

裏窓

大奥後宮秘史特集号

9

9月号

大奥後宮秘史・特集

定価 120円
IBM 1807

裏窓叢書が出ました！ 売り切れぬうちお申込ください！

★呪縛は妖しいいざないとなって、なめらかな犠牲の肌に迫りまつわる！

裏窓叢書
第二集

黒蛇呪縛

判 6 B
350円
送料 40円

黒木 忍・著
山田 彬 弘・挿画
喜多 玲子・装幀

① 姦雨の巻

傘蛇男の
浪の
手娘声女人

② 妖檻の巻

裸形の
地獄の
情欲の
大男の
闇の中

③ 麗水の巻

大手首の
縛りの
長襦袢
女房の

④ 囚姫の巻

濡れ肌地
沙汰の
死姫責
女め鞭姫獄

裏窓叢書
第一集

狂異地獄肌

判 6 B
350円
送料 40円

飯田豊吉・著
中島 喜美・挿画
喜多 玲子・装幀

① 人肌秘戯園の巻 ② 地下蔵地獄の巻 ③ 人買い唐人船の巻 ④ もだえ緋牡丹の巻 ⑤ 阿修羅月の巻

離子地蔵
岡引に女
鬼念流魔
狂異地獄
刺青師反

地獄のむき玉子
探死の羅
綾泣必死
姫く乳難

海老責め侍女
肌絵展
魔物執念
死の抵抗

深夜の脱出
恐怖の責め
絶対命
緋牡丹くすれ

姫肌吟味
あやつり責め
裏切り千両箱
月下の獄船

★罠に陥ちた美女群は白い花卉のようにおののきながら地獄の唐人船へ！

☆ むんむんとたちこめる金髪女の体臭と
悩ましい曲線にタフ・ガイの体当り！

マンハント 涼風8月号 目次

本番！ 殺しましょう E・ハンター

スクラップ・ブック J・クレイグ
欲望をあやつる女 S・フリードマン

月・月・火・水・木・金・金 R・S・プレイザー

寝室では仕事をするな W・ローガン
たくましい愛玩物 D・アレグザンダー

姉はなぜ消えた？ R・マクドナルド

金髪の誘い R・デミング
早朝興行 M・バーンズ
兄弟ぶん H・エルスン

マンハント 8月号絶賛
発売中！！

定価 150円

送料 12円

翻訳スタッフ
(50音順)

淡路瑛一
稲葉由紀
井上一夫
今井建一郎
田中小実昌
中田耕治
前橋市太郎
丸本聡明
矢島まゆみ
山下諭一

ジョーク・ボックス
志摩夕起夫
現代無用語辞典
騎士九郎

ヒネクレ族のシネ手帖
蘭太郎・寿浩・一子

カラー・モード
L. ウィリンジャー

マンハント・スクエア
田中小実昌

ポケットの中の本棚

あちら版・浮世風呂

表紙 笠井一
カラー 江瀬晃夫
江瀬晃夫
カット 江瀬晃夫
おおば比呂司

久保書店・刊

東京都中野区江古田1の2302(振替 東京 10756) 株式会社 あまとりあ社
(口座 久保書店宛)

異妖時代伝奇小説

悦 虐濡れ肌地獄

淫虐と肉慾！そして暗
い絶望の中に散る悲劇
の主人公忠長郷の生涯

230円
〒40円

岩堀 光・著

妖美幻想作品集

たそがれの肉体

妖しい悦楽としびれる
ような耽美の夜に憑か
れた倒錯の男女を描く

200円
〒40円

川野京輔・著

封建刑罰悲史

江戸暗黒秘録

封建の江戸に行われた
おぞましい公刑秘刑の
種々相を描いた興味篇

220円
〒40円

鈴木和夫・著

★あまとりあ社の特撰単行本を御覧下さい！！

(ハガキを下されば目録スグ送ります
東京都中野区江古田一あまとりあ社)

★



本文 248頁をごらん下さい

死神に憑かれた男女を妖し

い極楽浄土に誘う往生組の正体は？

彼らはもはや自分で死を選ぶ自由も奪われていた

泣き兵衛 往生組始末記：飯田豊吉
巷 囃子 中島喜美・画



裏窓・九月号・目次

◎表紙	紙……堂 昌一	◎目次カット	……石塚芳幸
◎目次裏口絵	……中島喜美	◎扉カッ	……美濃村晃
巻頭	桃色の怪盗	文	豊田一狼
絵物語	グアラ	ヌード傑作選	藤沢修

大奥後宮秘史・特集

秘説千代田絵巻(小日向)	矢桐重八	(36)
夜叉駕籠	(秋吉画)島本春雄	(62)
むささび悲願	(史画)橋爪彦七	(100)
大奥闘花図絵	(木原画)中林節三	(148)
妖雲練馬御殿	(吉正画)小田桐 爽	(172)
狂妃の罌	(木原画)藤見 郁	(198)

☆裏窓既刊号目次☆

(112)

続・女腹切りの史実と小説・中康弘通
かえり 怨讐二人小町……久我風太郎 (139)

色 貢 美肌小姓 文・中島喜美 (27)
色 貢 未整理棚の中から……偏 執子 (131)

異色 怪異河童小僧……寿々喜多呂九平 (186)
時代 怪 竜 秘 帖……円城寺 達 (212)

江戸暗 妖婦悪党抄……鈴木和夫 (224)
黒秘録

黒髪 弁 天……志摩不二 (50)
執念 墓場から来た悪魔……長谷川 勇 (78)

あぶ えんぴつ地獄……鳴海玄吉 (118)
綺譚 死臭つごもり池……溝呂木寂子 (160)

女を 東京の死角で……黒羽 新 (238)
探せ 泣き兵衛 巷 往生組始末記飯田豊吉 (248)

実用セックス講座……………① 発売中!!

結婚生活のレイアウト

絶対に二度とないチャンス! ご覧になればわかりますが、結婚の秘められた性の問題をこれほどまで赤裸々に書かれたのは他に類例がありません

定価 270円
送料 40円

厚生省人口問題研究所技官

青木尚雄

実用セックス講座……………② 発売中!!

性医学ノート

誰でも知ってるようで、案外知らないのが性の技巧! 男女悲劇の要因もここに潜んでいる。この書はその秘密の正体を縦横の角度から平明に解く

定価 250円
送料 40円

医学博士 飯田初男

実用セックス講座……………③ 発売中!!

女体のメカニズム

恋人として、妻としてあなたが選ぶ女性の肉体と心理の凡てに鋭いメスをあて、女の不可解な謎を大胆に解明し尽した快著。女の方もぜひ一読を!

定価 270円
送料 40円

日大教授
医学博士

押鐘 篤

★この一篇があなたの性生活に革命を起す! 当代の権
★威陣が解明する男女肉体の秘密と夫婦愛欲の実態! ★

御送金は小為替、振替、現金書留が尤も安全で確実です。
東京・中野・江古田一の二三〇二株式会社あまとりあ社



窓語
裏物
絵

盗怪の色情

① 深夜の怪漢

午前三時の銀座裏である。このあたりは、とくにバー、キャバレー、喫茶店などが軒を並べていて、いま頃になってから、やっと深夜の静けさになるのであった。と――
その寝静まった建物から建物へ、屋根から屋根へ、まるで猿のような身軽さでとび移っていく一人の影があった。

とあるバーの二階の窓から、その怪漢の影は、すりと侵入した。その部屋に寝ていたのは、マダムともおぼしき二十七、八才の女である。「おい、起きろ！」ハツとおどろいて目をさます女を、怪漢は手早く縛りあげて言った。
「もらいたいものがあるんだ。静かにしていなよ――」
数分後、その部屋から逃走していく怪漢の胸には、いま剥ぎとったばかりの女の下着が、ひしと抱かれていた。

狼 一田 豊
生 英正 古
画





2 バー「ピンク」

その翌日の夜——ここはバー「ピンク」の店内である。とつぜん、乱暴にドアがあいて、外から一人の若い男がとびこんできた。「追われているんだ マダム、助けてくれ」男は、マダムの美佐子に哀願した。「そんなにあわてて、あんた、何をやってきたの? みればまだ坊やじゃないの」マダムの美佐子は、迷惑そうにいった

3 マダムと美少年

まだ坊やじゃないの、と美佐子にいわれて男は不服そうに口をとがらせたが、「悪い奴らに狙われて、逃げまわっているんです。かくまって下さいよ、マダム おれの名は、秀夫っていうんだ」

「そうねえ……」

美佐子は、秀夫と名のつた男の顔を、じっと見つめていたが、微笑していった。「あんた、この店のホーイにならない? ちようど一人欲しいと思っていたところなの」

「しめた。恩に着るせ、マダム」

秀夫は、おどけて美佐子に手を合わせた





女のような美少年——という形容がピッタリするほど、秀夫は色の白い、まつ毛の長い唇の赤い、美しい顔だちをしていた。美佐子はまた反対に、大柄で骨っぽい、和服のよく似合う身体つきである。凄艶なマダムと、美少年のボーイ。これは何か、一揉めしそうな組み合わせであった。



④ 気になる……

このバーに働くバーテンと女給が、カウンターのかけで、こそこそとしゃべりあっている。

「男ぎらいのマダムが、またバカに色っぽいガキを雇い入れたじゃないか」

「そうねえ。あの秀夫っていう人あんまりきれいすぎて、ちょっと気味がわるいわ」

「ちかごろ銀座をさわがせているのは、案外、あんなガキだせ」

「桃色の怪盗のこと、まさか、でも、これからこの店の二階に住み込むとなると、ちよっと気になるわね……」

5 鶴田記者

それから、二、三日後――

日東タイムズの鶴田という男が、このバーに飲みに来た。

ビールを飲みながら、マダム的美佐子を相手に冗談をかわしていたが、やがて話題は、ちかごろ評判の桃色の怪盗の事件に移っていった。

「ほんとうにいやらしい泥棒ね。女をおどかしておいて、こともあらうに着ている下着を持っていつちやうなんて……ソツとするわ」

美佐子が眉をひそめていった

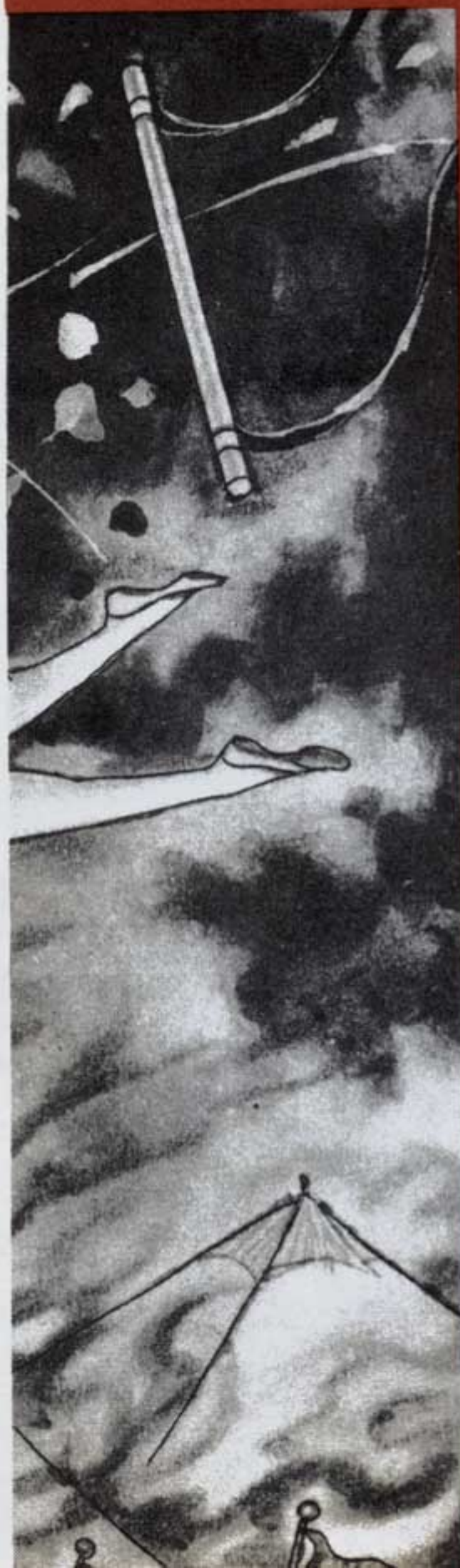
「金も物も盗まないで、女の下着ばかり強奪していくというのが

6 サーカスの火事

鶴田記者は、語りつづける

「二年ほど前に、北海道で興行中のサーカスが放火の火事で焼けたことがあったろ。ほら、火のまわりが早くて、動物や団員たちが多勢焼け死んだ事件だ。――そのとき放火した犯人というのが、空中ブランコの名人で、花崎春彦と

いう男だった。女の奪いあいが悪くもつれて、そんな不祥事をひきおこしたんだが、その春彦は放火後すぐ逃亡し、当局の捜索にもかかわらず、いまだにゆくえが知れない。――ところが桃色の怪盗の人相が、どうもその春彦に似ているという、被害者の訴えがあった。つまりその女性とは、サーカスにいた頃の春彦を、客席で見物していて覚えていたんだな……」





変っているな。あ、そうそう、お
 れは最近になって、やっとその怪
 盗の見当がついたんだ……」
 「あら、ほんと？」
 「あの犯人は、どうももとサーカ
 スにいた曲芸師あがりの男らしい
 んだ。あの身軽さ、すばしこさは
 ただ者じゃない……」



7 奇妙なうめき

ひとしきりおしゃべりをする、鶴田記者は、
 いい気持ちそうに酔っぱらって帰っていった。
 そしてその夜もバー「ピンク」は店をしめ、銀

座はすっかり寝静まっていた。

おや……「ホーイに住みこんだ秀夫は、深夜
 ふと目をさました。隣りのマタムの寝室で奇妙な
 うめきがする。「マダム、どうしたんです？」

ドアをあけた秀夫は愕然として立ちすくんだ。



8 マダム襲わる

マタムの美佐子が、寝巻きのままの妖艶な姿で、うしろ手に縛りあけられ、猿ぐつわを噛まされてうめいているのだ

「マダム、」 秀夫はあわてて駆け寄り、猿ぐつわをはすした

「あ、あいつよ、桃色の怪盗よ。とうとう、あたしもやられたわ、早く、早くこの縛を

9 女と男

「しまった、」

とさけんで、秀夫は舌うちした

「なんのために、なんのために男に化けて、この店に入りこんだのさ、」

すさまじい形相で、美佐子はつかみかかった。その眼には殺気が光っている

「あれえッ、」秀夫は女らしい悲鳴をあけて、せまい室内を逃げまわった

両手をひろけて、夢中になって秀夫を

追いつめる美佐子の寝巻きの襟が大きくくすれ、裾も乱れてひろがった

「あッ……」と秀夫が目を見はった

その美佐子の胸から、ブラジャーに包まれたスホンシ製の乳房が、ころりと落ちた。裾からは、黒々とした毛脰が、にゆうっとあらわれたのだ

「あッ、男、マダムはやっぱり男、」

秀夫の目が輝やいた

「バレたか、くそ、」ためえは一体、なに者なんだ、——美佐子がさげんだ





といてちようだいノ」
 「はいノ」 秀夫は美佐子の背後にまわつて、いそいで縄をとしかけた。そのとき、秀夫の胸のあたりが、美佐子のひじに触れたのだ。美佐子は、キクリと身をふるわせた。
 「秀夫ノ あ、あんた、女、女だったのね」
 秀夫の胸は、こんもりと柔らかく、ふくらんでいたのだ。



⑩ よくやったぞ！

秀夫は、いきなり手もとの花瓶を、窓ガラスめかけて投げつけた。
 カチャンノ 花瓶は窓ガラスを破って、外へ落ちる。それが合図だった。
 どとどと階段をあがってくる足音がきこえ、二人の男が、はげしい勢いでこの部屋にとびこんできた。
 「夢子ちゃん、よくやったぞノ」
 一人は日東タイムスの記者、鶴田であり、一人は刑事であった。
 「くそッノ はかれたのかノ」
 吐き捨てる、美佐子は飛鳥のように身をひるがえして屋根から屋根へ。 「待てッ」

⑪ 下着の山

鶴田記者は、室内を片っぱしからひっくり返し、何かを求めて探がしまわった。

「あつた！ みろよ、夢ちゃん、これかのがれぬ証拠だ」

鶴田記者が示した行李の中には色とりどりのなまめかしい下着、下着、下着の山である。

つまり、桃色の怪盗の正体は、ピンクのママ美佐子であり美佐子の実体は、もとサーカスの曲芸師、花崎春彦だったのだ。



⑫ 狐と狸

花崎春彦は、鶴田記者が酔ったフリをして語った暗示にひっかかり、身の危険を感じた。

そして、自分が桃色の怪盗でないことを証明しようとして、自分で自分を縛り、怪盗に襲われたフリをしたのである。

鶴田記者は、かねてから美佐子を怪しいとらんでいたが、確かな証拠がなかった。そこで冒険好きな婦人記者の夢子が、

みずから男装して、美佐子の身辺に近づいたのである。

「はっはっは…… まったく、狐と狸の化かしあいだったな」

鶴田記者は、なんとも奇妙な笑いかたをした。

「花崎、待てえッ！」

銀座の屋根の上を猿のように逃げまわる女装の男。しかし、ここまできては、この、女の肌についたものを集める変った趣味の怪盗の逮捕も、もう時間のもんだいであった。

終

ヌード傑作選



カメラ・藤澤 修











未整理棚の中から

編集雑誌帖(4)



偏執子

刺青屋敷

題名だけを見ると、何か時代ものめいた感じがするのだが、本当は現代のものがたりで、裏窓的なあぶりらあである。

これは、全篇にわたって、何か不気味な味の流れている小説で、その主人公である若い美しい女性の一人称で書かれていることが、妙にびったりしているので、読む者をして最後まで飽かせないのが立派である。

原稿も文章も、常に書き慣れたタッチで、内容自体も非常に面白いと思ったし、何度取り出して読みかえしたか知れない作品だったが、終末の救いのなさ、非情さ、が、妙にひっかかって、それがいつもふんぎりをつけさせなかったのだ。

しかし、また、考えようによればその救いのなさ、非情さが、この小説の作者の意図したところなのかも知れないので、若しそうだとすれば効果としては成功しているものだと思う。



主要人物は、たった二人。もちろん男と女の二人だが、その二人ともが、お互に救いのない結果に終わっているし、後半になると、矢張り例によって活字にならない。

だが、この作者は凡手ではないので、是非とも、もう一篇見せて戲きたいものと期待している。

では、黒木一夫氏の「刺青屋敷」の各部分を追って、御紹介といきましよう。もの足りない点は、雰囲気だけを吸収願って、まあお許しいただくこととして、まず、そのプロローグから――

化物屋敷――といえば、莫迦げた戯言と思われるかもしれませんが、このお邸だけは、事実その表現がびったりなのでございます。

一度どなたさまもこのお邸をご覧下さいまし。お邸のまわりを取巻く崩れかけた土塀と、広い庭園。そして深い木立――。おそらくただの一度で、お邸から立昇る黒い妖気と、陰気で沈鬱なただすまいに、腰から

下が朽ちていくような解さと、気味悪さが手伝って、逃げだしたくなるに違いありません。

ではなぜ、私は逃げださなかったのか？

実は逃げられなかったのでございますが、それはだいたいの順をおってお話し申します。

さて、がらんとして咳はおろか、虫の翅ひとつ聞えない、このお邸にも冠木門には立派な表札がございませす。「久宝寺夏樹」――お邸のご当主さまです。夏樹様は私がくるまでこの広大なお邸でのたった唯一の住人でした。さぞやそれまでひっそりとお邸の片隅で暮らしになっていたいられたのでございましょう。それは夏樹様のお静かなお人柄にも忍ばれませす。

なんでも夏樹様は、戦前は元なんとかの華族様だったそうで、私と夏樹様の「久宝寺」といういかめしいお名字をきいたときに、もしや、と思ったのでございますが……それにしても、夏樹様が一日中、

何処へ出かけられるということもなし、朝から晩遅くまで、ご自分の居室にしていられしやる南隅のお部屋へとじこもられたきりで、はたして何を職業に生活をたてていられるのやら、夏樹様の秘書を名目に雇われてこのお邸に住みこんで以来一年の私にも、皆目窺いしることもできないうさまなのでございます。

夏樹様は陽にあたられないためか蒼白く、瘠せて背の高いお方でした。そしていつも双眸にはかわらぬ柔らかな、慈愛の溢れる……いいえ、これは誇張ではありません。ほんとに何もかもご自分の眼に触れるものは、優しく包んでおしまいになりそうな深あい包容力を宿されていたのでございます。

なのに、時折お会いする夜には、それが冷酷な、鬱蒼たる樹海に囲まれた蒼蒼い湖水の底を覗き見るような、非情な美しさにかわっているのでございます。

思えば、最初このお邸を訪れたときにくたれたぞっとする肌寒い妖気



にすぐその場を立去るべきでした。

たとえ私の背後を塞ぐかたちになったご当主さまを、必死に突き仆してでも――

それも今は先にたたぬ後悔となりました。私はそのとき、いまでも申しましたご当主様のお優しい、愁いのこもった眼にふれ、何かしらぐいぐい惹きつけられるような、それと同じ時に、ほっとした安らぎを覚えたのでございます。……とこう申せば、いよく聞えますが、実のところ、私の心に大きな比重を占めていたのは四万円というお給料へのかくせぬ魅力でした。私は、何とかして採用していただきたいと思っていましたから、ご当主様の第一印象は何にもましての励ましとなり、つかえ棒になったのでございます。

実際、二十三才の小娘同然の私にとって、四万円というお給料は夢想不到にできなかったし、身に余る額でした。そしてお仕事というのが秘書なのです。私にとっては憧れの職業であり、もう否も応もありません。

まったく夢中でした。

さいわい私は採用になりました。それは私が孤児であり、この広い世間に、ただの一人も身寄りがないのに、ご当主さまが不憫をお感じになられてのことでございます……。

ところがそんな感謝も、まったく愚かな私の一人よがりであったと気づいたときには、私の身边にはすでに悪魔の爪が研ぎ澄され、犠牲者の祭壇への階段に一步、足をつけていたのでございました。

私が天涯孤独の身であることは、何を隠しましょう、ご当主さまにとっては、甚だ都合のいい、後腐れのない恰好の犠牲者だったのです。そうと知ったときの私の驚き、恐ろしさ、……

ああ……もう私は絶望です。私の五体には醜い悪魔の血膿が充満し、死が刻々と迫っております。

ご当主さまは恐ろしい方でございます。二重人格をもついまわしい変質者なのでございました。暮色に四囲がとざされる頃になりますと、俄

然一変する、吸血鬼ドラキュラ（夜になると人の生血を吸って歩く、英国の伝説上の怪物）のような兇暴な眼が、私を二眼と見られぬこんな姿に……

今の私をみて、誰が一年前の私だと気づく人がいましょう。

――これがまず第一幕である。孤児として育ったこの女性が、働кинаがらどうやら高校を出て、苦勞の末に、神戸のある小さな貿易会社に勤めたものの、四年目にその会社が潰れて途方にくれているところへ、ふとしたことから、秘書を探していると話をきかされ、それに葉をもつかむ気持で応募したのが、運命のつまずき始めだったわけである。

だが、夏樹という男の側からみれば、孤児という女性の身上が、またとなく得がたいものであったことが読者にはお判りになる筈である――

「――僕の方はできるなら、もう今からでも勤めてほしいんだが――」だ



が、君の方にも報らせるところへは報らせねばならないだろうし、都合もあるだろうから……」

といって、夏樹さまは薄く目蓋をおとしになりました。なにかしらとてもお淋しそうで、孤独の翳りが夏樹さまのお軀を取巻いております。こんなとき女というものは、ふと無性に殿方をお慰めして上げたいような、お力になって上げたいような、そんな共通の心理にとられるものではないでしょうか。

まして私は孤独な生い立ちの女でございます。そんなことには人一倍身につまされるのです。もちろん慰めるにも、力になるにも、こんな女にはとても望めたことではありません。夏樹さまがおっしゃるのですし、ただ夏樹さまの傍にいて上げるだけでも、お役にたてるのではないかしら、と考えたりしたものでございます。

私は勇躍答えました。

「私にはそんな身寄りもありませんし、もしお邪魔ではなかったら今か

らおいていただいた方が、早くお仕事の要領のみこめて便利だと思います」

夏樹さまの頬に薄い笑いが泛びました。私は喜んでいただけたのだと思つて満足でした。でもその陰に、もし私が帰ったあとで夏樹さまの気が変つては大変、そんな打算がまじつていたのは隠せません。

私のあてがわれた部屋は洋室でした。私などにはとても値ぶみもできない上等な絨氈が無造作に布かれています。そのほかのすべての調度品の一つ一つが、使用人の部屋などには贅沢すぎるものばかりでございます。

私はこの豪華なお部屋の様子に、相当驚いたのでしよう。夏樹さまはそんな私をみて、軽くお笑いになりました。

「遠慮することはないんだよ、自分の家だと思つてゆつくりしたまえ、それから——」と夏樹さまは部屋の片隅にある、二間ほどもある洋服箆箆につかつかと近づかれると、扉を

左右にあけられて

「——もし身体に合わなければ、洋装店で持えさせるが、それまでここにあるので間に合せていてくれないか」

何から何までの結構づくめでございます。もう私はほとんど夢見心地でした。夏樹さまの視線も忘れて、うつかり頬さえ抓つてしまいました。

夏樹さまが部屋から出ておしまいになると、いそいで私は柔らかそうな寝台にかけより、思いきり寝ころんだままでとんだり跳ねたりしました。それでもしなければ興奮を抑制できなかったからでございます。

五時になると私は台所の仔細を夏樹さまから教わり、こわごわ電気釜のソケットをさしこみました。

食事もたった二人で差し向いでございます。

「——君に飯炊きなどさせてすまないのだが——」

(いいえ、とんでもございません。四万円ですもの) 内心でそんなことをいって、顔は赧くなつてしまいま



した。

夏樹さまから一人暮らしの生活だと聞かされたのは、つい先刻でございました。ここ三日ほど前まで婆やさんがおられたそうですが、孫が病氣だとかで故郷へ帰ってしまったて、夏樹さまはトースターでパンばかり焼いて食べていられたそうです。これから私は夏樹さまとこの広いお邸で二人っきりでいかねばならないのですが、月給を前渡しされると、そんなことはどっちでもよいことになってしまいました。

夏樹さまはいつも、ご就寝まえにご入浴なさるそうで、今夜は遅くなるから先にはいれと申されたのでございですが、最初の夜からお言葉に甘えるのも気がひけましたので、それとなく夏樹さまがお済しになるまで待つことにいたしました。

浴室も凝ったなかなか洒落れたものでございました。楕円形の湯舟にゆったり身を沈めながら、窓を仰ぎますと、きらきら眩しいような無数の星にかこまれて、裸みたいな月が

しずかに地上を照しています。

しーんと死寂の底に沈んだ周囲は私がそっと胸元に落す水滴の音さえ咎めるようでございます。

私はまるで、悪いことをするのを見つけられたかのように、そろりと湯舟をぬけだしながら、音高にシャワーを浴びてしまいました。私は存分に湯をかぶると、バス・タオルを身体にまいて大きな鏡の前に立ったのでございます。

と、そのときから、私は何かしら人に覗かれているような気配——そんな不安な気持から心が昂ぶってきました。

でも窓といっても、外から覗けるような位置ではありませんし、ガラス戸もびったり閉って、とてもその間隙からは覗けそうな余裕はありません。

私は自分の臆病心を強くうち消しながら、思いきってバス・タオルを外し、鏡に向っておしげもなくむきだしの全裸をさらしました。

——彼女は、浴場の中で、たった一人で鏡の前に立っている。ところが、この鏡（相当な大きさがあるのだが）にはからくりがあるのだ。

俗にいう、マジック・ガラスである。その、マジック・ガラスの向う側に、誰がたたずんでいたかは、読者の方が先刻御存知であろうが、この犠牲の美女は、このときからしばらくの間は、全然そんなことには然がついていないのだった。だから、毎日のように、人目のないつもりで鏡の前で、いろいろのポーズをとったりするのである。

そんな、ある日のこと。——

夏樹さまはくる日もくる日も、お居間にとじこめられたきり、私にも秘書らしい仕事は何にもありません。退屈の連続で、お給料の手前、気兼ねするより、私は自分の軀を持て余してしまいました。

そんなある日のこと、今夜もおそくなった夏樹さまのあとから入浴して、湯舟の内で小波をたてながら、



ためつすかしつ裸身を眺めていた私は、ふと外から小さくガラス戸をノックする音に、我を取り戻しました「まだか?……」

夏樹さまの声でございます。「はい!……」私はあわててとびだしかけて、危うく浴槽の縁に足をとられて転びかけるところでした。

「あがったら私の部屋へきてくれなにか」

そういいおいて、夏樹さまは廊下を足早に去っていかれます。

私は満足にシャワーの湯をあびずに、クリームと口紅をぬりつけただけで、夏樹さまのお居間へ駆けつけました。

お居間には膳部の用意がしてあり燗のついた徳利が膳の上にのっています。夏樹さまは正面に脇息を肘に胡坐をかいていられましたが、私をみると、遠慮するな、とご自分の前の席をさしめされ、おてずから酌までして飲め、とおっしゃってくださいます。

かえって遠慮しても……とおもっ

て私は二三杯傾けたのでございますが、夏樹さまはいつになくご気嫌がよく、私もついつられて、一杯が二杯の献酬となつてしまいました。

とは申せ、お勤めしているときにハイボールの味をどうにか覚えたくらいの私ですから、ほとんど大半は夏樹さまでございます。

そのうち酔がまわられたのか、夏樹さまは陶然としたお眼の色をなされながら、こんなことをききだされたものでございます。

「——どうだ。君もこの邸には大分馴れたろう。今夜は仕事始めを祝つて、君の給料を上げてあげようと思うのだが——」

私はそのとき、不思議と男女がたった二人だけでこんな夜、不自然な恰好で向いあっていることに、何の疑念も警戒も持ちませんでした。主従の関係が私に淫らな危懼を忘れさせていたのかもしれない。

「——君の仕事というのは——ほかでもないこれがその道具だ」

私の前にだされた函の内をみると

鋭利な小刀と、束ねた無数の針、それに壺——。見当がつきかねて、きよんとしている私に、夏樹さまはいともぶっきら棒におっしゃったものでございます。

「——刺青だよ」

それでもまだ私は幸福でした。まさかこれから自分の肌に入墨が施されようとは夢にも気づいていませんでしたから。

ただ夏樹さまの眼底に燃えている燐光のようなあやしげなきらめきに漠然とした不安と、緊迫感をおぼえただけでございます。

謎を提出したあと、私の解答をまつかのよう、夏樹さまは脇息に腕を預けたまま、しばらくじっと息をつめていらっしゃいましたが、やにわに激したように、膳をつきのけると、私の二の腕のあたりをひつつかまえるなり、私を手許へひきよせようとなさいます。

「何を、何をなさいます!」

私は無我夢中で、抵抗いたしました。夏樹さまはそんな私の耳に、五



万円だ。五万円だぞ。と口早に囁やかれたのでございます。

最初、彼女は夏樹の態度を、世の常の求愛の姿だと思ふのだが、それが全然間違っていることに気づくのは、さして時間がかからなかった。

救いをもとめ、もがきながら、やがてどうなつてゆくのか？。

部屋の四隅に仕掛けられてあつた鉄の環に、背中を上にもけた姿のままで、手足を拡げた形に縛りつけられた彼女は、永い時間をかけて夏樹に刺青をさたるのだ。それは、四ヵ月かかって仕上げられるが、彼女には無限の時間のように感じられたというのも無理はないだろう。しかし本当ならこれで早い方だという。常人で一年、血氣盛んの若い者で、半年。それが背中一面の刺青をするのに必要な日数だそうである。

情景描写は、これまでの運びと同じく、微に入り細をうがっているがそれは頁数の関係で、ただ、御想像にまかせることとする。

その間の、彼女の夏樹に対する憎悪感、呪い、痛苦、悶え。そしてそれがいつとはなしに、奇妙な形の愛情に変わっていつて、やがて、刺青の仕上がる夜がきたときに、その歪められた激情は夏樹の軀に向つて突進するのだ。

しかし、夏樹は女を征服する軀を持たない男だつた。女体を完全に征服しきれない男の、女体に対するインフェリオリティ・コンプレックスは、それを覆いかくすために、反動的に嗜虐になつて現れるものである。

夏樹は彼女そのものを憎んでいるわけではない。本当は愛したいのかもしれないが、それが、世の常のものとは全然異質なものとなつて出てくるのであつた。

彼女の方は、その何ヵ月もの間に彫られる時の刺激が狂おしいまでの情感を呼ぶようになり、夏樹が憎くいのかいとしいのか判らなくなってくるのだ。

自分の感情の焦らだちに、どうすることもできなくなり、心は真赤に

燃えながら、それを消してくれるべき筈の夏樹につかみかかったりするのだが、夏樹の愛情の表現は、彼女の求めているものとは違ふのである。刺青は背中一面で終る筈のものがやがて、胸に、腰に、あらゆる場所にほどこされる。――

陽が昇ると、いつも私は良心の苛責と慚愧に悶えぬきました。理由はともかく針の下で奔騰する狂いきつた淫靡な欲情は、正常なものではないだけに私にはおぞましい限りでございました。

しかしそれを夜になると、かえらぬ繰言になるのでございます。いまさら誰がこんな軀を愛してくれることでしょうか。

理性では、割りきれない悩みでした。麻薬に魅入られた麻薬患者のよう、心はいくら離反しても、夜の私の肉体は夏樹さまを求めて呼吸もできないのです。

陽を浴びた私は夏樹さまを、怨み呪いました。私の夢は平凡な結婚と



円満な家庭生活でした。

いかなる困難を克服しても達成してみせる自信と希望に燃えていたのに、無惨にも破られ、望みもできない遠い所へつき放されてしまったのです。

私の望みは永久に去りました。

しかし……。

世を拗ね、諦めたとはいえこのままではあんまり自分が可哀いそうだと思いますのでございます。いまさら私に、こんな考えが浮んでくるとは不思議でしたが、とにかく、このお邸から、夏樹さまから離れさえすれば、また新しい道がひらけてこぬとも限りません。

(逃げよう……！)

絶望と悲嘆にすっかり取り包まれていた私は、いままで脱出をこれほど真剣に考えたことはありません。懸命に私は頭の中で秘策を練りました。

でも考えて迷うより実行に移そうと、そっと扉を押して外をのぞいてみました。入墨だらけの孤児が何処

へいくものかと安心しきっているのでしょうか。いつものことながら廊下はシンと寂まって、ただ遠く軒をうつ雨滴の音だけがしめやかに聞えてまいります。

戸外は沛然たる驟雨でした。

こうして、この屋敷を逃れ出ようとする彼女の企ても、やがて、夏樹に見つかり、終局がやってくる。

今まで絶対に近づくことを許されなかった。廊下の突きあたりの、座敷牢のような部屋の中に、脱走を企てた見せしめに投げこまれてしまう。

そこにあつたものは、何人もの女の肌の剝製で、それが、いろいろなものに細工されて置いてあるのだ。電気スタンドのシェード、壁かけ、ベッド、ソファ。そんなものが、全部刺青でできているのだった。

彼女は、その部屋の中で、「私はシェードなんかになりたくない……」と叫びつづけるのである。

異色官能 サスペンス **地獄の乳房** 飯田豊吉・著 喜多玲子・装幀

謎の黄色いトランクをめくって東京暗黒街にくりひろげられる凄惨な死闘と執拗な復讐地獄！息もつかせぬ迫力興味篇！

Y. 250
千 40

裏

窓

九 月 号

大奥後宮秘史特集



第四卷・第九号



秘説千代田絵巻

やぎりレゆ
矢桐重八
第一巻終

春日の局

慶長九年、二代將軍秀忠に長男が生まれた。

竹千代——のちの家光である。

その家光が十六才のとき、大奥勤めの女中夕浪の美貌に心を惹かれ、夜な夜な、西の丸から本丸へしのびかよった。

夕浪は阿江与の方附きの侍女であった。阿江与の方というのは、家光の生母、つまり秀忠夫人である。この夫人は淀君の妹にあたった。

ある日、秀忠夫人は、自分の居間へ家光の乳母である春日の局を呼び寄せ



ていった。

「ちかごろ、御本丸に夜中妖異のものが徘徊するときく。そちに心あたりはないか」

きかれて、春日の局は、はっと頭をさげ、

「おそれいりましてござります。実はそのことを、先日来よりわたくしも耳に致し、心痛いたしております。こんごとも夜中のお見廻りを嚴重に致し、早々にその妖異の正体を確かめまするでございましょう」

と、こたえた。

春日の局には、その妖異のものの正体が、だいたいわかっていた。

（おおかた、本丸勤めの若侍が、好きな女中のもとにでも、かよっているのであらう）

男子禁制の大奥——といってもまるきり男の気がなかったわけではない。

大奥の玄関に入って、すぐ北側の御広敷という一郭や、御門をくぐった左右の長屋に、御用人以下壮丁に至るま

で、三百名近くの男が詰めていた。

だが、もちろんこれらの男どもは、御錠口から中へは入れない。これが許されているのは、御膳奉行、若年寄、老中、御小納戸、それに医師、僧侶などである。

しかし、大奥の女たちとの交情は、絶対に許されない。禁を破れば厳罰に処せられること、むろんであった。

御台所から注意をうけた春日の局は、夜中の見廻りをふやし、いっそう嚴重にするように命じた。

やがて、春日の局の異様に鋭い嗅覚は、その若侍が忍んでいく目的の部屋を、夕浪の寝室とにらんだのである。

そこで、阿江与の方の許しをうけると、夕浪を大奥の一室にとじこめ、噂の根源を詰問した。

しかし、夕浪はうつむいて口をかたくとざしたまま、何事も語らない。そのつきつめた表情は、あくまでも無言の決意を示しているように見えた。

「おのれ、強情な女子め。ならば、責め問いにかけても、もの言わせてみせようぞ」

春日の局は、こめかみに青筋をくねらせて言った。

家光の乳母という重職に加えて、生来の才気と勝ち気で、多くの御殿女中のなかに権勢をふるっている春日の局である。

我が強く、冷徹で、傲慢な性質は、ことに目下の同性に対して、偏執的であった。

夕浪折檻

夕浪は、春日の局附きの女中たちの手によって、着ているものをむしりとられた。

わずかに水色の腰のもの一枚を残した姿で畳の上に突き倒された。

若い裸身が、行燈の灯にまばゆいほど白々と光った。

その裸身の腰のものにおおわれた下腹が、わずかなふくらみをみせているのを目ざとく見つけた春日の局は、

「ほほう……」

と、うすい唇につめた微笑をのせた。

「そなた、もう腹に子を宿しているのか？」

しかし、その問いにも、夕浪はかたくなに無言であった。

権勢をかさにきて、乱暴にもいきなり衣類を剥ぎとった春日の局に対して、反抗を示しているようにもみえた。

「ええ、お上をおそれぬしぶといふ不義者、くくりあげて責めあげてみよ！」

春日の局の癪癪が、ついに爆発した。

夕浪は、自分のしめていたしごきで、うしろ手に縛りあげられた。

三人の女中たちは、こんなときにも主人の氣にいられようとして、われ勝ちに争って夕浪の身体をねじ伏せ、腕をねじりあげ、足をおさえ縛りつけるのだ。

女同志の折檻は、男のそれよりも、よほど執拗で陰険である。

男に飢えきっている大奥の女たちの欲情が、こんなときに異常な形で、ほとばしるのだ。

こっそりと自分だけ性を享楽した同性に対する陰湿な嫉妬が、さら

にムラムラと加わっている。

（この白い肌が、たくましい男の手に、どのようにやさしくまさぐられたのか！……ええ、さても憎い、口惜しい！……）

美しく盛りあがった若い乳房の上に、いじわるい力で、ぐいぐいとしこきを喰いこませる。

背中にくりあげた両手首を、じわじわと肩の貝殻骨のあたりまでしめあげる。二の腕の内側の柔らかいところを、ぎゅうっとひつつねる女中もいる。

いつのまにか縫い針をもちだし、それを指のあいだに隠して、湯文字に包まれた夕浪の尻の肉を、うしろから、チクリッと突き刺す女中もいる。

自分の身内にもつりもっている不満忿懣を、このときとばかりにぶちまけるのだ。

「ああ、むむっ、おゆるし、おゆるしください、お局さま！」

その苦痛に、畳をなめんばかりに背を折りまげ、許しを乞う夕浪であった。

「だから、申すがよい。その腹の子の親の名を——不義の相手は誰じゃ！」

春日の局は、畳の上にびたりと腰をおろしたまま、つめたい表情でいった。

「さあ、それは……そればかりは、申しあげられませぬ」

苦しい息の下から、うめくように夕浪がいった。

「なぜいえぬ！」

「それを申してはならぬと、かたく命じられておりますゆえ……」

夕浪の眼が、必死の思いをこめて、春日の局をみあげた。口ではいえぬが、眼で何かを語ろうとする表情である。

「……」

春日の局は、それをじっとみかえし、何を感じたか、ふと眉を寄せた。

だまってうなずくと、夕浪のいましめを解くように、女中たちに命じた。

苛酷な主命

「困ったことになった……」

家光は、思わず口になだしてつぶやいた。

夕浪が春日の局につかまって男の名をいへと責められたことは、まもなく家光の耳にも入ってきた。

「うるさい乳母めが……」

いじわるい責めに耐えかねて、夕浪が白状してしまったら、乳母のやつは、またわしに長い説教をきかせるだろう……。

十六才の家光は、にがい顔をして、しきりに爪を噛んだ。この爪を噛む癖は、祖父の家康ゆずりのものである。

その家光の眼に、ふと、近侍の伊丹権六の姿がうつった。

★春日の局は冷酷な眼で若い侍女の苦悶の姿を見下していた、唇に微笑さえ浮べて……

(そうだ!……)

家光の胸に、一計がうかんだ。それは、我ながら名案だと思った。家光は人払いをすると、伊丹権六をちかちかと膝の前に呼び寄せた。なにごとか、と権六は緊張した顔で、家光の前に平伏する。

「そちに頼みがある。きいてくれ——」

それは、家光の代りに、般若の面をかぶって、夕浪の寝室へ忍んでいってくれというのである。

妖異のものが本丸を徘徊——と噂されたのは、家光が顔をかくすために、般若の面をつけて忍び歩いたからであった。

「わたくしめが、上様のお代りに?」

権六は、おどろいて顔をあげた。だが、家光のつぎの言葉には、もっとおどろいた。

忍びかけた途中で、うまく見廻りの女中に捕まってくれというのである。

そして、いままで夕浪のもとにかよっていた男は、自分だと白状してくれ、というのである。

そこまできけば、権六も家光の意図することが、はっきりとわかった。

(しかし……)

権六は、とっさに考えた。

わざと捕えられるのはたやすいことだが、不義は御家のきつい御法度であり、まして相手が大奥の女では、まず死罪はまぬかれない。不義者という汚名をきて、悪くすればハリツケである。

だが、家光は自分の考えに、しごく満足した表情で、ゆうぜんとしっていた。

「——君命じゃ。うまくやれ」

「ははっ」

いやもおうもない。平伏よりしかたのない権六であった。

主命とあれば、水火の中をも厭うことのできぬ、封建の世の臣の悲しさである。

たまたま家光の眼にとまったという事が、この男の不運であった。

権六の脳裏に、病身の妻や、今年十才になるいたずらざかりの伴の顔がうかんだ。彼は妻に対してやさしい夫であり、子煩悩の父親であった。

(たいへんなことになった……)

だが、君命を辞退することも、また切腹の道に通じていた。

権六は、悲愴な思いで、このときすでに死を覚悟した。

身代り夜這い

その夜——。

本丸の中廊下を、夜廻りの女たちが、肅然として





すすんでいた。

「萩の間、高岡さまお廻りでござアい……」

若い艶のある声が、夜の大奥にひびきわたる。

先頭の女は、柄のついた金網提灯をもち、右の小脇に、極づくりの稽古薙刀をかいこんでいる。

つぎの女は、右手に鎌、左手に分銅を握っていたこれは鎖鎌である。

最後の女は、がندوق提灯に稽古薙刀。

三人とも小褌をからげ、革羽織を着て、額には白布のうしろを鉢巻きを、キリリと締めていた。

「萩の間、高岡さまお廻りでござアい……」

三人の姿は、やがて夕浪の部屋に面した廊下の角を曲った。

(いまだ！)

と、伊丹権六は胸の中でさげんだ。彼は、家光に命じられたとおり、般若の面をつけ、頭から羽織をかぶって、先刻からこの廊下の隅にひそんでいたのだ。

女中たちがこちらへすすんでくる足音をききながら、権六は腰をかがめ、夕浪の部屋の襖を、そろりとあけた。

その姿が、夜廻りのがندوق提灯の光りの先きに照らしだされた。

「あっ、くせもの！くせものにござりますぞ！」
先頭の女が、悲鳴のような叫びをあげた。

権六は、みつけられてしまった、という身ぶり、あわてて襖をしめると、廊下を這うようにして馳けだした。

「くせもの！ くせもの！ くせものにござります！ お出合い召され！」

深夜の大奥に、騒然とした気配が流れた。

（なんたる屈辱！……）

権六は、眼をつぶり、齒を喰いしばった。

足を払われたふりをして、自分から廊下に転倒し、薙刀の石突きを背中の骨にぐりぐりと受けておさえこまれ、無念のうめきをあげた。

さらに背中の上に女中の膝がのり、両腕をねじあげられた。

（よりによって、女の手から縄目の恥をうけねばならぬとは！……）

縄をかけられながら、権六は、女中たちのびんつけ油の香を、やるかたない忿懣の思いでかいだ。

妻子ある身をもちながら、大奥の女と密通する不届者——武士にとって最大の汚名が、いま実感となって、権六の全身に、おそろしい圧力でのしかかった。

無念の斬罪

伊丹権六は、死罪を申しわたされた。

この時代にあつては、至極当然の処置であつた。

もとより、覚悟の権六である。

だが、彼の心の片隅には、家光が自分のために助命のはからいをしてくれるのではないか、という期待があつた。

（上様のために身代りの犠牲となつたのだ。むざむざとおれを見殺し

にするようなことはあるまい……）

それは、充分に望み得る期待であつた。

権六は、首を斬られる寸前まで、家光からの助命を伝える言葉を待った。

しかし、無駄であつた。

胴から寸断された権六の首は、死の恐怖と無念の形相に、カッと眼を宙にみひらいていた。

家光はそのときはもう、自分の身代りになった家臣のことなど、忘れていたのだ。権六の生命よりも、うるさい乳母の局を、うまくだまし終わせたという、少年らしい満悦感に浸っていた。

助命のはからいどころか、権六の罪のとがめは、その妻子までに及んだ。

妻の八重も、長男の兵之助も、権六の斬首の翌日、江戸府内から追放された。

「なんというむごい、上様のお仕打ち……」

八重は、家光を恨んで、くやし泣きに泣いた。病弱ではあつたが、気の強い、しっかりした女である。

権六は、この妻だけには、主君の身代りになる秘密を打ち明けていた。

「母上、父上は上様のおために死なれたというのに、なぜわたしたちはこんなひどい目にあわされるのですか？」

十才になる兵之助が、あどけない顔で、八重を仰いだ。

「いまにわかります。いまにきつとわかります、父上のご無念が……」八重は兵之助を抱きしめると、あらたな涙にむせぶのであつた。

母子は、九州にいる叔父を頼って、長い苦しい旅路の一步を踏みだ

した。

一方、夕浪のほうも、ただですむはずはなかった。

彼女は身の柄を、武州深谷の領主のもとにあずけられた。

十日ほどもたつと、江戸城の春日の局からの使いがきて、夕浪をひそかに殺せとの命令であった。

夕浪も権六と同じように、家光の情あるはからいを心待ちにしていたのだ。なにしろ、腹に宿っている子は、まちがいのない、家光の種である。

うしろ手に縛られ、目かくしをされて、筵にひきだされた夕浪は、むしろの上に坐らせられて、はじめて自分が殺されることを知った。

「なにをするのです！ わたしのおなかの子は、上様のお子ですぞ！」

夕浪は、立ちあがってさげんだ。

だが、背後の男は縄尻をつかんで、わめく夕浪を無情にひき倒した。

「だまれ！ 上様の名を口にだす、不届き至極の狂女！」

男は足をあげて夕浪の腰を蹴りつけ、罵声を浴びせた。

「命ばかりは、おゆるしを！ おなかの、おなかの御子のために！」

夕浪は裾を乱してころがり、うしろ手に縛られた身体を、ごろごろと地面に這わせて、助命の嘆願をした。

しかし、首斬り侍はなおも縄尻をひつつかんで夕浪の身体をおこすと、白刃を抜いてふりおろした。

大奥後宮秘史・特集

「ひえッ！」

刃はそれて肩の辺にあたり、血しぶきをあげて夕浪はのけぞった。あわてた侍は、なおも手もとを狂わせた。三太刀、四太刀、夕浪の全身は斬りさいなまれた末に、やっと、首を打ち落とされて絶命した。

夕浪はこのとき、十七才であった。

この報告を深谷の領主から受けた春日の局は、つめたくとがった鼻のさきを、

「ふふふ……」

と、鳴らした。

春日の局は、夕浪を責めたときに、彼女の寝室にかよった男を、家光だと見ぬいていたのだ。

ホタル大名

寛永元年、家光は摂政鷹司信房の娘、房子を正夫人にむかえた。

この房子に対する春日の局の眼は、異常にきびしく、氷のとげのようにつめたかった。

新夫人の一手一投足、箸の上げ下ろしに至るまで、底意地の悪い監視の眼を光らすのである。

これは老女特有の嫉妬であり、姑根性であった。

このころになると、千代田城における春日の局の実権は、単に家光の乳母というだけでなく、弟の忠長にくらべて、すこぶる出来の悪い家光を、將軍の地位にのしあげた実力者として、政治的な勢力をもその手中におさめていた。

骨身を削るような思いをして、將軍にしたた家光を、新夫人に奪

われるような錯覚からくる、老女の嫉妬である。

深窓の公卿に育った房子夫人は、この春日の局の陰険さにいたたまれず、本丸から逃げだして、中の丸に別居してしまった。

それから房子は、生涯のうち、一度も家光とは顔を逢わせなかった。

（——女を相手にすると、どうも春日の機嫌がわるいな……）

家光もそう考えた。わがままな気性のくせに、どうも春日の局だけには、頭があがらない。

そこでこんどは、欲望の対象を、男にむけた。といっても、家光は年少の頃に、すでに男色の味はおぼえていた。

彼は幼少からはげしいドモリで、それを矯正するために謡曲を習いいつもそばに能役者を置いていた。

能役者は、足利の時代から衆道の用もつとめている。

家光がこの異常な欲望の道に、早くから足を踏みこんだのは、環境からいっても容易であった。

——ホタルのように尻で光った螢大名。

そのホタル大名の数は、ちよつとかぞえきれない。

はじめは身分の低かった朝倉織部豊明は、その道で献身的に家光に尽くしたために、二千石の大身にとりたてられた。

これは文字どおり「献身的」である。

家光が京都へ行ったとき、小大名の長島城主、菅沼織部正の供の中に、美しい若侍をみかけた。

家光はさつそくこれと呼びだし、自分の小姓にした。主君の織部正には、二千石の加増をほうびとして与えた。

酒井山城守重澄と、堀田加賀守正盛は、寛永八年五月の同じ日に、三万石の大名にとりたてられた。

この二人はまるで女のように色目を使い、化粧をほどこし、媚をもつて、家光の愛撫を待った。たがいにしるぎをけずって、家光の寵愛をあらそったのである。

そのほかにも、高島右近や板倉市之丞は、とくに美男としてきこえ、若衆踊りという踊りを考案して、家光の機嫌をとりむすんだ。

この將軍の男色ぐるいには、さすがの春日の局も、いささかあわてた。

「——男ばかりをお相手にしては、いつまでたっても、お世嗣ぎが生れない……」

これは当然である。

やきもちばかりやいては、いられなくなった。このままで將軍に世嗣ぎがないということになると、自分の政治的責任を問われることになる。

そこで春日の局は、こんどは逆に、美しい女を自分の手もとに集め將軍に近づかせようとした。

家光はよろこんだ。また大っぴらに女を抱ける。

だが、それで男色と縁を切ったわけではなかった。

將軍の秘薬

「——御脈伺いの時刻にごさります」

御髪番の小納戸がきて、家光の前に平伏した。

御脈伺いは、朝食がすんだのち、結髪中におこなわれる。

「うむ……」

家光は、けだるい顔でこたえた。昨夜の疲れが、まだ全身に残って

大奥後宮秘史・特集

いる。

昨夜の女は、宇治山田の格式の高い尼寺の住職で、十六才の慶光尼であった。將軍の拝謁にきたのを、ひと目みて心にとめ、ただちに夜伽を申しつけたのである。

比丘尼を妾にすることは、当時の掟としてもゆるされなかったが、その掟に従うような家光ではなかった。

まさに鶴の一声である。

まるい頭の美女に、家光は複雑奇妙な魅力を感じて、一夜、ねむることなく愛撫したのである。

「——上様、御髪を……」

御髪番の声が、すぐ耳もとでした。

「む……」

小姓が四人、小納戸が二人はいつてきて、家光の元結を解きほぐした。

髪を大銀杏に、鬘を平まげに、白元結を十二、三本使って結いあげ、さらに顔とさかやきを剃る。

御脈伺いは、この結髪中におこなわれるのが、しきりであった。

將軍の健康を診察する奥医師は三十人ほどいて、毎日交替に六人ずつ出仕する。

そのほかに、外科、眼科、針道が、二人ずつ、三日目ごとに出仕して、家光を診察するならわしであった。

「ふむ……」

奥医師頭の都築林沢は、家光が黙ってさしだす左右の手の脈を、じっと計っていたが、眉のあいだにふかいた

て皺を寄せた。

脈数が多く、しかも不規則に乱れている。

「——上様、おそれながら、ひどくお疲れでござりますな」

林沢は、頭を下けたままであった。

「うむ……」

家光は、なまあくびを噛み殺してうなずいた。顔色が青い。肌の色も冴えない。

「御腹伺いを致しとうござりますが……」

「うむ……」

御腹伺いとは、將軍の身体に異常を認めた場合、衣服の前をくつろげて、より入念な検診をすることである。

これは、医師頭である、都築林沢だけに許されていた。

「——林沢」

と、家光が、目をとじたまま、口をひらいた。

「は——」

林沢は、診察の手を休めて、頭を下げた。

「ちかごろ、また疲れがひどく、夜中、どうも意のごとくならぬ。れの薬を調合してくれ」

れの薬とは、家光の精の衰えを癒やすために、とくに林沢が調合した強精剤である。

「は——。しかしながら、あの薬は……」

林沢は、頭を下けたままこたえた。そのような強精剤を將軍に服用させることは、老中からも、春日の局からも、むろん禁じられている。

それでなくとも、色ぐるいのはげしい家光であるからだ。

林沢のためらいをみた家光は、

「よい。余の命令じゃ。ほかのうるさい者共には、胃の薬だと申しておけ。余もそのように話を合わせておく」

と、やや声をおとしていった。

林沢がその秘薬をつくって將軍にのませたのは半年ほど前である。

それが、よく効いたらしい。林沢は、きゆうに家光のとくべつの信任をうけて、そのために禄も加増されている。

「は——」

家光の強いこの命令に平伏した林沢は、その唇に、ふと暗い微笑を

うかべた。

林沢は、番町の旗本屋敷の並びにある自分の邸にもどると、すぐ老母に、そのことを報告した。

「ほう……ふむ、ふむ……」

老母は眼をほそめて伴の言葉に耳をかたむけた。

総白髪の、猿のようになびた老婆であるが、うなずきながら、ときおり、するどく眼を光らせる。

林沢は、老母を抱くようにして、その遠い耳にひたと口を寄せ、な





おもそのことを語りつづけた。

——この都築林沢は、十五才のときに、長崎の蘭学者都築伴之進の門に弟子入して、西洋の最新医術を学んだ。

まれにみる秀才であった。懇望されて、二十才のときに、都築家の養子となった。

三十才のおり、江戸にでてきて、都築家の遠縁にあたる大名の後援のもとに、医家の門をひらき、たちまち名医の評判をとった。

旗本、大名屋敷に招かれて出入りするようになり、その卓抜した医術の好評は、さらに十年後、將軍家の典医を命じられた。

医師としては、最高の名誉と地位を与えられたわけである。

——林沢は、本日の將軍御脈伺い時での首尾を、こまごまと語り終えた。

「ふ、ふ、ふ、ふ……」

老母は、齒のない口を皺だらけにすぼめると、うれしげに笑った。

色 餓 鬼

家光の乱行は、ますますひどさを増していった。

のちに四代將軍となった家綱を生んだお楽の方は、家光のために責め殺されたようなものである。

生来の身体の虚弱さもあったが、家光の執拗さに、美しいお楽の方は、柳のように痩せほそり、若くしてこの世を去った。

ところが、家光のほうも、このころから、身体の衰弱がはげしくなってきた。

しかもなお、長年耽溺してきた色の道は、いっとうにやめる気配がない。すでにぬきがたい習性となっていた。

表の間における將軍の政務は、居眠りながらおこなわれた。

御用取次ぎの者が、老中の伺い書を読んできかせると、家光はうつらうつらとききながしながら、だまってうなずく。

すると、「伺いの通りなる可く候」と附箋がついて、老中に返却さ

れるのである。

もとよりこの決裁は形式的なものであったから、居眠りをしていても、けっこう用は足りた。

あまりの衰弱のようすにみかねた大久保彦左衛門が、

「上様、それではお身体がもたせぬ。なにとぞ、いますこしのお加減を……」

と、腹を切る覚悟で諫言したのも、このころであった。

もちろん、これより以前に、老中も春日の局も、口を酸っぱくして忠言している。しかし、將軍の地位にゆるぎのない家光は、うるさいという顔でにらみつけ、きこうとはしなかった。

將軍の閨房は、相手の女のほかの、三人の女の監視のもとにおこなわれる。そして、その女たちによって、深夜の言動の一切は、こまごまと年寄に報告されるのである。

「昨夜は格別の御打ち解けにて、かくかくにして何回の御戯れ有之、かかるお話を申し上げ、其他別条無之——」

という次第が、文書になって報告される。

家光の身を案じた彦左衛門は、毎朝この記録を読み、死を決していさめたのだが、乱行は依然としてやまなかった。

けだるい一日を過ぎた家光は、夕刻近くになると、都築林沢調合になるれいの精力剤をひそかに服用する。

すると、昼間のあいだ頭のなかにかかっていたもうろうとした疲れが、いちどきにふきはられ、夜に至るとともに、精気がみなぎってくるのだ。

家光は、よみがえったように躍然として大奥に入る。

朝になると全身から力がぬけてぐったりとなり、頭のなかは、ふた

たび汚濁したもやにもうろうと包まれるのだ。

家光の顔色は、ますます青く沈み、眼は死魚のように濁り澱んできた。

皮膚はたるみ、手足の動作も常に緩慢で生気がない。

あきらかに、腎虚の病相を呈してきたのである。

「——林沢。そちの薬も、ちかごろではほとんど効かぬぞ。もっと強いのではないか。くふうして調剤せよ」

じれた家光の命令は、自分の体力を復調させるための薬ではなく、ただ夜の快楽をいや増したいための興奮剤を、まるで駄々子のように求めるのだ。

すでに、色餓鬼であった。

「は——。かしこまりました」

林沢は、黙々として、家光の命令に従うのである。医師としての忠告は、一言も洩らさなかった。

そして、自分の邸にもどるや、一室にとじこもり、ひたすら和蘭陀渡りの秘薬を練りあげた。

誰の目にも、もう家光は病身である。信任あつい名医が、その家光に薬をのませることに、疑念をもつ者は一人もいなかった。

「——いくら林沢どのが治療に心を砕かれても、上様があの色ぐりをやめなければ、御快癒も無理というものの……」

と、家臣どもは語りあい、

「林沢どのも、つらい立ち場にあることよ。さすがの名医どのも、あの上様の悪い御病気には、歯がたたぬとみえる……」

と、林沢の立ち場に同情的でさえあった。

やがて、春日の局が死んだ。

家光には、もうこわいものがなかった。大奥は、ますます乱脈の度を加えていった。

医師の策謀

家光は、さらにはげしい頭痛に見舞われるようになった。

鉛をつめこまれたような鈍痛が、始終家光の脳中を痛めつけ、ときおり、キリキリ、キリキリと、錐で揉みこまれるような激痛がくる。

そのために、鉢巻きをして政務をとるようになった。江戸城の内外から、鉢巻き公方様と蔭口をきかれる。

しかもなお、女色男色への耽溺をやめないのだ。なにかに憑かれて、いるようにみえる。すでに狂人一步前であった。

しまいには、日夜うすほんやりして、視力までが弱まった。一尺さきのものが、かすんで見えない。

唇の端から始終ヨダレをながし、口をきくこともかなわなくなった。

家光が死んだのは、慶安四年四月二十日、四十八才の働きざかりである。

家光が死ぬと、同時に百数十名の女が、大奥から暇をだされた。

奥医師頭、都築林沢は、自分から進んで暇を願いでた。

医師として治療及ばず、ついに家光を病死せしめた責任をとる、という理由である。

林沢はその日、城を退出すると、さっそく小石川小日向台にある妙玄院という寺に、老母を伴なって参詣した。

青苔の生えた片隅の墓石の前に、彼は老母とともに額づいた。

「――父上。父上の御無念、やっとお晴らしました」

林沢の眼に、光るものがあつた。

老母も、しきりに白髪をふってうなずきながら、口のなかでもぐもぐとつぶやいた。その落ちくぼんだ眼には、執念をつらぬきとおしたよろこびの涙があつた。

都築林沢とは、伊丹権六の一子、兵之助であり、老母は権六の妻、八重であつた。

兵之助は、目的をもって強烈な催淫剤を家光にのませつけ、十年間を、はげしい頭痛に責めつけた上、ついにその生命を奪いとつたのだ。

非業の死を遂げた父権六の仇を、三十年後にとつたのである。

家光を淫乱狂気の地獄に追いやり、さんざんもてあそんだあげくに人知れず殺したのは、一人の奥医師の、ひそかな策謀であつた。

悲愴美の世界

少年切腹史

中 康 弘 通

次号予告

戦雲の下、武士の道はけわしく、ようやく芽ぐみそめた若葉の散る風情は、見る者の涙を誘った……史に残る少年の姿！



黒髪愛慕

髪 弁 天

志摩 不二

熊野 三郎・画

一、天然パーマ

科学の発達した世の中にも、ずいぶん不思議きわまることが多い。

僕が兵隊検査の歳まで勤めていた日東耐火スレート株式会社という工場のある処もその一つである。

番地は東京都深川区越中島八番地というのである。

ちっとも不思議じゃない？

そうかな？ だってね、越中島八番地というからには、一、二、

三、四、五、六、七番地とあって、八番地があるんだらう？

ところが、越中島は何万坪だか、ボーダイな地域の土地なのに、その一から七までの番地がないし、その八の次の九からの番地もないのである。



越中島というのは八番地だけしかないんである。

どうです？　ちっとア不思議でしょう？

そのころあった、陸軍の糧秣廠も、東京商船学校も、水産講習所も、府立三商も、その他の工場もみんな八番地にあったのである。

僕が工場に入った日、松平竹千代という工場長の名をきいて僕はびっくり仰天した。実名も実名、僕の志摩不二なんてペンネームどころか、戸籍にちゃんと登録された姓名であるという。

その松平工場長が、越中島八番地の話をしてくれたのである。

「どうだい不思議だろう？」

と工場長がいうので、僕は、

きているなんて——」

といった。すると、彼はキザなパーマのかかった頭を、モジモジかきながら、

「ハハ……。こりゃアやられた。さすがはカミナリ亀さんの息子だけあるな——」
と苦笑した。

「え？　工場長は僕の父を知ってんですか？」
僕は驚いた。すると彼は懐かしそうにいった。

「わしも今君の履歴書を見ておどろいたんだ。実は僕は府立三中の出身で、君のお父さんが小使さんをしていた時学生で、よく追いつめられたもンなんだよ。お父さんは元気かい？」

「昨年死にました。それで僕学校をやめて働

「ええ、不思議ですね。でも、工場長の名前の方がもっと不思議だ。この文明開化の世の中に松平竹千代が生

きに來たんです」母ひとり子ひとりだという
と工場長は、フンフンと気の毒そうにうなず
いていたが、後をふりかえると、
「会計課長——」と煤けたエントツのような
老人を呼んであっさりいった。
「この子、日給でなくて月給にしてやってく
れたまえ。そして本給は百円——」

僕は危くひっくり返りそうだった。大学出
たって、そのころは七八十円の月給だった。
それが、学歴もない十六七の子供の初任給が
百円なんて。その上僕は職員ではなく、職工
の身分なのだ。僕は狐につままれたような顔
をしてキョトンとしていた。すると、
「どうした？　そんな顔をして？」
「びっくりすくめ、不思議すくめなンで——」
「何をそんなにびっくりして、不思議がった
のだ？」

「第一は越中島八番地、第二は松平竹千代、
第三は父を知っていたこと、第四月給百円、
それからもう一つ……」

「もう一つは？」

「この非常時に、工場長が男のクセにパーマ

嗅ぐと身内の疼くような麝香の匂いのする黒髪！　しかしそれは鬚の結えないちぢれっ毛であった！

ネットかけてる——」

「アリヤ——。こりやアな、実はわしの頭天然パーマなんだ。どうしたら、直せるかと心配してるんだ。君のようにいちいち、みんなにいわれるンでネ——」

そして僕は工場長に直々連れられて、工場内の作業場に行った。従業員は五六十人だった。僕みたいな少年も十四五人いた。女工が二十人ばかり。あとはみんな中年の男ばかり。工員たちは新入りの僕を工場長自身が連れてやって来たので驚いているようだった。

僕はそんなことに得意になるより、照れくささでうつむいたままだった。工場長は職工長と、機械班々長、整理班々長、乾燥班々長、練方班々長の四人に僕を紹介してくれて、わざわざよろしく頼むよといってくれた。僕は機械班に廻された。

二、勝負

あくる日僕は八時半の始業だけど、第一日だからと心配する母にせかされて、八時に工場に行った。母は僕の話を書きいて、月給額に驚倒し、これも亡き父のおかげだと仏壇ばかりおがんでいた。

僕が更衣室で作業服に着替え終った時、三

人の少年工が入って来た。僕があいさつすると、互に三人は顔を見合せニヤリと笑い、

「俺、小松崎文雄、通称ブンちゃん」

「俺、宮本四郎、通称シロだ」

「俺、高橋新吉、通称チンだ」

と口々にいつてから、そろって、

「裏の空地まで顔貸してくれ！」とアゴをしやくった。僕は（ヤキを入れるつもりだな）とすぐ思った。みんな僕より背も大きくガツシリしたのばかりだ。僕は観念して、三人のあとについていった。空地はできそこないのスレートの捨て場になっていて、ゴロゴロしていた。

通称ブンちゃんが、むき直っていった。

「おめえ、女郎買ったことあるか？」

「……………」僕は答えなかった。ふふんと思つたからだ。女郎買なんてしたことないが——

「答えられねえ処を見ると、したことねえな」

「あるといたら、強がりと思うだろう？」

「おめえ、度胸いいな。いいか、これから俺たちを一人々々相手にして、二人負かしたら俺たちがお前を女郎買いに連れていっておごってやる。その代りお前が負けたら、お前が俺たち三人を女郎買いに連れていっておごる

んだ。いいか？」

「いいよ」

「あっさりいいやがるな。怪我したり、のされたりした拳句おごるんじゃ、つまらねえぜ。先にあやまっちゃった方が、よくはねえか？」

「できうれば、おごるよりおごってもらった方がいいもの——」

「コンニャアロー。できうれば、なんていいやがる。チン、やんな……」

「はい来たッ！」夏蜜柑に手足をつけたような奴が、僕のアゴをねらって拳固を飛ばして来た。僕は左へ跳ねながら右足で相手の股を蹴り上げた。

「ギャッ！」といってチン公はひっくり返り「いてて、いてて」と前をおさえてころげ廻った。

「俺だッ！」声を掛けると同時にシロが卑怯にも後から掛けてきたから癪にさわって一本背負いでスレートのこわれの山に叩きつけてやった。その勢いで、目をパチクリしているブン公に突進すると、ボディに一本入れて、かがんだところを突き上げてのしちまった。昼休みの時、もうすっかり仲よくなった三人と食堂で遊んでいると、職工長の猪トンス

んがよって来て、ブン公たち三人に、

「バカだな。お前たちはこの子とやったんだって。昨日のうちにいっておかなかったのが悪かったんだが、工場長の話によると、この子の亡くなったお父さんは学校の小使さんが剣道五段だったし、兄さんは自動車事故で死んだ有名な拳闘家のハンマー・西田なんだそう。かないっこないよ」

といった。三人はおどろいて、

「へえ——。この小っちゃいのが。どうりで強えや」と僕を見直してくれた。

僕はすっかり三人の兄貴株になってしまった。僕は五時になると事務所に行つて電話を借り、隣りの米屋の小父さんに掛けて、「職工仲間のおつき合いで、二三時間遅く帰るけど、心配しないでって、お母さんにことづけてね」と頼んだ。すると横で聞いていた天然パーマの松平工場長が、帰りしなに、「西田、月給の前渡しだぞ——」と十円札を一枚くれた。僕は涙が溢れそうになった。

三、洲崎弁天町

農林省倉庫の立ち並ぶ道を四人が歩いていく頃は、もうすっかり夜だった。浜園町から塩崎町とななめに、汐氣の多い川に掛る危い

板橋を跳ねたり飛んだりしながら洲崎弁天町に入った。

僕はぶらぶらと口笛なんか吹きながら歩いていったが、ブン、シロ、チンの三人は体を寄せ合つて何かゴソゴソいいながら、なかなか歩行が進まない。僕はおかしくて仕方がなかった。

彼らはこれから僕を進れていこうとする洲崎遊廓での金が心配なのだ。

(俺、一円五十銭しかねえよ)(俺、三元だ)

(俺、二円五十銭——)といっているのが、さっき耳に入つたからだ。僕は工場長に貰つた十円と、持つて来た五円の金があるから気が大きかった。よっぽど(心配すんな。僕にまかせておけよ)といったかつたが、これらのこともあるから黙っていた。第一新入りをいちいちおどかしておごらせていた奴らだから、少し灸を熱くしておいた方がいいと考へていた。

僕たちは、遊廓を南の反対側から入った。北側に大門があつて、そっちが入口なのである。支那事変が始まってもう二三年たった頃だし、非常時非常時といわれたりしていたが、まだまだこのような処は、夜のないう街であった。ここは妓たちが直接店に出ていないで四

ツ切りほどの写真が店内に飾つてあり、遣手の婆さんや妓夫太郎たちが客引きをし、妓の説明なんかをする。昔からある岡場所ではなく、根津権現裏にあつたのが明治なん年に埋立て地だった現在の処に移されたものだ。

徳川時代海がこのあたりまであつたころは、東北からやつてくる奥州船の船頭衆や荷主たちが常顧客だったが、今は石川島造船所や近辺の工場や商店の者たちが客である。もちろんその昔の妓たちは船まんじゅうのたぐいであつたが——、僕はちよつと前まで学生で、学校のグループで郷土研究をやつていたから、下町の歴史など相当くわしく知つていた。

三人組はめいめいの財布と相談しながら歩いているから、なかなか、登楼しない。

「どこがいいかなア？」

ブン公が相談した。できるだけ安い処がいいのだろう。(ここはどうかな?) (あそこの家は?)と僕を無視して相談ばかりしているから、僕は少し彼らをおどかしてやろうと「どうせなら、一流の大きな家がいいよ」

という、三人ともベソを掻いて顔を見合せ返事をしない。僕はわざと先に立って、三人をうながしながらどんどん歩きだした。三

人組はまごまごしながらついてくる。大門通りをはさんで東西に百軒近くずつ店が並んでいるが、その東側の大宝楼という大店に僕はつかつかと入っていった。と、ちょうど店先に人力車が五台止って妓たちが降りて来た。どこへいつての帰りか、どやどやと店に入つて来る妓たちはいずれも遊女特有の姿で、桃色のてがらをつけた桃割れのような投げ島田に結っていたが、ただ一人、腰まで届く漆のように濃い黒髪を洗い髪のように乱したままのがいた。その髪もまた異様で、細かくパーマをかけたように波うっているのである。背は中肉中背以上であるが顔も全体も十七八か未成熟な感じがした。

彼女は店に入るなり、わっと大きく声をあげて泣きだした。それも僕のすぐそばでだったから僕は驚いてあとずさりした。と、あとの四人の妓があわててその妓を取り囲むように抱きかかえ、上にあがった。奥から男や女たちが騒ぎをきいて飛び出して来た。

「小蝶さん、どうしたのよ。みっともない、早く入りな——」遣手婆さんの叱る声と共に人々は奥へ消えていったが、その中の一人の男が居残って僕の方を見ていた。大宝楼の主人増田さんで、死んだ僕の父と親友だった人

である。びっくりした顔に僕は、指を口に当てて（シーッ!）と合図をし、キョトンとして僕の後につつ立っている三人組に、
「さア、あがろう!」といった。

四、麝香の髪

「庄坊、どうしたんだ。いったい?」

「どうしたって、僕女郎買に来たんだよ」

「呆れた野郎だ。子供のくせに——。それにまだ学生じゃアねえかよ」

「学生じゃアない。もう一人前の職工だよ。月給百円也の——」

「何? お前学校止めたのか? そうか——ひとことわしにいつてくれればよかったのに……」

増田さんはいとおしそうに僕の顔を見た。

三人組をそれぞれ二階に追い上げたあと、帳場での会話である。

「お前の親爺さんは子煩悩で息子たちをいつも自慢にしていた。喜一は親の反対を押し切って拳闘家なんかになったが、それでも一流になってどうやら親孝行の内に入ったが、交通事故で早死しちまった。あとの一人お前も勉強体技共に優秀な息子で期待していたよ。それが学業を途中で止めるなんて、どう考え

ても惜しい。どうだわしがなんとかするからもう一回元に戻ってみんなか?」

「ありがとう小父さん。しかし矢はすでに弓から放たれたんだ。やるだけやってみるよ」
「そうか、それならそれでよい。頑張ってみろ! そうと決れば、立派な社会人になるための勉強にはなるまいが、参考ぐらいにはなるだろう。金はわしが出してやる。えんりよせず今夜は大いに遊べ——」

「天下公認だね」と僕は笑った。横にいた遣手の婆さんが笑いながら、お始めてですか? と聞いた。楼主の知り合いだということからことさらにいい言葉を使ったらしい。うんと答えると、

「大丈夫ですか?」と心配そうに増田さんにいった。増田さんは。

「そんな息子とは生れつきわけが違うんだ、こいつは。筆おろしするのに仲間を三人も連れて、その上わしのうちをねらってやってくるくらいだから、ワッハッハッハ——」大口開いて豪傑笑いをした。婆さんは僕を連れて妓のいる部屋に行った。僕は部屋の隅の鏡台の前にベタリと坐っているちぢれ毛の小蝶という妓を見つけてそばによつていった。彼女の目は真ッ赤だった。控え部屋まで入って

来た僕に異様な眼を向けていた。キョトンとした顔に、

「君、どうして泣いていたの？」という、

「あんただアれ？」その声は美しい絹糸のようだった。

「僕は君の友人さ。もちろんこれからなるんだけどね——」彼女は泣き顔を忘れて笑った。遊女にはない白い葵の花のように清潔な顔だった。

「さっきね。ほかのひとたちとね、髪結さんの処へ行ったら、こんなちぢれ毛、髪には結えないと断わられたの——」

「ふうん——。君すると今までに髪を結ったことないの？」

「ええ、だってこのお店へ来たばかりなんですもの」

なおも話そうとすると婆さんが、

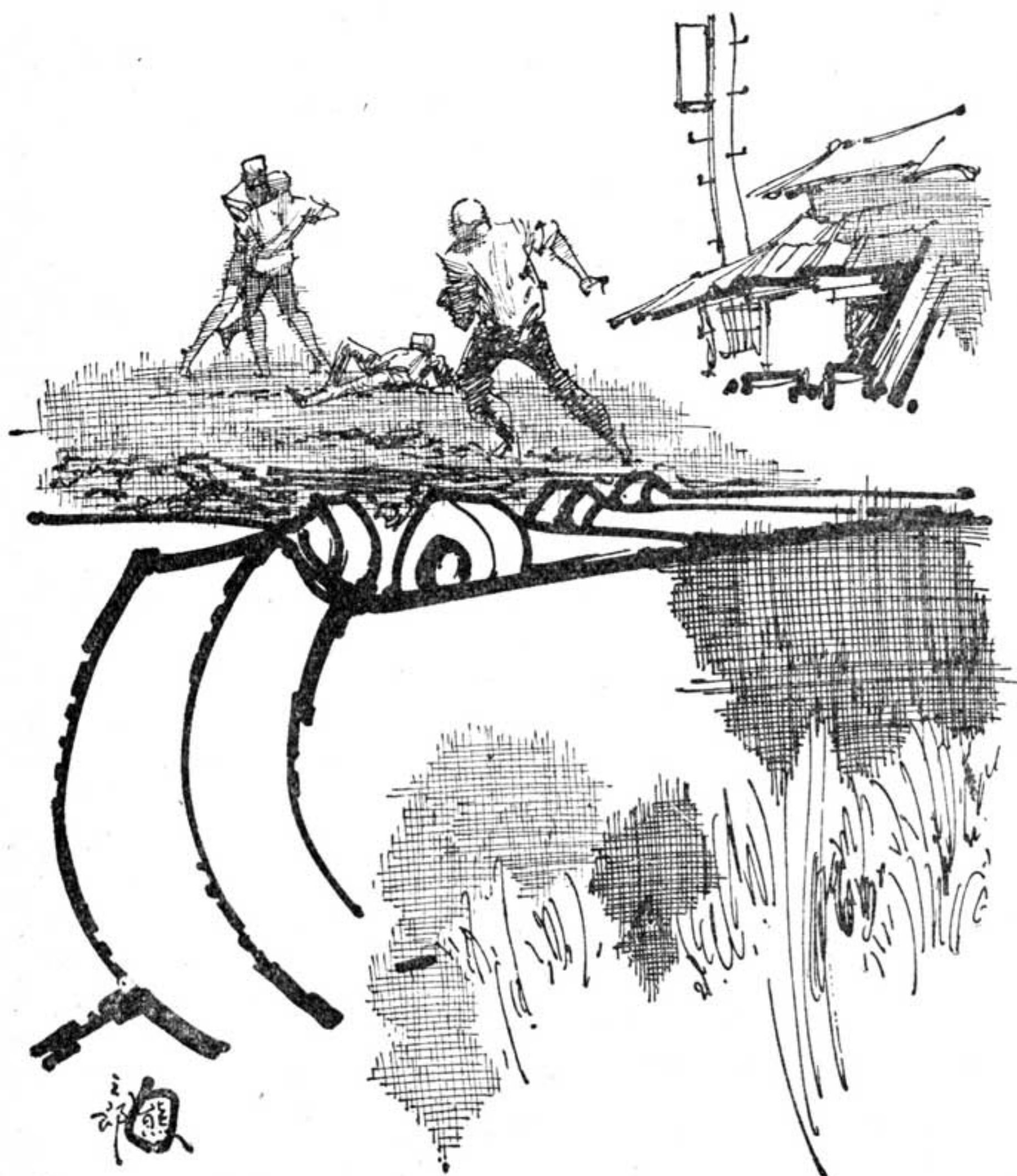
「さアさア、話は小蝶さんのお部屋にいったゆっくりなさいましよ」とせきたてられた。

しばらくのち、僕は三疊間の小蝶の部屋で、それこそクラスメートの友人間のような気持で話し合っていた。

小蝶は本名を小山蝶子といい、秩父の生れだった。小さい時から天然パーマで子供仲間からいじめられ、からかわれ、ずいぶん苦勞

をしたが少女時代髪を長くして、二つに分けおさげにすると目立たなくなつて、悪口もいわれなくなり、いつしか、ちぢれ毛も気にし

なくなつた。そのおさげのまま三日前にこの家にやって来たので楼主の増田さんも気づかず、今日になって髪結いに行き、こんな騒ぎ



油

になったというわけだ。昭和もこの時代、遊女が日本髪を結えなかったら、これは大問題である。

僕は小蝶の髪に手を触れてみた。僕はさっきから不思議に思っていた――。

この妓のそばへよると、なにかとてもいい匂いがあるのである。ヘリオトロップのような甘い香りではなく、麝香がどんな匂いかよく知らないが、そのような香りではないかと思う。僕の五官に細かくささってくるような強い匂いで、そのくせ脳髓が疼れてしまうようなやるせない烈しい甘さが、そのなかにあるのだ。香りを表現するのは、目で見たものを表現することよりむずかしい。

ともかく、その香りで、僕のずうずうしい心臓が泣きだしたいようにせつなくなるのだった。

その発生の根元がなんと、この妓のちぢれっ毛であるのを僕は、その頭髪に手を触れてみてはじめてわかったのである。

僕は声をあげて小蝶の丈なす黒髪のなかに顔をうずめた。鼻口から、いや全身の毛穴から容赦なく射すように染み込んでくる強烈な香りに僕の五体は、ぶるぶると痙攣してころげ廻るようだった。

それは重たくて濡れている太い太い絹糸のようだったが、生き生きと女の生命が宿っていて一筋一筋が、小蝶の鼻口から洩れる甘い吐息のように、いぶいていた。

「庄二さん、どうしたの？」

円い眸を大きく開いていぶかる妓に、僕は喘ぎ喘ぎいった。

「これは僕のもんだ。僕のもンにするんだ。」

小蝶、小蝶、僕はこれが僕のもンになるんだ、一緒に死んでもいい！」

僕は生れてはじめてこの時に恋を知ったのだ。

五、髪結談義

母はじつと長火鉢の灰の中に眼を落しながら、炭火をいじる火箸の手をとめて僕の話を書いていた。僕は母をいつも自慢にしていた。生れもいやしく学問もなかったが、まるっきりの下町育ち、竹を割ったような気性でいて優しく理解があった。口は乱暴なところもあるが人情家で涙もろく、昔からの辰巳ッ子の気概を持っていた。料理屋の女中をしていた時に父に見染められ一緒になったのだそうだが、剣道五段の父もかえって母に頭が上らないようだった。他人には手に負えない兄貴も

母には到底歯が立たず、母のいうことにはとても素直だったものだ。しかし僕は母を恐れず小さい時からなんでも打明けて物事にかくしだてしなかったから、洲崎から帰ると一部しじゅうをみんな話して母の意見を求めたのである。

もちろん僕だって、娼婦の身分なんか問題にしなかったが、十六七の子供で結婚のどうのということは充分無理だということとはわきまえていた。母は僕の話聞き終ると、

「その娘さんのちぢれっ毛を直すのが、第一問題だね――」とポツンといった。

「そうじゃアないかい？ 庄坊がその子の髪の毛の素晴らしい匂いに惚れて、その子を自分の物にしたいと思ったって、たとえ相手が女郎でも人間同士はお互いの心が大事――。つきあうのは母ちゃんも許してあげるから、庄坊がその子に心底から惚れられるまでやってごらん。そうなったら、母ちゃんもきつとなんとかしてやる。第二、第三の問題はそれからのこと――」

「うん、わかった。それで第一の問題はどうするの？」

「あたしがその子のくせ毛を直してやるよ」

「えっ？ ほんと！ 母ちゃんにできる？」

「できるとも！ あたしは髪結いの娘だよ」
「そうだっけ！ いつかきいたことあんなね。
おばあちゃんが門前仲町で髪結いしていたんだって」

「昔の女はみんな自分で髪ぐらい結えたもンさ。さアさア今夜は遅いから、寢床の中で話してあげよう——」

母は寝物語が好きだった。僕は小さい時から子守唄の代りに深川、本所の下町の昔がたりをよく聞いた。本所七不思議の話などせがんで何回も聞いた。小猿七之助、河童又助、それから芭蕉、一茶のこと、果ては深川生れの滝沢馬琴のことから、ボウ大な里見八犬伝の物語りまで、母は実によく知っていた。わけても世界地図に名を残した間宮林蔵の墓が深川警察の裏にあるが、その彼が偉大な行跡を成したにかかわらず不遇のうちに死んだ話など、わがことの責任のように口惜しがったものである。

「へーえ。あの複雑怪奇な日本髪が、自分の手で結えたのかねえ？」

「そうともさ。昔の女は、今の女みたいにだらしなくなかったもンさ。お女郎が奉公する時に交す証文にさえ（この女髪結物書く事親々より教へおき候へば御厄介かけず）ときつ

と書いたもンさ。しかしね、宝暦七年に大阪に來た百さんという男、本当の名を山下金作っていうんだが、この人が安永の末に深川の栄木町に住んで、芝居の女形のカツラを結うのを商売にしていたんだけど、芝居好きの女たちが舞台の役者の衣裳や髪形を羨むのは今も昔も変りないやね。芸者や町娘が百さんに役者と同じ髪を、わざわざ結って貰って得意になつて人に見せびらかしているうちに、われもわれもと、いつか多数の女たちが結ってもらうようになってね、百さん芝居の方を止めて女髪結になつちまった。それが髪結の始まりだとおばあちゃんが話してくれたよ。それからあまり百さんが繁昌するもんだからだんだん髪結という商売が多くなって、苦労して自分で結うより早いし楽だしで、いつか女たちは髪結に結ってもらうだけで、自分では結えなくなつてしまったのさ——」

「ふーん！ 髪結って女がするもんだとばかり思つてたけど、男が元祖なのかい」

「そうともさ。芝居で有名な髪結新三だつて男じゃないか」

「その髪結新三つてどんな奴さ」

ところが低い返事が聞えただけで、あとを話してくれないから、夜具から首をのばして

母の寢床をのぞきこんでみると、スースーといびきをかいて寝ていた。

六、弁天境内

「西田、増田さんという人から電話だよ」

退け間近に猪トンさんが僕を呼んだので、急いで事務所に馳けていくと、松平工場長がニヤニヤしながら、僕に受話機を渡した。

「洲崎の大宝楼からだよ」という。僕は柄になく赧くなった。小蝶からだと思つたからだ。

「おい、こいつ！ お安くないぞ」

「そ、そんなんじゃアありませんよ。ちぢれツ毛で困っている女の子の髪を直して日本髪に結つてやるつて母が、この前増田さんに話したからそのことなんでしょう。きつと」

「ほう！ そりやア、耳よりな……。僕も一つ頼もう——」と天然パーマを振りたてる工場長を突きつけて、受話機を耳に当てると、

「おう庄坊か。今日これから工場の帰りに寄つとくれ。小蝶をお母さんに頼んだので帰りに連れていってもらいたいのだ」と増田さんはいった。

大宝楼にいくと、店先から入らず裏口から行つて小蝶を増田さんからあずけられた。娼妓はどこへ行くにも一人歩きは許されない。

いつも二三人以上、それも姐さん株のが責任者になって引率して歩くのだが、小蝶は僕の信用で破格の待遇を受けたわけである。

小蝶はこの前と同じようにみだれ髪を長く腰の下まで垂らして、つつましく僕のあとについて来た。大門をくぐろうとした時に土地の者が懐ろ手で、ぬっと僕のところに寄って来た。

「兄さん、その妓とどこへ行くんだい？」

娼妓の逃亡や連れ出して玉替えさせるのを防ぐためである。

「ごくろうさん。僕は増田の小父さんに頼まれて、この人を髪結に連れていくんだよ」

「え、増田の旦那に、それはそれは……」

男は角刈りの頭を掻いて引き退った。増田さんはこの土地の一二の顔だから、男も恐縮したわけだ。

大門から左へ川ぞいに歩いて一町ばかり、左手に弁天社がある。その前まで来ると、小蝶は足を止めて（あのう——）と遠慮深く、

「お参りしていい？」と聞いた。

「ああ、いったい何をおいのりするんだい？」

「あたしのちぢれっ毛が直りますように——。そして日本髪が結えるようになりますように——」

僕がうなずくと、彼女は嬉しそうに小走りに社前へ馳けていった。僕は無神仏論者だから、その間、境内にある高さ六尺幅一尺四方ほどの石柱の文字を読んでみた。なかなかむずかしい字で書いてあって読むのに苦労していると、

「なんて書いてあんの？」ぶーんと五官の痺れる麝香の匂いと共に、小蝶の顔がそばに来了。夕暮れの淡い電灯の光りの中に彼女の顔は意外なほど幼なじみでいた。

「これは津浪の碑といってね。」

葛飾郡永代浦築地この所寛政三年波あれの時家流れ人死するもの少からず この後高浪の変はかり難く流死の難無しと云うべからず これによりて西は入船町を限り 東は吉祥寺前に至るまで長さ二百八十五間余の所家居とり払ひおき永代明地になしをかるるものなり 寛政六甲寅十二月

と書いてあるのさ」

「まあこわい！ 大水でそんなにおおぜいの人死んだの」小蝶は身をふるわせて僕の体にしがみつくようにした。

「大丈夫だよ。今から百五十年も前の話だから——」といっても握った手を離さない。そのままふたりは歩いた。小蝶はすっかり僕に

甘えて、いった。

「ねえ、あのう、あたしの髪直らなくても嫌にならない？」

「嫌いになんかなるもんか！ 第一僕はこのちぢれっ毛の君から好きになったんだもの——。どうしてそんなこと聞くの？」

「うふん——」と恥かしげに笑って、

「さっきね、弁天様にちぢれっ毛が直りますように、日本髪が結えますように——。そのほかにもう三つお願いしちゃった、あたし——」

「欲ばりだなア。そんなに頼んだの。弁天様に。お賽銭あげて頼んだのかい？」

「あいにく一錢玉なかったから、五錢ふんばつしちゃったの。だからうんと頼んだの」

「おーやおや。一つ一錢ずつで頼んだのか」

「いや！ そんなこといわないで。あたし一生懸命にお願いしたのよ」

「弁天様も呆れてるよ。いったい何を頼んだんだい？ あとの三つって？」

「あのね、あのね……。蝶子を庄二さんだけの物にしてください。そして、庄二さんを蝶子だけのものにしてくださいって！ もう一つは、うわーッ！ 恥かしいッ！」

そういうと、人絹のたもとで顔をかくしバ



タバタバと走り出した。

僕はびっくりと、嬉しさで一瞬ほんやりしてしまつた。はっと気づくと、僕も彼女のあとを追って駆け出した。

七、髪踏み

もうもうと立ちこめる湯気の中に、僕は固唾を呑んで異様なありさまを見つめていた。

台所の板の間に熱湯を入れた盥が置かれ、その中の前こごみになった小蝶の黒髪が潰けられてゐる。その繊細い白い襟あしを僕の母がぐつと

押えて（苦しくとも、もう少し我慢して！）といった。（うううう）頭を下にし、吹きつける熱気に小蝶は苦しげに呻きつづけた。やがて湯気にまじった彼女特有の麝香の匂いが息苦しいまでに僕を刺戟する。

五分……。十分……。二十分……。それでも母はよしとしない。

「母ちゃん！」僕はとうとう泣き声を出した。三十分……。ようやく母は小蝶の体を起した。そしていたわるように優しくいった。

「よく辛抱したね。疲れたろう？」

「いいえ、小母さん——」

「庄坊、裁縫の裁ち板を、座敷に出しておくれ」

僕はいわれた通りにした。そのあと僕は母の手で僕の両足をよく洗われ拭かれた。

小蝶は母に命じられて裁ち板の上にうつぶせになって寝た。長い黒髪が頭の上に掻きあげられ板の上に揃えられた。

「いいかい庄坊、これから母ちゃんが帰ってくるまで、この髪の毛を強くお前の足で踏んでんだよ。よく踏まないと、この人のくせ毛は直らないからね。わかったね！」

僕はためらった。好きな小蝶の、その好きな黒髪を、いくらくせを直すためとはいえ、

足で踏むな——！」

「さ、やってごらん！」せかされて僕は、

「いいかい？ 君——」と小蝶に聞いた。

「お願いいたします」小蝶はいった。僕はマ
リヤ像を踏むキリスト信者のような気持で小
蝶の黒髪の上に乗った。

つるつるとすべって足元は安定しないが、
足裏の感触は快よかった。太く濃い髪の毛
長く熱湯につけられたので、しなやかになっ
ていた。一、二、三、一、二、三と掛声をか
けながら僕は美しい黒髪を踏みつづけた。

「そうそうその調子で、しっかり頼むよ。そ
れじゃア母ちゃん、その間外へちよつと買物
に行ってくるからね」といって母は出ていっ
た。髪を踏みながら小蝶を見下すと、彼女は
死んだように身動き一つしない。

「君、痛くない？」

「ううん。なんだか、いい気持——」

「ごめんよ」

「なにが？」

「君の髪の毛、足で踏んだりして——」

「なにおっしゃるの！ あたしの髪、僕のも
ンだって、庄二さんいったじゃないの。踏ん
でも撲つても、切つても噛んでも、庄二さん
がするんなら、あたしかまわないわ。かえっ

てうれしいの……」

「蝶ちゃん！」

僕はたまらなくなつて、小蝶の髪の上から
飛びおりと、その黒髪の中に頭ごと突っ込
んだ。

ほのほのとした温たかさのなかに艶々とし
た太い絹糸のような冷たさがあった。そして
その甘い刺すような香りは、少しでも僕が離
れると遠くへ消えてしまひそうにはかない感
じがするので、しっかりと両手に握りしめ、
顔といわず体といわず僕の全身に巻きつけよ
うとあせつた。それでも逃げていかれそうだ
った。僕は髪束の束の中に入れた。舌がた
ちまちしびれた。僕は噛んだ。黒髪はジャリ
ッジャリッ和小蝶の悲鳴のように僕の口のな
かで泣いた。僕をこんなに、英しいまでの思
いにさせる髪の毛を、もっともっと苛めてや
りたかった。だがそれは悲しい苦しみではな
く歓喜がはげしく震えるための苦しみだつ
た。その少し前に読んだ志賀直哉さんの「暗
夜行路」の前篇の終りに女の乳房に触れて主
人公が「豊年だ豊年だ」という描写があつた
が、僕も美少女の黒髪に同じような思いで満
足だ満足だと喘いだのだった。

僕はもだえ狂つて、笑い、泣いた。そして

やがてぐったりとなつた。小蝶はその間じつ
と僕のなすがままに委せて素直だった。

しばらく後、日本髪に必要な道具などを買
つて母は帰つてきた。僕には何もいわなかつ
た。小蝶を鏡台の前に座らせると手際よく髪
を結つていった。

不思議に彼女の髪の毛のくせは直つていて、見
惚れるくらいに素直な流れを見せていた。

「小母さん、髪の毛のくせ、また戻ることないか
しら？」小蝶は心配そうにいった。

「十日や二十日は大丈夫。固い油で固めるか
らね。そのたびに家に結いにおいて。あたし
から増田さんによく話しておくからね」

「こんなにきれいに結えるなんて、あたし夢
にも思わなかった。嬉しい……」

みごとに美しく結い上つた髪を見て小蝶は
泣いて喜んだ。

八、お礼参り

「工場長、あなたは僕をベテンに掛けたんで
すね？」

ある時、僕は事務所に血相変えてどなり込
んでいった。ところが松平天然パーマは、少
しもおどろかず、ホレ来なすつたという顔を
して、



裏窓叢書 第一集 狂異地獄肌

飯田豊吉・作

定価 三五〇円
送料 四〇円

鬼畜か悪魔か地獄党の世にもおぞましい処女刺青肌展示。あくことない責めになぶられあえぐ美女の群れは、さらにからくり責めの唐人船へ……

(装幀・喜多玲子 画・中島喜美)

発売中ノ 中野区江古田一 久保書店

「なにを、僕が君をだましたね?」という。
「そうじゃアありませんか。僕は工員のうちでも最高の製品数をあげながら一か月百円。それなのに、僕の半分もできない奴が日給と歩合を合わせると百十円、百二十円と貰っている。そんなバカなことがありますか?」
「あるよ。その代り年二回のボーナスが工員は日給の一か月分だが、月給の者は三か月分つくんだよ。月給の方がずんと割りがいいだろう? どうだい、わかったろう?」 西田君

「へーえ。そんなもんかなあ——」事、金の

ことになる、てんからわからない僕はポカンとしながら、戻ろうとすると、
「ところで君、ちぢれ毛の女の子、直ったかい?」

「直りましたよ。でも工場長のはだめだって、母ちゃんいつてましたよ。髪の毛の短い男の頭は熱湯の盥の中に入れることでできないからだ——。だから工場長の天然パーマは諦めなさい。いっそのこと非常時なんだから丸刈りにしちゃった方が、悩みがなくなりますよ」と癪にさわったからといってやった。そこへごめんくださいと、弁当箱を持った蝶子が長

い髪をそのまま垂らし、リボンで結んだ姿で入って来た。工場長は目を見張って、

「この人は?」と僕に聞いた。

「大宝楼にいたちぢれ毛の子です。蝶子というんですが、増田の小父さん、大宝楼の主人ですが、その人の情けでそのまま暇を貰い今僕の家にいるんです。今朝僕が弁当を忘れたんで持って来てくれたんです」

蝶子はそのまま五時の退け時まで、僕を待っていた。肩を並べて工場を出ると、ぶらぶら歩いて洲崎弁天社までいってお参りした。蝶子がお礼参りしたいといい出したからだ。

「庄二さん、あのね、これから二人が大きくなって結婚して、またあたしのようになちぢれ毛の赤ちゃんができたら、どうしましう」

まじめくさって心配気にいるので、僕も大人のようにいっぱしぶって、

「大丈夫さ。その時はまたそのちぢれ毛の女の子に、僕のようなハンサムがあらわれて恋愛して、そして結婚することになるだろうさ——」

と答えた。

宝曆大奥秘文

夜叉駕籠

島本春雄
秋吉巒 鬼・画

★逢魔の刻になると夢想窓の大奥駕籠が不気味な邪気を秘めて現われるのだ！



一、墓地乗物

地獄。
極楽。

その明暗を一瞬にわけける逢魔の刻であった。

蓮華院の山内を、音もなく滑るように入った一挺の駕籠があり、見れば、萌木紗連子の夢想窓、赤地錦の簾縁、滅金の金簾、棒押縁黒塗り、唐草紋天鵝絨巻の女乗物である。

本堂を左にみて、そのまま墓地へ向った。

「錦島さま、お成り」

墓地の片隅で、ささやくような声が聞こえ同時に駕籠は、びたりと止った。

異妖な空気が流れている。

それは、逢魔が刻の、あの誘うように忍び



よる闇の色とは別のもの、殺気に似た緊張と邪念がかもしだす、暗い、冷たい、墓地の気配であった。

かなりの人数が伏せてある。

しかし、すべてが影徒士の配置をとって、人の眼には触れなかった。

「お待ち申しておりました」

墓地の中央で、小腰をかがめたのは、勘定奉行大橋近江守であり、その背後に立って、肉の薄い唇をへの字に結んでいるのは、大目付曲淵豊後守であった。

「絵浜の方さま、ご実家菩提寺代参の名目にて、大奥を出ました。刻限によゆうがありませぬ」と、いったのは、天鷲絨駕籠のぬしである。

——錦島。

ささやく声がいった言葉に間違いがないとすれば、この女は大奥中年寄の錦島であり、御客会釈、御中臈の上にくらいする権女であった。

大奥女中の職制は、御台所にお目通りを許されるお目見え以上に二十階級ある。

大奥後宮秘史・特集

上臈、御年寄、中年寄、御客会釈、御中臈御坊主、御小姓、御錠口詰、表使、御次頭、御次衆、御祐筆頭、御祐筆衆、御錠口衆、御錠口助、御切手、呉服の間頭、御三の間頭、呉服の間衆、御広座敷詰——である。

錦島は二人の中年寄の一人であり、上に、七人の御年寄、三人の上臈がいたが、いずれも無能であった。

家重將軍に二人の愛妾がある。

絵浜。

桜葉。

——の二人であり、絵浜の方の尻押しをしているのが、中老錦島、桜葉の方の背後にいるのが、いま一人の御中老小波であった。

大奥の実権は、この二人の手中にあるといつてよかった。

大名も旗本も、將軍の閨中を握る女の前では、屑——といつてよかった。

幕府の要職たる勘定奉行、大目付が、辞を低くしているのも、これは当然であつたろう。

「は。お手間は、とらせませぬ」

と、曲淵豊後守がいった。

（——聞きましょう……）

声には出さず、軽く眼でいって、錦島は横を向いた。

ご愛妾絵浜の方、ご実家菩提寺代參の名目で、大奥を抜けだしたこの女は、三十をこえた大年増であり、爛熟した女体をもてあます醜婦でもあつた。

「では……」

豊後守の声は、聞きとれぬほど低くなった。忍び寄る夕闇の中で、その口ばかりが、ときおり白い歯を見せて動いている。

四半刻……

半刻……

そして、蓮華院の墓地は、とつぷりと暮れた。

すでに、大江戸八百八丁が、千代田の城の松の緑が、白亜の天守が、墨色の夜気に包まれていた。

錦島の中老駕籠が、墓地を出たのはこのときである。

逢魔の黄昏に姿を現わし、地獄の闇に消えたこの駕籠は、どす黒い邪念と執念をひめる夜叉駕籠——といつてよかった。

墓地の密談に、善意は考えられない。いずれよからぬ相談であつたに違いなく、相手の大目付曲淵豊後守も、勘定奉行の大橋近江守も、後日おのれを襲うであろう兇運を知らず闇の色に誘われるように、その姿を消した。

墓地を警固した十三人の影徒士も、あとを追う形で音もなく移動している。

蓮華院は、無人の静寂——冷たい墓石と、幽気の中にとり残されてしまった。

否。

ここに一人、ほのかな女臭をふりまく人物がいた。

「ほっ」

微かに吐息して、本堂の蔭から姿を現わしたのは、頭巾で顔を覆って、その容色のほどは知るよしもないが、たしかにまだ若い女人——それも、町家の娘でなく、大奥の女中に違いなかった。

歩きだした。

そして、この女も闇の中……江戸城の方角に消えていった。

二、お庭番の娘

目見え以下の奥女中にも、七級ある。

御末頭、御三の間衆、御仲居、御火の番、御使番、御末、御犬小供——である。

御切米百石、御合力金百両、十五人扶持、炭二十俵、薪三十束、湯之木五十束、油七升二合、五菜銀三百目の御上臈より、御切米四

大奥後宮秘史・特集

石、御合力金二両、一人扶持、薪三束、湯之本二束、油五合、五菜銀十二両のお半下女中まで区別があつても、ひとたび將軍家のお手がつけば、たちまちその地位は変転する。

いずれも籠の鳥であり、生涯奉公の奴隷であつた。

が――

大奥の女は、これだけではなかつた。

脂粉と女臭と嫉妬と権謀の妖しい毒気が渦を巻いている大奥女の大部分を占めるのは、

局――部屋の取締り――合の間

小間使、おたもん――飯焚き――

――を含む部屋方女中……一生奉

公の誓約もなく、いつでも御暇をいただくことのできる女たちであつた。

しかし、こんな端女にいたるま

で、いまは二つに割れている。家重の閨を、その寵を二分する絵浜、桜葉……二人の側妾が

大奥を分断して、女ばかりの悲

しさは、陰湿な、どろどろした、蛇の執念を思わせる、暗い、い

や、どす黒い邪気に、はらわた

の底まで染めあげられていた。

「なに、錦島が、蓮華寺の墓地で、勘定奉行の大橋近江守と密談したとな……。大目付の曲淵豊後守も姿を見せていたといやるのか？」

「はい」

「して、密談の内容は？」

「影徒士十三人の眼があり、そこまでは……」

「むっ」

すでに夜半であつた。

本丸大奥の一室で対座しているのは、中老小波と、蓮華寺の頭巾の女――御使番の影鈴である。

「影鈴」

「はい」

「なんとしても探りたいものじゃ」

「……」

「このところ、上様いかなるご存念かは知ら

ねども、絵浜の方さまのお聞にばかり、足繁くお成りあそばされ、桜葉の方さまには、と

んとお成りがない。よって、錦島どのは、いさ

さか増長慢の振舞あり、心苦しきことじゃ。

このままでは、われら次第にうとんぜらるる

は必説……なんとかせねばと存じていました

――影鈴！――

「はい」

「この上とも、心して探ってくりやれ。ご代

参と称して、墓地で勘定奉行や大目付と密談するからは、必ずや、よからぬ企みがあるう。

その非をあばいて、絵浜の方さまに繋がる錦

島、歌花の一派を葬むるのじゃ。お使番頭の

歌花が沈めば、そちが後任となろう」

「必ず……」

影鈴の眼がキラリと光った。

お使番女中は十三人いる。番頭の地位を得

れば、あとは才覚次第で中老の職が待っていた。

影鈴には野心があつた。

お庭番衆の家に生れ、少祿下士の娘なるが

故に、大奥へ上つても目見え以下の位置しか

獲られなかつた。

（今に見ろ！）

と、思っている。

才覚にも、容姿にも自信があつた。いずれは中老の職を得て、將軍家の眼をとらえ、閨

中に誘つて骨抜きにし、天下を意のままに……

そんな野望の持主であつた。

「下つてよい」

「はい」

小波の前をさがって自室に入ると、肌身離

さず持っている伊賀手裏剣を褥の下に隠して

ほうつと軽く吐息した。

（——今宵も上様は、絵浜の方のお聞にお成り遊ばされている。狡猾貪欲の錦島も、今宵はお聞に近づくまい……）

と、思う。

墓地密談の内容は、いずれ錦島の口から、絵浜の方の耳に入るはずであった。錦島が絵浜の方を動かし、絵浜の方は、閨中の戯れに將軍家重をとろかして、その目的を達するのである。

ご愛妾の口先一つで、万石大名の社稷もあぶなかった。

「ふふ……」

苦笑して、影鈴は帯を解いた。大奥女中の定めとして、下着は必ず白絹であったが、その襟を割ってのぞく乳房は、小麦色に盛りあがって、薄紅の乳首が、若さと健康を誇示していた。

三、吃り將軍

老中本多伯耆守正珍を前にして、將軍家重は額に青筋を浮かべていた。

怒っているのではなかった。

生れつき疝性であり、極度の吃音者でもある家重は、思うことが容易に言葉とならず、

あせってこうなるのは、もう毎度のことだったのである。

「——か、か……か、かな……も、も……も

り……ひひひ、ひ、……」

なんのことか、わからなかった。

「むっ」

絶句して、家重は傍の側用人大岡出雲守忠光の顔を睨んだ。

「はっ」

心得て、忠光は代弁の口を開いた。これも毎度のことであった。

「上様のおおせられるには、金森兵部少輔頼錦が近年の藩政でござる。仄聞するところによれば、封内の農民ども騒擾のきざしありとか。この儀如何？」

伯耆守は、内心、きたな——と思った。いまさらいわれるまでもなく、先刻承知の事実であった。

金森兵部少輔は美濃郡上の城主であり、苛酷な年貢を取り立てて、封内不穩の空氣がみなぎっていた。

いずれは、江戸表の耳に入る……と見て、金森家家老の手が、老中本多伯耆守、若年寄本多長門守、勘定奉行大橋近江守、大目附曲淵甲斐守、美濃郡代青木次郎九郎の上にのび

ていた。

賄賂。

獻妾。

農民の血を絞りあげた黄金が、かり集めた美女が、幕府要職のかれらにおくられて、藩政の乱れが糊塗されてきている。

「——は。伯耆めも、さような噂を仄聞せぬではござりませぬが、これは、何か下心ある流言かと存じます。近来、ご府内の浪人どもややもすれば、根もなき流言を発して、人心の動揺をはかるきざしあり、先日もその取締りを町奉行に令したばかりでござります」

白々しくいつてのけた。

「——たたた、た……し、し……か……」

と、また家重がどもりはじめた。

「たしかめよ——と、上様はおおせられる」横から、すかさず忠光が口をだした。

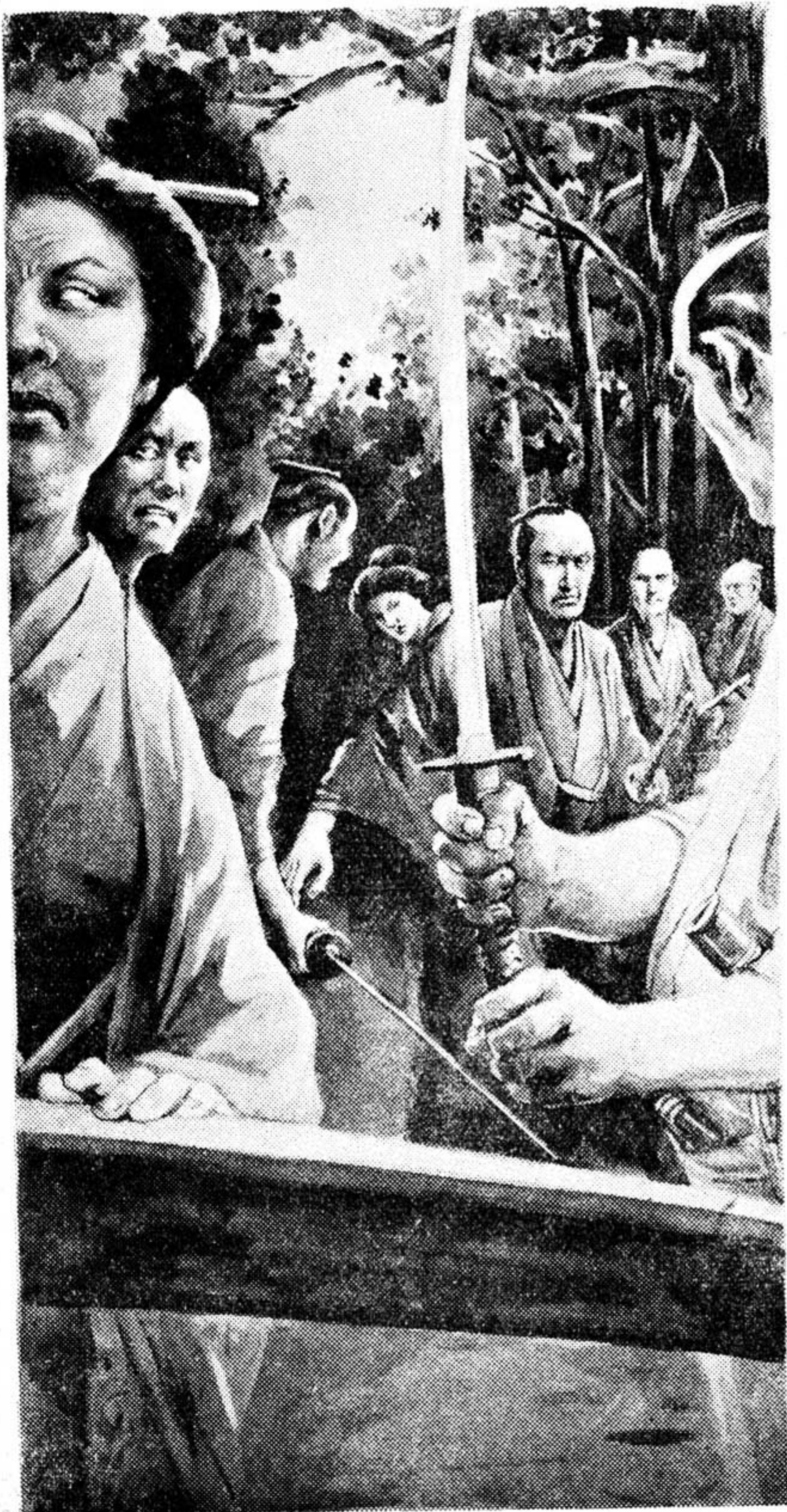
「はっ」

心得て伯耆守は下城したが、その顔色は牙えなかった。

（こういう経路で、上様の耳に……もしや但馬が……）

と思う。秋元但馬守は下席の老中である。

金森藩内の騒ぎは、今にはしまったことなく、訴状もいくたびか出されていた。しか



し、そのすべてを握りつぶして、將軍家重の耳に通ずる道は、一切断たれていたはずである。

(この上は、重ねて、錦島どのに……)

落着くところは、ここであった。大奥を握

る者が、將軍を制す。そのゆえに、家重の愛妾絵浜の方の軍師たる中年寄錦島を、自家薬籠中のものとしたのであった。

賄賂を山と積んでいる。

爛熟した女体をもてあます三十女の錦島に

家中の美小姓をよりすぐって、その夜伽も忘れなかった。

「早いほうがよろう」

心がきまって、伯耆守は卓上の振鈴を鳴らした。

大奥への出入りは、御錠口で遮断されている。將軍家重をのぞいては、側衆小姓といえども、大奥への出入りは一切禁じられていた。かたわらに広敷があり、ここに、若年寄の支配を受け、留守居の指揮に属する広敷用人がおり、この広敷用人が組下の者を使って大奥の用を弁じている。

若年寄も広敷用人も、伯耆守の意のままである。

翌日。

広敷用人勝沼武太夫は、大奥御錠口衆の一人、葉末に伯耆守の内意を伝えた。

御錠口衆を勤める大奥女中は七人いる。その七人ことごとくが、絵浜の方——錦島……につながる女とは限らなかった。

類、雪野、琴、葛葉、葉末。

この五人が、錦島の腹臣であることを、武太夫はあらかじめ確かめておいたのである。

本多伯耆守——本多長門守——勝沼武太夫

——葉末——錦島……間に三人の手を経て、伯耆守の内意が、錦島の耳に達した。

そして、再び夢想窓の女駕籠が、逢魔が刻をえらんで江戸の町に現われたのである。

こんどは墓地ではなかった。

闇になるのを待って、本多伯耆守別屋敷の

奥深く消えたのであった。

夜叉駕籠。

外面如菩薩内心如夜叉……いや、錦島は、外面もまた夜叉であり、内心は更に輪をかけた夜叉女であつたろう。

四、天井女

絵浜の方は、脇息に寄りかかって、うっとり目を閉じていた。

湯上りの軽い疲労感が、家重の愛妾であるこの女には、かえって心地よかったのである。どちらかといえば、丸顔で下ぶくれの美貌であつた。

「油断はなりませぬぞ」

と、錦島が語気を強めていったので、絵浜の方は、軽く閉じていた両眼を、うっそりと開いた。

「ご老中、本多伯耆守どののお言葉によれば金森家のこと、上様のお耳に入れし者ありとか。表諸役の者共には、更に心当りなければ必ずや、つてを求めて桜葉の方を動かしたとしか思われませぬ。ご寵愛、お方さまに傾きたるを嫉み、桜葉の方はこれ幸いと、金森家のこと、上様のお心を繋ぐ方便に用いたので

ござりましょう。意地にも、負けられませぬ」錦島は、いつもこの手で、絵浜の方をあやつるのである。

中蔵絵浜をもちたてて、家重のお手がつくように仕向けたのは錦島であり、絵浜の方はいわば人形にすぎなかった。

「どう致せばよいのじゃ？」

絵浜の方は、心細げにたずねた。

「なんでもありません。上様お成りの節、お聞における夜伽の褥で、金森家のことども、何かといふらす者あれば、重き罪科を下しおかれましますよう、そつと耳もとへ鼻声をおきかせなされませ」

絵浜の方は、軽くうなずいた。

何一つ取得はないが、この女には、家重をとらえて放さぬ魅力があつた。

それは、大奥三千の女を下に見る美貌であり、豊満な乳房であり、女盛りのむせるような肢体であつた。

「あ、あーん」

小さなあくびを、白魚の指に受けて、絵浜の方は閨化粧の用意を命じた。

今宵家重のお成りがあれば、この白痴美に似た愛妾の口先一つで、高潔の士の幾人かが暗い地獄へおちるのであろう。

(——ふふふ……)

錦島は、閨化粧をはじめた絵浜の方の、白いうなじを眺めながら声なく笑った。

(この細腕が天下を握っている)

と思ったし、生れついでに醜女で、將軍の寵愛は望むべくもないが、かわりにご愛妾の一人を意のままに動かして、思うことならざるはなかったのである。

(老中職といえども、わたしの前では猫同然じゃ)

その得意が、声なき笑いとなったのであるう。

否。

声なき笑いには、今一つ、みだらな意味があった。

それは、伯耆守別屋敷における美小姓との戯れの記憶であり、片輪者に近い家重に抱かれる絵浜と、絵から抜け出たような美小姓を意のままにするおのれと対照しての、皮肉な嘲笑といってよかった。

カタッ

微かな物音、それもたしかに天井裏からの物音に、耳さといはずの錦島が、気づかなかったのは、その脳裏に、妖しい追想の絵巻がありありと映しだされていたからであつたらう。

大奥後宮秘史・特集

物音のぬしは影鈴であつた。

このお庭番の娘は、天井裏に忍んで一部始終を聞きとつたのである。

(期、到来!)

と、思う。將軍家重の鼻毛を抜いて、金森藩騒擾を闇に葬ろうとするからには、その裏に抜き難い事実がなければならぬ。

金森家の腐政は、事実——と考えてよいのである。

(出世の機会……)

ニヤリとして影鈴は天井裏を這つた。

(手証を掴んで、桜葉の方さまの口から上様の耳へ……。さすれば、絵浜の方はうとんぜられ、繋がる錦島も歌花も逼塞は必説。手柄により、わたしは御使番頭の職に……)

妄念は、その進退に隙をつく

る。影鈴もまた例外でなく、細心の注意を払うべき天井裏からの脱出に、一瞬の虚をみずからつくって、ガタリと大きな音をたてた。

御使番頭歌花の局部屋が眼下にある。

「賊?!」

局女中(部屋取締り)のお夏が、キッと天井を見上げた。

お菊。

お縫。

お末。

三人の小間使は、裾を乱してたち上り、三方に散って、それぞれ小脇に長刀をかいこんだのは、その瞬後であつた。

「むむ……」

影鈴は動けなかった。動けば非常の警声が発せられ、大奥三千の女が、賊備へについてしまうし、そうなつては、穩便の処置は不可能である。

五、血 罫

緋鹿子の扱帯が、ぎりぎりとその両手首に食い込んでいる。

「そちや、鼠の生れ変りか?」

といったのは、狐のように眼尻の吊りあがつた御使番頭の歌花であり、その足もとに崩おれた緋鹿子囚女は、無念の齒をかみしめた影鈴であつた。

「鼠女の顔が見たい」

「……」

「ええい。顔をあげぬか」

男の肌も情も、ただ草双紙の絵空事としてついに一度も触れることなく大奥でひからびたこの女は、みたされぬ心が嗜虐の血を誘うのであろう。その妖しい眼の光りは、まさに鼠を捕えた猫のそれであった。

「顔じゃ！」

「はい」

と、こたえたのは三人の小間使であり、そのうちの一人が、影鈴の黒髪を握って、ぐいっと持ちあげた。

「天井裏に忍んで、何が目的じゃ」

「……」

「日頃、ござかしうさえずる口が、今宵は急に片輪になったとみえる」

影鈴の唇が、かすかに痙攣した。しかし、ただそれだけであり、ふたたび固く結ばれて歌花が期待した哀願の声は、ついに聞くことができなかった。

「察するに、絵浜の方さまのお閨裏まで忍んだに違いなく、上様のお成りがあれば、一大事となっていたかもしれぬ。お縫、ふところを探ってみやれ。七首を吞んでいるかもしれない

ませぬぞ」

「はい」

お縫の手が、荒々しく内懷をさぐった。

これは当然予期できたことであり、肌身離さぬ三枚の十方手裏剣は、帯の間の隠し袋に移しかえてあった。

むっちりとしたお縫の手は、むなしく内懷を舐めいて、獲物をつかめぬ腹立たしさに、形よく盛りあがった乳肌へ、悪意の爪をぎりぎりと押しつけた。

「むっ」

苦痛が声となり、悶えるように上体を引けば、黒髪を掴んだお菊の手が、底意地悪く吊

りあげる。

「ああっ！」

思わず腰が浮いた。

「刃物はないとみえる。——とすれば、盗みぎきの天井忍び……。だれじゃ？ そちに、かようなことを命じたのは？」

歌花の顔が、かみつくようにちかちかと寄った。

「いえぬか。なれば、いやでもさえずるようにしてくれよう。——構わぬ。三人で引きずり廻すがよい」

「はい」

お縫の手も黒髪にのびた。おのれより美し



き者、才の立つ者への憎しみが、無意識のうち荒々しく働いて、お菊、お縫の兩人は、眼と眼を見合せたのも一瞬であり、あとは無言で影鈴の髪をぐいと引いた。

「あっ」

仰向けに倒れると、裾を乱して悶えるのも構わず、一尺、二尺、三尺……無慈悲に青畳の上を引きずるのだ。

五尺……

七尺……

後手の両手首が、白魚の指が、青畳に削られて点々と血の色を見せた。

「ひいーっ」

こらえきれずに悲鳴を発したが、影鈴の口は、それ以外の言葉をつづらない。

「何事じゃ」

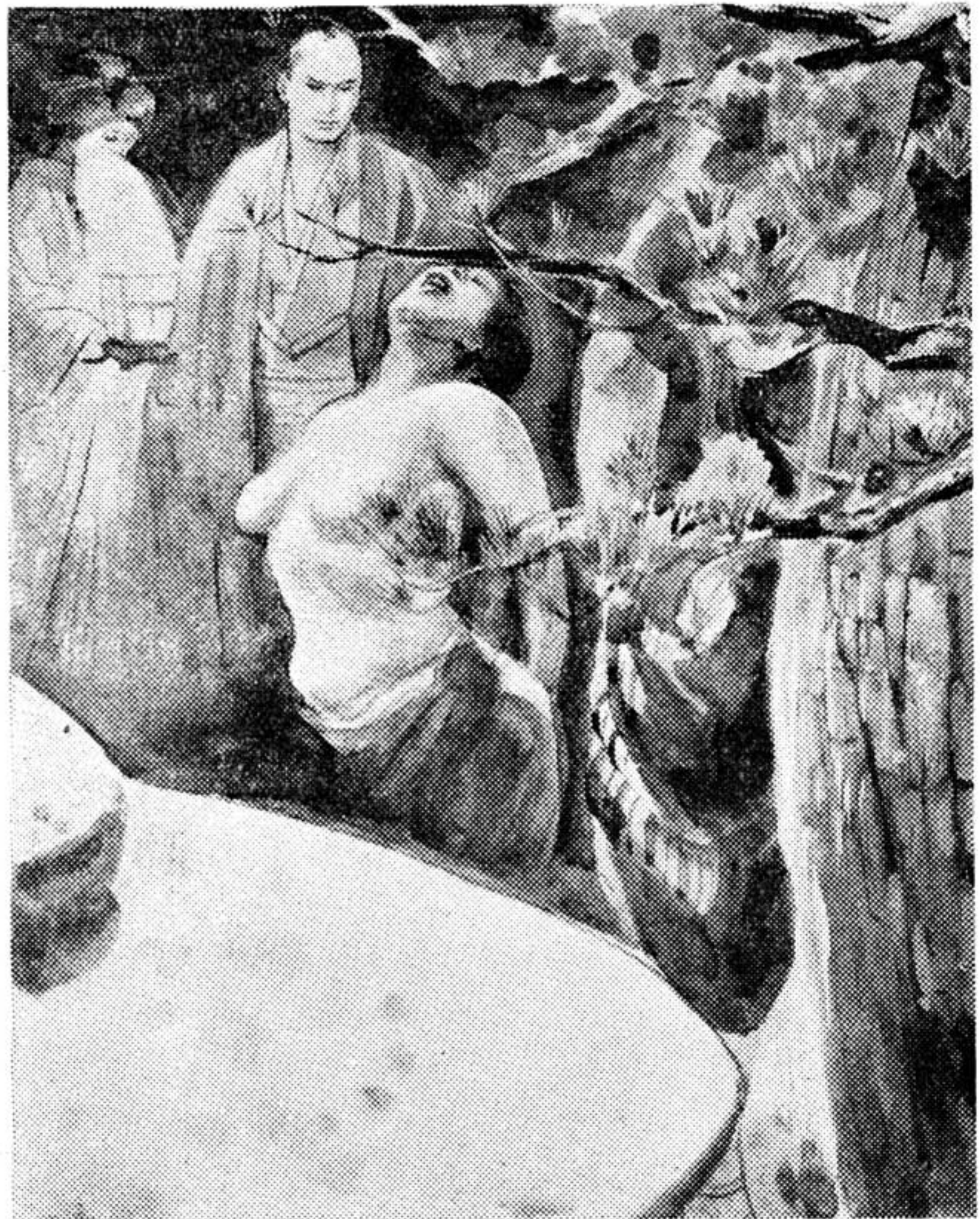
この悲鳴を耳にして、さいしよに姿を現わしたのは錦島であり、前後して小波も、その仮面のような顔を見せた。

「影鈴が天井裏に」

「なんと？」

錦島の眼がギラリと光った。

「ああ、そのことなら大騒ぎするには当りませぬ。桜葉の方さまご愛猫が、先頃、黄金の首鈴を紛失致し、あれは上様のくだされもの



ゆえ、そのままに捨ておくこともならず、影鈴に探索を命じておいたのじゃ」

これは、小波の才智を見せる救け船であった。

「むっ」

錦島は、不審の色を露骨に見せて、しかし喉もとまで来た声を、無理におさえた。

(白々しい大嘘！)

と、この女はいいたかったのである。

「ひどいことを……」

大奥後宮秘史・特集

小波は一瞬の躊躇も見せなかった。ツツツ……と、すりよつて、すばやく影鈴のいましめを解いている。

六、夢想窓の眼

「不覚でござりました」

小波の部屋で、影鈴は傷ついた白魚の指を揃えた。

「よいよい。上様のくだされ物

——黄金の首鈴の探索を命じた

……といったときの錦島の顔：

……ほほほ、思うても胸がすく。

あのように申せば、嘘——とわ

かっていても、引きさがるほかはない。ほほ

ほ……」

「でも、このままでは」

「いかにも。そちは眼のかたきにされよう。

一刻もはよう、金森藩騒擾の手証を握ること

じゃ。錦島の動きをみれば、かの者と老中、

若年寄、勘定奉行、大目付どもは、たしかに

賄賂でつながっている。このまま放置すれば、

大奥は、いよいよ乱れ、やがては、錦島の思

いのままとなる」

「とは申せ、大奥にては、自在の働きもなりかねまする」

「この小波に考えがある。桜葉の方さまのご実家は京都じゃ。口実を構えて、そちにご実家への使いを願いまししょう。異例のことなれど、桜葉の方さま、たつてのお望みということにして、そちは大奥を出るのじゃ。あとは自在、老中本多伯耆守を探ぐるもよし、美濃郡上へ走つてもよいぞ。お庭番の娘とあらばその辺のことは心得ていよう」

「はい」

うなずく影鈴の眼に、決意の色があった。

翌日。

この野望に燃える大奥女中は、三枚の十方手裏剣に、その運命を托して、ひそかに城を出た。

吉。

兇。

行手には、この明暗二筋道が、くつきりと分れて続いており、しかし、それは当人の眼に見えぬ運命の道であった。

一步……

二歩……

吉にせよ、兇にせよ、踏みだした以上は、後にひけない道でもある。

影鈴は急ぎ足になった。

美濃郡上へ直行するか、それとも老中本多伯耆守、若年寄本多長門守……の身辺を探るか、まだ方針は決定しておらず、いずれにしても、まず、その髪と着物をかえる必要があった。

(どこで……?)

考えながら歩いている。ことわりなく、親もとの伊賀屋敷へ戻ることは許されなかったし、また、その気もなかった。

(そうだ。お浜の親もとへ……)

ふと良策が浮んだ。お浜は、影鈴の下で働くお末の女であり、その実家は、日本橋の呉服問屋伊勢屋善左衛門であった。

目標を掴むと、この女の足は、さらにはやくなった。

が——

影鈴は、中年寄の錦島に対する警戒を忘れていた。

大奥の実権を一手に握ろうとしている錦島であり、この女の眼は、一件以来、影鈴の身辺から離れなかったのである。

夢想窓の大奥駕籠が、影鈴と前後して城を出ていたし、それより先に錦島の命を受けてこの女のあとを慕う二つの影が、つかず離れ

ず、執拗に続いていた。

逢魔の刻――

金森兵部少輔のお膝元である美濃郡上への直行を決意して、旅のしたくを終えた影鈴は伊勢屋善左衛門の店先を出た。

九十六里の道である。

許された日数に限りがあり、夜に日を継いで歩かねばならなかった。

しかし、影鈴は、なみの大奥女でなく、伊賀の血を受けて、九十六里の道のりは物の数ではなかったろう。

木曾街道を行けば、下板橋まで二里、浦和で六里たらず、どこまで足がのびせるか、一歩、二歩……踏みしめる足に、歌花への復讐と、大きな野望の夢があった。

夢……

それは、おしなべてはかないものであり、この女のそれも、江戸の町を出ないうちに、もろくもくだけの運命を背負っていた。

旗本榊原和泉守別屋敷の横を抜けて、宗三郎林を左手に見る道へ出ようとしたときである。いきなり横手から、音もなく影のように行手をさえぎったものがあった。

駕籠。

それは、夢想窓の大奥駕籠……中年寄錦島

を乗せた夜叉駕籠だったのである。

七、硬骨大名

「待てッ」

ぎくりとしたときには、すでに前後を押し包まれて、その人数は十人を越えていた。

「美濃へはやらぬ」

といった声は、駕籠の中からであり、まぎれもなく錦島の声であった。

（すると、この人数は、本多伯耆が手の者か……）

影鈴の顔から血の気がうせた。

街道無頼の雲助や、女一人とあなどって、汚ない触手をのぼす腐れ男には、大して驚かぬ心の準備も腕の自信も持ちあわせていたが老中の手の者が相手では、どうにもならなかった。

右手が帯の間の十方手裏剣をまさぐる。

（虚を衝いて逃げる）

これ以外に道はなく、やにわに身を沈めて背後の一人の眉間を狙った。

ヒュン

十方手裏剣が夜気を切り、悲鳴は瞬後であつた。

「げえっ！」

眉間を裂かれて、一人がくたくたと膝を折った。

ヒュン

ヒュン

続いて二枚の十方手裏剣が飛び、同時に影鈴は走りだしていた。

「うわっ！」

「げえっ！」

一人が左眼を、その横の奴が手首を押さえ、てよろめいた隙を狙って、影鈴の足は走り抜けた。

が――

追手をはばむ撒き菱の用意もなく、大奥の生活は、この女の足を予想外におとろえさせていた。

五間。

十間。

そして、もんどり打ったのは、小石につまずいたからであり、したたかに腰をやられてしばらくは起きあがれなかった。

「む、む……」

呻いて半身を起したときには、すでにその鼻先へ、抜身の刀がぬうつと来ていた。

「こうすれば走れまい」

白刃が一闪して、びりつと影鈴の帯を裂いた。

「ふふふ」

嘲笑して、下着の紐をぶつりと切る。

「さて、どうしたものだろう……」

振りかえると、いつの間に駕籠を出たのか、中年寄の錦島が、魂くい顔をさらに歪めて、音もなく近づいていた。

「帯を斬ってなんとする？」

その口から、皮肉な声が飛んだのは、憎々しげに影鈴の顔を一瞥したあとである。

「は？」

「手ごめにするために後を追ったのではなかったでしょう。伯耆守どのは、何と申されました？」

「は。錦島さまの御意のままに従へと……」

「斬るのじゃ」

「え？」

「この女子は、生かしておけぬのじゃ」

うなずいて、伯耆守の手の者は、白刃をふりかぶった。

（けっ。くそ女郎め！ 叩っ斬ってやりたいのは、おぬしの方だ）

と、腹の中では思っても、ここで叛逆するだけの度胸も義心もないのであろう。

「覚悟！」

と、低くいって、振りあげた刀に殺気をこめた。

「待てッ」

黒い夜気の向うから、鋭い声が飛んだのはこのときである。

「なに奴？」

「老中秋元但馬守家来、間瀬隼人じゃ」

名乗る声と同時に、四、五人の人影が走り寄って来た。

「われらは、本多伯耆守家来、主命により、ゆえあってこれなる女人を成敗致す。口出し無用！」

「ならぬぞ」

「なにッ」

「われわれも主命により推参致した。主君但馬守は、あれにおわす」

「え？」

見れば、闇の中にひっそりと立つ人影があり、背後に大名駕籠が黒々と見えた。

「ううむ」

老中の姿を前にしては、押しての無法もなりかねたし、たのむ錦島は、衝突をさせて、いちはやく闇のかなたに姿を没していた。

「引けッ」

と、焼くその声で叫んだのも、この場合やむをえなかったろう。

秋元但馬守は、老中唯一の硬骨大名であり縁者にあたる榊原和泉守の病床を見舞った帰りであった。

八、家重激怒

絵浜の方の、妖しい夜の肢態を、目蓋の裏にえがきながら大奥の畳を踏んだ將軍家重は思わずギョッとなって足をとめた。

「申しあげます」

局廊下を曲ったとき、いきなり叫ぶようにいって、飛び出した女があったからだ。

（ぶ、無礼者ッ）

吃音の家重は、叱咤の声も口の中であり、片頬を歪めてその女を見た。

平伏して、右手を上にあげている。その手に、一通の書状があった。

「狼藉ッ」

「乱心！」

口々にわめいて、この無法女中を取りおさえるべく、お錠口衆が躍りかかったのは、その瞬後であった。

一人が左手を、一人が右手を、のこりの者

は、髪や帯を掴んで引きすえようとした。

「ま、ま、まて！」

家重は、つかつかと歩みよって、女の右手にあった書状をとりあげた。

「ううむ」

一読して、顔色の変ったのは、だれの眼にも明らかであつたろう。

「た、ただだみつ……よ、よべ」

「はい」

まもなく、側用人の大岡出雲守忠光が、あたふたと駆けつけて来た。寵臣のこの男でも大奥へ足を踏み入れるのは、異例のことであつた。

「見よ」

忠光の鼻先へ、一読した書状を突きつけて、將軍家重は、取りおさえられた女を指した。

「おもてを上げい」

家重の意を体して、こういったのは忠光である。

「はい」

あげたその顔は、影鈴の顔であつた。

「う、う、うい……うい」

と、家重が吃る。

「うい奴、と上様はおおせられる」

即座に忠光が口をそえた。

「名は？」

「影鈴。お使番をあい勤めまする」

「うむ。うい奴」

と、こんどは吃らずにいえて、家重はニヤリとした。

影鈴の美貌が、家重の心証をよくしたし、それに、この女が差し出した書状は、秋元但馬守の画策によるもので、容易ならぬ内容を持つていたのである。

翌日。

大奥は、上を下への大騒動になった。

愛妾絵浜の方の黒幕であり、大奥の実権を一手に握ろうとしていた錦島が、青竹の筈の下で呻吟したのである。

ピシッ

錦島の肩に、青竹の筈を加えたのは、お使番の影鈴であり、

「見苦しい。すでに、美濃郡上の農民どもがご老中秋元但馬守どのお屋敷へ、駆け込み訴

えのことあり、金森家老臣どもより、本多伯耆守の手をへて、そなたへ賄賂の筋ありしこと、すでに影鈴の書状により明白となつてい

る。この上の隠しだては許されませぬぞ！」と、叩きつけるようにいったのは、小波であつた。

家重の面前である。

「ふ、ふふ、ふ……ふらち——く、く、くる……くる、くるま……」

例によって家重は、額に青筋を浮かべ、激怒と、もどかしさが、生来の吃音に輪をかけていた。

「不埒な者、この上は車裂きの極刑に問うても……と、上様はおおせられる」

側用人の忠光がいなくては、何をいつてるのかわからなかった。

「……」

しかし、錦島は屈しなかった。おし黙って夜叉の形相である。

「うて！」

家重の手が、小刻みにふるえている。

「はっ」

影鈴は、えたとび青竹の筈を、ふりかぶつた。

ピシッ

ピシッ

甲賀娘の折檻の手には、独特の力があり、錦島は苦痛に悶えて、蛇のようにくねる。

ピシッ

「ひッ……ううう……」

ピシッ

「あぁッ……」

肉を打つ音と、悲鳴が交錯し、強情我慢のこの女も、しだいに力を失っていった。

「き、斬れ」

家重は、ついに最後の断を下した。

「上意じゃ」

忠光の冷たい声が、刺すように迫った。

「ううッ」

錦島は、おえつを噛み殺して、がっくりと肩の力を抜いた。

我慢の角も折れたのである。

——この女の口から、その領内苛酷のために、農民騒擾し、幕府の聞こえをおそれた金森家が、ひそかに勘定奉行大橋近江守、大目付曲淵豊後守、若年寄本多長門守、老中本多

伯耆守に賄賂をもって取入り、農民処置の内

談をとげ、美濃郡代青木次郎九郎に命じて、騒擾威圧をはかりし一件が、明白になった。

賄賂は、伯耆守の手から錦島に及び、ため

に錦島は、愛妾絵浜の方をつついて、閨の痴話にことよせ、金森家不問のことを、家重に吹きこんでいる。

——予を、おもちゃと心得るか！

家重が激怒したのは、このためであった。宝暦八年。

この一件に対する家重の断が下った。

金森兵部少輔頼錦は領地召上げ南部流罪。

老中本多伯耆守は老中の職を奪い逼塞。

若年寄本多長門守は同じく職を解き美作流罪。

勘定奉行大橋近江守は、相馬預け。

大目付曲淵豊後守は閉門。

美濃郡代青木次郎九郎は逼塞。

そして、愛妾絵浜の方は、錦島と共に追放され、同心の奥女中も、それぞれ流罪となった。

影鈴は、望みの御使番頭をとびこえて、一挙に中臈となり、桜葉の方は、絵浜の方にかわって、家重の寵を独占したが、まもなく病いを得てこの世を去った。

一件落着。

しかし、このあと、將軍家治の安永年間に至って、時の老中田沼意次と結びついた影鈴は、一変して悪女となり、再び大奥に嵐をまねくのである。

……おれは石の壁に頭をぶつつけたみたいだった。クスリが手に入らんとすると、こんなところでブラブラしていても、ハエもタレはない。おれは玉突屋をでた。表の通りにおりとすぐ、あの靴みがきがみつかった。

もし、やつを知ってたら、話を

つけて、金をかりてもいい。しかし、ぜんぜん面グレじゃないからそれもできん。おれは、やつのあとをつけて、角をまがり、すこしいそいで、おいつこうとした。あるいてるやつが見えないのはマブい。通りは燃えるようだ。お

いつくとも、靴みがきはふりむいた。こいつはお笑いだ。この野郎、

やつのこつちをむくと、おれは

シャン台の革紐をつかんで、やつを壁におしつけ、革紐のどをおさえた。

「へたにがたつくと、日が沈むのを見れんようになるぞ」

靴みがきは、なかなかいいタマだった。まだ子供のくせに、ぜんぜんブルっていない。おれにかかってこようとした。で、おれは、シャン台の革紐で、もつとのどをしめあげた。やつの目の玉がとびだしてきた。

もう、いつてしまいそうになったので、おれは手をゆるめた。「おれのことを、ひとことでもベシヤってみろ、仏にしてやる。よう稼いだ金はどこだ？」
やつは返事をしなかった……。

……のぞき穴があいた。ドアのうしろから、バカでかい片目がのぞいた。そして、ドアがあき、お

れはなかにはいった。部屋はずしく、おちついて、ライトもくらく、音楽は、おれの頭のなかにかかったもやみたいにふんわりしている。ちくしょう、スカしたパーティだ。

おれは奥にいった。みんな面グ

レだが、知らない野郎が二人と、はじめてのスケも、ふたりばかりいた。

そして、そのスケにあい、コマして、コマされるようなことになった。スケはマリワナを吸って、だいぶトロンとなっている。

わかったよ

ANyThlNGGoes



ハル・エルスン

「あんた、はじめてね。いっしょにマリワナを吸う？」

「ああ、おめえとだったら、なんでもつきあうよ。わかってんだろ？ おれたちは、なんでもいっしょ……」

新しいレコードがかかった。おれはおどりとなくなったので、スケとおどった。

「つき合うな……？」

「うん……」

スケはアドレスをおしえてくれた。おれはスケのからだをおしもどして、言ってみよう。「一つだけヤクなのは、おめえまだ十四だ。おれとあそぶには、子供すぎる」
ヘタなことをいった。スケはかみついてきたのだ。面をひっぱたくと、スケははなれた。

スリル・スピード・セックスの
感覚を盛り込んだ御存じマンハン
ト九月号御期待下さい！

(月末発売)

魔悪来たから墓場

幸運の黒猫は一声も鳴かず、日増しに肥え太ったあげく……

長谷川 勇
画 夫 晃 淵 江

私がまだロンドンの古い小さな貸し家を借りて、売れない小説を書いていたころ、そう、二十七才の十二月だと思う――。

ロンドン市といっても、はずれで、夜になってしまえば人の声も聞けない森の中だった。

私は安い家賃で、近所づきあいにも騒音にもさいなまれることなく仕事が続けられるのを非常に幸福に思いながら暮していた。

家政婦に雇っている老婦人（五十二、三才かと聞いたらすごい権幕で怒ったことがあったから、実際は、もう少し若いのかも知れない）が都合のいいことに町の方から通ってくるので、必要な品は前もって頼んでおけば用が足りた。

私は、たいていの日は、朝食を十時ごろにとると、少し音楽をきき、それから新聞を読む。午後からは、一人暮しの気楽さから、近所の安酒場に入りびたるか、雑誌や書物を読むのが常だった。

雨でも降って、安酒場まで歩く

のが面倒なときや、懐具合の寒い折は、後者を選ぶより仕様がなかったが、たまには家政婦の小母さんから五シリング銀貨を借りてオムニバス（乗合バス）――私はこの新式の乗物に全く愛着を感じていた）に乗り、友人の家に酒をたかりに行くのも楽しみの一つだった。

晩食が済むと、家政婦はさっさと帰ってしまい、私は十二時ごろまで仕事をするのである。

そんなある日、友人が訪れ、雑談の末に、迷信は事実だと、友人はいい出した。

その迷信の一つに、黒猫を飼うと、幸運が必ずやって来るというのに私は大変興味をもった。

すると友人はますます得意になっていったものだ。

「本当さ、君。うちの伯父さんなんかね、凝り性だろう。すっかり有頂天になってしまつて、六匹も飼ってるありさまなんだ。

僕も飼おうと思って捜してるんだけど、なかなかいいのがいなく



てね。——とにかく黒けりや黒い
ほどいいんだ。けど、少しでもほ
かの毛が混っていたりすると、だ
めなんだよ。影のように真黒いの
が一番上等なんだそうさ。だけど
ね、一つだけ気をつけなけりやい
けないことがあるんだ」

「いけないことっていうと？」

「うん、その黒猫に絶対、股の下
を通らせないことだ。もし運悪く
黒猫が君の股の下をくぐったりし
たら万事休すなんだぜ！」

私はすっかり、その話を信用し
てしまった。実は、もう私は親兄
弟はもとより、ほとんどの知己、
友人に借金だらけの状態だったか
ら、幸運が来ると聞いてはもうじ
っとしていられなくなった。

で、友人が帰ってしまうと、酒
も煙草も忘れて、黒猫を捜しに出
掛けた。

しかし、彼のいったように、ふ
だんはどこにでも見つかる黒猫が
今日はおかしい位に姿をみせなか
った。一日中、足を棒にして歩い

たが、だめだった。

翌日も元気よく、黒猫を捜して歩いた。ロンドンのピカデリーの裏まで、たんねんに捜した。しかし、漆黒の猫は私の前へ出て来てくれなかった。

この時ばかりは、私も辛抱強かった。

それから、毎日、洋傘を小脇にはさんで、ロンドンの街を、隅から隅まで捜して歩いた。そして、すっかり諦めかけた十三日目に、私はやっと、一匹の真黒な仔猫を手に入れることができた。(実は墓場で見つけた野良猫の巣から、目の開かないのを、さらって来たのだが、全部で七匹仔猫がいたなかで、その一匹だけが、私の探し求めていた奴だった)

私は小踊りして喜び、早速、捕えて帰るとその乳呑み猫を、わざとわざと箆のひきだしを一つ空けてその中で、大事に育てた。

腹をこわしたり、下痢をさせないように細心の注意をはらい、食

料としては牛乳だけを、呑みたいだけ吞ませた。

家政婦の小母さんには、秘密にして、昼間は箆のひきだしを閉めておいたが、気になるので鍵穴を一日に何回ものぞいては、大きなものを楽しみにしていた。

そのうち、私はあることに気がついた。

黒い仔猫は飼い始めてから一度も鳴き声を聞かせなかったのである。家政婦に秘密なので、もちろん、鳴き声などあげてもらわない方が好都合なのだが、一日中箆の中で、音もたてなかった。窒息してしまったのじゃないかと思われるほどだった。

しかし夕方、家政婦が帰った後鍵を廻して、箆のひきだしを引くと、なんの変りもなく生きていて、牛乳を皿に流してやると、ピチャピチャと音をたててなめるのである。

箆の中の黒猫が声をたてないのは、別に鳴き声を出す必要がな

いからだろうと思って、私はそのまま飼いつづけた。

毎日牛乳を飲ませて大事に育てるうちに、月日は流れて、山も林も、緑に香る六月になった。つまり六か月たった。——もう、黒猫は、箆の中には隠しておけないほど大きくなってはいたが、目はまだ開かなかった。

私は今まで生き物は飼ったことがなかったが、六か月も目が開かないというのはおかしいことだと気にかかってならなかった。

独り気をもんでいるうちに、黒猫はどんどん育って、どうにも、箆の中には入れて置けなくなつた。それに、夏に向うとすれば、こんな狭い所に飼っておくのも哀れに思つて、ある朝、箆のひきだしから、部屋の中へ出してやつた。床の上へ置かれた私の黒猫は、目がみえないためへ、外へ出してやつても、喜んで歩き廻る元気さえなく、四足をひとところにキチンとそろえると、声をたてることも

なく、まるで、置物のように、一か所にうずくまったきりだった。

私はあわれに思つたので、膝に抱きあげてやろうと思いうずくまった黒猫に近寄った。

私が黒猫の上にかがみ込んで、腕を伸ばした時だった。なにに驚いたのか、突然黒猫は飛び出すと私の股の下を走り抜けた!

全く思いもかけないことだった確かに、私の黒猫は今、私の股をくぐってしまったのだ!

同時に私は友人の忠告を思い浮かべたので、すっかり気が重くなつて、椅子に座り込んでしまわずには、おられなかった。

黒猫は、私の心中がわかる由もなく、少しずつ、床のあたりを嗅ぎながら、歩きはじめた。

ほんやりと、椅子に身を沈めながら、床の黒猫をみつめているうちに、家政婦が私の部屋に出勤のあいさつをした。私が床の黒猫を家政婦にまず紹介すると、予想した通り、彼女はだいぶ驚いた様子

だった。彼女は猫が大嫌いだった。顔をひどくしかめて、

「こんな目の開かない猫はとても物の役にはたたないから捨てなさい」と勧告した。が、私は耳を貸さなかった。

それからは、黒猫を室内に置いて育てることにしたが、いつまでたっても目は開かなかった。

私は不思議なことだと思って、毎日牛乳を与える時に調べてみたが、うす目すら開けようとしなかった。それでも、体の方は目に見えるように大きくなり、普通の猫の三倍はたっぷりあるくらいに育ってしまった。

家政婦は、もう絶対に魔女の変身だと信じていたので、だれも抱き上げる者もなく、一日中、牛乳を飲んで、寝そべっていたのでますます大きくなるばかりだった。私も不思議がっているうちに、まる一年の月日が過ぎ、暦は十二月に入った。

家政婦は、恐ろしくてとてもい

たたまれないから、猫を捨てないなら私が身を引くといって、ついに家政婦を止めてしまった。

私は、異常に大きくなった盲目の黒猫を見下ろして、猫が大きければ幸運もきつと大きいのがやって来るに違いないと、ひとりひそかに、ほくほくしながら黒猫を育てた。

家政婦が来なくなって七日目、晩方になってひどい嵐がやって来た。

風は、私の住む小さな家を、附近の森を、怒とうのように吹き荒んだ。森の木々の葉が雨のように、私の小さな家の屋根と窓ガラスをたたき、青黒い空はゴウゴウとすごんで見せ、私の小さな借家を、土台からゆすりあげた。

天が狂うというのは、こんな時に使う言葉だ！ きしむ家の中ですっかり私はふるえあがってしまった。

晩食が終って、九時近くになって、嵐はつのる一方で、雨をもま

じえて、私の古い小さな家を攻めたてた。

森の木々はすっかり葉をとられてしまつて、嵐から、古い一軒の小さい家をかばうどころではなく自分の方さえ危うかった。

私は大地の、森の中にいるとは思えなかった。まるで小船が大洋の中で嵐に遭つたように、生き心地はなかったのだ。

私が一生懸命に神に、家と、私の命の庇護をねがっていた時だった。

どこから侵入したのか、風が矢の如く飛び込み、ランプ（家主はけちだったから高い電燈を引くなんてことは考えなかったの）をふつ、と吹き消してしまった。

一瞬、家の中は光を失つて、漆黒の暗闇となつてしまった。

私は黄燐マツチを捜そうと思ひそろそろと立ち上つた。物につまずかないように、すり足で足元を、確かめながら、戸口の方角と思うあたりへ、私は慎重に近寄つて行

った。

全く、鼻の先へ止まつた蠅も見られないほどに真つ暗なので、手を平泳でもするように動かしながら、壁に衝突しないように進んで行った。十歩ほど、進んだときであつた。ふと、足元のあたりに何か光る物を見つけて立ち止まつた！ それは、夜霧の中で見る、貨物列車のテール・ランプに似ていた――。

つまり、血のような色の丸い光の玉が二つ、横に間隔を保つて、まぼんやりと光っているのだ！ またきも、ゆれもしなかった。私はややもすると、吸い込まれて行きそうなほど、じつと、その不可解な、血の色をした黄がかつた光をみつめた。

煙草の吸いがら？ いや、私はたとえ酒に酔っていても、そんな部屋の中へ、吸いがらを捨てたことはなかった。第一、今日は晩食以後、嵐にすっかりおびえていたので、煙草は一本も吸わなかった。

しかも、ここには二つもある！

では何だろうか？ ルビイ？

——宝石がこの部屋にころがっているなんて、考えるだけ、ばからしいことだった。こんな大きなルビイが二つもあれば、もうとつくに電燈を引いているころだ。

私は一生懸命に思い出そうとしてみたが、全く思い当るものがないかった。少しのためらいののち、私は、見慣れない光の上にかがみ込んで、恐る恐る右手を伸ばした。そうと、伸ばして、もう少してその光をつまめるほどに指を近づけた瞬間、ほんやりした赤い光は、二つとも同時に消えてしまった。私はすっかりめんくらって、立ち上った。

これは、あんまり貧乏が続いたので、ルビイの幻かなんかを見てしまったのだと、苦笑をして、また、マッチを捜し続けた。

やっと、マッチを手にしたとき時計が十時を打ったので、ランプをつけることをやめて、寝てしま

うことに決めた。

手さぐりでベッドを捜し当てると、服も着かえずに、中へもぐり込んで、そのまま眠ってしまった。それからどのくらいの間時間が過ぎたのか、私は見当がつかない。ふと、真夜中に眼を醒まして、あたりを、ほんやりとながめた。外では、嵐がまだ吸き荒れて、窓はガタガタと音をたて続けていた。

私は何か悪感を覚えて、びくびくしながら、注意深く、天井や壁をねめまわした。そして、眼を足元へ落したとき、私はもう少して声をあげるところだった！

あの、赤い、血の色のように赤い光の玉が、前と同じように二つ

ほんやりと床で光を出しているのだ！ じっと、五分くらい凝視してみたが、光の玉はおほろにかすんだまま、二つとも全く動かなかった。宝石の幻にしては今度は長かった。私は眼をよくこすってみた。

夢でないことは確かだ。私はすっかり恐怖心にとりつかれて、やにわに、枕元のペンをつかみとりおほろに光る玉を目がけて、投げつけた。

と、突如、物凄い——けものの叫びが私の耳を潰した。つづいてめちやくちやに室内を暴れまわる音が始まり、それがとても猛烈なので、私は何がどうなったのか全くわからないまま、夢中でベッド

へもぐり込むと息を殺した。とても一匹で暴れまわっているとは考えられなかった。

やがて十五分もすると、部屋の中は、走り廻る音も絶えたので、私は注意深く起き上り、服のポケットからマッチをとり出すと、ランプに火を入れた。

私はランプの光りで、室内を見し、すっかり胆を潰してしまった！

室の隅に、私が大事に育てて来た、あの黒猫が、右目にペンを突き立てたまま、腹を大きく波打たせて参っていた。私は元来、気の小さな男だったから、その場の成行を察すると、すっかり自分の行為が恐ろしくなって、立ちすくんだまま、膝をガクガクふるわけこの先、どうしてやっていいのかわからず、しばらくは黒猫の苦しんでいるのを見下ろすだけだった。

やっと気を取り直すと、私は勇気をふるい起して、黒猫のそばへ



近寄り、ペンを抜いて、手当をしてやろうとした。

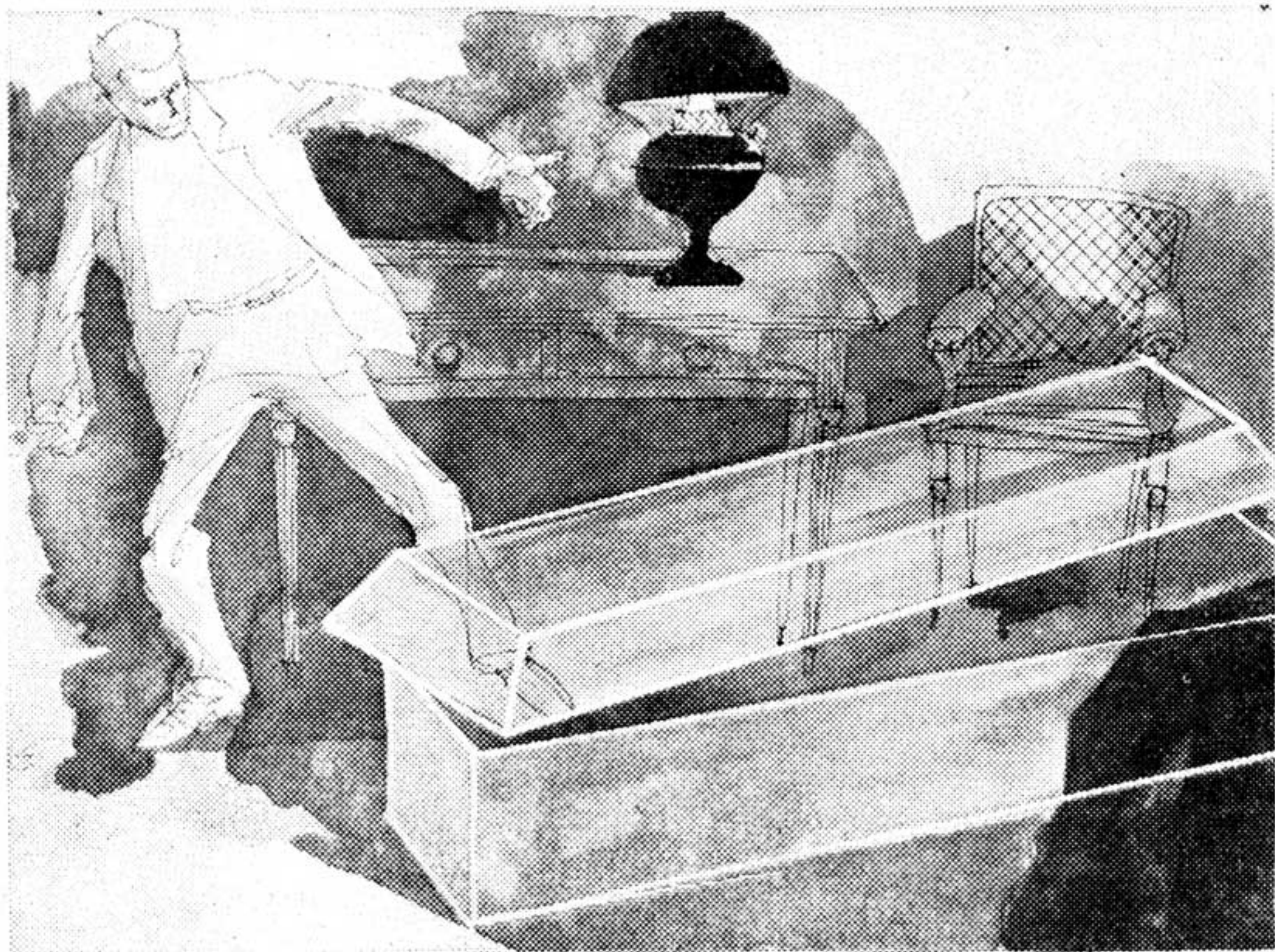
まず、黒猫の頭を押さえて、ペンを引き抜いた。——すると、突然黒猫は暴れ出し、私の手を払いのけると、大きな体に似合わぬ素早さで、窓辺に突進し、ガラスを一枚蹴破って、嵐の荒れ狂う中へ姿を消してしまった。

私の一年間の苦労はすっかり水の泡となってしまった！ この嵐の中ではとても探しには行かれないし、明朝までに黒猫は死んでしまふと思った。

私はすべてを諦めて、再び床についたが大黒猫のことが心配でねつかれなかった。

翌朝になっても、やはり黒猫は姿を見せなかったので、私はがっかりしながら、黒猫を飼え、とすすめた友人のところへ相談に行った。

私が、今日までの一部始終——黒猫の体が、異常に大きかったこと。目がなかなかあかなくて、や



っとゆうべ、生れてはじめて開いたと思ったら、奇想天外な赤色だったこと——を話して聞かせると友人は眉根を寄せていたが、私の話しが終わると、友人は哀れみの表情をかくそうともせず、深い溜め息を一つ吐いた。

「いったい君は、その猫をどこで手に入れたのだね？ 実際！」

私は隠し立てなく、当日の模様を詳しく語って聞かすと、もう友人は私の目を見ながら、こういった。

「十三日目の曇った晩方、墓場で見つけたんだね。そして七匹のうち、それ一匹が黒かった。すると君、それはたいへんなしろものだよ！……そいつは必ずまだ生きている。そして気の毒な話したが、間違いなく、君の所へ復讐に来るのだ！ もちろん夜にだよ、君は充分気をつけないといけない。」

百年前に、スコットランドの王妃がやはり君のような猫を飼ってね、ルビイの目をもった大黒猫だ

ったそうさ。で、ふとしたことからその猫の恨みを受けて、ある晩顔をめちやくちやにされた上、咽喉を襲われて死んだそうだよ。その猫は五十年も生きていたそうさ……」

私はすっかり気を悪くして、そのまま安酒場に出向いて、正気を失うまで酒を飲み続けた。

そして、その夜は、扉や窓にすっかり鍵を掛け、破れた窓には丈夫な板を打ちつけて、万全の工夫をして（昼間飲んだ酒は、夜になると醒めてしまったから）寝た。

一晩中、大黒猫の復讐が頭から離れず、ほとんど私は眠れなかった。

しかし、とうとうその夜は、あの黒猫は現われなかった。

朝になって、やっと私は緊張から解放され、晩方まで死んだように寝た。

私は、黒猫はやはり、あの嵐の夜に死んでしまったのだと思うようになった。

黒猫が逃げた日から数えて二十二日目は、もうなんの警戒心をも忘れて、十時半に床に着いてしまった。

だいたい眠ってから、私は部屋のドアをノックされて、目を醒ました。

私はすぐランプに火を入れると鍵を開けて客を入れるつもりで、ドアへ近づき、ドアの前へかがみ込んで、鍵を鍵穴に入れようとしたとき、鍵穴が赤くなっているのに気がついた。

私は棒を呑み込んだようにギクリとした！ その場に釘づけにされ、手から鍵束を床に落してしまった。

来た！ ついに来た！ あの黒猫が！……もう間違いない。鍵穴に赤く光るものは、あいつの目だ！ 私をのぞいているんだ。そうさ、あの黒猫はまだ左目があるんだ！

復讐を企てる目だ！今日は燃え出しそうにむいてい

る。しかし、どうやって、ノックをしたのだろう？ 頭だ！ そうだ頭をドアに打ちつけたのだ！

だが、あんなところまで、背伸びができるなんて？ 魔性があるからだ。

私はふるえる足をやっと操りながら、机に戻り、ひきだしから錐を取り出して、再びドアに近寄って行った。一突きにしてやろうと錐をかまえて、鍵穴をのぞくと、もう鍵穴は黒く、うつろになっていた。

私は興奮があまりにもひどかったので、その夜は、鍵穴が気になって、一睡もできないまま、朝を迎えてしまった。翌日はすっかり陽が高く昇ってから、私はベッドを降りるとどこから大黒猫が私の家の中に侵入して来たのかを調べるために、隣の部屋（黒猫が鍵穴から、私の部屋をのぞいたところ）を開けて調べた。私は時間をかけて、丹念に、出入口を見廻した。しかし、どこにも、それらしい物は見当らなかった。ただ、私の居間との出入口であるドアの鍵穴の下に、黒い動物の毛が、五本ばかりあるのを発見しただけだった。これで、昨夜たしかに、片目の大黒猫は私の部屋（居間兼、寝室）をのぞいたことが確定になった。しかし、出入口はない！

この二つの事実から、私は恐ろしい結論を認めざるを得なくなった。

すなわち、あの復讐の機会を狙っている大黒猫は、この家の中に住んでいるのだ！……

私はこんないやな推理を思い込んでしまったので、すっかり自分の家が恐ろしくなり、また今日も酒場へ入って、時間を飲み潰したが、夜になっても、神経はたかぶるばかりだった。今にまたノックがあつて起きれば、あの鍵穴から、血色をした目が私をのぞく、と考

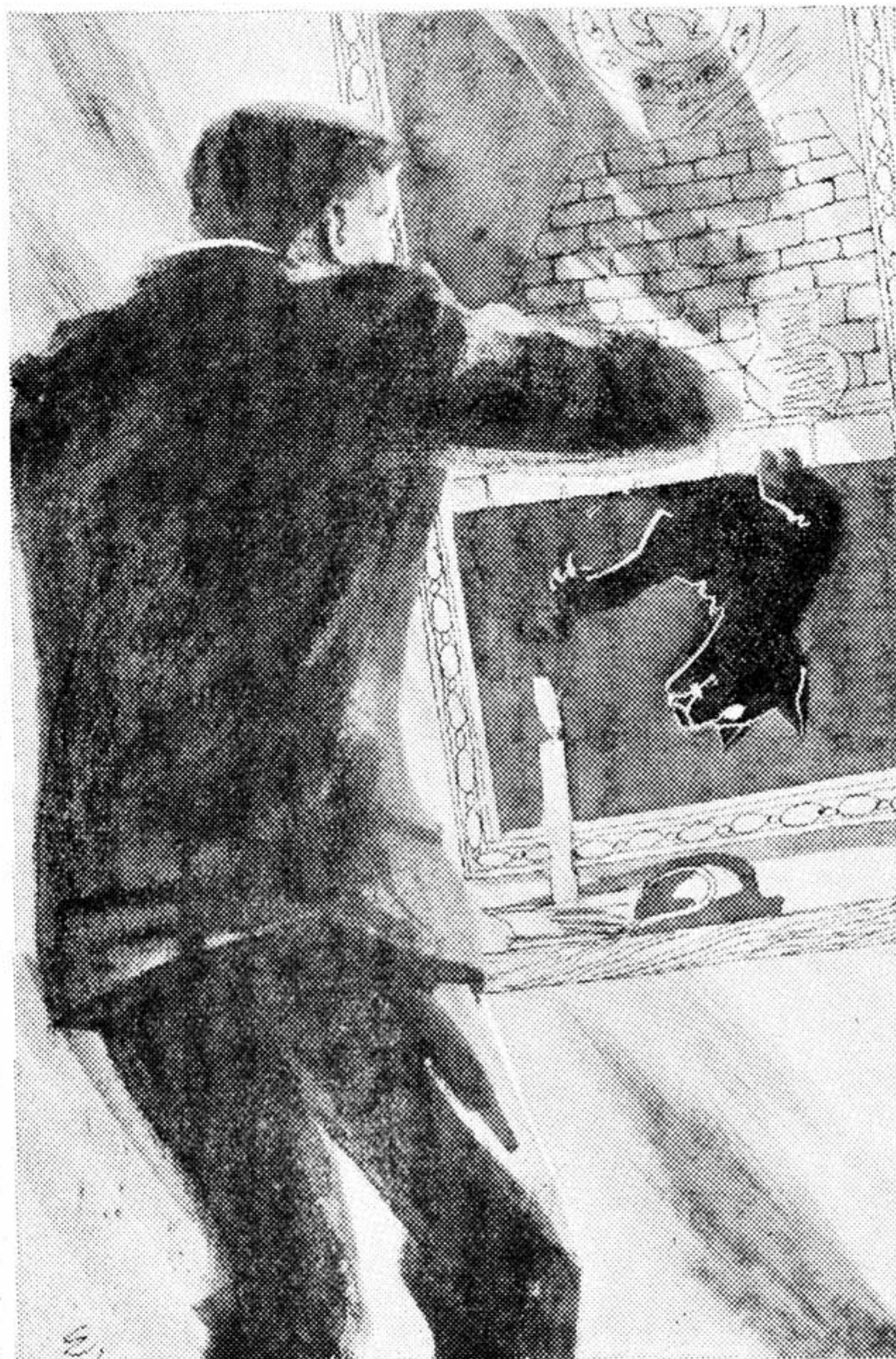
えると、もういても立ってもいられなくなり、床の中へ入って、ランプの明りを消すのが、非常に恐ろしかった。だから十二時になっても、今日は、ベッドに腰を下ろして、鍵穴をじっと凝視し続けた。そのうちに、私は、あの黒猫がどうやって、隣りの部屋（書斎に私は使っていたので近頃全く使っていない）に姿を現わすのかを知りたくなってその準備にかかった。まず、隣りの部屋に入って、窓のカーテンを開き（月のあかりを入れて、室内がよく見えるように）寝室に戻って、ランプを消すと、そっと、息を殺して、ドアの鍵穴に近づき、隣りの部屋をのぞきみた。——瞬間、私は「あっ」といって、その場から飛びのいてしまった！ 鍵穴から、隣りの大黒猫が見えまいことか！ 大黒猫は、もう、あの血の色の片目を、向う側で、ちゃんと鍵穴に据えていたのである。黒猫の片目は、昨夜のときよりも、一層暗く濁っていた。

そのことは明らかに、黒猫がひどく興奮して来ているのを暗示していた。

次の夜。私は室内のランプを消すと、右手に錐を用意して、すぐ

扉の鍵穴の前へかがみ込んだ。ちらと鍵穴を一瞥すると、鍵穴は暗く、うつろだった。私は目的が達成しそうなので、まず安心して、黒猫が秘かにのぞくのを待った。

右手はしっかりと錐を握って、少しでも、赤い色の物が見えたら、間髪を入れずに、突き出せるような姿勢で、あの大黒猫のぞっとするような赤い片目が現われるのを



今か、今かと、待った。

しかし、妙なことに、その夜にかぎって、いつまで待っても、黒猫は、私の部屋をのぞきに来なかった。

いい加減にしびれをきらして、ついに私は根負けした。

時計が二時を打ったので、私は立ち上って、ベッドに戻ろうとした、ちょうどその時。——ドアがコツ、コツとノックされた！　ついにやって来た！

私は全身が石のように硬くなったのを感じ、全神経を極度に緊張させた。

今夜こそ思い知らせてくれようとはかり、右手の錐を握り直して鍵穴をのぞいた——。すると、続いてまた、コツコツと音がきこえた——。しかしよく注意して聞くと、ノックされているドアは、私の前のドアでないことがわかった。私は、あまりにもあせっていたのだ。

どうやらノックされているのは

玄関の扉らしかった。

私は急いでランタンに灯を入れ、客を迎えるように、みなりを整え、玄関へ出た。

が、鍵を廻そうとした手を、私は急に引っこめた。うっかり戸を開けてしまうと、あの黒猫が入ってくるのかも知れない。このノックの音はあの黒猫が頭を打ちつけて、作っているのではないだろうか？

そうだ。こんな真夜中に客がくるはずのものじゃない！　全く、危いところだった。すっかり黒猫奴に騙されてしまったところだった。私はそう考え直して、ランタンを下に下すと、そっと鍵穴からおもてをのぞいた。

月の光を浴びて、玄関の前に立っていた者は、あの大きな黒猫ではなかった。

外には、背の低い男が一人立っていたのである。私は胸を撫でおろすと、けわしい目つきを柔らげ、鍵を廻して戸を開けた。

私がていねいに戸を開いたのに「夜分、突然失礼致します。」ともなんとも、いわないで、その背の低い、見なれない男は、ぬつ、と入って来た。

私は、その小男の無礼さに、ひどく驚いて、ランタンを取り上げると、相手の様子を再び確かめてみた。

弱いランタンの光にぼう々と浮き上った小男は、黒の山高帽子に黒いオーバー・コートを着け、ズボンも靴も黒色だった。——驚いたことにネクタイまでも真黒だった。

私が「どなた様でしょうか」とたずねると、小男は、ゆっくりと顔を、私の方に向けた。……すっかり気を悪くしていた。私は山高帽子の下にある顔を一目見て「あっ」と声をあげてしまった。

その小男の顔には右目がないのだ！　全く、大黒猫と同じだ！　私はぐらつく足を、やっとふんばりながら乾いた声を出し、どもり

ながら、また、どんな用件でしようなとたずねた。

すると、男は、身じろぎもせず、落ちついた低い声——というより、蔭気にこもった声で、「死体を引き取りに来た」といった。

私は、わが耳を疑うほどびくつき、危うくランタンを落とすところだった。なにかいおうと思ったが、舌が上あごにくっついたまま、どうしても、声が出せなかった。やっと手振り、身振りで、「死体など、ない」と断った。すると、小男は、左目でまたたくともなく空間を見つめながら、ボツ、ボツ、と一語、一語を確かめるように区切りながら、前と同じく、陰気な調子で、語り始めた——。小男の話によると、「まだ死んでいなくても、とにかく今夜この家で一人の男が死ぬから、そうしたら、すぐ棺に入れて、ふたをしておいてくれ」というのだ。用件を話し終ると、「外へ出て、棺を中へ入れたいから、手伝って

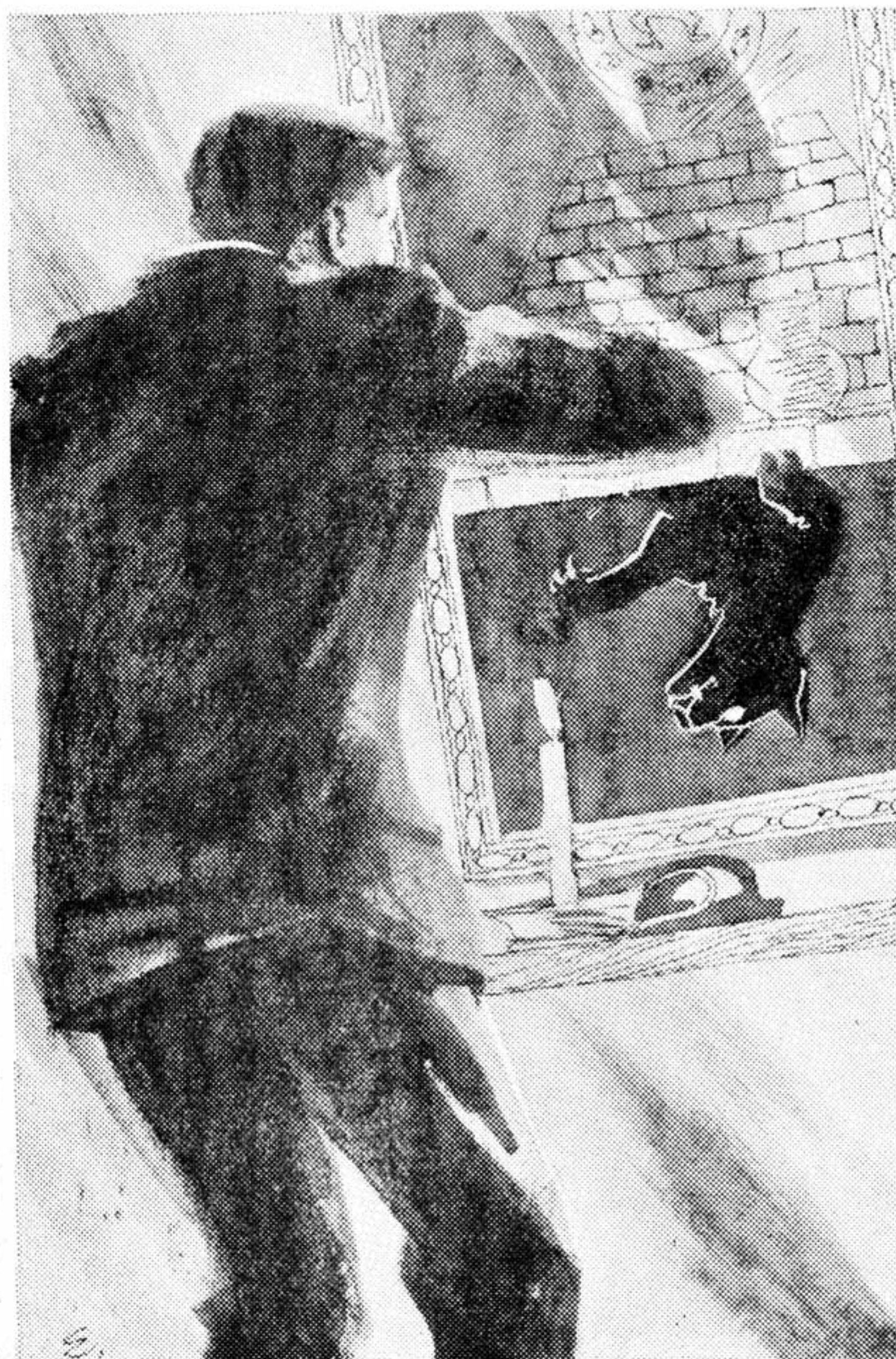
えると、もういても立ってもいられなくなり、床の中へ入って、ランプの明りを消すのが、非常に恐ろしかった。だから十二時になっても、今日は、ベッドに腰を下ろして、鍵穴をじっと凝視し続けた。そのうちに、私は、あの黒猫がどうやって、隣りの部屋（書斎に私は使っていたので近頃全く使っていない）に姿を現わすのかを知りたくなってその準備にかかった。まず、隣りの部屋に入って、窓のカーテンを開き（月のあかりを入れて、室内がよく見えるように）寝室に戻って、ランプを消すと、そっと、息を殺して、ドアの鍵穴に近づき、隣りの部屋をのぞきみた。——瞬間、私は「あっ」といって、その場から飛びのいてしまった！ 鍵穴から、隣りの大黒猫が見えまいことか！ 大黒猫は、もう、あの血の色の片目を、向う側で、ちゃんと鍵穴に据えていたのである。黒猫の片目は、昨夜のときよりも、一層暗く濁っていた。

そのことは明らかに、黒猫がひどく興奮して来ているのを暗示していた。

次の夜。私は室内のランプを消すと、右手に錐を用意して、すぐ

扉の鍵穴の前へかがみ込んだ。ちらと鍵穴を一瞥すると、鍵穴は暗く、うつろだった。私は目的が達成しそうなので、まず安心して、黒猫が秘かにのぞくのを待った。

右手はしっかりと錐を握って、少しでも、赤い色の物が見えたら、間髪を入れずに、突き出せるような姿勢で、あの大黒猫のぞっとするような赤い片目が現われるのを



今か、今かと、待った。

しかし、妙なことに、その夜にかぎって、いつまで待っても、黒猫は、私の部屋をのぞきに來なかつた。

いい加減にしびれをきらして、ついに私は根負けした。

時計が二時を打ったので、私は立ち上って、ベッドに戻ろうとした、ちょうどその時。——ドアがコツ、コツとノックされた！　ついにやって來た！

私は全身が石のように硬くなったのを感じ、全神経を極度に緊張させた。

今夜こそ思い知らせてくれようとはかり、右手の錐を握り直して鍵穴をのぞいた——。すると、続いてまた、コツコツと音がきこえた——。しかしよく注意して聞くと、ノックされているドアは、私の前のドアでないことがわかった。私は、あまりにもあせっていたのだ。

どうやらノックされているのは

玄関の扉らしかった。

私は急いでランタンに灯を入れ、客を迎えるように、みなりを整え、玄関へ出た。

が、鍵を廻そうとした手を、私は急に引っこめた。うっかり戸を開けてしまうと、あの黒猫が入つて來るのかも知れない。このノックの音はあの黒猫が頭を打ちつけて、作っているのではないだろうか？

そうだ。こんな真夜中に客がくるはずのものじゃない！　全く、危いところだった。すっかり黒猫奴に騙されてしまったところだった。私はそう考え直して、ランタンを下に下すと、そつと鍵穴からおもてをのぞいた。

月の光を浴びて、玄関の前に立っていた者は、あの大きな黒猫ではなかった。

外には、背の低い男が一人立っていたのである。私は胸を撫でおろすと、けわしい目つきを柔らげ鍵を廻して戸を開けた。

私がていねいに戸を開いたのに「夜分、突然失礼致します。」ともなんとも、いわないで、その背の低い、見なれない男は、ぬつ、と入つて來た。

私は、その小男の無礼さに、ひどく驚いて、ランタンを取り上げると、相手の様子を再び確かめてみた。

弱いランタンの光にぼう々と浮き上った小男は、黒の山高帽子に黒いオーバー・コートを着け、ズボンも靴も黒色だった。——驚いたことにネクタイまでも真黒だった。

私が「どなた様でしょうか」とたずねると、小男は、ゆっくりと顔を、私の方に向けた。……すっかり気を悪くしていた。私は山高帽子の下にある顔を一目見て「あつ」と声をあげてしまった。

その小男の顔には右目がないのだ！　全く、大黒猫と同じだ！　私はぐらつく足を、やっとふんばりながら乾いた声を出し、どもり

ながら、また、どんな用件でしようなとたずねた。

すると、男は、身じろぎもせず、落ちついた低い声——というより、蔭気にこもった声で、「死体を引き取りに來た」といった。

私は、わが耳を疑うほどびつくりして、危うくランタンを落とすところだった。なにかいおうと思つたが、舌が上あごにくつついたまま、どうしても、声が出せなかつた。やつと手振り、身振りで、「死体など、ない」と断つた。すると、小男は、左目でまたたくともなく空間を見つめながら、ボツ、ボツ、と一語、一語を確かめるように区切りながら、前と同じく、陰気な調子で、語り始めた——。小男の話によると、「まだ死んでいなくても、とにかく今夜この家で一人の男が死ぬから、そうしたら、すぐ棺に入れて、ふたをしておいてくれ」というのだ。用件を話し終ると、「外へ出て、棺を中へ入れたいから、手伝って

くれ」といった。

私は断わろうと思って、舌とあごに一生懸命力を入れた。しかし私は恐怖で自制心を失っていた。あせればあせるほど、歯はまるで電信機のように、ガチガチ鳴り続け、いくらとめようとしても止らなかった。

黒いコートを着た見知らぬ小男は、私の腕をつかむと、白痴のようになつてしまった私を外へ連れ出した。

棺は、家のすぐ近くに置いてあった。私はその棺を一目見て、思わずその場に立ちすくんでしまった。ちょうど私にあつらえたような大きさなのだ！ しかし相手は全くの無表情で、さっさと棺の前の方を担いでしまった。私も仕方なく、後方を担ぎ上げねばならなかった。棺は、空にしては妙に重かった。小男も、「変だぞ？ 急に重くなった」と呟いた。

私は、棺を担ぐと、ガクガクする足を押さえ押さえ、小男に従っ

た。

家の中に入ると、左目だけの小男は、よりによって私の部屋（居間兼寝室）へ、棺を運び込んでしまった。私は棺の後を担いだことに、全く後悔したが、もうだめだった。

棺を部屋の中に下ろすと、小男は手を払い、棺を指さして、「死体をこの中に入れたら、ふたを釘づけにしておきな」といって、帰って行った。

私は玄関で、すっかり小男が遠くへ行ってしまったのを確かめてから、あの縁起の悪い棺を外へ捨ててしまおうと思って、すぐ、自分の部屋へ戻った。

ドアを開けると、確かにつけて置いたランプが消えて、中は真暗だった。私は、ランプの芯が、尽きてしまったのだと、無理に推定して、用心しながら、中へ入り込んだ。何でもない！ と無理に落ちつかせたが、心臓は激しく活動する一方だった。

ランタンの光りで充分に足元は確かめられるので、別にランプをつける必要はないと思って、私はすぐ、棺の方へ近寄って行った。

ランタンの光に浮かび出た縁起の悪い棺はあろうことか、ふたがはずれて、下に落ちていたのだ！ 明らかに、この棺の中に入っていた物が、室内に出たとか考えられない！ どうも、さっきは、空棺にしては重い棺だと思ったわけだ。すると、まだこの室内にいるということになる……。

私は不安気に、室内を一廻り、見渡した。しかし、人影らしいものは見当らなかった。さらにランプをつけて、部屋の中をよく調べた。ベッドの下も、簾笥の中も調べたし、屑籠の中まで調べあげた。

が、やっぱりふだんと変ってはいなかった。ますます気味が悪くなった。

私は、もう、とてもたまらなくなつたので、一人では、今夜を、

この家の中で過すことはとうていできないと思った。

私は友人の家へ行けないまでもせめて、いつも飲んでるあの安酒場を叩き起こしてでも、泊めてもらおうと思い、すぐに服を着換え始めた。

簾笥をあけ、服とズボンは、ふるえながらもどうやら着込んだがネクタイばかりは、両手と顎のふるえが激しいので、うまく結べなかった。

何回も失敗して、鏡の前で、大あせりしているうちに、鏡の中に写っている後の暖炉に、何か黒い物がぶらさがっている様子だ！ 私ははっと胆を冷やして、後を振り向いた。

改めて、暖炉をよく見ると、黒い物など、どこにも見受けられなかった。

変だな？ 私はそう思いながら再び、困難なネクタイを結び続けた。後の暖炉に注意しながら……二、三分すると、私の期待通り、

黒い物が徐々に、煙突から煖炉に下がつて来るのを鏡の中に見ることができた！ 正体を見届けてやろうと思って、私は、はやる鼓動を押えながら、じっと目を凝らして、息を殺した。

黒い物は私が気がつかないと思つてか、だんだん下へ下がつて来た！ それは——逆さに煙突からぶら下がった黒猫だった！ あの黒猫が、体を煙突内に隠し、首だけ——あの右目のつぶれた、首だけを出して、逆さに下がり、濁った赤い片目をカッと大きく見開いて、私の後姿を凝視しているのだ！

絶叫をやつとこらえて、私がそのまま背を向けていると、赤い片目から、鼻、口、右腕と、だんだん、黒猫は体を煙突から出して来るのだ！ 明らかに、後から私を襲おうと、私の油断を狙っていることがわかった。

私は、鏡を見つめているうち全身が総毛立った！ 血がすっかり

凍りついて、体は石のように硬くなった。そして、口の中は乾ききってしまった、逃げることにすら、できなかつた。

棺の中から出た物が、何であるか、私は今わかつた。どこへ隠れていたのかも今わかつた。大黒猫は多分、私とあの小男との話しを盗み聞きすると、先廻りして、棺の中へ潜んでいたのだ！ そしてまんまと私の城にもぐり込んだのだ！ トロイの馬だ！

全く大胆不敵とは、よくぞいったものだ。

私は今さらながら、あの黒猫の魔性、狡猾さと忍耐強さ、復讐心の固さにふるえ上つた。全く私は恐怖の感服をした。

そう畏敬しているうちに、鏡の中ではもう大黒猫は、注意深く体を半分も、煙突から這い出して、私の後姿を見まもっていた。

こんな化け猫に五十年も生きられたりしては、たまつたものじゃない！ 私は大黒猫の計画の裏を

かいて、捕まえることを考え始めた。そうしているうちにも黒猫は徐々に、用心深く、体を乗り出して来た。

私は、黒猫の動作に気をつけながら、ネクタイを結ぶのを止めて首からはずすと、それでちょうどあの黒猫の頭が入るほどの輪をつ作つた。そして、大黒猫の成行を見て見ぬふりをしながら待った。

大黒猫の方は、そんな企みが私にあるとは知らないらしく（知っていたかも知れないが、功を急いでいると見え）モソモソと真黒い大きな体をほとんど煙突の中から出した——。

そして、あと、片足と尾だけになり、あのルビイ色の片目が戦闘意欲でキラキラと輝いた。まさに私目がけて、煙突から飛び出さんとした時、私はゆっくりと何気ない様子を装って振り返つた。

この振り返り方が慎重であつて、むずかしいところだつた。もし、いきなり振り返つて黒猫

をにらみつけたら、黒猫は口惜しさで破れかぶれになり、死にもの狂いで煙突を飛び出して、私にかみかかつて来たはずである。そうなつてしまつたら、勝負はあぶないものだつた。

とにかく、相手はけだもの。つまり無法者であるから、どんな卑怯な術を使うかわからない！ おそらく、友人の話しにあったスコットランドの王妃のように、顔をめちゃくちゃに引つかかれた上咽喉をやられていたかも知れない！

私の予想した通りだつた！ 大黒猫は、私が見つけたとは思わなかつたらしく、一生懸命、また煙突の中に隠れようとした。しかしもうほとんど全身が外に出ていたので、素早く、というわけにはいかなかった。

全く、気の毒になるくらいにあつてよう、黒猫は苦しんだ。狭い煙突の中を、後向きで昇つて行くのは、猫でもつらい仕事らしい（棺から出て隠れたときは、

一度煙突を上まで昇りつめてから
また降りて来たのだと思う。私は
頃合もいいと考えて黒猫の顔を正
視してやった――。

まだ半分以上も体が煙突の外に
あったので大黒猫は、見つかった
とわかると、いっそうあわてて、
苦しそうだった。

私は近寄ると、頭を一つ小突い
てやった。

全くだいい気持だった。こんな
思った通りに運ぶとは思わなかつ
た。

私は落ちついて用意のネクタイ
を取り出すと、大黒猫の首に掛け
て締め上げた。

息がつまると、赤い片目を飛び
出さんばかりに大きくし、黒猫は
なおも逃がれようと、必死で煙突
にもぐり込みたがった。

しかし、その労力も永くは続か
なかった。

大黒猫は、やがて力尽き煙突の
中からずり落ちてしまった。

大黒猫の死体は全く大きくて、

太っていた。

赤い片目は開けたままであった
が、見る見るうちに色がなくなっ
て行った。

私は大黒猫の死体を、棺に入れ
ると、ふたをして、釘を何本も打
った、それから、外出着を脱いで
手を洗うと、もう朝になった。

しばらくして、昨夜の男がやつ
て来た。

何回も、ペコペコおじぎをし
て、昨夜間違って持ち込んだ棺を
返してくれといった。

私は、彼を玄関に待たせておい
て、棺を持って来て与えた。（だ
いぶ重かったのだが、そんなこと
は、ちっとも顔に出さないで、彼
の前へ雑作なく運んで見せた）

そして、彼の母親のことを詳し
くたずねると、無口な彼も、母親
はやはり恋しいと見え、いろいろ
と喋ってくれた。

私は真顔になって彼に話してき
かせた。

「実は昨夜、その君の母親に瓜二
つの人さ！ 私の家の前で行き倒
れになってね……息子の名前を呼
びながら昇天したんだ。いやしく
も人間の皮をかぶったものが、そ
の場に居合わせて、どうしてほっ
たらかしておけるものかね？ 幸
いにも、私は君の置いて行った棺
を思い出したもんで、これ、この
通り……。いや、全く、いいこと
をしたもんで、今朝は気持がさっ
ぱりした。君が、ゆうべ私の家へ
棺を持って来たのも、何か神様だ
けが知っている因縁が君と、この
婦人にあると思うんだが、どうだ
ね、君。このかわいそうな人にこ
の棺を与えて、火葬場へやって、
成仏させる気は持ち合わせないか
ね」

彼は私の話しを、深くうなだれ
てきいていたが、溜息を一つ吐く
と、顔を上げていった。

「ようがすとも！ 儂だって人の
子でさあ！」

異色時
代巷談

女犯経秘図

高月大三・著
喜多玲子・装幀

酒池肉林の好色寺の地下部屋に捕われた女隠密！素っ裸の木
馬責めに果して耐え得るか？お小夜嵐、穴蔵菩薩も収録！

¥ 250
― 40

続・女腹切りの史実と小説

中 康 弘 通

栗 原 伸 画

★汚れを知らぬ柔肌に、自ら刃を当てる女腹切りは悲愴美の世界をつくりだす塙垣だ！

先に、女腹切の史実と、史実に基づいた文芸作品について説述したので、今回は、フィクションに現われた、切腹その他の手段による女性自刃の種々相について、あるいは哀愁、あるいは妖艶、あるいは凄烈きわまりない諸相の、文芸作品としての必然性と効果性を説いてみたい。

山田風太郎氏「妖説弁天小僧」

天下の大盗日本左衛門が、四天王の一人と頼む弁天小僧菊之助は、もと老中松平左近将監の子として生れながら、父の失脚とともに身の上も変転し、今は、江戸城を窺う不敵の怪賊であった。

一味の忠信利平が一念、菊之助は菊弥と名を変えて世を忍ぶ寺へ、一日、利平を慕う町

娘お雪と、利平が江戸城侵入の緒口を掴むために籠絡した御殿女中早蕨とが来合わせ、菊之助は早蕨を程よくあしらううちに刺青を見られ、彼女を殺してしまふ。

日ならず、お雪は田沼邸に掠われ、首領は自首し、自棄になった利平は田沼邸へ乗り込もうとするが、菊之助はお雪に執する利平のために一計を案ずる。彼が籠絡した中年寄巻絹を通じてお雪を將軍のお伽に上げ、自らは女装して江戸城に乗り込むのである。

やがて一夜、將軍家重の寢所に慄えているお雪に代り、菊之助は同じ総白無垢で寢所に入っていく。ふと目覚めた家重は、雪洞に浮かぶ菊之助の白い顔に、遠い記憶を呼び覚まされた。それが、かつて、同じこの御小座敷で舌を噛み切った、松平左近将監の娘の顔だ

ったからである。

そのころ、利平や赤星十三、南郷力丸が、お雪を擁して極楽橋門近く殺陣を展開していた。家重を楯に走り抜けて来た菊之助は、門に上ると火薬を投げ、騒ぎにまぎれて利平らを逃がした。

上半身は乳首から腹へかけて晒を巻いただけの、今は血に染む桜の刺青姿も艶やかな菊之助は、ここでもかねて覚悟の凄絶な立ち腹を切る。そのとき、彼の胸に盛り上がる二つの乳房が、追いつがった武士どもの夜眼にも鮮やかに映じたのである。

以下、風太郎氏の麗筆を引用しよう。

「嵐にちりゆく花じゃあねえが、これまでつもる悪事の年明、今夜を一期に斎日の、閻魔の庁へ名乗って出る、弁天小僧の最期



のほどを、うぬら、近くへ寄って見物しろ！」
とさけぶと、簾のようになつた大刀を血まみれの袖でつつんで逆手にもち、ブツリと腹につきたてた。

寄手からこのとき名状しがたい叫喚が、あがつた。切れて吹きながれた晒のあいだから、そこだけ真つ白な胸が見えた。とみるまに、それは炎と血に真紅に染まつた。おう見よそこに盛りあがつたふたつの乳房！
「忠信……おいらはおめえを……」

ささやく声は風だけがきいた。夜空に浮かんだ乳房は、次の刹那、女、弁天小僧のいのちの光茫をえがいて、烏羽玉の闇に燃え堕ちていった。

山田風太郎氏は、年少に

して人間心理の解明に努め、旧制中学時代すでに受験雑誌の月例小説募集にはしばしば入選を重ね、戦後、「宝石」の第一回新人探偵小説コンクールに入賞以来、医学徒としての知識を駆使し、人間の生理と心理の裏からかもし出される一種、妖にして奇なる雰囲気を感じた推理小説を続々と発表、探偵、諷刺、伝奇の多方面にわたり、往くとして可ならざるはない絢爛多彩ぶりを示した。时期的には探偵文壇の三島由紀夫とも呼ぶべく、系譜的には推理小説界の芥川龍之介ともいえよう。しかし、もとより両者ともまた質を異にする耽美性をも秘めている。

この作品における女装の男が実は女であった、すなわち、女が男に化けながらさらに女装していた、という設定は、女剣劇やヌードショウに現われた弁天小僧ものに通ずる二重倒錯的效果を挙げているし、また一面には、美少年と信じられていたものが実は美女であった。しかもそれが死にぎわにあらわされる、という設定は、芥川龍之介の「奉教人の死」に通じてもいる。しかし、前者の頹廢的な美意識や、後者のバタ臭い気取りは、この作品には見られない。

やはり、爛熟した武家政治がやがて崩壊に

近づく過程において、夜ひらく仇花にも似た孤高かつ妖艶なヒロインを描いて、読者の納得を無理なく誘っている。

菊之助にとって、素姓を見破られまいとする努力よりも、むしろ素姓そのものが一種斜陽族的な血統の高貴さが、彼の、というより彼女の、利平への恋情を圧殺していた。利平が利平自身に似つかわしい町娘に深く恋着することへの菊之助の嘆きは、その痴情を喰うそれよりも、むしろ遂げ得ぬ哀恋に苦しむ己れへの嘆きであった。彼女の徒勞に近い反抗は、終局において非常の異変を大江戸城内に捲き起し、やがておそらくは予定通りに凄烈きわまる立ち腹にその幕を閉じる。

彼女は、好色な將軍のためにうら若くして自害し果てた亡姉の復讐という大望があつて、城中に忍び込み、首尾よく將軍を刺せる位置に身をおきながら、むしろ將軍を、今さらかく辛苦を重ねてまで刺すに値せぬ一個の老醜として見くだすことにより、高貴なるものの実証を、みずからの生命を賭けて充足し、利平らを城外に脱出させたのち、壮麗な立腹を切る。

それが己れが思慕する利平を逃がれさすために、というよりもむしろ、みずからの孤高

さを貫くための手段であつたといえよう。もちろん彼女の切腹は、彼女が精神的に男性化していたというような浅薄な心理の基盤によるものではなく、みずから反撥し憎悪する武士のありかたというものに、彼女が本能的な回帰を示したにすぎないのかも知れない。しかしより以上に、彼女の美化意識、高貴なるものの自負が、かくも劇的な最期を選ばしめたといつても不当ではあるまい。さらにいふなれば、彼女は本質的にはナルシストであつたのであろうか。巻絹を斬殺する瞬間の彼女の心理描写にも、そういった深部心理の複雑さが顔を覗かせているのではなからうか。

とまれこれらの心理的経過は、追って述べる「おんな髪男髪」のヒロインとは本質的に異なるであらう。

今村信一郎氏「おんな髪男髪」

侍奏屋敷番、沢村小弥太は、

女にもみまほしい美貌と、なよやかな

姿体

の持主であつた。少年時代から彼と親しかった妻木源三郎は、

小弥太が、妻を娶ったとき、ふと、嫉妬に似たものを感じた

御目付衆で
ある、その源
三郎が、小弥
太の切腹を聞
き、

珠玉を喪つ
たような、落
胆で、蒼白に
なっていた
とき、小弥太の
遺書が届いた。



安之助は、小弥太と同じ侍屋敷番であつ

太の秘密が記されていた。

つながりのある、小弥

そこには前
日、林木河岸
で斬殺されて
いた青江安之
助の謎の死と

たが、小弥太の妻と通じたばかりか、小弥太の湯浴み姿を垣間見て、彼が実は女であることを知ると、一日船宿に誘ない、暴力で自由を奪った。

やがてその結果、小弥太は姪もり、思いつめて安之助を斬殺したのち、自宅に帰って遺書を認め、従容と切腹して、悲愁と屈辱の生涯を終ったのである。

小弥太が源三郎に宛てた遺書に曰く

——宿業の報いにござ候えば、母をも安之助をも露恨まず果てる覚悟にござ候。

さりながら、ただただ、心残りとしては、衆人は知らず、そのもと様に、安之助の肌に溺れての無理心中とばし思われむか、それのみ残念にござ候。何卒々々御憐愍願わしゅう。女この心ばえ、想うほどに、口外かなわぬを、何卒々々御察しのうえ、哀れみ給えば、長の冥路も、嬉しゅう旅ゆけ候かし……。

彼女もまた、ひそかに源三郎を慕っていたが、所詮その恋は悲恋に終る運命だったのである。

彼女が男として育てられたのは生母の意志によるものであった。妾腹に男子があり、生母としては、沢村家を守るために彼女を男と

して届けねばならなかった。

女兒が旗本の後嗣として育てられる設定には、大仏次郎氏の名作「大久保彦左衛門」における曾根崎義江の場合がある。彼女は、三河武士の意地を貫く父の意志により男として育てられ、やがてその秘密を知る奸悪横沢源太夫に操られて、苦悩の日々に心身を苛まれるのだが、たまたま美貌にして果敢な好青年、名門の次男坊阿部妥女と契り、真の恋を知る。一たん源太夫の許に戻った義江は、彼を欺いて刺し、妥女の兄の秘密を記した文書を焼いたのち、悪人一味に刺されて、美しい生涯を短かく、しかし「男よりも男らしく」終るのである。

ここにも悲劇的な死は約束されていた。その出発を誤まれる生涯の償いは、悼ましくも身みずからを犠牲とすることによって果されねばならないのである。

ただ一つこの義江の場合、救いは、「阿部妥女の妻」と名乗って源太夫を刺す一瞬にあったといえる。彼の生涯のしあわせと躍やきが、ただこの一瞬に籠められて、最も緊迫した、しかし最も昂揚した瞬間として描かれている。それに比して小弥太の場合は、最後まで武士としての体面を保つために、自殺する

にも女の身で切腹を選ばねばならなかった。

彼女が安之助を斬るとき、誰某の妻と名乗るだけのしあわせを持ち合わせることさえできなかった。源三郎への慕情もむなしく、かくまでも彼女は家名を守らねばならなかった。切腹は彼女の場合、心理的必然というよりも至上命令だったのである。

源三郎への遺書に一切を告白し、苦しい慕情までも吐露したのを、もし、検視によって源三郎が役目から彼女の実体を曝露することを恐れたため、とのみ見るのは、この場合不当な解釈であろう。

むしろ、切腹は形のみで、腹を傷つけることもなしに介錯を受けるのが通例とさえなりつつあった時代相の中で、女の身でみずから腹を切り死についた美女の膺美を、行間に読み取るべきであろう。

いずれにしてもこれらの作品において、「家」のために犠牲となる美女の薄命が如実に示されているわけであるが、また考えてみれば、「家」の名の下に発生する悲劇の暗さと、それに比例した悲劇の美しさが、これらの作品を彩っていることを、いったいどう見ればよいのであろうか。これらの悲劇はまさに、悲愴美の世界を作り出す坩堝とでもいえ

ばよいのであろうか。

島田一男氏「女腹切り」

美男浪人真琴菊太郎は、瓦版の作者で謎と名の名人でもあった。吉田屋のお幽、読売り屋の長吉、絵描きの春斎と一と組なのである。戯作者桜亭三里も時折これに加わった。

たまたま一日、桜亭三里と組んで赤穂義士銘々伝を出すについて、材料あつめに三里と菊太郎が町を歩くうち、ふと目にとまったのは、腰元風ながら、ヤの字に結んだ帯に太刀を差した異様な女たち、これが奥州泉一万五千石、板倉伊予守お抱えの別式女であった。別式女、刀腰元、刀持女ともいう、女の武者である。菊太郎はその伊達姿に、奇妙な色気の漂ようなを感じた。

その翌日、菊太郎の長屋へ、
「女の腹切りですぜ」

と長吉がかけつけ、お幽がまた、
「なんてことでしょう、腹一文字にかっさばいて——」

と注進に及ぶ。三人目の桜亭三里から、死んでいたのは板倉様の別式女、と聞いて、菊太郎は現場へ急いだ。

女は、洲崎の浜へ流れ着いた小舟の中で、

割腹していた、というのである。

以下、島田氏の筆は、二十になるかならずで死んだ美女の姿を描く。

女は、白無垢を朱に染めて、右へ倒れ、舟べりに寄りかかるような姿で死んでいた。

両膝を、白い下締でキュッとくくり、口に、ひと折の懷紙を咥えている。

左の脇腹の辺りに、パツと血が飛沫き、右の首の根が、パツクリ、口を開いていた。

握りしめた懷劍で、まず腹を切り、返す刃で首の血脈を掻切ったものと思われた。舟の舳先に、キチンとたたんだ着物に帯、その上に、刀が一本置いてある。——着物には、見覚えがあった。

桜亭三里が言うように、この女は、昨日見た板倉家の刀腰元のひとりに違いない……。

菊太郎は、女の顔をのぞきこんだ。——細面のよい女だった。

「もったいねエ！ 十九か二十ですぜ」長吉が横でつぶやいた。

現場へは板倉家の家老小柴左近も来合わせ女の名を志保と明かし、

理由はわからぬが、自害を覚悟いたし、小舟に乗って下屋敷から中川へ出て割腹……。

と説くが、菊太郎は納得しない。

女腹切りで瓦版屋がどこも儲けたのに、菊太郎だけは書かない。その夜、憤満やるかたないお幽に、その理由を聞かすのであった。

別式女……、女ながらも太刀を帯びる志保が腹を切った……、いかにも勇婦の最期……と思わせるように仕組まれている。が……、わしは騙されぬ。

と菊太郎は断言する。

志保が刺殺されたのちに自害を装わせた、という根拠は、腹よりも首の方がとぶはずの血が、あまり首からは流れていなかった、というのである。

やがて菊太郎の活躍で謎はとけ、彼の推理通り、志保は、オランダ船から招いた異人の女に、嫉妬から刺されたのであった。

この作品は、探偵小説的興味が主であるから、題名こそ「女腹切り」であるが、結末は単純な殺人の隠蔽であり、偽装切腹であった。

もっとも、「三河物語」という古い本に、切腹した者は首を切るのに際して、腹から血

が多く出て首からはあまり出ぬものだ、という記述がある。

この論法で行くと菊太郎の決め手はかなり弱められる。しかしこれはもちろん比較的話なのであろうか。

偽装切腹は加賀淳子氏が作品に用いた例もあるが、女のそれは島田氏をもって嚆矢とする。さすがに氏の視野の広さを感じる所以である。

矢桐重八氏「父恋い娘旅」

会津落城秘話、と副題をつけたこの作品は、会津藩の要職にある父新藤刑部を慕って、茶屋女の娘お玉が江戸から戌辰の役に捲き込まれた会津の地へ旅する物語であるが、その挿話として、刑部の妻初子が、娘子軍に加わって奮戦の末力尽きて立ち腹を切る姿が描かれている。

すなわち、「凄絶十文字腹」の小見出しで説かれた条りがそれである。そのうち、初子の最期を描く部分をここに再録しよう。

力尽きた初子の手から、やがて薙刀は叩き落され、兵士たちは、それとばかり襲いかかった。

初子は腰の短刀を抜いて、つかみかかる

敵兵の脇腹をえぐった。

「わあッ」

と、のけぞる兵に、取り囲む兵たちは一瞬たじろぐ。その隙に初子は短刀の刃に布を巻きつけ、自分の着物をぐいと押しひろげた。

白い腹が、兵士たちの眼にさらされた。はっと見るまに、初子は逆に握った短刀を自分の左下腹に、ぐさりと突き立てた。さすがに兵士たちは、息をのんで、この凄絶な女の切腹をみつめる。

「さ、さ、薩長の官賊ども、新藤刑部が

妻、初の十文字腹、よ、よ、よく見届けい

……」

いうや、抜いた刃を、再びみぞおちへ突き立てた。

「ううッ」

咽喉を破る苦痛のうめき。

小手あての金具が、傷口にひっかかり、すさまじい苦悶の表情で、敵兵の顔をかっとな睨んだ。

「か、か、官賊めら。会津女子の最期、

思い知ったか！」

「わッ……」

さすがに顔をそむけて逃げる兵士。初子は、がくりと前に伏し、息が絶えた。

壮烈な最期であった。

少し過剰な表現とも見えるが、当時の会津娘子軍の心意気は察せられる。ただし、正史と目される書物には右の該当例は見えない。

直木三十五氏「踊子行状記」

叙上の諸例では、ヒロインが悲劇的な最期を遂げた例ばかり解説したのであるが、今度とは未遂、それもヒロインというより、ヒロインの妹分に当る美貌可憐の踊り子が、切腹しようとして果さず、救われる挿話を取り上げてみよう。

この「踊子行状記」は、大映で映画化され、昭和三十年六月、「踊り子行状記」の題名で封切られたので、御存知の方も多いと思う。安田公義監督のもと、山本富士子、市川雷蔵、勝新太郎三氏の初顔合わせというので注目された作品である。

執筆されたのは、昭和五年、直木氏が、いずれ本稿で後日解説する予定の「南国太平





記」(東京日日、大阪毎日)と並行して都新聞に発表したものである。

青傘組と名乗る踊子の頭誰弥は、蔵前の富商大口屋の世話になっていたが、朋輩の不始末をかばって浪人した安堂右馬之助を愛していた。安堂は大口屋に匿われているうちに、一刀組の首領、無頼の渋谷五郎太の怨みを受け、一方、渋谷の情婦団七組の踊子頭団七は、誰弥の声望を強く嫉み、この二た組の男

女がかもす愛憎の相を経緯として、結局は、人間の外觀に捉われず、世の転変に怯じず、常に正しいもの、真実なるものの姿を見きわめて生きようとする右馬之助と誰弥が、結末では結ばれ、誰弥は日本橋橋町で新たに踊子を集めた芸子の取締りに就くところで、この物語は終る。

昭和五年といえ、ロンドン軍縮条約(これは後日、日本に不利な制約の課せられるの

を痛憤して、草刈海軍少佐が悲憤の切腹を遂げる事件もあった) 浜口首相狙撃事件があり、経済不況と政情不安から、後年の政界不信の空気を生み出す世相がのぞきはじめる時期である。この時代相を背景として発表された作品の中に、直木氏は、時代の制約を超越して生きる男女の姿を描くことによって、永遠の生命を保つ文学の本然の相を示したといつてよいであろう。

この数百枚を超える長篇の中で、ここに引こうとする踊子千弥の登場する場面は、比較的少い。

十八、九に見えても、もう二十一才の千弥は、御書院番八百石取りの水城頼母に愛され、彼女自身も慕っていた。たまたま一夜を頼母の邸で明かした朝、団七の密告で役人に捕えられ、掟に則して新吉原の遊女に下げられてしまった。それは、江戸を去り高崎で病む右馬之助を追って、誰弥が旅に出た間のことであった。

大口屋は金を積んで千弥を客止めにしたが、渋谷五郎太は執拗に千弥を自由にしようと狙っていた。やがて匿まわれていた寮から、千弥は五郎太の住居へ拐われて行った。そこには団七も来ていた。

渋川の手ごめになろうとして、千弥は、かねての覚悟通り、五郎太を刺して自害しようとするが、仕損じて、われとわが腹を刺すのである。少し長いが引用しておく。

「もそっと」

と、低く言つて千弥を、引寄せようとした途端だ。渋川の膝の上にあった千弥の左手が、脇差の方へ廻ると、柄へ手をかけてぐっと引張つた。と同時に、千弥は、全身の力で、柄を引いた。身体ぐるみの力で引抜いた。

「うぬッ」

欺されたと思うと、渋川は、怒りと共に、十分押えていた千弥の右手を、力任せに引くと共に、

「ええいッ」

渋川の手は、千弥の腰へかかっていた。千弥は、刀を抜き取ったまま、裾を乱して髪を崩して、投出された。畳へ、壁へ、それでもどどんと響いた。

「誰も来るなッ」

と、渋川が叫んだ。そして渋川が立上ると、千弥が、裾を押えて、坐り直したのと同時であつた。千弥は、赤い顔をし、呼吸を喘ませつつ、左手の脇差を、両手で握

つた。そして、前へ突出しながら、壁を背にしてじりじりと立って、壁へ、身体を、びたりとつけた。

千弥の必死の抵抗を、渋川は赤児でもあしらうように押えようとする。折も折、嫉妬に狂った団七が、二人の対立している部屋へ剃刃を持って暴れ込もうとし、渋川の子分たちに押しとめられていたのである。

千弥の顔は、蒼白になつてしまつて、眼が異様にかがやいていた。渋川が切尖から三尺余りの所まで近づいた時、千弥は、唇を顫わせて、

「姉さんっ、許して下さいまし」

と、叫んだ。頬が、びくびくとつれた。死を覚悟しながら、誰弥を呼ぶ千弥の心根はまことに可憐である。その間にも団七は子分たちを押しつけて、襖をこじあけていた。次の瞬間、千弥は自害しようとする。

「あッ」

と、渋川が口の中で叫んだ時、千弥は、前方へ突出していた脇差を、持直すと、自分の脇腹へ、突刺した。その瞬間、渋川の身体は、虎の跳躍するように千弥へ跳りかかった。千弥は、壁へ、どんと、身体を、ぶつつけると崩れ倒れてしまった。

「馬鹿め」

と、渋川は、叫びながら、それでも、千弥の手から、指をこじ開けて、脇差を取り上げた。

一寸以上も刃を突立てたものの、こうして千弥は気絶し、やがて渋川の子分たちに介抱され、一命を取り止める。

後に千弥は、渋川が団七を憚かつて隠した隠れ家から、誰弥によつて救い出され、水城頼母の世話になつたら、という大口屋のすすめも断つて、芸子稼業取締りの誰弥を手伝うことになる。

男らしい直情さの持主安堂右馬之助と、踊子の操というものに絶望に似たものを常に感じながらも、心の高さを忘れないで真実の恋を彼に見出す誰弥とのコンビは、全篇を貫いてみずみずしい抒情を乾いた筆致から生み出しているが、そしてまた、ある意味では勧善懲悪の気配も見えないではないが、善悪ともに登場人物が生き生きと現代にも通用する生活感情で動いている中に、楚々たる容姿に似ぬ千弥の気性の激しさ、勁さが一層彼女の可憐さを目立たせ、思いつめて、われとわが腹を刺してまでも汚辱を逃れようとする千弥の気魄の確かさは、さすが巨匠の筆の力という

べく、稼業の如何にかかわらず、微妙な女心の壁に隠された清冽さには、一種爽快な、しかも、深い「もののあわれ」を覚えないではおれないであろう。

蝦蟇家一美氏「瑤泉院切腹」

バクリ屋の須藤守人は、もと国粹主義者で今は発狂して、籠居の大石内蔵助を気取る乙瀬栄吉の妻、美千代に強く魅かれていた。

美千代は、狂った夫の妄想の中で、瑤泉院の役割りを果たし、つねに喪服を身につけていなければならないのだが、その着ほそりのする股体にまとう黒衣が、一層彼女の憂愁を湛えた美貌を引き立てていた。

守人は、かつて恩義あった栄吉を見舞って金品を贈るうち、いつしか美千代と待合に連れ立つ仲にまでなった。その初めての夜、彼女の、というよりむしろ栄吉の秘密を守人は知った。その秘密を、彼が現実を目撃する日が来た。大胆にも乙瀬の、妖気さえ覚える邸の一室に潜んで、美千代と会った日のことである。美千代は守人に訴える。

「——今日来てくださってよかったわ」「なぜ？」

「夕方、また切腹させられるの、眼が醒

めたら、きつとさせるわ、きつと……」

ひとみがうるんで、声音が湿った。

そしてその夕方、栄吉は、

「瑤泉院様、いさぎよくお腹を召されえ」

と降りしきる雪中に美千代を坐らせ、拔身の短刀を手渡すのだった。

先ほど美千代が哀しい身の上をかこったとき、笑っていた守人も、さすがにハツとしてガラス戸の棧をつかんで見守るとも知らず、栄吉はさらに、

「ささ、いさぎよくお腹を召されえ」

と美千代を促がし、美千代は躊躇いも振り捨て、守人を見つめながら、狂した夫の命ずるままに、雪中に端座して、われとわが腹に刃を当てるのであった。やがて、白い肌に一とすじ刃が走り、美女の血汐は雪庭にまで滴落した。その妖艶きわまる美しさに、守人は息を呑んだ。

この作品に現われた「瑤泉院」なる美女の切腹は、全く強制された一種の擬態であって、実際のものではない。そしてみずからの意志でなく苦痛に耐えて屠腹を模するほどに狂える夫を愛しないではおれぬヒロインの、憂愁に満ちた膺美が、殺伐な暴力組織のエピソードに辛うじて渋い彩どりを添えている。

本誌本年一月号に載ったこの作品は、従来説いたものと全く趣きを異にして、切腹という現象を、ある意味では戯画化している。

筆者は、こうした擬態としての切腹を描く作品について風俗雑誌の類いで散見したこともあるし、比較的若い、戦時中に中等程度の教育を受けた、乃至それよりも若い層にも、擬態への嗜好を告白する文章を書いた女性のあることも知っている。しかしそれらはすべて、ヒロインの意志、嗜好としての擬態を描いたものであった。従ってこの作品の着想には、かなり興味を魅かれたので記録にとどめたいと思って、現代小説にもかかわらずここに詳説したのである。

ただ、終末近く美千代が、守人の凝視に気づきつつ夫に強いられて見せる切腹の擬態が、もし擬態にとどまらなかったとしたら、この作品はさらに異なった評価の基準を持ったのではないかと思う。

(あとがき)

著作権法の規定するところに従い、御作品より必要部分の節録引用を御許容願いました諸先生方ならびに御遺族の方々に厚く御礼申し上げます。

大奥 秘史 むささび悲願

橋爪彦七
東 桂 史・画

★雲より白いその美貌を見詰ながら吉宗は、ふツと灯を消した！

夢

月光院は、眼をつぶっていた。
妖冶に冴える美貌の眉が、しのびやかにひそめられて、光りを避ける表情が、蘭燈の絹をこしてくる仄かな明りなのに、それさえまぶしくつらいのである。

それは、六代將軍家宣が他界して、月光院の御腹である幼君家継の治世——治世といつてもわずかに四才で大統を継いだ七代家継としては、父家宣の時代からの側用人間部越前守詮房にたすけられている將軍である。詮房は、この幼少の將軍を膝に乗せて、
「上意——」

と、老中はじめその他の幕臣に号令している——その真摯な忠実な様子を見ると、生母である月光院として、詮房に、時として、好意以上のものを覚える場合もあった。

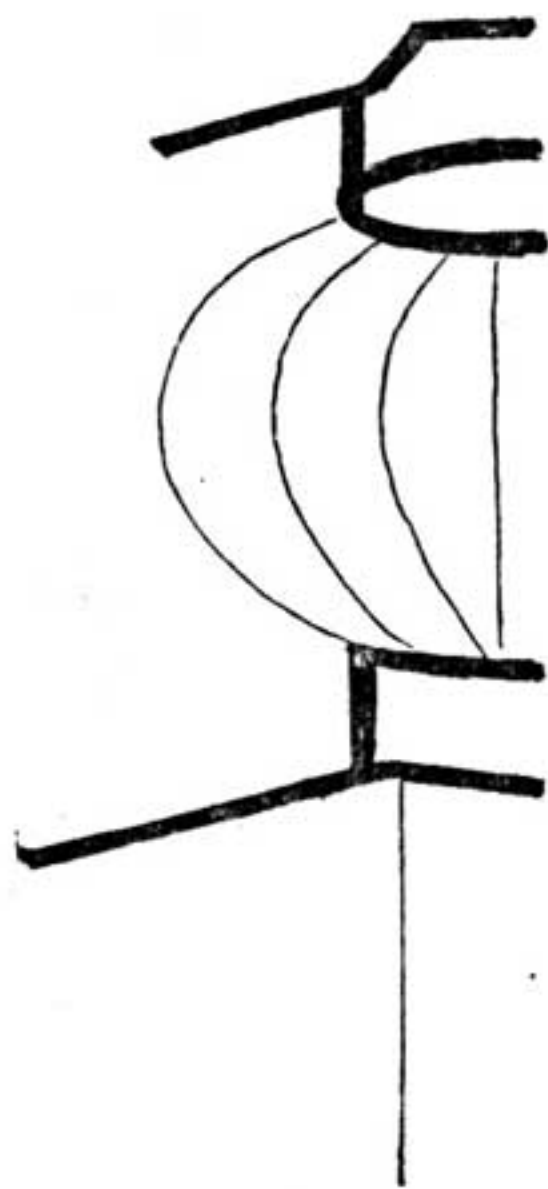
その詮房に、月光院が、いま、すべてのものを与え、一双の玉手を彼の頸に巻いて、無限の恍惚を味わっているのである——
「うう……」

と、彼女は、うつつ心に声を咬んだ。
「あッ、あ……」

思わず叫んだ瞬間だった、翳の濃い彼女の睫毛が動いて、ぱち——と涼やかな眼が開いた。

肩が、大きく波打って、乳の下騒ぎが異様である。

月光院は、びく——となって夜具をはね、しとねの上に起き直った。そして、おびえたような眸で身辺を見廻したが、四辺は、寂とした夜が息づいているばかりで、いままで彼





女の胸を掻き乱していた間部詮房などいるはずもなく、あえかに薫る香の匂いだけが、ゆるく浮動しているだけだった。

「夢であつた……？」

月光院は、自分で自分に恥かしく、こんどこそほんとうに、蘭燈の灰明りに、底ほてりする顔をそむけた――

むささび馳け

そのころ――ちょうどその刻限である。

夢に、月光院が、すでに八才で世を去った家継や、側用人の職務を剝がれた詮房との過去の情事を映し出してじっと生身の羞らいを、切髪姿の全身に感じていたとき、この、江戸城内二の丸の銅御

門の峯をつたって、ぱッと内側へ降り立った黒い影があつた。

そして、ややしばし――御多門の長屋塀に張りついていたが、すこしずつからだを動かして、中仕切御門脇の御多門の廊下へ移ろうとしたとき、

「曲者ッ」

と、底力のある声が飛んだ。――と同時に御門番所の戸が門いて、

「どこだ！」

と、飛び出してくる番士の姿――「曲者だど？」

と、二三人が、続いて湧いて出るその耳へ、

「あれだッ、あれに隠れこんだようすだーッ」

声を与えて、ばたばたと馳け出すのへ、

「しッ、しすかに――御殿近くだ」

心得のある注意を配って、

「あれだな、あの御門下だなッ」と、これが、水のような速さだった。

「あ、一人では――」

「続けッ、続くのだーッ」

大奥後宮秘史・特集

六七八人が、影をすかして刹到する。

こちらは異装の黒覆面が、

(もうこれまで——)

とても思ったか、全身を中庭に露出して、塩見坂の櫓下から喰違いの御門際へ馳け出した。

飛鳥——まったくそのよう、弾みをつけて馳け出したはいいが、このとき覆面の行手にあたって、下梅林の番所から、一導の光りが、つ、つ——と振られた。

「曲者——ッ」

光りは、覆面の姿を捕えた。

さらに、右からも左からも、龕燈の交叉は眼に痛いほど覆面を射て、

「各々ッ、御本丸に入れてはならぬぞッ」

声を絞るあいだにも、二の丸警羅の夜詰の番士が、もう次々と走せつけてくると、人、人、人——の絡脈の輪が、死魄のなかにちちんできた。

このとき覆面は何をおもったか、不意にからだを鋭角に——右へ走った。

「それ！」

と、追いかける番士の群へ、彼は、くるつと身をひるがえした。
「ゆくぞ！」

はじめて吐いた若やいだ声——叫びざまに

逆襲すると、薙ぎつけるような殺刀一揮！

「うっ」

番士の一人が、噴血を夜空に撒いた。

「ひるむな！」

「斬れ、斬れッ」

だが、口々にする憤りの叫びは、本能的に僚友の死につりこまれるかたちで、まずく騒げばその都度に、犠牲の屍を積むことになる——と、一人が気づくと、いま一步、しりぞいて考えを深めると、いかに無月の星月夜でも、江戸大城の二の丸御殿へ、怪しの曲者をしのばせたということ自体が、すでに今夜の番士たちとして、誰もが、明日への責を負う苦痛を噛むのだった。

まして、僚友一人の魂を宙に飛ばした失態をかえりみると、相手の覆面を斬るところかぜひとつもからめ捕らねばならぬのである。

覆面は？ と見ると、この場にあつて迷路をもとめるには、あまりに肉迫されているのを感じたようすで、意表の外に出る闘法を編んだと見え、

——よし！

と、決意をその瞬間の跳躍にしめして、猛然、颯風に似た襲撃に転じてきた。

「来い！」

「なにを——」

誘われて、一人が正面から飛びかかったが

「うッ」

しまったと意識する余猶も与えずに、覆面は、もうその刀をちぬらしていた。そして、体位を一転させると、

「まだ来るかッ」

と、まるで一塊の黒い肉弾となつて、相手の劍陣に飛びかかった。

左右に、噴血をあげる一人ずつを倒すと、

あなや——と見る間に馳け出した。

「しまった！」

「やるなッ」

「逃がすな！」

「竹槍ッ、竹槍の諸士に手を借りろ！」
喚きつつ、躍気に追いついたが覆面は、夜の天地をわがものとするむささびのように敏捷だった。

たちまち——樹木の深い天守台の木下闇へ霞となつて溶けこんでしまった。

鬼子母神詣で

それは、晴天の霹靂であった。
江戸大城——將軍家の居館が、一夜、不敵

大奥後宮秘史・特集

の曲者に蹂躪されたという噂は——

「まさか？」

誰もが、最初は否定した。——が、番士の多数が二の丸うちで殺傷された事実を知ると公儀の面々は顔色を変えた。

そのうえ、不審にたえぬのは、千代田城の衛戍三十六門の警備の諸士たちは、怪覆面の侵入も知らねば、またその逃走も確認していないということなのである。

「捨てておけぬ不祥事！」

「怪異的な刀魔の跳梁——」

「ぜひと、われわれの組でからめ捕る！」

と、気負い立つが、覆面の刀魔が、その夜かぎりで行動を中止したらしいのは弱りこんだ。

「大城のうちにひそむか、それとも退散をしたものか——」

そのいずれとも決せぬままに、不安を孕んだ七十五日、そしてそうした噂の消えるというところ——二の丸住居の月光院は、かねてから信仰の厚い雑司ヶ谷の鬼子母神へ、参詣の旨を平河御門の諸士溜へ伝えてきた。

それは微行のていどではあるが、かつては

六代將軍の寵をあつめ、前將軍家継を産んだ麗人の月光院、老女——御年寄の玉尾をはじめ御使番、御用人、お座敷、御客会釈、御祐筆から小姓おはしたまで、それに駕籠脇の添番の士を交えての二十幾人が、おのおの装いを凝らしての出門である。

巳の上刻——月光院につづいて、二の丸奥女中総取締の御年寄玉尾が駕籠で、その他は徒歩の嬭々たる一行が、江戸の街々を物珍らしく、江戸川を越えると目白台、田舎びた、その辺の景を眺めながら、ようやく先触れの御使番を先頭に、駕籠は、鬼子母神別当職の大行院の表玄関へ着いた。

寺中一統の僧侶出迎えのうちに、月光院、玉尾の順で客殿へ——

ややたつと、

「御堂の御支度、整いましてござります」

と、うやうやしく役僧の述べるのにこたえて、玉尾が、

「御前様、どうぞ——」

促すと、無言のままの月光院が、白綸子の柄襦袢姿でその座を立つ。続く玉尾と、小姓が一人——

「皆はそのまま、御前様の後に御礼拝あるよ

う」

と、玄関へ先導する玉尾が、月光院の介添えとして草履穿きの主従、徒歩で、鬼子母神の御堂へ通ると、衆僧諸列の礼を受け設けの席に着いた。

本殿——御堂の正面に青銅像の鬼子母神、脇侍には、鬼子母神の夫君と称される円満具足天と、御子の十羅刹女の立像が安置され、八葉の蓮華、諸種の供物、縷々とのぼる香煙のたちこもるなかで、番僧の鐘を合図に兜率天上の樂が奏される——

そのなかで、楚々と行動する月光院の姿は嫦娥が地上へ降臨したかとも見える容姿である。

樂が続く——

すでにして——執事が、

「月光院様御参詣、無事相済みました」

と、客殿別室に残った女性群に伝えられると、御使番、御祐筆その他の礼拝がゆるされるのである。

折から玉尾は、先導して、本殿を降り、石だたみの参道を草履の足で踏みしめて来た。そして、何気なく眼を遣る末社稻荷の蔭——木立の樹幹が重なっている向うに、浪人鬚の若い侍と、御使番の登代とが、何か語らって

いるようすが見える。

「はて、登代としたことが……？」

と、もう一度玉尾が眸を送ったとき、登代がふところから取り出したものを、侍の手に渡すのが見えた。

「あ、文……」

若い男女の——それは疑えば疑われる文のやりとり……。

そう見た玉尾が眼の狂いか、それとも登代が思いのたけを、ひそとしたためた艶書であったか、ともかく登代の手から若い浪人侍の手に、何か渡されたことは事実だった。

（ああ、よしないようすを……）

と、御年寄の玉尾が眼をそらして、後をふりかえってはッとところで蒼くなった。

見ていたのである——月光院が。

そして、玉尾に眼をつぶったのは、見るなよとの謎か、行けとの意か、御殿勤めに年功を積んだ玉尾にも、その解釈は悩ましかったのである。

浪人兄者

夜になって——

御年寄の玉尾の部屋で、御使番の登代が、今日、鬼子母神での不審な振舞をきびしく詮

議されていた。

「これ登代どの、それではそなたどうあつても、みだらがましいあの所業を、不埒でないといひはりますかえ？」

「はい」

十九の厄年——文金島田がよく似合つて、絵に見るような腰元姿だ。

それを——姥桜の臺もたった玉尾の眼が、あだ憎らしく上座にいて、睨みすえているのであった。

「昨日や今日の御奉公でもないそなた、不義は強い御法度は承知のはず——死罪におうても余儀ないのじゃぞえ」

「は、はい……」

と、登代は、おとなしく、両手をついて、頭を下げているのだったが、どう考えたか、急に玉尾を仰ぎ見た。

額がせまって、美しい生え際に二三本、おくれ毛がふりかかった蒼い顔——細おもての黒眼から、長い睫毛の美しいきりようが、かえって凄味をきかせている——

「御年寄様に申しあげますが、さきほどからのお咎めの筋、登代には合点が参りませぬ」

「なんとおいやる？」

「たとえ男女でありましても、広く申せば人

と人、たがいに物をいいあえば、すぐ不義だの不埒だのと、それは見る人の料見一つ……ここに曇りのない仲ならば、誰と逢おうが語ろうが、すこしもさしつかえないかと心得まする」

「登代どのそなたは！ ま、口では賢しらしゆうそういやるが、お稲荷の物蔭で、どこやらの侍衆に、たしかに文を渡しやった所業、そなた、不埒でないと思ひやるのかえ？」

「はい。不埒とは、あのような所業を申すのではないと存じます。また——あの者に文渡したなどと、失礼ながらそれは御年寄様のひが目ではございませんか？」

「ま、ぬけぬけと登代どのが……そなたこの玉尾の眼を晦まそう料見と見えますの」

「何をおっしゃいます？ 世のたとえにも親子は一世、夫婦は二世、主従は三世とか申します。登代も以前はあなた様の召使い、いまこのように御使番にお取り立ていただきましたも、みんなあなた様の御恩……それほど深い重恩のあなた様のお眼を、なんでわたくしがくらましましたよう、いえいえ、たしかに御眼ちがいでござりまする」

「そうかえ登代どの、ああいえばこうと、発明なそなたにしては、まだ相手の名もいわぬ

の。誰じゃ、なんという男じゃ？」

「は、あのそれは……」

「申しやいの、どこの誰と何の用で、ああした物蔭で忍び合いましたと、はつきり述べて見やいのう」

畳みかける玉尾の前で、なぜか登代は、啞者のように黙ってしまった。

そのときだった。

「御年寄様に申しあげます。ただ今これへ御前様が成らせられます」

と、襖の向うで小姓の声がしらせてきた。

「なに、御前様が……」

玉尾が、すぐと座を立とうとした。それより早く襖が開いて、月光院がしず——と入ってきた。

「これ玉尾、なにをそのように荒々しゅう申します？入側のあたりまで筒抜けじゃぞえ」
「これは……お耳をけがしましただん、何ともおそれ入りまする」

「登代、どうしやった？ 何を叱られておりますえ？」

月光院は、艶麗な眼を、ちらと登代にそそいであら、

「玉尾へ、なにごとの咎めかは存せぬが、若いうちにはそれぞれに、どう気を使うても落

度のあるもの、今日のところは登代にかわつて、詫びをいおうほどに、もうたいがい許してやってたも」

「ま、滅相もない御前様から詫びようなどと、それでは玉尾、なにことも申すことができませんが、もし御前様、今日鬼子母神さままでの

登代の振舞を、よう御覧なされたでござりましょうがな」

「おお、あの稲荷社の物蔭で……」

「それでござります。ただ今こうして尋ねましても、いっこうにはきはきといたしませぬ」
「それはようないの。したが玉尾、今日あの



所で登代が会いました侍は、登代が肉親の兄じゃぞえ」

「え？ 兄……登代どのの兄者じゃと仰せられまするか」

「あいのう、登代、なぜちゃつとそう申さぬ？ 妹が兄に会う場合、そうよそよしゅうもならぬ道理、ほほほ……登代としたことが、玉尾にいかい気を揉ませましたのう」

「さ、さようでござりましたか」

玉尾は、それでもいぶかしそうに、

「登代どの、そなたの兄者とありまするは、たしか尾州家の御家来と聞きましたか？」

「はい、お恥かしゅうござりますが——」

と、登代は、その兄が、しばらく前に尾州侯の御前をしくじって、長の暇になっているのだと答えた。

「——では御浪人……？」

「はい」

と、登代が、恥らいの面を伏せた。

玉尾は、その兄の名が、安財数馬ということや、尾張の太守継友が、側近く召使っていた近習であることなど、登代が自分の部屋子であったときに聞いたのを、記憶のなかから呼び起していた。

捕物陣

火の元の大城では、ようやく噂が下火になってきたが、江戸の市中はこしばらく、嚴重が上にも嚴重な取締りだった。

——さる夜、千代田御城内に不敵の賊が忍び入った！ 治安維持と府内警察の任にある町奉行所はなんたる怠慢！

こうした意味で、町奉行大岡越前守のもとにまで、老中牧野因幡守から、嚴謹があつてからもう百日も過ぎてい——

しかも、その夜の賊は、天にかけるか地にもぐるのか、いまだに、奉行所の網にはかからぬのである。

「石を起し、草の根を掘っても、必ず町方の手で捕えまする！」

越前守は、上へ、こう答えたのだった。

伊勢の山田奉行から、新將軍吉宗の声がかりで、江戸町奉行に登用された彼——越前守忠相である。

必死の探索には、部下の八丁堀を総動員しての督励だが、実績は、まだ彼に、功を挙げさせていなかった。

今宵も——

大城の外郭、浅草御門から筋違御門、小石

川、牛込、市ヶ谷、四谷の方面はむろんのこと、赤坂、虎の門、山下、幸橋、日比谷、数寄屋橋、鍛冶橋、呉服橋、一ツ橋など、雉子橋その他を加える十八門の要所々に布陣をしいて、万全を期してはいるのだが、さて、この捕物の網の目へ、怪覆面がかかるかどうか？……

上弦五の月が頭上にあつた。

風が出て、行雲が、ときどき地上の弱光をかすめて、明暗の縞目を崩すころ——

「四つでござーアい……」

と、遠くで夜廻りが眠そうな声を流して、ときおりカチ——とを打つ音。

どこかで、迷い犬の遠吠えがする。

その——しんと寝しずまった四谷御門そとの大横丁を、刈豆店の方へ出た薄くらがりから、すウ——と風のようにわき出した男が、いま眼の先を行く覆面の侍へ、

「もし……」

と、うしろから声をかけた。

「内藤新宿へは、どう参るのでございましょうか？」

「そうだの……」

と、侍は顎をあげて、

「西だ——が、貴様のような不浄の者には死

門だ」

いったとたんに、異常に緊迫した夜気が動いた。次の刹那――

男が、ピピッ――と呼笛を吹くのと、覆面の腰から一条の光りが走るのと同じだった。
「うッ」

男――八丁堀の町方役人の手先、笹良の友吉が地にはった。――が、その苦鳴にも似た叫びが、いや呼笛が、夜の中空でぶっ――と断れると、御簞笥の一角と伊賀町とに伏せられていた捕吏の一隊が地を蹴って行動した。

「曲者ッ」

一人が、声を叩きつけると、

「捕れッ、曲者だーアッ」

と、その脇からも聞かせてきた。

「御用！」

と、とっさに、六尺棒を飛ばすやつがある。

「おッ」

身を開いた覆面――足もとにきた棒を踏みまたいで、水明りのような往来に眼を配ったが、おどろくほどの人数だ。手薄――と見えるのは伝馬町の方角だけ、
(よし！)

脱兎のいきおいだった。

「彼だーッ」

「お尋ね者！」

「木戸をたててッ、そちらの木戸を――ッ」
と、絡脈に声をからしながら、町方の威信にかけた包囲の網――その網の目をしぼりかけた。

すると、その時――

伊賀町の福寿院脇へ、ひょっこりと出てきた塗駕籠がある。七八名の供侍――相当の武家とは受けとれるのだが、なぜか無燈で、いま追われてくる侍――その覆面の姿を見ると駕籠を止めた中年の武家が、供人に何か指図をした。

「はッ」

答えた一人がつかつかと供先へ出ると、さッと駆け抜けようとする覆面を、双手をひろげて突き戻すようにして、

「これへ――」

と、命じるような声だった。

あ……と、思わず踏みよめいた覆面も、街なかではあり危急の感じる場合だったので面前で、駕籠を指差されると、躊躇なく身を落しこんで、びた――と塗戸をたててしまった。

尾州の宗春

「早く――」

中年の、主人と見える武家が命じると、駕籠尻はただちにあがった――いや、あがろうとした刹那だった。

ばたばたと駆け寄ってきた町方の捕吏が棒鼻をおさえて、

「しばらく――しばらくお待ちねがいたい」
「なんじゃ？」

「ただいまこの駕籠うちへ隠れこんだ者は、お尋ね中の曲者でござる。すぐお渡しください。強っておかばいだてなさるににおいては、いず方の御仁なりともその分には差し置きませぬぞ」

「差し置かぬ……では何とする？」

「知れたことを！拙者は南町奉行所勤役の同心磯貝波之進、役目によってその中の者を引ッたてるッ」

声を弾ませ、いま八丁堀の名捕吏とうたわれる磯貝同心が、場合によれば駕籠ぐるみにふん縛ろうと詰め寄った。――がこちらはせきもあわてもせず、

「黙れ」

と、威のある一語をはいて、

大奥後宮秘史・特集

睡魔

「あ痛ウ……」

月光院は、夜具を刎ねて起き直ると、右手で軽く頭を押した。

づきん！

と、こめかみのあたりから、右の頭部が痛むのである。もう長いことになる偏頭痛——それは、自分が産んだ七代將軍の家継が、僅か八才で春を終えたその頃からの持病だった。（ああこんなとき、あの江島でもいてくれたなら——）

ふと、それをおもう。

そして、彼女が、山村座の俳優生島新五郎との情事を罪に問われ、

——重き御奉公も相勤め数多の女中の上にも立ち候身にてありながら身持よろしからざるにつき……と、いま信州の高遠で、内藤駿河守に終身お預けの身になっている——もと大奥女中総取締の御年寄、その江島は、月光院が左京の局であったときからの、よき助言者であり、また間部詮房との噂の渦をおおってくれる力強い味方の女性でもあったのである。

あの、気性の立ちまざった女——そうして

「予は尾州の冷飯喰い——」

「は？」

磯貝同心の顔色が変わった。

「宗春じゃ」

「は、はッ……」

磯貝同心、いまはいうべく言葉を失ってしまった。

この人である！

尾張名古屋の金鯁城主、六十一万九千余石の親藩太守従三位中納言継友卿を兄にもち、寛濶必達——ときには狭斜の巷にも足を入れ一夜に一擲千金の興を催し、ひそかに当將軍家の儉約を嗤い、林家の学閥を腐儒と蔑んで武を練り技を励ます——その裏に、紀州以来の吉宗公に不満を抱く豪快な人物——

（危ない——さても危ない……）

と、磯貝は、身をちぢめた。

むろん、あの怪覆面を駕籠に入れ、すぐ裏側の戸を開いて、ひそかに闇へ放した——と気づいてはいたが、御三家様の貴人にはよかれ悪しかれ齒がたたぬ彼であった。

「行け」

声がして、尾州宗春は駕籠のうちだった。

やがて一行は、四谷見附の濠端を左折して、夜靄のなかに霞んで行くのだった。

「噂によれば、近ごろ大城が鼠賊に踏み荒されたとか聞く。城門衛戍の懈怠もさることながら、なるほどこの疎忽さでは、その方どもにもその一半の罪はあるぞ」

「何といわれる?!」

「はて合点の悪い男ではある。孫一、駕籠うちを見せてつかわせ」

「はッ」

供侍の天野孫一が、駕籠の塗戸をがらりと開けると、素破！と思わず磯貝同心がのぞきこんだ。

いない！

そして洞然と、主なき駕籠からながれる薫香は、身分の高い貴人の乗物——そうとより思えぬのだった。

「どうじゃ？」

「はッ……」

「せっかくの賊とやらを追いながら、夜目遠目に、予がかばいだて致すなどに見誤るようでは、御用の筋も勤まらぬぞ。ひいては——奉行越前の失策とも相成ろう。夜中、粗忽は忘れつかわす」

「は、して、御尊名は？」

気を吞まれて、磯貝同心、大地に片手突きになった。



月光院のためならば、ほとんど自己を捨ててまで、忠節であった女性なのに、今は、冷たい他郷の空で、圀園同様の身を嘆いているはずである――

(どうしていやるか?)
考えると、いまも、その江島が前に来て、
(御前様、ちとおつむりなど……)

と、やさしく介抱してくれる気がするのである。

「ああ……」

月光院は、そろと立って、寢所の一隅にある二蓋厨子から薬篋を取った。そして、畳紙のうちから一帖の粉薬を出すと、しずかにそれをのみくだした。

この一帖はてきめんに頭痛が去るかわり、

一定時間は、昏睡をすぎねば眼が覚めぬという、不思議な妙薬なのである。

処法は、典医竹内中務法印、彼は、この御匙をすすめるとき、

「あまりたびたびお用いに相成ますると、脾胃を破り肝の臓をそこないまするによって」と、注意を忘れなかった薬物でもあった。

月光院は、たちまち頭の痛みがとれ、全身にだるさを覚えてきた。

「あ、あ、あ……」

声もうつつに、月光院は、紅梅縮緬総縫取りの三枚重ねの布団へ、よろ……とからだを倒していった。

おりから――

次の間の襖が音もなく開いて、そこに將軍吉宗の姿があった。

常ならば、まず先触れがあつて、少ししてから御年寄の玉尾がそれへ来て、

「上様、ただ今お成りでございます」

と、伝えるのが順序だった。――が、今宵は何の先触れもなく、突然に大樹吉宗がただ一人――そして月光院のしとねの側に立つと寝顔へ、瞳を吸い寄せた。

ところへ、あわただしく小姓が吉宗の褥を捧げてくると、

「退っておれ——あ、待て待て、玉尾その他にも、しばらく遠慮をするように申せ」

台命である。小姓は去った——もうそのときの吉宗の貌は、なにかあわただしい表情にさえ憑かれている……

「似ている！」

吉宗は、凝結したかとおもえる瞳を、月光院の顔へ喰い入らせた。

今は、十幾年の昔になるが、吉宗が、まだ鯖江城三万石の紀州家分家であったとき、ふと契った女性の一人に、いま近々と見る月光院の寝顔が酷似しているのである。

「千賀……」

吉宗は、過去の女の名を呼んだ。——が、月光院の雲より白い顔もとは、そよとの動きもないままに、昏々、睡魔に抱かれているのだった。

「似ている！ いかにも似ている！」

吉宗はもう一度呻くようにいうと、何を思ったか、つかつかと行燈の傍に行つて、ふッ……

その光源を吹き消したのであった。

小座敷の声

次の夜——

子の刻を過ぎた頃。

江戸城内吹上の山王祠の扉が音もなく開いて、覆面の人物が吐き出されてきた。

元来、江戸大城の築城の秘密に、秘孔三穴が城外に走るとあるが、第一に指を屈するのは、この山王祠の地下からつづく坑道だった——と、すれば、いま、山王祠の扉を排してきた覆面は、おそらく、城外から、地下を伝つて来たものといえるのである。

彼は、夜空を仰ぐようにして、
「今夜こそ！」

と、呟くように吐き捨てて、姿を、洞然とした闇に消してしまった。

それからどのくらいたったろうか、脂粉の匂いの流れている二の丸の局々は、深い眠りに落ちていたが、ここに一ヶ所、御小座敷の闇が、妙に空氣の浮動がある。

ことり……と、天井裏で微かな音がした。

すると、今まで澁もうとしていた部屋の空氣を乱して、御使番の登代の姿が浮き上った。それとほとんど同時にだが、床の間脇の袋戸棚の小襖が二三寸ほど開いて、

「……登代」

と、含みのある声が洩れた。

「は、はい……」

むろん、四辺をはばかりる声——

「首尾は？」

「兄上さま、その首尾が……」

「なに？」

いらだたしい声といっしよに、袋戸棚から抜け降りた人影——いうまでもなく、一刻ほど前、吹上の山王祠から消えた人物、いうなれば、彼こそ登代と血を分けた兄——安財数馬であったのである。さらに、その数馬が、先夜四谷で捕物陣にひっかかり、危なく尾州宗春に救われたとしたら、彼の悲願の实体はほほ、想像がつくのだった。

ともあれ、なぜか闇の人物となっている数馬の妹登代は、むろん、数馬と同腹で、ことを起そうと企んでいることだけはたしかだった。

兄妹は、なおひそひそと語りあって、

「……すると昨夜か、惜しいことに」

そういう兄へ、

「あの上様が、どうしてあのようなことを……」

「そこが凡夫だ、しかし、それをうかがっている其方も、たいへんな辛抱だったろう」

「まあ……」

と、登代はここで顔をあかめたらしく、

「そんな厭らしいお話はともかく、今夜は兄上さまに欣んでいただく吉報があります」

「ほう、吉報？」

「近く上様が、日光廟へ御社参になります」

「な、なに、將軍家が日光へ！」

ぐッと、数馬の言葉尻がはねあがったが、それから兄妹は声を沈ませて、もう四辺では聞きとれなくなってしまった。

美わしき死

享保六年四月十三日、吉宗は、老中酒井右京亮、若年寄松平玄蕃頭、その他群臣数百名を召連れて、日光靈廟参拝のために大城を出た。

そして、この社参は、予定どおりに行なわれ、吉宗は機嫌うるわしく日光街道を帰途——雀の宮と宇都の宮の間、松崎山の山道にかかってきた。

「来たな……」

葎の目堰笠をかぶり、ぶっ裂羽織に旅袴の彼——安財数馬が、にこ——と笑った。

これまでに、数回彼は吉宗の鷹狩を襲おうとして果さず、惨辛の偵察で江戸城へ忍んで妹登代の加力までもとめたが、それこそ迷宮に入ったも同様で、思いのままに吉宗を狙え

なかったが、ついに今日、待ちに待った大事決行の寸前なのである。

場所は、前にもいう雀の宮と宇都の宮との間、俚俗に、離山という小高い丘の雑木林——正しくは、松崎山の上腹である。

数馬が、樹木の茂みからうかがうと、吉宗の行列から、はるか離れて、急いでくる駕籠が一挺、まるで、將軍家御成の先駆に追われる形で、ばかな早脚でやってくる。

「はて？」

考えたが、供廻りならば騎馬のはず、將軍家以外に駕籠は用いないし、だから数馬は、「ことによったら道中での急病人……？」くらいに思って、目的の行列を待ちつづけた。

時刻は、ちょうど夕七つ、斜陽を浴びて堂々の隊列が、いま、眼の下の往還を過ぎる！「あれこそ！」

彼は、中央の駕籠に樹間から狙いをつけた。火縄銃の筒口が、駕籠の引戸をまともにとらえた！

「だあーん！」

轟音が、あたりの樹々の梢をゆすって、遠くの山々にまでこだました。

「あたたった！」

数馬は、覚えず躍りあがって叫んだ！

いま、眼の下に將軍家の駕籠は止り、騎馬は手綱をひきしほって行列が乱れた。

「曲者ッ、曲者はあの山である。囲めッ、おッ取り囲んで捕りおさえい！」

非常命令——旗本、徒士の侍たちが、

「それッ」

「取り逃すな！」

と、離山を目がけて、われ先にと馳け出した。

このとき——

吉宗將軍の駕籠の戸を開いて、しず——と出たのは、身に、擦り傷もない、松平越中守、万一をおもんばかったの、替玉だったのである。

騒ぎのうちに——

松崎山の山蔭に、当年二十五を一期とした安財数馬が、みごとな屠腹を遂げていた。

浄らかに、実に充ち足りた欣びに酔う美しい面影を残して——

「数馬、余は無念じゃ、このたび大樹継嗣の相談に尾州は別じゃとはぶきおったぞ」

大守中納言継友が、酒宴の席で、ふと小姓の数馬に洩らしたのがもとで、数馬は、身を捨てての悲願をおこしたのである。

裏窓 既刊号目次

34年(八月特大号) 呪法幻術特集

○グラフィア・ヌード傑作選……………藤沢

○絵物語・美女と野獣……………〔文〕秋津 京太

幽霊陰陽師……………〔画〕古正 英生

妖呪盲目雛……………矢桐 重八

丑の刻異変……………島本 春雄

幻術からくり小町……………中林 節三

怨讐女夜叉抄……………葉田 節三

悪魔の笛で女は踊る……………橋爪 彦七

歓喜天の呪い……………杉本 駿

未整理棚の中から……………黒羽 新

絵物語・あんどろめだ絵図……………偏執子

髪人形……………中島 喜美

えんぶり……………志摩 不二

絵物語・婦人謀報部員(二)……………〔文〕依田 玄吉

妖奇女護ガ島……………〔画〕秋吉 鬱

白刃の舞……………小田桐 爽

美童切腹史……………久富 浩司

お龍秘帖……………中康 弘通

綺談異聞抄……………円城寺 達

泣き兵衛巷囃子・地獄医者……………鈴木 和夫

なめくじ屋敷……………飯田 豊吉

女は穴を掘る……………宇治川 龍

鏡に映す……………柳 斐子

奇怪な手紙……………襟垢 残

（八月特大号・定価百五十円・送料十六円）

34年(七月号) 恐怖異色感覚特集

○グラフィア・ヌード傑作選……………藤沢

○絵物語・地獄屏風……………〔文〕中島 喜美

奥様お手をどうぞ……………鳴滝 三郎

女腹切の史実と小説……………中康 弘通

灰色の壁の中(獄中想起)……………新谷 芳美

いれずみ記……………円城寺 達

髪ぐるま……………志摩 不二

奇妙な博物館……………峠 浩介

絵物語・婦人謀報部員……………〔文〕依田 精二

妖異怪奇譚……………〔画〕秋吉 鬱

未整理棚の中から……………鈴木 和夫

首吊り屋敷……………偏執子

足のしもべ……………矢桐 重八

顔の二つある侍……………牧戸 信雄

七(あいくち)首……………島本 春雄

平家部落の怪……………中林 節三

呪われた老人……………藤見 郁

貴婦人と犬……………〔文〕長谷川 勇

死者の贈り物……………とやま・かつひこ

まぼろし侍・凝脂地獄……………岬 洋之助

殺意の人形……………黒木 忍

（定価百二十円・送料十二円）

34年(六月号) 伝奇秘宝録・特集

○グラフィア・黒と白の幻想……………藤沢

○絵物語・絢爛たる舞踏……………〔画〕山田 彬弘

伝奇紅蓮党……………矢桐 重八

阿修羅秘帖……………中林 節三

夜叉姫絵図……………小田桐 爽

妖異女宝島……………葉田 光

魔童子秘文……………島本 春雄

肌絵双紙……………藤見 郁

絵図面地獄……………高月 大三

髪一重……………志摩 不二

絵物語・女が死んでる……………秋吉 鬱

〃・裸身菩薩……………中島 喜美

散華白虎隊……………中康 弘通

妄執黄金秘抄……………鈴木 和夫

怪異愛靈教(完結篇)……………飯田 豊吉

まぼろし侍・黄金女仏……………黒木 忍

白き神の穴……………南村 蘭

巷説人肌呪縛……………玉木 重信

（定価百二十円・送料十二円）

34年(五月号) 女性解放悲史・特集

○グラフィア・女体とロープ……………藤沢

○絵物語・太腿に眼をつけろ……………〔文〕豊田一狼

○絵物語・刺青小町……………〔画〕古正英生

砂漠の女囚……………中島 喜美

繰り子地獄……………南村 蘭

からゆき悲歌……………矢桐 重八

緋縮緬伝法……………葉田 光

紅怨無限……………島本 春雄

海の魔王と女たち……………橋爪 彦七

女体と圧制……………小田桐 爽

美女蒲鉾……………鈴木 和夫

血(けつよう)妖……………明石 汐子

連載・怪異愛靈教(五)……………溝呂木寂子

巷説緋扱帯呪文……………飯田 豊吉

高月 大三

陰陽元禄侍……………	島本 春雄	悲願八丁堀……………	橋爪 彦七	ゲヘナの火……………	麻布 義朗
義央をめぐる人々……………	橋爪 彦七	伽羅肌ごよみ……………	岩堀 光	夜の秘潮……………	松井 籟子
狂異忠臣蔵……………	宇治川 龍	白い炎(二)……………	河野 春雄	穴倉菩薩……………	円城寺 達
輪廻ごよみ……………	杉本 駿	外国雑誌に現われた女奴隷……………	峠 浩介	臀の下の男の小指……………	藤見 郁
お軽と三平……………	葉田 光	処女の代償……………	蝦蟇家一美	ザルドの帝王……………	竹谷 十三
遥泉院切腹……………	蝦蟇家一美	隠密覚書・髑髏提灯……………	島本 春雄	裏窓のぞき(読者評論)……………	天野 謙
覗き見平内……………	矢桐 重八	穴倉菩薩……………	円城寺 達		
連載・怪異愛霊教(一)……………	飯田 豊吉	黄色い毒蛾……………	溝呂木寂子	33年(十月号) 怪異復讐譚特集……………	(定価百二十円・送料十二円)
まぼろし侍・蛇神異変……………	黒木 忍	壺地獄……………	川口 直樹	○絵物語・女水芸師……………	〔文〕 柳寄重三郎
黒い唇……………	京極 美岐	泡(あわ)……………	松井 籟子	○絵物語・地獄舟……………	〔文〕 中島 喜美
海底のハレム……………	橋 新太郎	化身歓喜女仏……………	梅田 楠雄	○絵物語・鬼火河岸……………	〔文〕 歌川 大雅
肌責め稲荷……………	円城寺 達	奇妙な自殺者達……………	神戸 裕一	○グラフィア・光と肌と……………	撮影・藤沢 修
復讐陣……………	明石 汐子			○絵物語・蝙蝠座の秘密……………	〔文〕 夏本圭之助
男装十文字腹……………	藤山 秀緒	33年(十一月号) 陰謀叛乱秘録特集号……………		連載完結篇・地獄の乳房……………	飯田 豊吉
押入れの中のひとりごと……………	桂 安佳	○絵物語・廃坑は知っていた……………	秋吉 鬱	隠密覚書・死棺小町……………	島本 春雄
		○グラフィア・みのりの夜……………	藤沢 修	旗本閨房譜……………	橋爪 彦七
33年(十二月号) 奴隷と圧制特集号……………	(定価百二十円・送料十二円)	無頼征韓党……………	葉田 光	続肌呪文……………	高木 龍二
○グラフィア・若いヌード……………	藤沢 修	張孔堂秘策……………	橋爪 彦七	ストック・ホテルの怪……………	竹谷 十三
○絵物語・裸女島綺談……………	〔文〕 夏本圭之助	妄執菓子絵巻……………	岩堀 光	お島仇討旅……………	矢桐 重八
○緋縮緬草紙……………	〔文〕 中島 喜美	鳥羽玉侍……………	高木 龍二	虜塚美女因果……………	葉田 光
煩惱奴隷宮……………	小田桐 爽	泣き叫ぶ人工衛星……………	海部 陽三	変化若衆……………	三国沢 隆
売春奴隷街……………	飯田 豊吉	おせいさまと隠亡……………	加山 和雄	妖異死神旗本……………	小田桐 爽
鰯(じょうろ)雨……………	鈴堀 残	讐怨私刑抄……………	鈴木 和夫	もうじき命日……………	宇治川 龍
象牙の王座……………	橋 新太郎	ナチス秘密諜報部の魔女……………	樋口 逸馬	傲れる女達……………	股野 元
虜囚美人伝……………	葉田 光	淫らな釣師……………	京極 美岐	足にひそむ悪魔……………	溝呂木寂子
奴隷船事件……………	壇 達二	紅蓮の女……………	志摩 不二	毒蝶の宿……………	松井 籟子
女奴隷の宝石……………	藤見 郁	白い炎……………	河野 春雄	妖氣を誘う家……………	猿若 屯平
奈落の檻……………	志摩 不二	隠密覚書・般若狂女……………	島本 春雄	死を売り歩く男……………	尾島 新
その箱をあけるな……………	佐々木 力	女漁り旅……………	野田 淳		

怪異変幻抄……………鈴木 和夫

(定価百二十円・送料十二円)

33年(九月号)敗戦落城秘史特集号

○絵物語・夢魔の殺人……………画・山田 彬弘

○〃・雪姫受難……………画と文・歌川 大雅

○〃・女夜叉……………画と文・東 桂史

グラビア・夜のえくぼ……………撮影・藤沢 修

落城悲愴譜……………宇治川 龍

餓鬼供養……………伊能 孝

関ヶ原悲歌……………橋爪 彦七

父恋の娘旅……………矢桐 重八

怒りの焰……………麻布 義朗

落城洞窟地獄……………高木 龍二

疾風馬賊黒鷹団……………南村 蘭

琴姫散華……………葉田 光

戦国女房……………小山龍太郎

アポロの少年……………砧 真砂男

切支丹殉教史(下)……………鈴木 和夫

変性の破戒尼……………梅田 楠雄

髪地獄……………志摩 不二

邪宗門小町……………小田桐 爽

隠密覚書・妖雲小倉城……………島本 春雄

おつや櫛……………鷺尾 素人

連載妖異・地獄の乳房……………飯田 豊吉

(定価百二十円・送料十二円)

33年(八月号)一揆殉難秘史特集号

○口絵・泥人形……………画と文・歌川 大雅

グラビア・渇きの夜……………カメラ・藤沢 修

天保血笑録……………小田桐 爽

美作一揆秘譚……………葉田 光

独立黒月党……………南村 蘭

一揆に咲く花……………曲 二十八

四郎時貞の復活……………宇治川 龍

美女門一揆……………高木 龍二

黒旋風一揆……………小山龍太郎

人魚と短剣……………画・沖 涉二

切支丹殉教史……………鈴木 和夫

宗吾秘命……………橋爪 彦七

お綱草紙……………画と文・東 桂史

天正あじさい若衆……………大門 正人

黒い陽炎……………浜松 武

隠密覚書・幽霊奉行……………島本 春雄

佐渡夫人の魅惑……………尾嶋 新

蜥(とかげ)蟻……………伊能 孝

秘密のよろめき……………三国沢 隆

連載・地獄の乳房……………飯田 豊吉

(定価百二十円・送料十二円)

33年(七月号)裏窓妖異譚特集号

○口絵・花鬘體……………画・古正 英生

蒼白い手……………文・高須信次郎

黒猫小町……………画と文・歌川 大雅

あおみどろの座……………宇治川 龍

七化け死霊……………矢桐 重八

怨霊狂い化粧……………橋爪 彦七

変化屋敷……………高木 龍二

妄(もうきょう)鏡……………酒井 皓介

寄生人の恐怖……………前田 勇

かつば沼の魅惑……………伊能 孝

近松門左衛門の血……………平林 啓子

天使をいじめるな……………佐々木 力

苛責嚴刑譚……………鈴木 和夫

黒い陽炎……………浜松 武

いざりが夜にやってくる……………否笠 一郎

ハラハラ場面オンパレード……………高円寺 一郎

K君の女装系図……………滋賀 雄二

隠密覚書・裸女小判……………島本 春雄

お町の罪……………小田桐 爽

危険な曲り角……………竹谷 十三

連載・地獄の乳房……………飯田 豊吉

(定価百二十円・送料十二円)

33年(六月号)女忍者女間諜特集号

○口絵・女城鶴巻地獄……………文・岩堀 光

○グラビア・夜の砂時計……………画・柴谷幸二郎

蛇林洞秘文……………喜多 玲子

間諜曉に消ゆ……………南条 慎一

伝奇怨霊沼……………黒羽 新

血染曼陀羅……………曲 二十八

間諜散華……………橋爪 彦七

雪肌密書……………藤見 郁

紅紐呪縛……………葉田 光

傾城忍者……………小田桐 爽

慶安女忍道……………高木 龍二

連載・地獄の乳房……………円城寺 達

隠密覚書・妖異呪文鏡……………飯田 豊吉

極刑秘抄……………島本 春雄

女館南蛮船……………鈴木 和夫

卯の花くだし……………画と文・歌川 大雅

蛇使いの王女……………大門 正人

藤 琴也

死者は蘇える.....矢桐 重八
悪魔は見えていた.....神行 京一

33年(五月号)裏窓妖異捕物特集号
(定価百二十円・送料十二円)

○絵物語・乱世艶色隠密記.....画・山田 彬弘
○絵物語・血まみれマリ.....画・秋吉 鬱
グラビア・別離の詩.....撮影・藤沢 修
新連載・地獄の乳房.....飯田 豊吉
愛憎血潮傘.....松井 籟子
大名屋敷の怪.....橋爪 彦七
獄門首供養.....宇治川 龍
麝香肌小町.....高木 龍二
妖異お告げ狸.....矢桐 重八
吸血艶魔伝.....青木 憲一
アマゾン流刑奇譚.....大町 三郎
女刺青師.....歌川 大雅
戦国刑譚.....真野 麗
黄色い帯をしめた少女.....竹谷 十三
海賊貴族.....川野 京輔
拷問と処刑.....鈴木 和夫
マダム僕をどうぞ.....青葉 繁
連載伝奇・お小夜嵐.....高月 大三
隠密覚書・美女秘巻.....島本 春雄
服地がほしい.....岬 洋之助
波に笑う女.....柳生 亘

(定価百二十円・送料十二円)

33年(四月号)あぶちっく・さすぺんす特集

○口絵・白獣の市場.....画・山田 彬弘
裏窓巷談・島の喜三郎.....鳴海 玄吉
東西映画・名場面を探る.....高円寺一郎

野鷄復讐奇譚.....矢桐 重八
魔の二十分間.....横山 正勝
手提金庫の鍵.....神行 京一
肌絵を蒐める男.....三国沢 隆
桃色の替え玉.....大河内常平
冷酷な雌獣.....京極 美岐
鼻から上だけを見た.....宇治川 龍
情炎千姫絵巻.....橋爪 彦七
禍夜草紙.....黒木 忍
隠密覚書・闇若衆伝奇.....島本 春雄
十寸髪執念.....大門 正人
仁俠恋まんじ.....榎 剣吾
連載伝奇・刺青弁天.....中林 節三
美代吉捕物暦.....飯田 豊吉
伝馬町牢屋敷.....鈴木 和夫
蛇女郎呪文.....滝 一平
連載伝奇・お小夜嵐.....高月 大三

(定価百二十円・送料十二円)

33年(三月号)裏窓妖婦伝特集号

○口絵・お百化粧草紙.....画・東 啓三郎
十六夜お新.....橋爪 彦七
白狐呪伝.....青木 憲一
奴の小せん.....松井 籟子
刺青百万石.....高木 龍二
まぼろしお徳.....伊能 孝
松風吟味.....宇治川 龍
からす猫お紋.....飯田 豊吉
らしやめん駕籠.....小山龍太郎
紅筆さんげ.....岬 洋之助
黒い王座.....ワトスン・独田

地獄部隊.....大宮 敬一
隠密覚書・幽鬼大名.....島本 春雄
仮面の青春.....藤川 博
連載伝奇・刺青弁天.....中林 節三
白い顔の悪魔.....矢桐 重八
連載伝奇・お小夜嵐.....高月 大三

(定価百二十円・送料十二円)

33年(二月号)裏窓遊俠伝奇特集号

○口絵・柔肌偶奇.....榎 剣吾作・古正英緒画
英五郎笠松土産.....橋爪 彦七
情怨姫買宿.....葉田 光
疾風飯岡街道.....飯田 豊吉
やわ肌仁義.....中村 獺
ちよぼ一お松.....宇治川 龍
遊俠剣法.....高木 龍二
愛憎メキシコ無宿.....大門 正人
人工怪物.....ワトスン・独田
仮面の青春.....藤川 博
リユカ大王の宝庫.....藤 琴也
隠密覚書・どくろ遊女.....島本 春雄
白いくちなわ.....三国沢 隆
狐(きつねび)灯.....松井 籟子
連載伝奇・刺青弁天.....中林 節三
鏡の中に男がいる.....岬 洋之助
死体を運ぶ男.....潮井 拓
地獄の指輪.....神行 京一
連載伝奇・お小夜嵐.....高月 大三

(定価百二十円・送料十二円)

33年(新年特大号)あぶちっく忠臣蔵特集

○口絵・妖説女忠臣蔵.....画・中島 喜美

阿撫的赤穂囃子……………法界寺 嘉
 美しき奴隷ジェリスナア……………海部 陽三
 闇に生きる義士……………島本 春雄
 元禄二筋通……………橋爪 彦七
 黄泉路の影……………宇治川 龍
 投がん燈秘聞……………松井 籟子
 妖説絵図まんじ……………窪村 弘
 元禄匍匐……………真野 麗
 雪嵐お美代さんげ……………伊能 孝
 血まみれ観音像……………飯田 豊吉
 元禄乱れ小袖……………黒木 忍
 二人の内蔵助……………小山龍太郎
 あしのうら源内……………岬 洋之助
 こんばんわ……………鳴海 玄吉
 墓屋敷……………神行 京一
 狐(きつねび)灯……………松井 籟子
 白い芋虫……………否笠 一郎
 SS秘密クラブ……………横山 正克
 隠密覚書・逢魔娘……………島本 春雄
 連載伝奇・刺青弁天……………中林 節三
 リュカ大王の宝庫……………藤 琴也
 放浪の記……………伏見 和夫
 (新年特大号、定価百五十円・送料十二円)
32年(十二月号)あぶちつくすりらあ特集
 ○色頁・倒錯のよろめき……………高月 大三
 ○口絵・女を探せ……………秋吉 轡
 ○グラビア・罌に陥ちた暴漢……………編集部編
 隠密覚書・怪異蠟人形……………島本 春雄
 鱗肌異聞……………南屋 彦六
 地獄島……………美作 賢

雌花のいたずら……………京極 美岐
 死人駕籠……………黒木 忍
 盗賊煙丸の最後……………藤 琴也
 妄(もうしゅう)執……………大河内常平
 輪(りんね)廻……………三谷 春樹
 殺(さつ)意……………岬 洋之助
 夢(むえん)魘……………岩堀 光
 死体工場……………大町 三郎
 妖夢呪薬譚……………窪村 弘
 青い顔の男……………飯田 豊吉
 歪んだ眼……………真野 麗
 狐(きつねび)灯……………松井 籟子
 死を弄ぶ女……………花町 右門
 紅燈夢……………横山 正克
 血の蜜月旅行……………陶山 密
 刺青弁天……………中林 節三
 (定価百二十円・送料十二円)
32年(十一月号)あぶちつくすりらあ特集
 ○口絵・廃屋の妖精……………秋吉 轡
 人差指の妬み……………朝山 蜻一
 闇(やみ)……………大河内常平
 悪魔の祈禱師……………神行 京一
 闖入者……………三宅 一郎
 地獄から殺しに来る男……………真野 麗
 金曜日の戦慄……………鳥羽 暎子
 殺意の黒白……………宇治川 龍
 窓(まど)……………岬 洋之助
 傷痕だらけの人魚……………松井 籟子
 なめくじ幻想曲……………坂 みのる
 宝石呪縛……………黒木 忍

連載伝奇・刺青弁天……………中林 節三
 隠密覚書・鬼姫変化……………島本 春雄
 恋人形……………鳴海 玄吉
 罌にあえぐ女……………波戸 容
 手裏剣……………狭山 温
 死体買います……………柳生 亘
 妖 虫……………京極 美岐
 女炎脂地獄……………岩堀 光
 コレラの正体……………田井 良栄
 黒いマニキュアの女……………木原 康夫
 偶奇談義……………川口 映治
 放浪の記……………伏見 和夫
 (十一月号、定価百二十円・送料十二円)
32年(十月特大号)時代伝奇小説特集号
 (定価百二十円・送料十二円)
32年(九月号)耽美小説特集号
 (定価百円・送料八円)

○以下売り切れ

★お買い洩れのないよう月ぎめで御予約くだ
 さい。

★三ヵ月以上月ぎめ購読をお申し込みの方に
 は、送料は当社で負担いたします。

★三冊以上御注文の際も、送料は当社で負担
 いたします。

★御送金は振替御利用が最も確実です。

東京都中野区江古田一の二三〇二
 株式会社 久保書店
 振替口座・東京 一〇七五六番

えんぴつ 地獄



針のように尖った鉛筆のシン……
皮膚にひろがるさわやかな痛みは
さらに喜びをかきたてるのだノ

1

「よろしい。二三日がっちり尾行してみま
しょう。なあに、きつと何か出てきますよ。
じっさいちかごろの娘なんて、うわべはどん
なにまじめそうでも陰じゃ何をやっているか
わからないのが多いんですからね」

この商売はもらった、というような断定的
な口調でそういうと、探偵は昌雄の顔を
見てニヤリとわらった。探偵というの
は、三十五六の口ヒゲを生やしたニ
ヤけた感じの男で、ちょっと歪
めてわらう口もとのあたり
が、へんにいやしい性的な
表情をもっていた。いか
にも、この世の中に
かくれている、さま
ざまの人間関係の

鳴海玄吉

美濃村 晃・画

秘密を嗅ぎ出す鋭い嗅覚をもっていそうな感
じだった。それにしても昌雄は探偵にそんな
ふうにいわれると、山本つた子の私生活に、
自分の想像もつかない秘密がかくされている
ことが、まちがいないような気がして、年が
いもなく、嫉妬で顔が赤黒く燃えてくるよう
だった。

昌雄は探偵には、すべてをありのままには
話していなかった。

「あたらしく、女事務員を採用したんです
がね。金銭なんかも扱うし、店のことを任せる
ことになるんで、身もととか素行を調べてお
きたいと思ってね。履歴書は取ってあるが、
それだけではたよりないような気がするんで
ね」

探偵には、そういうふうにしたのだった。
探偵は、

「ああそうですか。ふんふん」



いちいちうなず
いて昌雄の話
をききなが

らときどき、
鋭くすばやい
一べつを投げ、昌
雄の表情を読もう
としているようだ
彼はすでにあるていど

カンづいているようだった。

たんに雇い主が女事務員の身元を調べると
いった表面の理由だけではなしに、そこに暗
い情痴の匂いがまわりついているのを、彼
は敏感に嗅ぎとっていたのだ。探偵の口もと
には、昌雄の話をききながらも、

「ふん、ありそうなおつた」

というような、すべてを呑みこんだような
うすわらいが、絶えず影のように浮んでい
たのだった。

話が一段落ついたところで、探偵はよれ
よれのレインコートのポケットから、もみ
くちやになった「しんせい」の紙袋をつかみ
出すと、これもくしゃくしゃに折れ曲りそう
になったタバコを一本出して火を点けた。や
っと一本か二本残っていたのをさぐり出した
感じで、いかにも貧乏くさい。

それが昌雄に、その男の収入とか生活のこ
とを連想させた。その連想に便乗するように
探偵はいかにも慣れきった自然な調子で、
「前金の規定なんですがね。五千円ちょうだ
いします」

そういうと、挑戦するようにふうっとタバ
コのけむりを吐きながら、昌雄の顔を見た。
その眼に、獲物を窺う猛獣のような、する

どい光があつた。昌雄の顔を見たその瞬間から、探偵はそれを切り出すキツカケを窺っていたにちがいないのだ。

昌雄は、

「ああそうですか」

はじかれたようにあわてた調子でそういうと、机のひき出しから小切手帳をだし、

「五千円でしたね」

もういちどたしかめてから、ペンをとって金額の数字を記入しはじめた。

ほんとうなら、

「半分は報告書と引きかえにしましょうよ」

くらいのことをいいかねない彼なのだが、いまは情痴に狂ったようになっていたので、そんな考えもはたらかず、探偵のいいなりになつてしまふほど意気地がなくなつていた。

ペンを走らせながら昌雄は脳裏に、机に向つて事務をとつてゐるときの、山本つた子のムッチリと肉づきのいい下肢のふくらみや、彼女が何かしようとして、ものうい仕草で立ちあがるときの椅子のきしりの音を思い浮べていたのだった。

2

昌雄は女のあしらいにかけてはもともと自

信のあるほうだった。若い時からずいぶん遊びもしたし、女関係もあった。

「あんたみたいのを、女殺しというのね」

ひとしきり情痴にふけたあと、寝そべつたまゝの姿勢で、剃り痕の濃い昌雄の横顔を見上げながらそんなふうにいる女もあった。

「あんたにはすっかり覚えさせられちゃったわ。忘れられなくなるじゃないの。ほかの男のひとじゃダメになつてしまふわ」

それから、

「ニクらしい！」

といつて、昌雄のももをつねったりするのである。

昌雄は、

「いたいッ」

大げさに首をすくめて見せながら、それでも女殺しといわれた自己満足で、口もとのあたりがニヤニヤとゆるんできた。若い時の彼の日々には、そんな思い出が無数にあつた。

彼は家具の職人だったが、戦前の実業学校の家具科も出ていて、小僧から叩き上げた職人にくらべるといくらか学もあったし、その表情や言葉つきにもいくらかインテリくさいところがあつた。青白い神経質な風貌や、心もちゆううつそうな表情などが、ある種の女

には好ましいものに映るのだった。

しかし、そうした形で女にモテるのも、せいぜい三十くらいまでだった。

昌雄は世間の女の自分を見る眼や態度が少しずつ變つて来ているのを感じた。

「金だな。金がなけりゃ、いまどきの女にはもてねえや」

それは同時に時代の動きでもあつた。

彼は道楽はしたが、それに身を持ち崩すというふうではなく、どこかで生活者としての自分の姿勢をちゃんと保っている用心深さがあつた。女に対する執着はますます強くなつていたが、女にもてるには経済力も必要だといふことが年令と共に身に沁みてわかつてきたので、なんとかしてそうしたことでも一人前の男になろうと思つていたのである。

三十四の時、それまで勤めていた木工所の親方からのれんを分けてもらう形で独立することができた。独立といっても、もとの木工所の下請が主で、昌雄のほかには少年の徒弟が一人いるだけだった。それでも、独立できたという張合いでけんめいにはたらき、二年くらい後には、もとの親方の下請仕事のほかに自分なりの販売先もいくらか確保できるまでになった。

いくらか経済的にもらくになったので、はじめておそい結婚をした。相手はもとの親方の遠縁に当る出戻りの女だった。

「君もさんざ遊んだ男だから、いまさらどうということばねえだろう。なあに女房なんてのは家の中の道具みたいなもので、あとは外で適当にやれや。君のこったから、そのへんはいわなくてもわかってるだろうよ」

親方はそういつて笑った。

しかし、結婚した当座は神妙にしていた昌雄も、一年目ぐらいから金がいくら自由になるに任せて、またしても遊びクセが昂じてきた。それが目に余るようになったころ、妻は怒って実家に帰ってしまい、それきりになつてしまった。昌雄のような男にセックスをみっちり仕込まれ、しかも肉体がすっかりそれに慣れたところで昌雄が外の道楽にふけるあまり妻をかまいつけなくなってしまったので、彼女は逆上したようになってしまったのだ。あれほどさばけたようなことをいつていた親方だが、そうしたことになってみると、さすがに怒って昌雄とは絶交同様になつてしまったのである。

その次には、のみやではたらいっていた女を妻にむかえたが、このころは昌雄の木工所の

経営がガタガタになっていた。材料屋の支払いが滞り、それに追われて融通手形を濫発したり、製品をコスト以下の値段で換金投げしたりしたことが祟って資金的にうちもさつちもゆかなくなった。そうなればなつたで、昌雄はヤケになつたように、遊びのほうも凄くなつた。昌雄のいないあいだ。押しかける債権者を一人でさばいていた女房もついに音をあげて、

「あんたはあのほうもウマイしい人だけれど、とてもあたしにはついていけないわ」

などというようになった。

それが一つの警告だった。まさかそれほどあつさり見きりをつけるとは思わなかったがそれから一週間もたたないうちに、彼女は昌雄の前から姿を消した。若い職人の谷村もいっしょに消えていた。

「あつ、そうだったのか？」

とふたりの関係を昌雄が気がついたのは、あとのことである。債権をのがれることと、ヤケになつて飲み歩くことで身心をスリへらしていた彼には、家の中で起つていたそうした変化に気がつくゆとりがなかったのだ。

これが、彼が女から受けた最初の手ひどい傷だった。ひとの女房を寝盗ったことはあつ

ても、寝盗られようとは夢にも思わなかったのだ。そこに彼は自分の年令と、それから境遇の落ち目を感じた。

それが一つの転機だった。

三人ほどいた職人にヒマを出し、木工所を整理したあと、また徒弟と二人だけの振出しに戻つて再発足した。

「藤野（昌雄の姓）さん。あんたはやれるんだから、ここでひとつがんばつて男になんないよ。事と次第では力になつてあげてもいいから……」

そういつてくれる債権者もあつて、とにかく曲りなりに工場は動き出したのである。

それからさらに一年たち、昌雄の木工所はいくらかましになつていた。職人も二人ほど雇い、旧債もポツポツ返せる段階になつてきた。そのころから、昌雄は、仕事をしていてもふと疼くような女体への渴望を感じることもあった。以前のように遊ぶ余裕もないし、だいいちもう年令も四十ちかくなつていたのだ。

彼はキマつた女がほしかった。そして、自分が年令を加えるのに反比例して、若い女に執着しはじめているのを感じた。そうした背景のもとに、彼はある日職安に頼んで女事務

員を回してもらったのである。それでやってきたのが山本つた子だった。

目立たない、地味な感じの娘だったが、昌雄のように女に舌の肥えた男にとっては、粗末な衣服の下に隠された肉体の美味を嗅ぎとすることは雑作もないことだった。

木工場につづいた、二坪ばかりのせまい粗末な名ばかりの事務所にはじめて山本つた子が姿を現し、そこで二人で向い合った時、昌雄はひさしぶりの若い女の体臭に圧倒され、息ぐるしくなったほどだった。

面接時の質問も上の空だった。飢えた獣のように乾いた視線で、彼はうつむいている山本つた子の全身の線を撫でまわし、意味もない、どうでもいいような質問を繰り返した。

彼女の採用を決定した瞬間、昌雄は彼の債権者たちや、そして世間にかくれて、ひそかな悪事をはたらいっているような戦慄が背筋をはしるのを感じたのだった。

3

昌雄の債権者たちは、その後もちよいちよい彼の工場に何喰わぬ顔をして動静を探りにきた。

自分たちが強引に債権のとりたてに出なか

ったおかげで、どうにか細々とやっている昌雄が、勝手な真似をしていないかどうか、よくすを見にくるのである。みんな自分の債権が可愛いものだった。

「おや、べっぴんさんを入れたね」

工場に來た債権者の一人からそういわれた時、昌雄は、

「あたしが工場に入ったり外回りをしたりするあいだの留守がどうしても必要なんでね。これであたしも安心して仕事に精が出せますよ」

そんなふうに答えたが、内心では顔の赤らむ思いだった。

「それは結構だ。まあ、しっかりやんなさいよ」

債権者はそういつて帰っていったが、帰りに山本つた子と、それから昌雄のようすに、鋭い視線をはしらせることを忘れないのだった。

山本つた子は全体として田舎くさい娘だったが、半分くらい都会風になりかけたところがあった。昌雄には、そうした彼女のどこか泥くさいところが、かえって新鮮な魅力だった。

せまい事務所に二人きりしていると、ほとん

ど膝がつかえそうだった。昌雄はつた子の肉体を強く意識しながら、彼女のいれてくれたお茶を、うまそうに音を立ててすすった。しかし、ほんとうはお茶の味など上の空だった。唇をつき出し熱いお茶をすすりながら、茶碗のかけから上眼づかいにじっとつた子のようすを窺っていた。そして時どき、とってつけたように、

「ああ、ノドが乾いているからお茶がうまい」とか、

「山本さんはお茶の入れ方がうまいね」などというのだった。

それはどうかすると、

「山本さんはお茶の入れ方がうまいから、きつといい奥さんになるよ」

というような、狎れた言葉に化けてゆくのである。つた子は、

「まあ、いやだわ」

あいまいに笑って、昌雄と向い合った位置からそっと座をずらせると、椅子を引寄せ昌雄に背中を向けて机に向った。昌雄は、

「ふふ」

と乾いた声で笑い、うしろむきになったつた子のからだの線を、むさぼるように眺めた。眺めながら、茶碗が空になったのも気がつ

かずすすっていることもある。

つた子は地方の高校を出ると、一、二年してから上京したらしく、上京してから二年くらいたったところらしかった。パートタイムで時どき働きに出たほかは、あまり勤めの経験はないらしい。早くから両親がなく、叔父夫婦の厄介になっていたという

ことで、家庭環境には恵まれていないようだった。いまは、嫁いでいる姉のもとに寄宿しているのだった。なんとなく彼女の環境の貧しいらしいことが昌雄には気に入っていた。

「どうにかなる、いまにどうにかして見せるよ。この娘は……」

昌雄はつた子をすぐかたわらに置きながら残忍な誓いの言葉をみずからにいいきかせるのだった。

つた子はいちめん子供みたいなところがあって、鉛筆が好きだった。ピンク、コバルト、そして黄色……と、いろんな色の軸の鉛筆を五本も六本も机の上にならべ、シンをいつもキリのように尖らせておくのである。



彼女が手洗いに立ったりしている時、昌雄はなんということなしに、その鉛筆の一本を手にとって見た。軸に吹きつけられたいろんな色が、なんとなくまめかしかった。そつとその一本を鼻に近づけてみると、ほのかなシナの木匂いがした。それは妙なことに、若い女の軀の匂いを昌雄に連想させるのだった。

昌雄はそれを鼻にあてがったまま、しばらくくうつとりと眼を閉じていた。

「つた子」

と、心の中でそつと呼んでみた。そのつた子はいま、手洗いでしゃがんでいるにちがいないのだ。

うすつべらな板戸いちまいを距てた向うにあるつた子の秘密な肢体を昌雄は想像してみた。

その手洗いは事務所につづいた昌雄の住居の廊下にあるのだが、そこへゆくためには、茶の間になっている四畳半を通ってゆかなければならない。もっとも、住居とはいってもその四畳半と、奥の六畳のふた間しかなかった。奥の部屋は妻がいた時は妻と二人の、そしていまは昌雄ひとりの寝室だった。つた子はまだその部屋には入ったことはな

い。あいだの襖がひらかれている時には、チラと見て通るだけだ。その六畳の間には昌雄と、別れた彼の二人の妻との、さまざまな情痴の痕跡がしみこんでいた。

つた子は、本能的にそれを感じているらしい。意識的に彼女の視線はそこを避けて通るのだ。

しかし、つた子がうすいナイロン・ストッキングの足で手洗いの行きかえりに踏んで通る四畳半にしたって、昌雄とその妻たちの情痴の痕跡がしみこんでいないとはいえないのだ。

時間にかまわず、突然、妻に対して変則的な愛撫をその茶の間の四畳半で加えた時のことを昌雄は思い出していた。もっとも、そうした、なんの前ぶれもない突発的で変則的な愛撫がスコールのように襲ったのは、まだ昌雄が妻に対して新鮮な情熱を感じることができただけに限られていたが……

昌雄は鉛筆を鼻にあてたまま、つた子を畳の上に押倒す瞬間のことを想像していた。

それはたぶん、あの四畳半になるのにちがいないのだ。つた子が手洗いから出て来て、ナイロン・ストッキングの足で、そつと爪先だちするように四畳半の畳を踏んで横切って

くる瞬間をネラって自分はおそいかかるだろう。あとは、天井にかけられた古ぼけた埃をかぶったお酉様の熊手や、壁の額や、そうしたものが見えているだけの凄惨な默劇が展開されそしてすべては成就するのだ。

昌雄はつた子の抵抗を想像した。

「あれで案外気は強そうだから、爪でひっ搔いてくるかな」

と思った。

ひっ搔かれて血がにじむ。皮膚にひろがるさわやかな痛みの感覚。それはさらに男の獣慾を掻きたてるにちがいない。血の中で遂げられる最初の祭典だ。かまうもんか……

昌雄はそうしたことを想像しながら、鉛筆を鼻にあてがったまま、しばらく恍惚と立っているのだった。そして——つた子が用を終り、手洗から出てくる物音をきくと、

「いまに、そうだ。いまに……」

と思いながら、そつと鉛筆をおき、それから何喰わぬ顔で工場のほうへ出てゆくのだった。

4

つた子はなかなか昌雄に本心をつかまなかった。昌雄がひそかに空想したような、光

景は、現実にはなかなか訪れなかった。

昌雄は焦れて、つた子を外へ食事につ誘った。
そんな時彼は、

「工場の連中にわかるとうるさいからね。先に出て待っていてくれ」

落ち合う場所を指定し、彼女にそっと秘密っぽい意味をこめた視線を通わせた。そうすること、

「僕と君はたんなる雇い主と使用人ではないんだ。もうワケのある仲になりかかっているんだぜ」

ということ、言外に感じさせようとしていたのだった。

つた子は、あいまいに、暗く笑ってそれにならずいた。そして、指定された場所に待っていた。そのくせ、時間がくると、

「もうおそくなりますから」

といって、昌雄にちよつと制止するキッカケをつかませないようなすばやさとしたしきで、さっさと帰っていつてしまふのだった。

「固いんだな」

と思った。しかし、固いだけでもなさそうだった。固くよろったポーズのかけから、あけびのように赤い割れ目を見せた女の心がのぞいていて、昌雄をおいでしていた。

「チキショウ！」

と思ったが、どうしようもない。本能的に身についた女の狡智かもしれない。そしてこの頃になると昌雄はハッキリ焦れはじめ、つた子のためなら工場をつぶして入れあげてもいいようなヤケクソ気分になっていた。

探偵をたのんでつた子の男関係を調べて貰うことになったのも、そうした焦りからだった。

一週間くらいたったころ、探偵は最初の報告をもってきた。当然のことだが、探偵がくるのはつた子が帰ったあとの、おそい時間に限られている。昌雄は自分の知らないつた子の半面を探偵がつかんだかも知れないという期待と不安で胸が波立ったが、さりげなく表情を殺して探偵をむかえた。

「どうでした？」

と顔を向ける昌雄へ、探偵はわざとものつたいをつけるように、ゆっくりと、

「まあ、いままであたしの見たところでは、一通りの固い娘さんですな。この通り臆本もとりによせて見ましたが、本籍地とか身元なども履歴書と一致してますよ」

そういつて、つた子の本籍地の役場から取りよせた臆本を出して見せた。

昌雄は自分の思い焦れている女の本籍地や戸籍を記したその臆本の文字面を、へんにせつない気持ちで拾っていつた。

探偵のいうところでは、姉夫婦の家にいるということも、まちがいないらしい。姉の亭主というのは、ある下級の役所に勤めている小官吏で、生活はあまり豊かではないらしく、場末の古びた二階建のしもたやに住んでいるのだった。探偵はそこまで彼女をつけてゆき、彼女が自分の部屋にしているらしい二階の間で、夜、寝巻姿になっているのを、前の暗い空地に、しゃがみこんだまま、窓越しにたしかめたというのだ。

探偵が三日にわたつて、彼女を尾行したというのは嘘ではないらしく、詳細な尾行のメモを彼に示した。

最初の日は、彼女は昌雄のところから、まっすぐ帰宅している。大森で国電を下車、蒲田行のバスにのつて、Tという停留場で降り、そのまま五六分歩いて自宅へ入つた。

二日目は有楽町で下り、松竹ピカデリーでロードショウを見て、それから電車でもうすぐ家に帰っている。ピカデリーでは切符を買わないで、モギリの女の子に話して劇場の誰かを呼んでもらつた。

そこで探偵は誰か男でも出てくるのかと思
って緊張したが、出て来たのは制服を着た劇
場の女の子で、二人はちょっとしたあいだ立っ
たまま談笑していたが、すぐつた子一人でエ
スカレーターで二階の観覧席のほうへ上って
いった。

「あたしもお相伴で映画を見ましたよ。大枚
二百十円をはらって……ホラね」

そういつて探偵は入場券の半分を出して見
せた。その日は、バスの中までついていった
のでは怪しまれるおそれがあるので、大森で
国電を下りるところまで尾行し、彼女がそこ
でちょっとした買物をしてバスにのりこむの
を見届けてから、切りあげて帰って来たのだ
という。

三日目は、探偵は主として、近所のききこ
みにあたったらしい。

「ところが、最近見合いをしたらしいんです
な。目下婚前交際ってところです。もっとも
たまに姉夫婦の公認で会って映画くらい見る
程度で、おたがいなそれほど積極的な段階に
はいっていないらしい。しばらくつきあって
見て、ピンと来なかったらそれっきりにしよ
うというつもりらしいです。そのへんは、割
り切ったもんですな」

探偵はそこまで報告すると、五千円の調査
料ではまあこのへんまでですな、という顔を
した。

「どうです。報告書を作成してお届けします
かな。いまタイプが混んでるんで、ちょっと
時間がかかるんだが……」

「いや、それには及びませんよ」

昌雄は、その婚約の相手の男なんかもう少
し調べさせたかったが、しばらく様子を見て
からにしようと思った。それと、彼がすぐピ
ンと来たのは、彼女が同宿先の姉の亭主と何
か関係がないかということだった。世間には
よくある例だし、昌雄はすぐそうした方面に
気を回すクセがあった。しかし、そこまで探
偵にたしかめて見るのも、なんだかこっちの
腹を見すかされるようできまりが悪かった。
そこで、調査をいっぺん打切ることにした
のである。

「なかなか、固い子です。あの娘は」

探偵は帰りがけに意味ありげにニヤリとし
て見せたが、昌雄は探偵が帰ったあとも、
「なるほど、固い子か。ふん、なるほど
な」

ひとりつぶやいてみたが、いよいよつた
子に対する情念が、どうしようもなくたかぶ

ってゆくのを感ずるばかりだった。

5

つた子が最近見合をしたという事実、しか
も彼女が自分にそれを隠しているということ
に対して、昌雄はからだじゅうがムズムズす
るような嫉妬にさいなまれた。

「オイ君。見合いをしたんだってな」

そういつて、つた子の髪をワシづかみにし
て問いただし、不信をなじってやりたかった。
しかし、考えて見れば、自分とつた子はい
ったい何だというのだろう。自分一人がムラ
ムラと情火を燃やしているだけで、彼女のほ
うは、ただの雇用主と使用人の関係としか思
っていないのかも知れない。それだとしたら
彼女としては、そんな私事をいちいち主人に
報告する義務はないわけだった。まして、見
合したから結婚するとはきまっていけない以上
なおさらのことだ。

だが昌雄は、ヌラリクラリと彼女が自分を
かわしているのは、一方にそうした見合の事
実があるからだと思わないわけにはいかなか
った。彼の経験によれば、他の娘ならもうと
つくに落ちていたのだ。それがつた子には通
じない。案外何もかも知っている図太い女か



もしれないと思った。そう思えば思う

ほど、情火はいよいよ燃えさかつた。いよいよ彼女をねじ伏せ、

本音をあばき出すほかはな

いと思った。昌雄は年

令にふさわしい思

慮と抑制を完全

に忘れ果て

ていた。

そのやさき、突然、つた子が休んだのである。

「どこかぐあいでも悪いのかも知れないな。

明日は出てくるだろう」

そう思っていた昌雄も、あくる日になってもやはり彼女が出て来ないので、にわかにドス黒い猜疑と嫉妬にさいなまれはじめ、それに平行して、狂おしいばかりの恋情を掻き立てられた。

その日は彼は職人を帰してしまい、工場も家も閉め切って一日寝ていた。一升瓶から冷や酒をあおった。しつこくつた子のが頭にコビリついて離れなかった。

彼は寝巻のまま事務所に起きてゆく

と、つた子の使っている机のひき出しをあけた。机の上も引出しの中もキレイに整理されてあった。ふと彼は、このままもうつた子は来ないのではないかと思ひギョッとしたが、引出しの中にまだこまごまとした彼女の私物が残されているのをたしかめると、ホッとした。

例のように、いろんな色の軸をした鉛筆がシンを尖らせたまま、そろって寝ていた。彼はその一本を手にとり、まるでつた子自身であるかのように、それに頬ずりし、匂いを嗅ぎ、はては口にくわえて、ほのかなシナの匂いのするその軸に歯型をつけはじめのだった。

彼は鉛筆をくわえたままの奇妙な様子でさうにつた子の机のまわりをうろつくと、彼女がふだん事務所ではいているビニール製のサングラスとか、椅子に敷いている赤い模様のちいさい座ぶとんだとかを眼につけ、それに鼻をつけて犬のようにクンクンと彼女の体臭を嗅ぎまわった。

しばらくあと、彼はそうしたものを、まるで古道具屋のように枕元にならべ、じっと夜具の上にアグラをかけたまま腕組みをして考えこんでいた。

鉛筆や、サングラスや、小さい座ぶとんや、置き忘れたハンケチや、消しゴムや、色とりどりの品物は、まるでつた子の分身のように彼の枕元に整列していた。彼はつた子自身を辱かしめるように、それらの品物を辱かしめていた。しかし、統一を欠いたそれらの雑多な品物の群は、彼の情火を鎮めるかわりに、

いよいよそれをまおりつけ、さいげんもなく物狂わしく掻き立てていった。

彼は、つた子がふだん愛着している鉛筆のトガったシンの先で、彼女を責めさいなんでもやりたかった。桃色、青色、黄色、そして紫色とさまざまな美しい色をしたそれらの鉛筆を四方八方から彼女に突き立て、彼女がのけぞるのを見たかった。なまめかしい兇器で彼女の全身を覆ってやるのだ。そして、針ネズミのようにトゲを生やしたまま彼女がのたちまわるのを、冷然と眺めてやりたい。

日中のあいだ、彼はそうした妄想と冷酒に酔い痴れたままうつつとして時間をすごした。しかし夕方になると、もう恋情と嫉妬のために、居ても立ってもいられなくなっていた。

「そうだ。見舞いに行こう」

と思った。彼女が病気で寝ているのではなくてもなんでもいい。見舞は口実なのだ。それによって彼女の家を訪ねる口実ができる。彼女がもし家にいないようだったら、まず男関係を考えてもいいだろう。そうになったら、そのときのことだ。

昌雄は蘇生したように寢床から起き上り、外出の仕度をする、もうすっかり暗くなっ

た戸外へ出ていった。

途中で果物の籠を買った。贈り物の体裁に包装してもらい、探偵にきいた道順をたどって彼女の家をたずねていった。

やがて、彼は恋しい女のいる家の門に立っていた。恋にやつれた男のように、しばらく戸外に立っていたが、やがて思い切って戸をあけた。つた子はいたのである。寝巻姿のままだった。やっぱりぐあいが悪かったのだ。

昌雄は湯のようなうれしさと、それから恋しさが一時にどっとコミあげてくるのを感じ雇用主としての威厳もわすれ、つた子の姉夫婦に挨拶することばもしどろもどろだった。

6

昌雄はつた子に、日々のきまった俸給のほかに折にふれて小遣いをやったり、いろいろと身のまわりのものを買ってやるようになった。

はじめは拒んだつた子も、結局そうしたものの魅力には抗しがたいように、徐々に昌雄の前で姿勢を崩していった。しかし、肉体はそのままだった。

「これでいいのだ。時期の熟するのを待つのだ」

昌雄は自分にいいきかせた。つた子がひとりで自分のほうへころがってくる、その傾斜の深まるのをじっと待っている、くすぐられるようなたのしさがあった。ちょうどそんな頃である。販売先から手形の不渡りを喰って、彼がどうにもならない立場に追いこまれたのは……。

しかし昌雄の心は、そのときもうキマっていた。とても工場を挽回する力はないのだ。彼は失踪しようと思った。

ひそかに駆けまわって、集金できる範囲は全部集金した。七十万ほどになった。じっさいは二百万にも達する負債を背負っているのだから、それを整理したら彼の手もとには一銭も残らない。それどころか百万以上の赤字なのだ。しかしもうそんなことはかまっていられない。

彼は大口の債権者の一人にひそかに手紙を書き、工場と住宅を売却して負債返却の一部に宛ててもらいたいと頼み、他の債権者にもよろしく頼む、と伝言した。捨値に売っても工場や住宅や在庫品などで八十万くらいはあるだろう。

それを分配されることで、債権者たちはしぶしぶなっとくするにちがいない。

「しょうがないなあ。これっばかしじゃ。しかし本人が雲隠れじゃどうにもなりませんや」そんなことを話し合いながら、

「この工場も、やっぱりダメだったね」そういつて散ってゆく彼らの顔が目に見えるようだった。

昌雄はつた子を自分の部屋に呼んで事情を話し、それから債権者に渡す手紙と白紙委任状と実印を渡した。

「君は一週間ほど事務所に残って、債権者の応待をしてくれよ。それから、これを預っていてくれないか。あとで僕のおちつき先が定ったら知らせるから、そこへ届けてくれ給え。君にもその時、少しはまとまったものをあげる」

そういつて現金を三十万円渡した。彼は別に四十万円ふところに隠している。つた子の腹中に信をおくやり方で、そんなまわりくどいやり方で、つた子と自分とのきずなを残しておいたのだ。一週間たって、おちつき先である熱海の旅館へ、彼女は預けられた三十万を届けにくるだろう。その時、債権者団の動きについての情報も持ってくるだろう。そのときこそチャンスなのだ。あるいは彼女は三十万持ったまま自分を見限るかも知れない。

二つに一つのバクチだった。

「君はあくまで何も知らんことにしているんだ。ただ僕からこの手紙と印をこずかったことにしとけがいい。給料もくれないまま主人がいなくなってしまった。自分は途方にくれているという恰好でいればいいんだ。いいね」

はじめつた子は強いられた共犯者の立場に脅えたような眼の色を見せたが、やがて

「ハイ」

とうなずいた。

「こいつは俺についてくる気だ。すくなくとも熱海まではな。それから先は、またその時だ」

と昌雄は思った。つた子が、にわかに情婦のような身近さで感じられた。

一週間ののち、昌雄は熱海の宿の一室でつた子の来るのを待っていた。つた子にはひそかに通知を出してあり、今日くることになっていた。彼女が来るか来ないか、そして俺の女になるかならないか、今日こそ丁半の壺があけられるのだった。七十万円の現金をつかむために工場をたたんで夜にげという手を打ったのも、思えば彼女のためだった。まじめ

に死身になって経営すれば、工場はまだなんとか回してゆけたかも知れない。しかし情痴の谷間におちこんだ昌雄は、もうつぶれかけた工場を立ておなしてゆく気力がなかった。

「なるようになれ」

と思ったのだ。むしろ、そのためにつた子を得ることができれば自分は救われるのだ。

七十万円のなくならぬうちに、どこか人の知らないところで、新しい出発のいとじちがつかめるかも知れなかった。

昌雄は、寝床の中に入ったまま、つた子のくるのを待っていた。メモを取るために枕元においてあるのは、つた子が使っていた鉛筆の中の一本だった。知らないまに鞆の中に入れて来たと見える。シナの包いを嗅ぎ、昌雄はやがてくるだろうつた子 pensando 情痴にからだが疼いた。

「お客さまです」

と女中が告げに来た。つづいて、もう一人ひそやかに入口に立つ気配。つた子だ。

「やっぱり、来た！」

昌雄は、

「お入り」

といって、つた子の下半身が、畳を踏んで室内に入ってくるのを視線の隅でとらえてい

うら八捕物帖・とも吊りの巻



左次朗・画

た。あの、四畳半ではついに倒すことのできなかったその肉体が、いま、しっかりした現実の重みとあたたかみをもって、彼の寝ている枕元に歩みつつあった。ひそやかに畳を踏むナイロン・ストッキングの足どりもそのままだ。

昌雄は枕元に置いてあった鉛筆を、なんとなくこともなく急いで夜具の中に隠した。そして次の瞬間、彼は自分でも予期しない行動に出ていた。その鉛筆を夜具の中で逆手に持ったまま、グサと自分の太股に刺していたのだ。

血がタラタラと流れ出すなまあったかい感

触が太股を伝わった。鋭い疼きが全身をつらぬいた。それが行動への決断だった。上半身を起し、まだ座りかけたまま中腰でいるつた子を思い切って引きよせた。やわらかい肉体の重味が、なんの抵抗もなく昌雄のからだの上に倒れてきた。昌雄は太股の激痛をむしろ快いものに思いながら、従順な共犯者を、レスラーのように敏捷にそこに組み伏せていた。

債権者側のスパイになった、あの例の探偵がつた子を尾行して来て、その旅館の入口に立っているのを、つた子も昌雄も知らなかった。

絵物語 美肌小姓



絵と文

中嶋新三郎

①恵まれた美貌の僧、蓮生が伝法院の院主となつてからは、女性の参詣が目に見えて多くなつた。結構な伽藍が新築されてからはますます門前市をなす繁盛ぶりに、近所の商家もその余恵で何かとみいりがよくなり、ここ伝法院はわが世の春を謳歌していた。

大小名の御代参や、大奥の女中衆の代参まであるといううわさもあるほどだった。

緋の衣を着た蓮生の美しさは歌舞伎役者も及ばないその美貌と気品に、参詣の女達は魅せられたように、われを忘れて眺めていた。

浮気娘や尻軽女房は、この頃では、猿若町へ芝居見物に行くより、伝法院へお詣りした方がといった騒ぎだ。だがこの美僧の過去は誰も知らないし、その行状すらわからなかった。寺社奉行がそれとなく密偵を放つようになつたのも、女出入りが繁くなり出して、目に余るようになりだしたからだという。

そんな噂が出できたある日、美しい小姓が供の足輕一人を連れて伝法院を訪れた。

境内にいた女達が思わず足を止めて振りかえるほどの美小姓だった。小姓は女達に見られるのを恥じらうようにして静かに本堂の方へ近づいていった。案内を乞うと一人の僧が出てきた。



②「手前は京極家より参上致しました神谷求馬と申する者、法印さまに御取次ぎを……」

「法印さまはお待ちかねでございます」

取次ぎの僧はうやうやしく一礼すると供の足輕を残して本堂の中へ美小姓を案内した。

京極家の御簾中にお世継ぎがないところから、真言秘法の祈禱を試みてはと、今繁盛の伝法院へ使者をたてたのだった。前もってしらせがあったと見えて、中奥の祭壇の前では、蓮生が厳かに護摩を焚いて祈禱をしていた。

美小姓求馬は護摩壇のはるか下座に坐ると本尊不動明王に深々と一礼した。

③やがて祈禱が終って、蓮生は壇からおりて、求馬を省りみると、

「御代参ご苦勞にございます。何卒奥の間にて御休息あそばされますよう」とねんごろに挨拶をした。

「お言葉ありがとう存じますが供の者にことづけをいたしますほどに」

と立上った求馬は本堂の階段下へ降りて、足輕に二言三言小声でささやくと、ゆっくりと蓮生の後へ従った。

美僧と美小姓が連れだった姿は、まるで一幅の綿絵のような美しさだ。





④美小姓に何かいわれた足輕は、本堂を離れると小走りに走って伝法院の山門を潜った。山門の横には一人の乞食が大地に坐って物乞いをしていたが、出合頭の足輕と眼が合ったと思うと、乞食は辺りの様子に眼を配り、「どっこいしょ」と立上った。足輕が歩調を早めて立去る後から乞食はついていった。いや乞食ばかりではない、境内に休んでいた屑屋も鉄砲ざるを肩にすると、足輕の後をつけていった。



附近に居合せた女達は、
「まあーッ」
とため息まじりの嘆声をあげて惚れ惚れと二人を見比べ蓮生に劣らぬ求馬の姿をいつまでも見送っていた。

⑤「あつ、何をなされます……」
求馬は、必死にもがいた。
蓮生の手が伸びたと思うと、いきなり求馬の右手を、ねじあげたからだ。
「離して……」
「ウフフフ。この蓮生の眼をごまかそうとは肝の太い女よ。小姓に化けて伝法院を探りにきたか」
激しく抵抗する美小姓を、蓮生は小脇に抱えこみ、奥の間へ連れこむと、荒々しく縛りあげた。

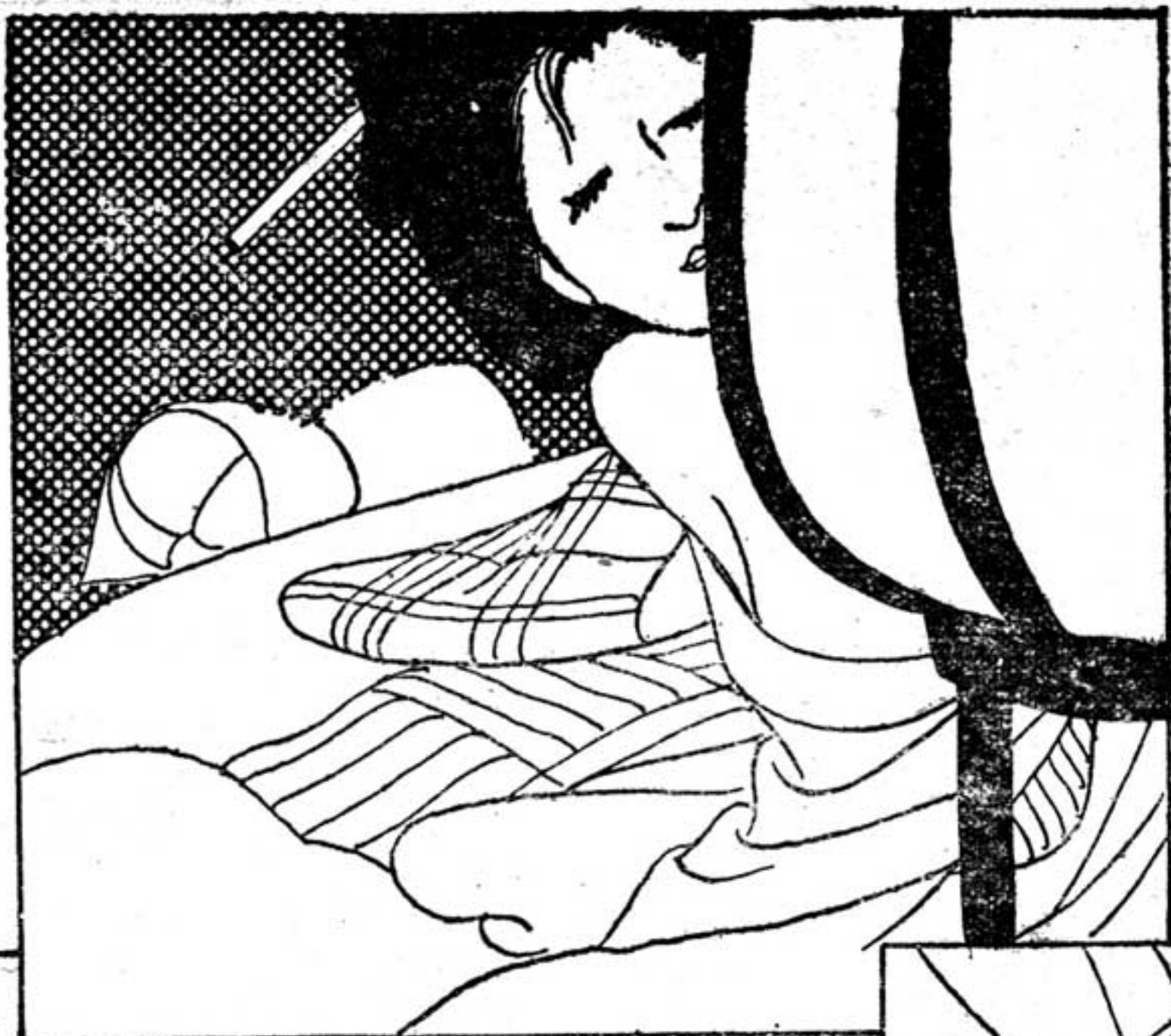


⑥無残にも半身を剥かれた求馬は後手に縛られて座敷の中に転がっていた。美小姓が女性であったあかしの胸のふくらみが、荒縄の間から息づいている。
「伝法院はこの世の極楽よ、お主も今にたんと極楽浄土で遊ばせてやるわ」といい残して蓮生はこの室を立去った。

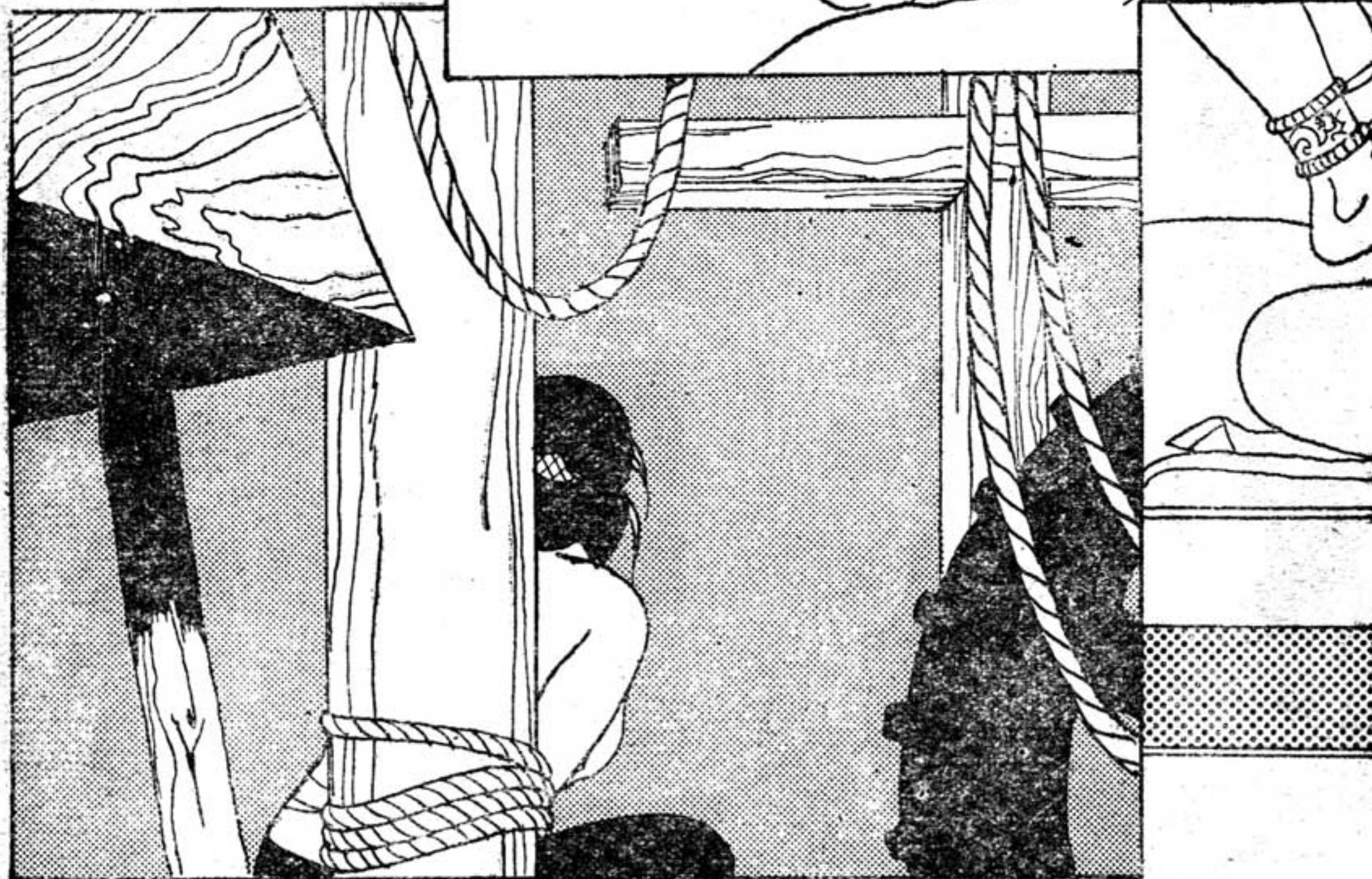


⑦腰の大小も、袴も取り去られ乱れた裾前を気にしながら求馬はそっとあたりの様子を探った「あっ」
思わず眼を見張った。三方壁のこの室は、歓喜天の曼荼羅図絵が描かれていた。

美小姓の眼がその一つ一つを追った。白象の歓喜天の顔、周囲に描かれた奇怪な動物と人間の姿に、求馬は呆然とした。その時かすかに女の含み笑いが聞こえた。みだらなその笑い声に求馬は壁ぎわに近かった。



⑧曼荼羅の一個所に、隣室からもれる灯が見えた。美小姓はその穴から覗くと、御殿女中風の女が若衆姿の男と戯れていた。
酔い痴れた女のなまめかしい声が一際高く小姓の耳に……。はっと眼を壁から離した求馬の前に蓮生の姿があった。



⑨「女狐、何者に頼まれてきたか白状せねば痛い目にあわせるぞ」

地下室の奥に求馬を引きずって来た蓮生は、そこにあるいろいろな責め道具を見せた。年増女の裸姿が柱に縛られている。

「あの女も伝法院の秘密を探りにきた町方のイヌだ。可哀そうだが近いうちに異国船で安南カルソン送りが身の果てさ」

蓮生は鞭を手にした。
ビュンノ
ビュンノ
と鞭がうなる。



⑩ビシッ、と鞭が美小姓の背中にあたると一回転した体から帯がぼらりと下の板間に落ちた。一言も声を発しない美小姓の体は蓮生の手で、天井から宙吊りにされて容赦なく革鞭がその体に加えられていた。

剥き出しにされた、両肩、胸に、ぎりぎり縛りあげた荒縄が強く食込んで……男髷の元結いが切れて顔にたれ下った求馬の顔は妖しい魅力があった。「地獄の苦しみが続いた後は、ゆっくりと極楽浄土の味を教えてやるぜ」と縄を強く引いた。



⑪「ひーッ」
美小姓もついに声をあげた。

宙吊りにされた縄を、蓮生が力強く引いた瞬間に美小姓の手元から、ぶつつりと切れて、あっというまに体は床の上に落下した。

床の上でぐったりと美小姓は気を失ったらしい。



⑫「おい蓮生、どうやら身边が
やばくなってきたらしい。手は
ずは終わったから今夜あたり女共
を品川沖へ運ぶとしようぜ」
一癖ありそうな浪人が蓮生に
話しかけた。

「そうよな、どうやら寺社奉行
が嗅ぎつけた様子、長崎無宿の
お役者小僧もこの辺で江戸をお
さらばする潮時かも知れねえ、
だが俺はあの女狐をものにして
えせ、ちょっと手に入る代物じ
やねえからな」
「冗談じゃねえ、この期に及ん
で色気は禁物だ。異国船に売り
込むには持ってこいの上玉、ぐ
ずぐずしちゃいられねえ、大奥
の女から町娘まで、さんざ好き
な真似をした手前だ、早いとこ
ずらかった方が勝だぜ」
それに返事もしない蓮生は立
上ると隣室の戸を開けた」



⑬「しまった……」

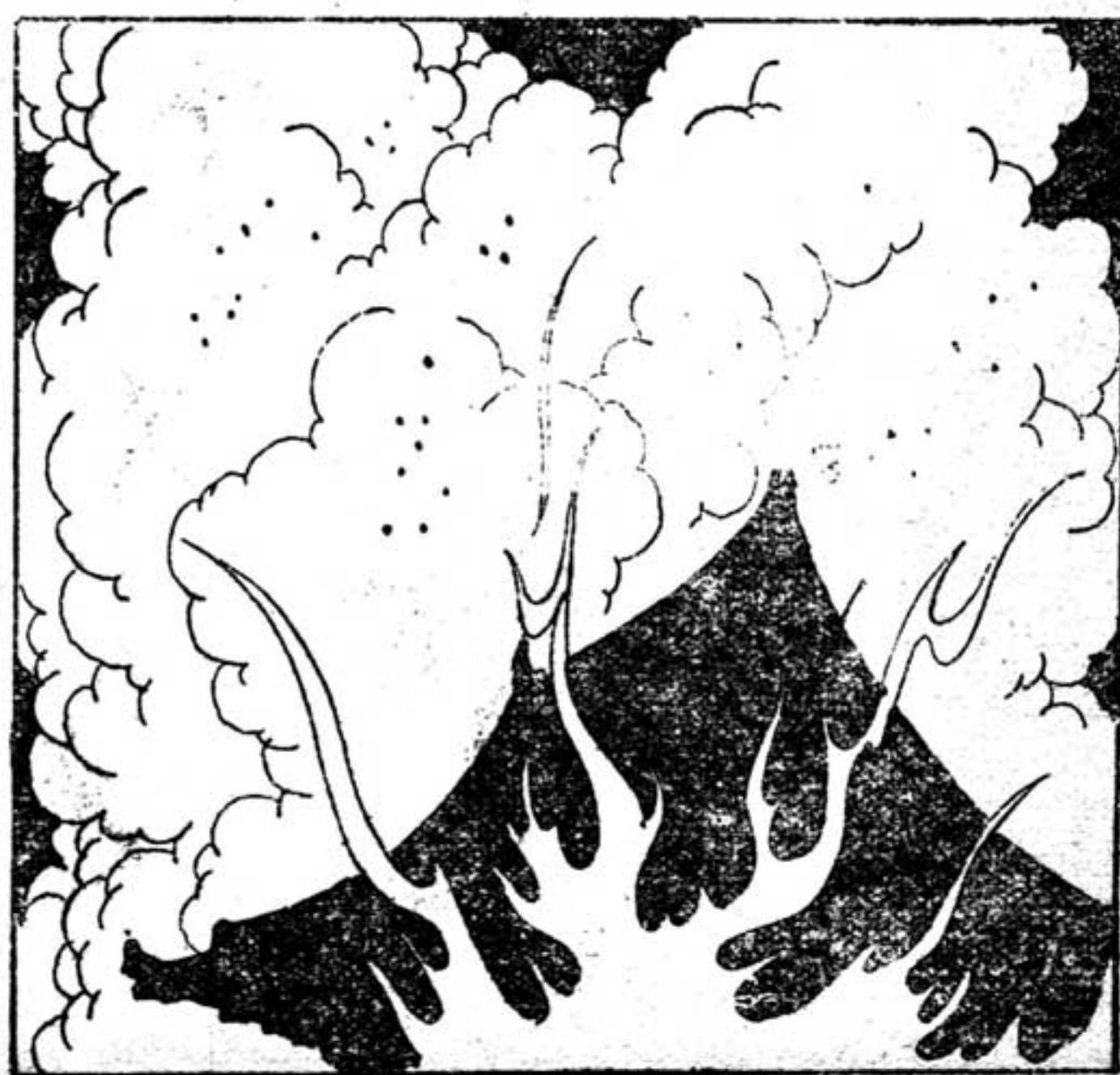
「どうした」

「女狐に逃げられた……」

蓮生をはじめ伝法院の連中はただちに庭へ、境内へと美小姓の行方を探した——美小姓の求馬は木馬で失神したと見せかけ、蓮生の寝室へ運びこまれてから、隣室の話しを聞き姿を消したが、裸身では遠くへ逃げられなかった。境門の大木の上へ昇って伝法院の連中を眺めていた。

その伝法院をひしひしと取巻く御用提灯の灯りが美小姓の眼にはいった。

「あっ、火事……」



⑭美小姓が木の上で叫んだ。

お役者小僧の蓮生が、求馬の逃走で手の廻ったことを知って伽藍に火を放ったのだ。

女達を乗せた舟は大川へ出ると網を張っていた町方の手に捕えられた。

伝法院を根拠にして大芝居を打った蓮生はみずから放った火の中で焼死した。

美小姓の求馬は、寺社奉行の放った間者で名を美鈴という、供人の足軽、乞食も、すべて寺社奉行の手のものだった。



怨讐二人小町

もえるような怨みをこめた刃先
をかわされて琴路はあえいだ!

久我風太郎

栗原伸・画

(一) 琴路の懐剣

禄高三十二万石、藤堂和泉守高献の上屋敷の南側の廊下を、朱塗の膳部を持ったひとりの美しい腰元が、静かな衣ずれの音をさせて歩く。

彼女は、新参召抱えになったばかりで、名を琴路といった。髪を高島田に結って、濃紫地の矢絣の袷、黒縹子の帯を立てやの字にむすんだ姿は、彼女が美しい長身であるだけに、いっそう華麗であった。

琴路は居間の立障子を静かに開けて、あでやかに裾をさばきながら内側にはいると、正面に向って平伏した。

和泉守は、ものやわらかい口調で、書見をしていたが、むせかえるような物音で我にかえると、そっと琴路の美しい姿をとらえた。

「お食事を持参いたしました」

「これへ」

和泉守は書見台を自分のかたわらにのけてわずかに身をひらいた。

「そちは新顔じゃな」

和泉守は、眼を細めて重い口を開いた。

「はい。昨日おめみえにありがとうございました。琴路と申す不つか者でござりまする」

琴路は三尺をへだてたところに座って、かなふるえを覚えながら、給仕の仕度をした。

「うむ、なかなかの美形じゃのう」

和泉守は、琴路の白い襟足を一瞥しながら満足そうな顔で碗を受けた。

短い時間がたって、再び碗を差出すとき、和泉守のたくましい腕が、あつという間もなく琴路の長い袂をとらえていた。

「あれ、なにを遊ばします。おたわむれはおやめくださりませ」

琴路は顔を蒼白にして、うしろにとびさがつた。わずかではあるが裾が乱れる。

「今宵は、余の夜伽をいたせ」

和泉守は両手を大きくひろげて、可憐な琴路を捕えようとする。重い口から不気味な笑いがもれる。琴路は必死で和泉守の脇下をかくぐって、部屋の外にのがれたが、それも

一瞬にすぎなかった。彼女はやにわに羽交締めにされた。

「あれーっ、お許しくださいませっ」

背後から乳房のあたりを強く押さえ込まれて、再び部屋の中にひきずりこまれていた。

そのとき、和泉守は本能的に身をひらいた。琴路の手にいつのまにか懐剣が光っていたからである。

「な、なにをするっ」

和泉守は、白い切先をさけながら叱咤した。

「父の仇っ、和泉守、覚悟しやっ」

琴路の声が、するどくひびいた。

和泉守は意外だという顔で

「余に覚えはないっ」と叫んだ。

殿様は膳部を蹴り、御簾の内側に逃げる。

腰元は大きく裾前を割りながら追う。ふたりは青畳の上でもつれたり転がったりした。

琴路は、もはや女としての力の限界を越えていた。燃えるような恨みのこもった切先もにぶりがちになった。

和泉守は、それを知ると、じわじわと攻勢に転じてきた。最後の力をふりしほって、体当りの戦法できた琴路の切先を、ひょいとかわした彼は、そのきき腕をとらえた。

「あっ」と叫ぶ間もなく、懐剣は畳の上に転

がった。

ふたりは、その場にもつれながら、なげだされた短剣をうばいあった。

琴路の矢絰の裾が、白い太もものところまでまくれあがって、燃えたつ火の海のような真赤な長襦袢がさらけでる。

和泉守は、琴路の肩口を押さえて、ひきさえようとするが、呼吸が乱れているので、思うようにはいかない。

あせっているうちに、琴路に跳ね返えされて、ぶざまにも後にのけぞった。

彼女はそのすきに、飛鳥の如く廊下に走り出た。

「おのれっ」

和泉守は、烈火の表情で追いながら叫んだ。

「誰かあるっ、狼藉者じゃっ、出合え、出合えっ」

琴路は、いくつにも曲折した細長い廊下を走っていた。

灯の消えた部屋の前を通り抜け、暗黒の庭先を右に感じながら、裾の乱れもかまわずに必死でのがれようとしていた。背後には、和泉守の怒気をふくんだ声が迫ってくる。

そのとき、琴路の前方に、それとなく察知した腰元共の黒い形が、彼女にむかって、あ

わただしく殺到してきた。

(二) くすぐる女

寒月が雲にさえぎられて、表局の障子に投じていた庭の木の葉の影が消えた。

ここは、老女荻野の寝所である。彼女は夜具布団の上にながながとねそべりながら、眼前で行われようとしている腰元の仕置を眺めていた。

はかなくも捕えられた、琴路に対する報復の手段が、どんなかたちで行われるのか。

荻野は、薄笑いさえうかべている。

琴路は、高手小手に縛り上げられていた。

嚴重に猿轡までかまされている。

お仕置は、奥の自治に従って秘密裡に行われる。だから声をだされて騒がれてはまずいのだ。

ふたりの腰元が、琴路の背後に座っていた。主命があれば、いつでも責めにかかれる心の準備をととのえている。

琴路の高島田は、根本からがっくりと落ちて、髪が乱れ、白い頬にばらりと下って、見るからに凄絶であった。

「まず、くすぐり責めがよからう」と荻野がいった。

男のような太い低音である。彼女は、背後に控えているふたりの腰元に、眼くばせをした。

腰元達は、心得顔で琴路の傍に寄ると、赤い長襦袢の袖口が、なまめかしく隠見する袂をたくしあげるようにして、琴路の身体に手をかけた。

「う、ううふふ」

ふたりの腰元の手が動きだすと、琴路はこらえきれないように、身を怪しくくねらせた。

「手心をくわえずに、存分にくすぐりや」

荻野の声で、ふたりの腰元の白い手が、琴路の身体をとことろきらわす動きはじめた。

「うう、うふふ、ううふふ」

琴路は、身をのけぞらせてもがいた。

眼が充血していく。猿轡を通して、よだれをたらす。胸元がひらき、裾が乱れて、真赤な腰巻がからまった雪のように白い脛や太ももまでがあらわになった。

彼女は、羞恥心を全然感じていなかった。

否、感じる余裕がなかったからである。

やがて琴路は意識を失った。

琴路が動かなくなると、ふたりの腰元は青ざめた顔を互に見合せて、手を引いた。

「ふん、他愛もない」

荻野はそれを見て舌打ちをした。彼女は床の上に起きなおると、胸元をかきあわせながら立った。

「そち達にまかせる。煮ようと焼こうと勝手だが、必ず白状させるのだぞえ」

腰元達は、その場に平伏した。

「ここではまずい。そち達の部屋に運んで、充分に仕置をせい」

荻野は、そういいすてると、裾をさばいて荒々しく部屋を出て行った。

「お京さま、いかがいたしたものでござりましょうなあ」

頬から顎にかけて、薄い痘痕のある腰元が当惑したような顔でいった。

「ご老女さまは、あのようなきついことを仰せられましたか」

「仕方がござりませぬ。お気の毒な琴路殿ではありますが、恐れおおくもお殿様に対して刃をむけたとあっては、その罪軽からず、事柄の次第によっては、死罪をもまぬがれぬお身の上、この場合の同情は禁物でござりまする」

とお京とよばれた色白の腰元がいった。

「と申されて、こうしてお気を失われていられる琴路さまを、これ以上お責めになるのは」

なんとしてもむごいことにござりまする」

薄痘痕の女は、顔に似合わず優しい心根をもっているらしく、琴路に対してしきりに憐愍の情をわきたたせている。

「これ、お縫殿、めったなことを口走ってはなりません。そのようなことが、もしもご老女さまのお耳にでも達しようものなら、それこそ大変なことになりましょう。そなたも同罪として重き仕置のあることは必定、痛い目をみなければなりませんぞ」

お京は意地が悪そうに口もとをゆがめた。

「それとも、ご老女さまのご命令にそむかれるおつもりか。それならそれでもよい。琴路殿のお仕置は、妾ひとりで行しましょう。そなたはさがってよろしいぞえ」

「お京さま、そんなつもりで申上げたわけではござりませぬ。いたします。いたします。琴路さまのお仕置をいたします。どうぞ、くちさがなく申上げたただいまのことはご内聞にねがい上げまする」

お縫は顔を蒼白にしていた。平素、腰元達に対して、微罪すら容赦もなく、ちようちやくする老女の荻野に対して、すくなからず反感を抱いていた彼女が、つい不満の端を口にのぼらせたばかりに、先輩のお京に痛くた

しなめられた。

彼女は、同僚の気安さから、ついお京に口をすべらせてしまったが、どうやらお京は、荻野の腹心であることに気がついて、蒼くなつたのであろう。

「それでは、ただいまのことは、妾の胸のうちまでに、とどめておくことにいたします。今後もあることです、くれぐれもお言葉に注意なされますように……」

「あい」

「さあ、お縫殿、一刻も早く琴路殿を妾達の部屋に運びましょう。こうしているうちにもいつご老女さまのおもどりがあるかも知れませぬ」

ふたりは、失神している琴路に手をのばした。

くすぐり責めのために、胸もとがはだけて白い乳房をあられもなくだしている琴路の脇の下をお京が抱えると、裾が乱れて燃えるような真赤な腰巻がまといつた白い脛をお縫が抱えた。

女とはいえ、弾力のないぐったりとした琴路は、案外に重かった。

ふたりの腰元は、長い裳裾をひきずりながら、よろよろと歩きはじめた。

(三) 碁 敵

寒月が再びくつきりとうかびあがっている。

老女荻野の長い影が廊下に落ちた。そのころ彼女は庭先から内所にまわっていた。

和泉守の寝所の側近くくると、足音を急に忍びやかにした。

「お殿様」

障子にむかつて膝をついた。

「荻野か」

「はい」

権力者の前では、さすがの荻野も女らしい可憐な声をだす。彼女は、媚態をつくりながら障子を開いた。

和泉守は、枕屏風のかげで伏っていた。

「近う参れ」

荻野はかすかに衣ずれの音をさせて、分厚い夜具布団の側近く寄った。

「琴路めはいかがいたした」

「それにつきまして、あらゆる責めの手段をこうしましたが、なかなかもって強情な女郎にて、いまだに白状いたしません」

責めの好きな殿様故に、てぬるい報告をしては、どんなお叱りを頂戴しないとも限らな



いので、狡猾な老女は、それとなく当りさわりのないことをいった。
「ただいま、腰元共にきついお仕置を命じておきましたこと故、間もなく白状いたすことでござりましょう。どうぞ、お心おきなくお休み遊ばしますように——」

「もうよい。琴路が白状いたさずとも、余を仇よばわりした訳が相わかった」
和泉守は、静かな口調でいった。
老女は驚いたような表情で、
「それはまた、いかなる理由にござりましようや」とききただした。

「そちも存じていよう、以前、余の近習役をつとめていた富田正吾という男を」

荻野はそつとうなずいた。

「碁敵はにくさみにくし……正吾は余に対して一手も待たず強情をはりおった。おまけに余を卑怯呼ばわりをした。そのとき、腹を立てた余がいきなり手打にいたしてくれたが、今思えば、ふびんなことをいたしたと悔まれる」

和泉守は、ありし日の富田正吾を惱裡にえがくかのように目を閉じた。

―春宵一刻、いつものように御前に罷りでた富田正吾は、碁のお相手をしていた。

碁盤の形勢は五分と五分、定石どおり、隅から打始められた石は、上辺の優位をお互に占めようと争っていた。

額の広い眉の濃いきかぬ気性の和泉守は、傍の脇息にもたれながら、相手の黒の出方を待っていた。

お互が、しわぶきひとつしなない緊張した雰囲気包まれていた。

やや間があつて、正吾の女のように華奢な指先がかなふるえを感じさせながら、前方に動きはじめた。

和泉守は、正吾の石が、自分の最大の弱点と目される箇所に接触しつつあるのを、恐れていた。やや実力がうわまる正吾が、そこを見逃がすはしないことを知っていたが、主従の間柄ということもあり、そこは遠慮するものと、たかをくくっていた。が、正吾の一手は、そういう甘い考えの和泉守の鼻面をびしやりと押さえるように、絶対有利な形態を構成してしまつたのである。

和泉守は、さつと顔色を変えた。

「正吾、その一手は待て」

「なに故、おとどめなされます」

きめの細かい女のような肌をもつた近習役が、意外だという顔つきをした。

「うむ、この方の都合が悪いから、ちょっと待て」

和泉守は、苦しうにいった。

「これはお殿様のお言葉とも思えませぬ。この一手を見逃したら、形勢はたちまちにして逆転となり、手前の不利はあきらかでごさりまする。いつものようなわけにはいきませぬ、さあ、はやくおやり遊ばせ」

「そう意地のわるいことを申すな。全部をのけると申すのではない、たった一手じゃ、そのほんの一手だけじゃ」

「なりませぬ。絶対になりませぬ」

いわゆる殿様碁というものがあつて、近習役が次々とまかりでて、殿のごきげんを損じないように、ていといい負け方をする。

芯のある武士にとっては、苦々しきことであつた。

和泉守の碁は、専門家からみれば、定石や手筋の研究が不足で、所詮、田舎碁の域をでなかつたであらう。

「なに、どうしてもならぬとな」

和泉守は、広い額に青筋をたてて、相手をぐつと睨みつけたが、正吾は平然と横を向いていた。

「ううむ、憎い奴めがつ」

とうなるようにいつたかと思うと、いきなり盤の端に手をかけてひっくりかえしてしまつた。

石は青畳に四散した。

あつと驚く正吾を、不興げに凝視した彼は「強情者めつ」

と一喝して立ちあがつていた。

「強情者とは、異なことを仰せられます。殿の配置の石が不利な形態をつくつたのは、所詮、未熟なるお腕前のあらわれと存じ上げます。男らしく堂々と攻防をおやりあそばさ

れぬ殿の方こそ、卑怯なおふるまいと存じ上げまする」

と身をのりだした正吾が、なんの恐れもなく申上げたから和泉守は烈火の如く憤った。

「おのれつ、余を卑怯者呼ばわりしたなつ」

と叫んだかと思うと、悪鬼の形相で、背後にうやうやしく控えた小姓のもつ刀の抜く手もみせず、ただ一刀のもとに正吾をその場に斬り伏せた――。

「それでは、あの琴路は、富田殿の娘と申されますか」

「いかにもそうじゃ、あの美しい顔は親父に生写しじゃ」

「お殿様、それならなおのこと、生かしておいては面倒でござります。まわりの者が気づかぬうち一刻も早くご成敗を――」

荻野は膝をすすめていった。

(四) 無惨姉妹

宿直の腰元をのぞいて、この部屋に集つた連中は、誰からの束縛も圧迫も受けることはない。それだけに、めいめいが思い思いのんびりと昼間の窮屈な思いをいやすことができる。

固苦しく座りずくめの膝を崩している者、
不作法に白い脛を畳になげだしている者、豊
かな胸を開いてくつろいでいる者、おさがり
のお菓子をつまんでいる者等々、さまざま
姿態を同性同僚の気安さから臆面もなくさら
けだしている。

そうしたなかに、醜悪と嫉妬と嗜虐とをお
りませた、怪しげな雰囲気をかもしだしてい
る一部があった。

腰元八重は、部屋の隅においてある黒塗の
小机に向って、さっきから国表に宛てた書面
を認めていた。いや認めているようなそぶり
をみせているだけである。

彼女は、皆からひとり離れたところにいた
が、同僚達の異様なまでの騒ぎに対して、全
然無関心を装っていた。が、機会をみて、い
つでも決死の行動をとるつもりであった。

今や、騒ぎは最高頂に達している。

(腰元共の残酷な仕打——)

八重は眼を閉じた。胸に手を当てて、肉親
の苦しみをわかち合うように、ひそかに祈っ
た。

「ひいーっ」

琴路の断末魔のようなきわどい悲鳴が、八
重の耳朶をうった。

彼女はハツとして、
胸のあたりをかきむし
る。

(お姉さま! さぞか
しご無念のことでごさ
りましょう)

「ああー、ひいーっ」
不気味な鞭の音と共
に、またしても琴路の
悲痛なうめき声が、八
重の胸をはげしく打つ。
彼女は、決意したよ
うに筆をなげだして立
ちあがった。

裾をさばくと、仕置
場に向って、せかせか
と歩く。

部屋のあちこちで身
体を休めていた腰元が
驚いたように顔をあげ
た。

八重は、そんな同僚
のざわめきも意にかい
さぬように、おもしろ
そうにヤジ馬根性をあ



らわしている連中のなかに割ってはいった。

そして、同僚達の姉に対する残忍な行為の仕打をみているうちに、胸のいきどおりを押さえることができなくなった。

八重は蒼白な顔でつかつかと前にでた。今しも罪人を打ちすえようと弓の折れをかまえた女が、眼の前に現われた腰元を不思議そうにみつめた。が、すぐに氣をとりなおして罪人をちようちやくしようとして弓をふりあげたとき、八重の白い手がその女丈夫の腰元の袖をとらえた。

「なにしやるっ」

顔の浅黒いその腰元は、眼をむいた。

「しばらくしばらくお待ちくださりませ」

八重は、その場に膝まずいて、執行の腰元に哀願のまなざしを向けた。

「そなたは八重殿ではないか、何故におとどめなさる」

が、彼女はそれには答えず、琴路の痛々しい姿をみつめた。

それは、あまりにも変り果てた姿であった。赤い腰巻一枚の半裸体にされて、細びきで上から吊されている。髪は乱れ、顔色は土気色になっている。丸い乳房をむきだしにしたまま、ほとんど息が通っていないもののように

微動すらしなかった。

八重は、姉にすがりついておもいきり泣き叫びたい衝動にかられた。

「これ、八重殿、いかがなされました」

執行人が不服そうにいった。

「どうぞ、もうそのくらいで、お許しなされてくださりませ」

「なんといやる」

「罪人とは申せ、すでに失神している者を、さほどまでに……」

八重は美しい眼に涙をためて、必死にいった。

「これ、八重殿、そなたは気が狂うたか。お殿様に刃を向けた大罪人の琴路を、成敗の生命を受けるは当然のこと、お身は、罪人に味方する気かいのう」

大柄な腰元は、弓の鞭に空振りをくれながらいった。

「はい」

八重は、下唇を噛みしめてうなだれる。

「どうじゃ、それともお身が身代りにでもなつて、この罰をみごとにお受けなされるおつもりか」

そのとき、裾を引きながら、男のように腕組みをして立っていた、細面の眼の吊り上つ

た腰元が、いきなり真赤な長襦袢をあられもなく蹴出して、八重のふっくらとした肩口を蹴った。

「あっ」

という間もなかった。彼女はぶざまな恰好で前につんのめった。そのさまを見ていた心ない連中が、あざけるようにどっと声を立てて笑った。

「なにをしやるっ」

八重の胸は爆発した。裾をふんまえて立ちあがると、すばやく胸の懐剣を抜き放った。

「きゃあっ」

大勢の者は、花びらのように散った。

「狼籍者っ、なにをしやるっ」

弓の折れをかなぐり捨て、これもすばやく抜き放った懐剣で立ち向ってきた執行人と、二三合わたりあう。

他の腰元共も、めいめいに懐剣をひらめかせながら、口々に、

「狼籍者じゃっ、乱心者でござりまするっ」と叫びまわった。

八重はとびあがるようにして、琴路の縛り綱を切った。どしんと音をたてて、畳の上に転がり落ちる。

「お姉さま、お姉さまあ」

彼女は姉にすがりついた。

琴路は落されたときの衝動で、かすかではあるが、息を吹き返したようである。

妹の腕に抱かれて、わずかに眼を開く。

「お姉さま、しっかり、しっかりなされませう」

「や、八重殿か——」

と琴路はもらしたが、それが最後になった。

「お姉さまーあつ」

八重は、背後に迫っていた剣を、身をひらいて避けたつもりであったが、したたかに突かれた。

脇腹のあたりに疼痛を感じる。その痛みがだんだんはげしくなるようだ。

彼女はよろよると起きあがった。その瞬間に突きかかってきたひとりの腰元の、のびきった腕を脇腹に掻い込んだ。

相手の重心が、きずついた身体にかかってくる。

こらえきれずに前に押しやると、みずからもはずみで膝を折って崩れた。

あわてて起きあがるところを、別の刃が背筋のあたりにささった。

八重の身体から鮮血が吹きだしてくる。

さっと変る八重の顔。

いったんは倒れたが、最後の力をふりしぼって起き直ったときの形相は、凄絶きわまりなかった。

腰元共は、思わず顔をそむけて、遠まきにする。

「皆の者、控えいっ」

そのとき、廊下にするどい声がかかった。はげしく障子を開いて姿を現わしたのは、当主の和泉守と老女の荻野であった。

腰元共はうろたえて、その場に平伏した。

「うつけ者めっ、何事であるぞっ」

和泉守は大喝した。

ずかずかと部屋にはいってくると、八重のほうをじろりとらみつけた。

「おのれ——和泉守っ——」

乱れた髪が白い顔にばらりとかかる。それをうるさそうにはらいのけた八重は、自分を見下しているはやけた仇の顔をはったとらんだ。

が、その眼は、すでにうつろであった。

和泉守の八重を見る眼が、すこしやわらいできた。

瀕死の状態にある者に対する憐みの念が、わきあがってきたのであろう。

（よく似ておる。姉妹で、余を狙っていたの

か。そのにつくき仇を眼の前に討ちもらしてさぞ無念であろう）

そう思うと、和泉守は姉妹がふびんでたまらなくなった。

八重は、すでにこと切れた姉にすがりつこうと、見えぬ眼をかつと見開いて、自分の周囲を手探ぐりしている。

「荻野、ふびんなやつじゃ、そのほう、手を貸してやれい——」

いわれて荻野は八重に近づいた。

「おねえーおねえさまー」

荻野にすがりつこうとする八重の手をやさしくとって、琴路の冷めたい身体にふれさせた。

見えぬ眼に涙をためて、姉の死体にすがりつく哀れな八重のふるまいを見ていた腰元共は、いったんは彼女に刃を向けた連中まで、思わず声を立てて泣き伏した。

和泉守は、八重が満足そうな顔をして息を引取ったとき、かたわらの荻野に、

「手厚く葬ってつかわせ——」

といい残して、その場を立去った。

大奥闘花図絵

中林節三

木原三樹・画

★清麗俠艶花と競う美女を擁して女達の暗闘は果てることなく続くのだ！

お伝の方

お伝は、館林城の奥向へ勤めるようになった。まだお伝は、十二になったばかりであった。

何分、軽輩の娘であるから、まずお湯殿の係にまわされた。

お伝の父は「黒鍛者」と呼ばれている城内の掃除に当る軽輩だった。

月日がたつ。

その月日は、生来の美貌を奥女中の中に加えたことと相まっていいよ磨いていった。肢体はようやく成長していくにつれて、女人の魅力が日毎夜毎、この娘の上に加えられていくのであった。

館林城の若い主、綱吉が、お湯殿にあらわれるたびに、お伝は、ひそかな望みが今宵は達せられるかと、小さな胸をときめかしたが、多感な純情的なものに憧れていた綱吉は、そのたびに、美少女のほのかな色香をそれと氣にとめたままで、日が過ぎていった。

美貌に絶対の自信があったお伝は、その過ぎて行く日が、無為に流れていくようにようやく焦躁して来た。奥女中のだれもが、なんとか綱吉に、お手をつけられようと考えているのである。

(そうだ！)

お伝は、ある日、思うことがあった。

その日、綱吉は、お湯殿に裸体を運んで、あっと目を見張った。

いつもそれとなく愉しみにしていた係りの女中が、今宵は自分の世話にかしずいていないのに軽い失望を覚えていた、その娘が、お湯殿の隅にころがって、じっとその綱吉を見上げていたのだった。

美少女は、後手にしぼり上げられていた。そんな恰好にされているせいか、美少女の綱吉を見上げる目は、熱情的にキラキラと輝いていた。

綱吉は、無言で、しばらくしている美少女に近づこうとした。

美少女は、それを拒むように逃げた。

「そちは……！」

綱吉は、呻くように声を出した。

その夜、美少女は、綱吉に添寝して、恥し



げに美しい肢体を、綱吉の目には悩ましくくねらせたのだった。以来、綱吉はこの美女に一通りならぬ愛撫をそそぎ、一寸も側をはなさぬというほど熱愛したのだ。

お伝は、思いを遂げた。そして、それは、はじめ父の小谷権兵衛が起した野心より、何層倍何百倍のうれしさであった。館林城主綱吉は、その時、すでに五代將軍を約束せられていたのであった。

將軍付の中臈、お伝の方の誕生であった。そしてお伝の方こそ、大奥幾千の女人の中において、しかも綱吉の寵を受けた数多の美女の中において、誰よりも特別の深い寵愛を受

けたのだった。

彼女は、始終、將軍綱吉の傍にあって、彼が熱中する能楽や読書の様子を見、またすこしずつ將軍自身手ほどきしてくれるそれらのものに対して趣味を解した。元来聡明な質であるだけに、その要領を会得するのが速く、それだけでもいよいよ綱吉の心にかなうのであった。

それに、彼女は、小鼓を打つのがとりわけ上手になり、綱吉が唄う時には、いつも彼女が鼓を打ってお相手をした。

延宝五年、彼女は鶴姫を生み、越えて七年徳松丸を生み、その美しさは年を重ねることに加わりいよいよその優婉な姿態が綱吉の心をとらえてはなさず、綱吉の生母桂昌院にも、御台所にも、へりくだった態度を取ったので彼女等にも愛せられ、その地位と勢力とは抜くべからざるところまで確立した。そして、綱吉が五代將軍となつて江戸城に入ってから、お伝の方は大奥一切の事務の支配を命ぜられ、事実上綱吉の正夫人のようになり、彼女のいうことはなん

大奥後宮秘史・特集

でも將軍のいれるところにまでなったのだった。それに、黒鍛者であった小谷権兵衛は、一挙にして三千石の旗本に取立てられ、武士的教養もなかったのかかわらず、老中首座堀田正俊の弟分になり、名も堀田將監と改めて、神田小川町の御用屋敷まで賜った。

お伝の方の生んだ鶴姫は、貞享二年二月、九才をもって紀州家へ入興した。その前、紀州徳川家は、綱吉の感情を傷つけていたから家臣が何とかしてその感情をやわらげたいと思いついて、幼嗣綱教へお伝の方の生んだ鶴姫の御婚約を願って許されていたのだった。

お伝の方は、日頃、「鶴姫は黒鍛者の生んだ姫ではないか」と軽侮の蔭口をきく者があつたから、彼女を喜ばせるに充分であつた。だが、天和三年五月、世子徳松丸が五才をもつて夭折すると、お伝の方は悲嘆の泪にかきくれたのであつた。悲しみのあまり床についてお伝の方に、綱吉も鬱々として樂しまず、事毎に喜怒哀樂が常規を逸するほどになり、將軍のお伝の方御寵愛の度は、お伝の方の床に伏すとともにいよいよ増していったのだ。やがて、お伝の方は本復した。

そうになると、お伝の方の大奥における勢力

は素晴らしいものであつた。彼女の爛熟した婉美な色香には、將軍の心も蕩ろけた。老中諸有司、諸大名とて、お伝の方の怒りを買ったが最後、その運命は、風前の灯と覺悟せねばならなかつた。そこで彼女の御氣嫌を取結ぶために、彼等は肝胆を砕かねばならなかつた。

そうになると、ここに哀れをとどめたのは、綱吉の御台所であつた。御台所は鷹司関白の娘で、国母陛下の妹であつたが、綱吉の愛はひたすらお伝の方に傾注されているので、彼女は本丸にありながら全く淋しい生活をつづけていた。形式的に御台所として尊重されるとはいへ、正夫人としての勢力はない。愛妾お伝の方が事実上正夫人の地位を占めているのだ。たまたま綱吉が御台所の許へお成りになつたとしても、通りいっぺんのお成りに過ぎない。定まつた閨中の伴侶はお伝の方であつた。

このように名ばかりの夫婦生活の下に置かれてあつた御台所ではあつたが、彼女は一度も嫉妬がましい言動はしたことがなかつた。けれど、彼女をめぐる侍女たちは、さすがにそれを見かねていた。れっきとした夫人でありながら、絶えて久しい孤閨を守り淋しさを

こらえている彼女の心を思いやつて、女同志だけが知る厚い同情を禁じ得なかつた。それと同時に、ときめくお伝の方の勢力と仕合せが嫉妬されて、何らかの方法で、お伝の方の君寵をうすくしてやらなければ、彼女達には我慢ができないような焦慮を覺えていった。

ここに、御台所付の上臈に万里小路の局というのがあつた。この女は、お伝の方の君寵を奪うためには、優れた麗人を物色して、その恋愛闘争に打ち勝つ外に道はないと考えた。万里小路の局は、そこで、御台所の御連枝なる国母、新上西門院殿へ、事の由を申し上げ、絶世の美女を京都からお遣わしになるようにとお願いした。

この、お伝の方への君寵を一挙に取り戻すべく、御台所側の待ちに待った代表選手に、御所に仕える常盤井の局がえらばれた。彼女は、つとに才学と美貌と高い氣品をもつて、抜群の名を知られていた水無瀬中納言の娘であつた。俠艶なるお伝の方に対峙させるに、彼女には清麗な容姿と、文芸的教養とがあつた。間もなく常盤井の局は江戸に下向した。

紅梅・白梅

「いかがでございます」

大奥後宮秘史・特集

万里小路の局は、京都から下向した常盤井の局の挨拶が済むと、御台所に微笑しながら小声で聞いた。

つつしみ深い御台所は、それには無言で微笑をもって答えた。

万里小路の局は、得意であった。

お伝の方も、たしかに抜群の美人であった。元禄時代を象徴する俠艶なる江戸の女性美の権化であり、江戸女の気質を代表する女性であった。紅梅の最も見ごろに咲き匂う俠艶な美しさであった。

それにくらべて、常盤井の局は京都における貴族階級の理想とする清麗な美人の典型であり、雲上女人の気質を代表して、才学と典雅なる趣味を体現していた。その清麗な美しさは、白菊の花のように匂った。

万里小路の局は、これで、お伝の方を負かせると思った。

果せるかな、綱吉は、はじめて常盤井の局を引見すると、

「おう」

と、声を立てずに目を見張った。御台所は、その綱吉の様子に、

しずかに微笑した。

（これで上様はお伝の方から取り戻せる）

そう思ったが、それは御台所自身の容色ではない。常盤井の局が、綱吉の気を惹いたのである。お伝の方に勝てると思って、その裏には、御台所の淋しさがかくされていた。

「いかがでござりますか？」

「うむ、お伝に見ることのできぬ美しさを持っている」

綱吉は、呻くようにいった。美女とはきいたが、さまでとは思わなかった綱吉である。だが、一目見て、彼は常盤井の局の美しさに感銘していた。まずあたりを払うような高い気品が、綱吉の心を惹きつけた。それはお伝の方にはないものである。そして、教養からくる聡明な光りも好ましく思われた。

綱吉は、じっと、俯つ向いている常盤井の局の細いうなじに目をやった。そこからは、京の水で磨き上げられた象牙のようにこまやかで白くふくよかな肌が、綱吉の思いを混乱させるように息づいていた。

「予にこの女をくれぬか」

綱吉は、目を御台所に移していった。

「いやだと申しあげましたら……」

御台所は、いたずらっぽく、その綱吉を見

ていった。

「いや、どうしても予は欲しい」

その言葉の調子は、ふと哀願のひびきをもった。

「差し上げましょう」

「くれるか、そうか……」

綱吉は、ほっとしたようにうなずいて、常盤井の局を見つめた。常盤井の局は、深くうなだれている。心なしか胸のあたりが苦しうにあえいでいるらしいのに気がつく、綱吉の心は妖しい期待に満ちて、息をつめた。

綱吉は、常盤井の局を將軍付となし、奥表総女中の支配を委ね、千石の扶持を給した。そして名も右衛門佐と改めさせた。

万里小路らの策謀は、ここにみごとに成功したのであった。

当時、最も進んでいた京都文化の中で馴致され、しかもその中で閨秀文学者と謳われた右衛門佐の才学であるから、その教養は大奥において断然光った。茶の湯、香花、双六、囲碁などの遊芸も、手に入ったものである。

綱吉は、今までお伝の方の無教養に馴れて女に学問はふさわしくないものと思っていたので、こうした右衛門佐に驚異の目を開くとともに、この聡明な教養ある美しき女人と、

心ゆくばかり学芸の興趣にひたり、恋の享樂に堪能した。そして綱吉の愛は、お伝の方から右衛門佐へと、日々傾いていくのも自然であつた。

この結果は、綱吉の日常生活を変化させた。それまでただただ能樂に熱中していた彼は、一転して学芸に再び傾注しだしたのだ。

また、右衛門佐が大奥を支配するようになってからは、それまでお伝の方によって支配されていた大奥とは、次第に空氣が變つていった。行儀作法に重きをおかれ、座作進退も優美高雅が第一とされた。女中の趣味も、遊芸から文芸へと傾いた。

そのころ、お伝の方は、綱吉の命で小谷の方と改名した。

二世は愚か、三世までもと深き契りに陶醉していたお伝の方の紅閨も、小谷の方と名を改めたと同時に、上様を迎える夜がまれとなった。大奥における一方の権威者ではあったが、一人君寵をほしいままにしたところ、なんとという変りようであろう。

「妾が多年丹誠して植えつけておいたものが根こそぎに引き抜かれて行くように感じる」
そう、側の女に洩らすように、小谷の方は淋しかった。ことに、右衛門佐が上様の愛撫

を一身に浴びて、五の丸の別御殿に住むようになったのを見ては、口惜しく、妬ましく、淋しさが身にしみるのだ。日に日に、右衛門佐に奪われた恋の甘味と君寵による勢力は、小谷の方と改名した彼女に下り坂であつた。小谷の方は、その淋しさにたえられず、上様の御生母桂昌院にいよいよ取りすがつていった。桂昌院も、平民の子であつたことから彼女等は遊芸趣味の支持者で、江戸風を好んでいた。この二人は相結んで、貴族的な文芸趣味の、京都風なその趣味、その傾向に、そしてその憎い右衛門佐という女に對峙し、競争し、暗闘をはじめた。

以来、大奥は自然と二党に分れて行つた。小谷党と、右衛門佐党にである。そしてその暗闘の度の深まるにつれ、老中も側用人も、そのいずれかを背景として堅い手を握らなければ、その地位を保てなくなった。

聡明ではあつたが、一代の享樂児であつた綱吉の判断は、美しく好ましき女人のうつつな争いの渦中に、次第にその光りを曇らして行つた。

それにしても、綱吉は若君徳松の死去以来世嗣を得ることの必要を痛感して、小谷の方右衛門佐、その他大奥の数多い豊艶な女性達

に、どうにかして子供を生まれようと努力したが、その一人として懐胎するものはなく、年もすでに四十の坂を越えたことと、焦慮も一方でなかつた。

「この上は、神仏に祈願をこめよう」

綱吉は生母桂昌院とも相談し、僧隆光を召して、

「いかにしても、子孫繁昌致すよう祈禱に丹誠すべし」

と、命じた。

僧隆光は、貞享三年、神田知足院の惠賢が病に伏した時、護国寺の亮賢を桂昌院が召して知足院の後任を推薦させた時に、亮賢がすすめて知足院の院主となつた僧である。彼は
大和国添下郡二条村の生れで、当時相州長谷寺の住であつた三十八才の美僧である。隆光をすすめた亮賢は、桂昌院がまだ京都の実家にある時、母に連れられて仁和寺に参詣した折、少女の顔をつくづくと見て、
「この娘はきっと出世して尊い方におなりになる」

と、母にささやいた伴僧である。

それが的中し、やがて江戸城大奥に勤めるようになり、ついに君寵を受けて若君の母堂となつた。その彼女がまだ綱吉を懐妊してい

る時「どうぞ男児を出生いたしますよう」と
諸社寺に祈願をこめた時、亮賢は江戸に出て
いて神田知足院の住持となっていた。

亮賢は、

「このたびの御懷妊は柳営の御慶事でござい
ます。まさしく男児を出生され、やがて大将
軍にもお就きになることとございましょう」
と、いって、彼女を喜ばせた。そしてそれ
がまた的中したので、教養浅く迷信深かった
桂昌院は亮賢を信頼し、愚昧な信仰心を持っ
たのである。

その亮賢がすすめた隆光であるから、綱吉
も母ともども、隆光に深い信頼を寄せたので
あった。

隆光は、綱吉に子孫繁昌祈禱を頼まれると
「かしこみて丹誠致します。さりながら、こ
れはなかなかの大法でござりますれば、まず
上様よりよろず御清浄に遊ばされ、御信心専
一になりますように願ひ上げます」

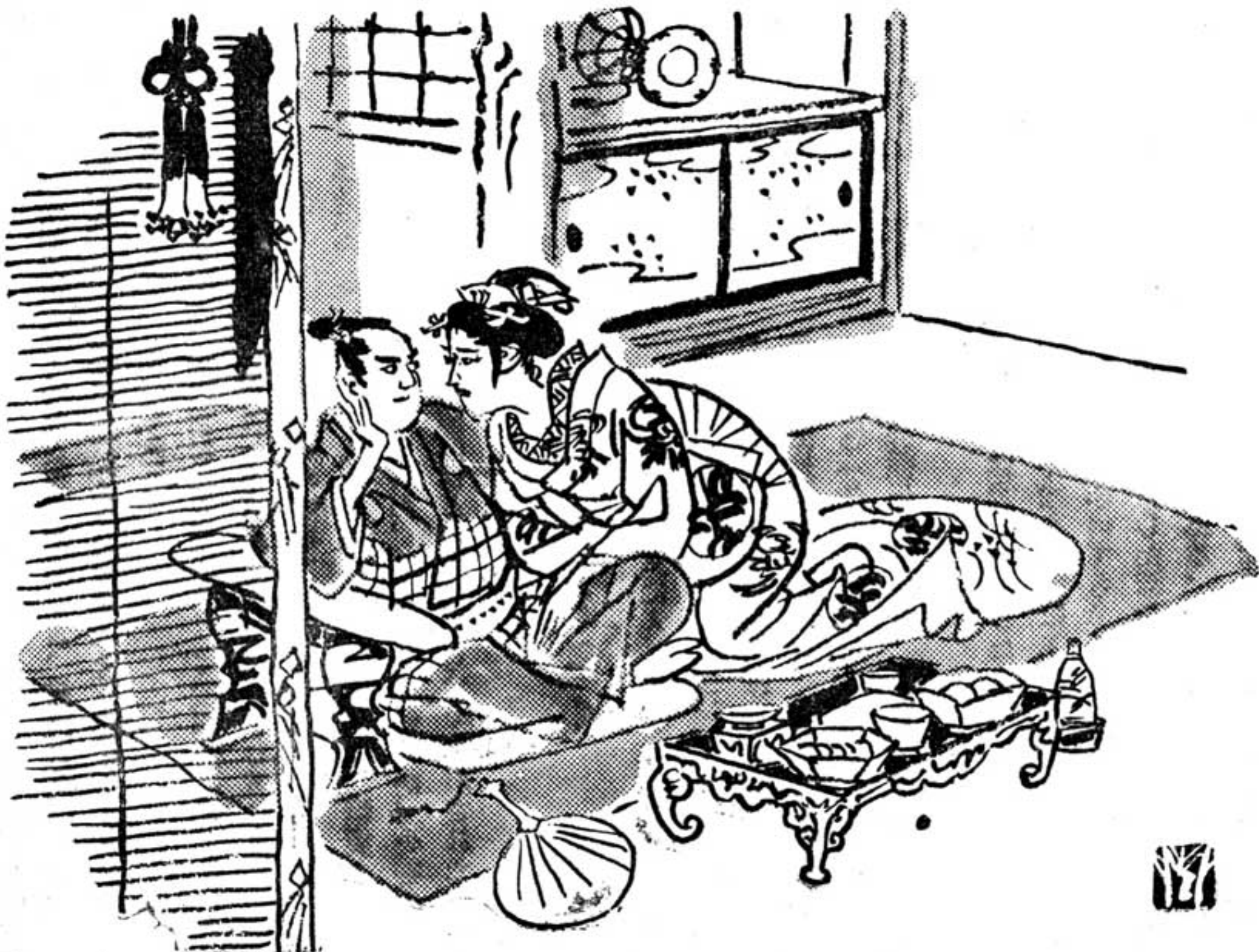
と答え、早速、

「彼のために一字建立致してつかわせ」

ということになり、また、今生に子なきは
前生殺生の応報であるから、生類を憐れむこ
とが緊要だということになったのである。

そのころ、江戸城内は、吹上苑から紅葉山

のあたりにかけて、雉
子や狐狸の類が群棲し
ていて、大奥の料理所
はむろんのこと、局の
いたる所に出没し、こ
とに長局の辺は、縁の
下まで狐狸の棲家とな
って、日中でも廊下の
ここかしこ、座敷の上
にまで姿を見せて戯れ
ていた。だから夜なぞ
その騒動は一通りでな
く、異様な声を立てて
鳴くのを聞いたりして
は、女達は恐ろしさに
ふるえ上り、
「何とかしていただき
たい」
と、総支配の右衛門
佐の局まで願ひ出た。
局はいろいろ考えて
いたが、学者だけあつ
て、御倉に蔵してあつ
た虎の皮を出させて廊
下に敷かせ、長崎奉行



に急使を立てて、

「今年唐船が持ち渡った虎の皮は、すべて御用になるから到着次第大奥に差出すべし」と命令した。

右衛門佐の局の妙計は、「猛虎山中にあれば百獣震損す」とある言葉からの思いつきだったが、これは大成功であった。狐狸の類いは、虎の皮に恐れをなして、それを敷いてある所には近づかなくなった。しかし、虎の皮にありつけなかった長局のほうは、ますます狐狸が群がり、狼藉を働いて、夜昼女達の悲鳴の絶える時がなくなった。そこで右衛門佐は、縁者の智慧を借りて犬を飼わせることにした。局々に残りなく一匹ずつ犬がいることとなると、狐狸も恐れてようやく近づかなくなった。

しかし、犬を飼ってない桂昌院や、小谷の方の住居のほうは、逃れて来た狐狸が加わっていつそうその数を増し、白昼とても人を恐れず、あられもなく騒ぎ立てる。それで、こちもまた犬を飼うことにした。

そんな日に、隆光は、御加持のため桂昌院に召されて出仕した。隆光は、犬が数多くいるので、桂昌院に尋ねると、桂昌院はその由を話した。

じつときいていた隆光は、やがて、両眼に涙をたたえながら、殊勝げにいい出した。

「勿体ないことでございます。これは全く仏のお計いに相違ございません。と申しますのは、恐れながら上様には戌の年の御誕生でござりますから、生類の中でも別して犬を御愛護遊ばさるべきでござります。まして只今は御子孫御繁昌の御祈禱中なれば、犬を憐れませることは結構なことでござります」

桂昌院は、じつときいている。

「それにしても、拙僧は今日までこれに心づきませず、言上致しませんでした。が、なかなか凡慮の及ぶところではなく、ひとえに仏の御計らいと思われます」

妖僧隆光は、一世の高僧としての矜持のために、わが祈禱にもし功顕がない時に当たっての、己が立場を考えていたところである。わが權威を保持し、地位を守るために、桂昌院がわれを信じ、ひとえに迷信に凝っているのを幸いとして、不可思議な運命の神秘を仏教に結んで、まことしやかに述べ立てたのだ。

彼の魔術は成功した。このことは桂昌院の口から綱吉の耳に入った。この虚妄の説も、一筋に敬愛する母の言葉としてきけば、綱吉もふと信じる心にもなったのである。

時に貞享四年の二月、前代未聞の愚劣な暴挙が合法的に社会民衆を支配することになったのである。

「犬をこれまでのように無慈悲に扱うな。万一違背したる者には嚴刑を申し付けよ」

綱吉は老中達を召してそう申し渡した。それから犬愛護の愚かな命達は、幾度も繰り返し出された。そしてその命達が、小谷の方と右衛門佐との暗闘にもすぐ利用されたのだ。

果てしなく

小谷の方の御氣に入りの女中、真砂は、いくら追っても一匹の赤犬が追いつがるのに、しっ、しっ、と追い立てながら、何気なく髪の手を手に持って追い払い、そのまま御殿に上ってから一刻ほど後である。

右衛門佐の御殿から、小谷の方に使者が立った。

真砂が赤犬を殺傷したのは、いかに小谷の方のお女中でも罪科はあばかねばならぬ。いくら秘しておいても、こちらは赤犬を殺傷した真砂の使用した笄を拾ってあるからという使者の口上である。

小谷の方はおどろいて真砂に糺すと、赤犬

に追いつがられてたしかに笄を抜いて脅したが、赤犬は決して死んだわけはないと真砂は顔色を失って返答した。色を失ったのは、笄を失くしていたし、それが小谷の方から頂戴したものであるから、それを持って訴えられてはどうしようもない。どうしてもその笄は取り戻さなければならぬのである。

使者の口上はつづいて、真砂がこちらに来て禁令を冒したことを詫びれば、笄は返すというのである。

「まさか、その言葉に偽りはあるまいな」

小谷の方は、それでもほっとして口に出した。表沙汰になれば、いかにしても真砂は重料をこうむらねばならなかった。

「なんで偽りなぞ申しましょう。右衛門佐さまは、ただただ小谷の方さまのことをお考えになって、妾をお使者に立てたのでございます」

それは嘘であった。本当にそういうのなら黙って真砂が落した笄を返してくれればいいのである。そこに右衛門佐一派の意地悪さを小谷の方は見たが、証拠の笄を向うに取られてはこちらの負けであった。

「では、真砂をやりますから、どうか笄はお返しくださるよう」

大奥後宮秘史・特集

真砂は、使者の女中と同道して、右衛門佐の御殿に行った。

そして、通されたのは、十畳ほどの座敷である。

「この笄であらうな」

真砂は、女中達に取り巻かれて、そう万里小路の局にきかれた。万里小路の局の手にしているのは、真砂が落した笄に相違なかった。

「お返し願います」

真砂は、深く頭を下げた。

しかし、万里小路の局達は、まるで敵の間者を捕らえたように意地悪くいうのである。

「この笄を添えて訴えれば、そなたはもちろんのこと、お咎めは小谷の方さまに及びましょうぞ」

「いかようにもお詫び致しますれば、ぜひその笄をお返しく下さいまし」

真砂は、必死であった。自分の身はどうなっても、お方さまに及ぼしてはならなかった。

「どのようにも詫びるといいやつの」

万里小路は、ひややかに微笑し

ていった。

「は、はい」

「犬をこの笄でそなたは殺したのじゃ。いつてまさかそなたを殺しはせぬ。打擲を承知なら、その上で笄を返して内聞にしようが、どうじゃえ」

「はい、ご存分に……」

と、真砂は顔を伏せた。身は死んでも、小谷の方さまから頂戴した笄は持って戻らねばならぬのだった。

「よい覚悟じゃ。では打擲するによって、衣類を脱ぐがよい」

「えっ？」

「はて、何も驚くことはない。そのままの打擲ではさしてきくまいと思うから、肌をじかに打つのじゃ。それ、皆で脱がしや！」

万里小路の言葉に、わっとまわりの女中共も真砂に飛びかかった。真砂が小谷の方の氣に入りの者と知って、だれもが敵視していたから遠慮はない。真砂の悲鳴に、かえっていい氣味とっているぐらいのものである。

真砂は、見る間に裸にされて、大勢の同性に囲まれて引き据えられた。真砂は舌を噛み切って死にたかった。しかし、生きて笄は持ち戻らねば、死ぬに死ねなかった。

「手をしばるがいい」

万里小路の局の言葉に、ハッとする真砂は自分の身からほどかれた腰紐で、後手にぎりぎりにくられた。

「手をはなしや」

万里小路の局は、そういうと、いつ用意したのか、よくしなう根竹を手に立ち上った。

「よく見ているがよい。小谷の方さまのお女中は躑躑がよいによって、滅多には悲鳴も上げぬであらうからな」

そして、ひややかに、顔を伏せている真砂のまるい肩先に、ピシリと根竹を打ち下ろした。

(あッ……)

いかに覚悟していることとはいえ、その苦痛に、真砂は、悲鳴を噛み殺して、からだを俯つ伏した。

ピシリ、ピシリ！

その、白く、ほどのよい脂の乗った若い娘の背肌、根竹は振り下ろされた。

「うっ」

と、思わず真砂は背を反らした。美しい形の乳房が、囲りの女達の目に妖しくふるえているのがわかる。

「顔に傷をつけぬのは慈悲じゃえ」

ピシリッと、万里小路の持つ竹鞭は、真砂の胸を打った。真砂の裸体は、飛び上るように、ころげた。その投げ出された内腿に、万里小路の持つ鞭は、容赦なくピシリと高い音を立てて打ち当てられた。はじめは、おもしろそうに見ていた女中どもも、こうなるというのまにか互いに手を握り合って、息をつめて、恐ろしげに真砂がころげ廻るのを見ていた。

やがて、真砂は失神した。

その真砂は、気付薬を吞まされ、しばらくそのまま捨てておかれた。気がついて、自分で衣類をまとえる力を取り戻すまで、そのまま大勢の女中どもに見物させておくという万里小路の局の意地悪さであった。

それから小半刻、真砂は、やっと返して貰った筈をふところに、血の氣のない顔をして小谷の方の局に立ち帰った。

「口惜しい目に合ったのであろうな。でも、我慢するのじゃ。それが妾への奉公じゃえ」

小谷の方は、やさしく真砂をそうなくさめた。そのうち、手を廻して真砂が殺したという赤犬を調べると、筈傷ではなく短刀様なもので突かれて死んでいたとわかったが、その時にはもう後の祭りであった。右衛門佐の局

側の女達の策謀であったわけである。

そうこうするうちに、綱吉は隆光のために寺院の建立を急がせていた。

隆光は、御子孫繁昌の祈禱を行うについては、まず將軍みずから仏に帰依しなくてはならぬといい、

「容易ならざる大修法のことなれば、清浄の地に東照宮を勧請し、その御宝前にて長日別異の修法を仕り度うございます」

と希望をいい出したのに任せて、江戸城の鬼門に当る神田橋外に五万余坪の地を卜し、邸宅を引払わせて東照宮を造営し、別当の知足院を新たに建立した。東照宮は上野のそれと、また知足院は上野の寛永寺と同一の作りである。だが出来上った知足院本坊の普請に綱吉は用材の不備を発見して憤って帰城し、普請総奉行大久保佐渡守以下をすべて遠島、追放、お預けと処分し、改築総奉行に寵臣のお側衆、柳沢保明を命じて日夜工を急がせた。保明はこれを、上野の本坊をはるかに凌ぐといわせたほどにみごとに竣工させた。將軍は再び参詣しこれに満足し、筑波山知足院元禄寺と称せしめ寺領五百石を寄進し、関東新義真言宗の大本山と定め、ここにいよいよ若君懐胎の大修法を壮嚴に初めることになったの



であった。知足院は元禄八年、護持院と改称され、同時に隆光は大僧正となった。

柳沢保明は、このたびの功により側用人に引上げられた。

その時にも、しばしも大奥の勢力争いは、止らずに進んでいた。

右衛門佐の局の君寵に小谷の方の無念さは、

わが身は年も三十に近く、十幾年の愛玩に飽満して新鮮なる刺戟を感じなくなっている上

様の心を囚えるには、わが心身はすでに力なしと悲しく観念し、この上は青春豊麗なる美女を他に求めて上様に

すすめる以外にないと桂昌院に相談し、母公からひそかに柳沢保明にその周旋方を依頼し

「局を越してわが君の愛を受けるほどの美女は、まず清麗優婉な絶世の美貌と端麗なる姿態。白く美しく柔かな肌、そして抜群の才芸を持ち、さわやかな色香を放散する女人でなければならぬ」

保明はやはり、そんな女は京都より求めなければほかにないと考えた。

えらばれたのは、当時禁中長橋に勤める大典侍局という美人であった。間もなくこの麗人は、江戸城三つ丸の桂昌院の住居まで送り届けられた。

綱吉はこの大典侍に目がつくと、右衛門佐に対する恋も忘れて、夜も日も彼女の側からはなれず、

「政治は保明がよろしく取計らえ。予は大典侍と……」

と、いい出したありさまに、桂昌院や小谷の方の喜びは一通りではなかった。早速別殿が、新築普請の総奉行柳沢保明で竣工し、隆光が安鎮の修法を行った。大典侍は北の丸どこのと呼ばれ、保明の大功は、彼を三万三千石の大名にしたのである。

こうして、北の丸どのの寵愛が、かつてのお伝の方のそれにもまさるほどであり、桂昌

院、小谷の方がこれと結んで一団となったのだから、さすがの右衛門佐の局も孤立し権勢も衰えるかに見えたが、三人の女人はそれぞれに美しかったし持味もかわっていたから、結局は皆それぞれに綱吉の愛を受けたのである。だが、以上の三人もそうであるが、そのほかのこれと思う女人に綱吉は効力を傾けたが、若君誕生の反応はついに現れなかった。

若君を懐胎する。そのことが、いまは大奥の勢力を確実に握るただ一つの鍵である。

右衛門佐の局は、これは隆光の法徳が足らぬためではないかと疑念を抱いた。そして綱吉の許しを得ると、京都から仁和寺の御門主覚深法王の弟子なる高僧覚彦を招じ本郷湯島台に宝林山靈雲寺を建立、これに真言の秘法を尽させて加持祈禱させ、右衛門佐も日々代参を遣わして信仰した。その効験がたちまち現れたと見えて、元禄四年の冬の初めから、局は懐妊の徴候を自覚した。局は感泣した。

「われ、勝てり！」

そして懐妊は確実となり、ひたすらすこやかな男児出生を指折り数えて待った。綱吉の喜びもその日を待たせたのはむろんである。

だが、そのありさまを見るにつけ、小谷の方の者は無念がって、ひそかに局流産の呪法

を行わせると同時にわが党の女人にもとます綱吉のお成りを願ったが、この方はすこしもその徴候を見なかった。

かくて、元禄四年も暮れ、五年の春となつて、梅花が芳香を放つ日になった。

そんなある日、綱吉は大奥女中等を召しつれて吹上苑で観梅の宴をひらいた。彼は女達に梅花の題で朗詠させた。

御園生のしげれる木々のその中に

ひとり春知る梅の一本

その時、右衛門佐はかく詠じた。大奥幾千の女人の中で、一人卓抜な才華を有する彼女は、我一人將軍の御胤を宿した仕合せを受け得ては、この歌の如く、まさにひとり春知つた梅の一本より以上の誇りと喜びとを覚えたのに違いなかった。綱吉は、局に感嘆し、「では、その短冊を局の好きな梅ヶ枝に結びつけよ」と、命じた。

その時、素早く足次を持ち運んだ女中がいた。右衛門佐の局は、今を盛りと咲き匂えるあえかな紅梅の一枝に短冊を結びつけて、しとやかに足次を降りようとした刹那である。

「ああ——」

と、長い悲鳴をあげて、局は転落していた

のである。生れ落ちて以来、深窓の人となつて、一挙一動、すべて姫の淑やかさを損わざる範囲においてのみ肢体を動かすことを習い得たに過ぎぬ局が、長々と綾羅錦繡を身にまとつて、上様の仰せとはいへ、その不自由な姿態を、足次の上などに伸び上らせたのだから、足次が動くと同時にたちまち体の平均を失つてあられもなく転落したのも無理はなかった。とにかく、局は流産し、これまでの喜びを一瞬に水泡に帰させたのである。

局は、御殿に運ばれると、悲嘆に泣いた。「だれじゃ、あのように揺れ動く足次を用意したのは……その者を酷しく妾の目の前に折檻しや」

局は、叫んだ。

「はっ、それは……」

万里小路の局は、ふとそばにいる、右衛門佐の一番の氣に入りの女中、鈴香に目をとめた。その女が足次を運んだのではなかった。

万里小路の局は、あの時、足次を運んだのが小谷の方のお女中真砂なのに、そのあとで気づいていたのである。小谷の方党の計略！そう思ったが、足次をいわば敵方の者に運ばせた手落ちは重大であった。だから、彼女は足次を運んだのを、鈴香にしたかった。鈴香

ならば第一のお気に入りのお女であるから、さほどの折檻もなく局のお許しが下ろうと思っただからである。

「えい、酷しく折檻しや。裸にして肌を細竹で息の止るほど打ち据えるのじゃ」

だが、そう叫んだ右衛門佐の局の目は、目の前にまる裸にされた鈴香の姿態を見てはいなかった。

ヒュウヒュウと竹が空に唸り、ピシリピシリと肌に鳴る無気味な音も、そして鈴香の、今にも息絶えそうな切れぎれの悲鳴も、局の耳には入らなかった。

「ええい、打つのじゃ。打ちのめすのじゃ……！」

局はうつろに叫ぶ。

そして心で泣いていた。

「われ、敗れたり……」

右衛門佐の局は、ただ悲嘆に泣いている。

そして、いつ果てるともなく、鈴香の肌には、万里小路の局の振るう細竹の鞭が空を裂いて振り下ろされた。

生娘の肌が上げる悲鳴は、そのままこれからもつづくであろう大奥の女人の暗闘を暗示するが如く、強く弱く、そして絶えだえにいつまでもつづいていた……。



耐えられる運命ではなかった、だから彼女らは抵抗した、はかない抵抗を……戦争による悲劇が、ここにも繰り広げられていった。

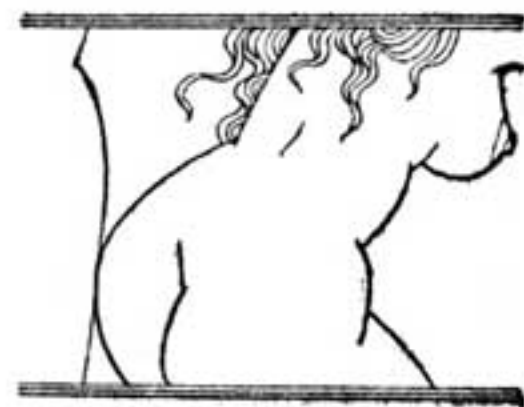
女たちの檻

次号予告

辻

哲

哉





つごも池

溝口寂子
とてつとて
カミヤマヤカ

★蛇男の瞳にめらめらと渦巻く狡滑な笑いにも気づかず、酔いし
★れた彼女にシユルシユルとろろこのすれる音が近づいてくる！

桜の花びらが夜空に舞っては闇の中に消え
ていった。

あぐりは松葉杖をついて、ひっそりかんと
したサーカスのテント裏をゆっくり歩いて行
きながら、そんな無表情な花びらの姿を追っ
ていくのである。

サーカスのテント裏はまったくの闇で、わ
ずかに、遠くから赤いほんほりの光りが桜の
樹の間をとおして見えるだけである。

からっとしない天気のためか、九時をすこ
しまわったテントの中は、夜桜見の客でいっ

ばいだった。

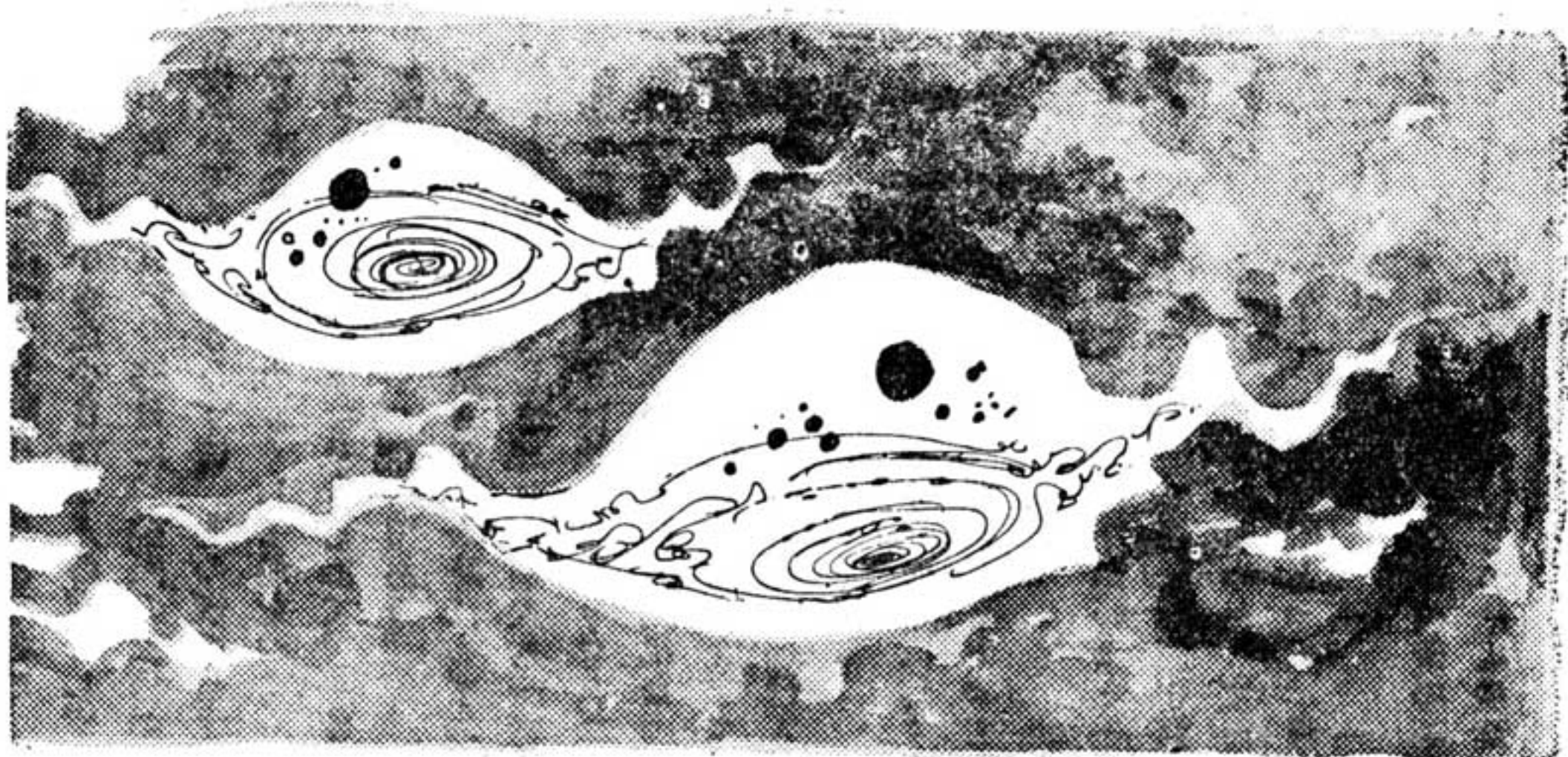
ひわいな男達の声だけが公園の広場中にひ
びいてやまないのである。

あぐりは人波には興味ないので、松葉杖を
あやつって灯りのない道を散歩した。

灯りのないところでは、桜の花びらだけが
胸をくすぐるように仄明るかった。

鬼子母神社へつづくその道は発育のわるい
桜の道であった。観賞するのは朝夕通る坑夫
ぐらいで、土地の人達は、

「鬼子母の神さんにとられたんじゃ、養分を



な。だけに、ゆっくり見ようものなら血をば吸いとられるばな」

と、迷信にも度のすぎたようなことを語り合っている。しかし、あぐりは、この道が好きであった。へなへなとした自分の右足のように、軟弱な樹ばかりがつづいているが、花はやっぱり美しいからである。

そして、夜はそれこそ人足は絶えて、まるで、花と自分だけののようにのんびりとできた。今晩は二度目の公園だった。

人影もなく、ががつと早く松葉杖をすすめることもいらない安心感は、離れることなくついてくるサーカスのうるさいシンタの音さえも、心地よく、耳に流れ込むのである。

あぐりは燃えあがりそうに熱した体を松葉杖でささえながら、大声でわめきたいような気持ちだった。十九才の体が今夜ほど女を意識したのは、はじめてだった。

上気した声で、思わず、

「だれか私を思いきり抱いてくれない？　ほら、その草原の中で私の腰を眺めている蛇さん、それとも、泥池の中で鳴いているガマさんでもいい。男の子に化けて私を抱きしめておくれでないかえ」

と、話しかけてしまった。

そこに蛇の目の光りを見たのでもなく、ガマガエルの姿を見たのでもない。

ただ、そんな妄想があぐりの頭の中に生れ、焦燥から、つい声になったに過ぎなかった。

自分の声にハッとして、あぐりは歩みをとめて振り返ってみる。誰もいない。

桜の樹と樹の間にあぐりの姿が、黒く長く影をおとしているのが、かさをかぶった月の光りで感じられる。

そんなふうに気をつかうこともないほど、今夜の桜の道は自由であった。

あぐりは一度楽しみながら歩いてきた道を、再び通って戻るのがこわかったので、鬼子母さまのお社のあるすぐ下まできて、そこから、小道の方へそれてゆっくりあるいていったのである。

小高いところにある鬼子母神社が、ゆらゆらと、かすみの中で笑っているようである。小道の方は、つごもり池の方へつづいているので、かなりとおまわりであった。

あぐりは、それでも、今夜の楽しさに対して少しぐらいの距離の差など問題ではなかったのである。

つごもり池の伝説も知っている。

つごもりとはつまり晦日のことである、昔昔、この池は小さな小さな小人の涙のしずくであった。それが、晦日に、樵夫の五作が小人が泣いてるとも知らずに、その涙のしずくのある水たまりを、大きくして池をつくつてやろうと思い、川の水をせきとめて、一度におし流して、池をつくつたのである。

そのため、数軒の家々が池の底にしずみ、数人の人々が死んでしまった。小人も一緒に池の底へ沈められ、今は死人になりきれない人々のむくろを引き取って、池の主になっているそう。そして晦日になるときまって悲しい小人の泣き声が聞え、罪もない通行人を誘うといわれていた。

一年に一回は、必ず誰かが池の底にしずんでいくのである。そして、日が、きまって晦日であった。

そこで人々はつごもり池と呼ぶのである。あぐりはこのつごもり池の伝説を聞き慣れていたし、こわくも、思わなかった。夜などは全然人の姿がなく、あぐりにとって、最上のいい場所でもあった。

時折、むしろように現在の自分の位置の不安定さに悩まされたりすると、この池に松葉杖をついてやってきたものだった。

けわしい細い道につづいて、細い堤防が、たわらと赤土に固められてある。

その、濁った池の水は、たえず苦しんでいるようなあらい息使いを感じさせていた。

小石をポトンと水面に投げると、幾重にも波紋が大きくひろがっていく。

その輪の中心から、昔、池の底に沈んでいた人々の魂が浮上してくるようで、迷信とほいいながら、ふと襲われるような気がして来るのである。

死霊が誘う、招く……

晦日に、偶然にしろ死んでいった人々の気持ちがいくらかわかるような気がする。

あぐりは見なれたつごもり池の堤防の上でそんなことをぼんやり考えながら、たゆとう水面を眺めた。

しかし、つごもり池の水はおもおもしろく月の下で、沈黙を守るだけで、松葉杖のあぐりには目もくれず静寂を楽しんでいた。

それもそうである。今夜はまだ晦日にはほど遠い十九日……

あぐりのひよろ長い影が何かを暗示するよう水面に消えていった。

その時、あぐりの頭の中にわけもなく死という言葉がコマのようにくるくる廻った。あ

ぐりは、

「私はもうすぐ死んじゃうのかも知れない。もしかしてつごもり池の晦日死人に招待されるかも知れない。そんな気がする。きつと、死んじゃうのだわ、そんな予感が……」

あぐりはそう考えながらも足もみだれず、呼吸も変らなかった。

死というものを簡単に考えていられるおのれの心理が不思議なだけで、少しの恐怖もないのである。

あぐりの住んでいる二軒長屋の明りがはつきり見えてきた。石ころ道を不自由なあぐりの体が、ゆがみながら歩いて行く。

シンタの音は消えて、虎の吠声がウォーンとかすかに聞える。

あぐりはやっと、石ころの意地悪な感触で俗世へ帰ってきた心地であった。

「今夜の私は変だったわ。でも、これが、きつと本当の気持ちなのかも知かんない……」

あぐりは下を向く。ぐにやぐにやした右足がこっけいな姿で自嘲的に歩みをくりかえしていた。

なまあたたかい気温が夜になって強い雨になった。

雨のあとに風が吹き、そしてまた雨になった。トタン屋根の上を無情な雨水は狂ったような音をたてた。

雨音にさいなまれながら、あぐりは天井をながめた。

螢光灯の豆電球に、雨水をよけて逃げてきたブタが、まるで戸外の外燈の下を思わせるように飛んでいる。

銀蠅がその中を数匹、あぐりの頭上で低く羽を鳴らして飛んでくる。夜ふけの部屋の中で、虫の立てるわずかな音さえも重くあぐりにのしかかってくるのであった。

いや、今夜の夜桜見の時からのかぶりが続いているためかもしれない。

あぐりは雨音と虫の飛びかううるささに、天井ばかりを見やった。

完全な音への敗北であぐりは銀蠅の姿へ視線をむけていたが、しばらくして、ガバッと起き上り、電気をつけて、たなの上の殺虫剤を取りだした。

ほこりまみれの噴霧器が左右をかすめて、畳の上へころがり落ち、その上へ、重心を失なった体がぐにゃぐにゃと折り重なって倒れていった。

あぐりはしたたか左足を打ったのである

が、声を出して母の絹江を呼ぶほどもないので顔をゆがめて噴霧器を手に持ったが、中に液がないのか、スポスポと軽い音をたてるだけだった。

あぐりは執念ぶかく電燈の下で舞っている虫を眺めていたが、台所へ下りてゆき、炊事場の泥水のたまった水ガメのある処から、白いBHCをとり出した。

あぐりは、空になった噴霧器にそれを入れて虫にふりまいた。

シューシューと薬液の霧がブヨと銀蠅をボトボトと心地よく殺していった。

畳の上で苦しそうにもがく虫けらを見ながら、

「お前さんたち、人に迷惑をかけながら、もう一日生きのびようなんて了簡はおよし……私が殺してあげよう、でもね、私は何もひねりつぶそうってんじやなくてよ。ちゃんと、安楽死をさせてあげるわ。ほら、このBHCで」

こんなところに不具のあぐりの残忍性が、露出されるのであった。

人の前ではいとも消極的なあぐりであったが、自分が中心になってふるまう場合、性格がむき出しになるのである。

畳の上でどぎつい色をした銀蠅が数匹、ブヨの死骸の中で断末魔のくるしみにうごめいていた。

あぐりはトタン屋根をたたきつける雨音を耳にしながら、床へはいったが、奇妙なほどの気持ちのいらだちは、いつのまにか消えていたかわりに、むしろ一人であることの寂漠感があぐりをおそうのであった。

こんな晩は夢見がわるい。

あぐりは抵抗するように筋肉のない右足を海老のように折りまげ、手で握りしめて目をとじた。

夜中、寝苦しい悪感におそわれた。

人のけはいがするのである。あぐりは何となく薄目をあけてみると、シュルシュルという音が雨の音にまじってきこえてくる。

はつきり、その音をあぐりはきいたような気がする、ガバッとふとんの上に起きあがると、部屋の中は真暗である。

なのに、二つの青い光りが動物的にあぐりを凝視していた。

あわてて、母を呼び起そうとすると声がでないのである。

のどを焼いたようにひりひりと痛みがやっ

てきて、苦しいかぎりであった。

体は妙に興奮している。

その時、真暗い中から二つの青い光りが、シウルシウルと、うろこでも畳に触れるようにあぐりの方へ寄ってくるのである。

あぐりはハッとした。

「おまえは、なんなの？　まるで、私をのみこみにくるように寄ってくる……。さ、正体をおみせ」

あぐりの口からやっと言葉がもれた。

二つの青い光りは近づくにつれて、逞ましい男の目として、あぐりにうつってきた。

肩が……。腕が……。胸が……

「あつ！　腰から下が蛇！　へびだわ。あつ！　こっちにやってくる。へびが……」

あぐりの前には下半身蛇のかたちをした、たくましい美男子が立っているのだった。

蛇男は、はげしいあぐりの言葉に、しずかに頭をたれた、

頭髮が青年ブルタースのような感じで、深いほりをみせて、頭の上半面がくつきりとあぐりの前にあった。

「きれいな人……」

そう思ってみても、下半身の蛇身はまるで化物のように物凄く気味がわるかった。

ことに下半身の蛇のうねりが、動物的にたえずクネクネと畳の上を動いているのである。化物同様の蛇男は、あぐりの視線が見つめているうちに、はっきりと強さを感じさせるほど変っていった。

古蛇は目から人の精気をとると云われているが、その蛇男の表情にも、そんなものが多い分にくまれているのかも知れない。

あぐりは、だんだん蛇男の方に吸い寄せられていく気がしたが、それを、しいておさえるようともせず蛇男の言葉を持った。

「あぐりさん、君は、こんな姿のぼくが嫌いかい？　もっとも、君ははじめてぼくに会うんだから、その気持ちはわかるさ。しかし、ぼくは君のことをよく知っている」

「わたしのことを？」

「そうだよ。君は今夜も桜を見にきたね。あの時、君は何とかいったつけ。僕は公園の主の青大将……君に会いたいために、まだ足りない神力を鬼子母の神にたのんで、やっと上半身だけ変えて貰ったんだよ。あと、晦日まで待てば僕は一人前の男として夜を過ごせる身分になるんだ……君はさびしいんだろう？　右足が気になるんだろう？」

あぐりは一瞬、たじろいだだが、男の顔を見

て、「ええ、でも仕方ありませんわ、今さら、どうなるわけでもなし……」

「しかし、愛してくれる人をみつけるのは仕方がなくはない」

「でも……」

「そう考えないかな。僕が君の前にわざわざ出てきたこと、すなわち、これは、君を愛するが故の手段なのだよ。化物みたいな僕じゃないやだろう。それに、ちゃんと僕が何であるか前身を告白してあるもの。君の心は美しい。その心のとらわれ人が、この僕なのだ。僕の気持ちかわかるね」

「ええ……」

「こんな姿でもすぐ返事をくれる？」

蛇男の目はもう完全にあぐりの気持ちをとらえたごとく、自信ありげにみつめた。

あぐりはあやつり人形のように、自由自在に蛇男の手中におちてしまい、その、甘い言葉に酔いしれていた。

また、頭の中に死という言葉がチラリとかげをみせたが、まもなく消えていってしまったようである。

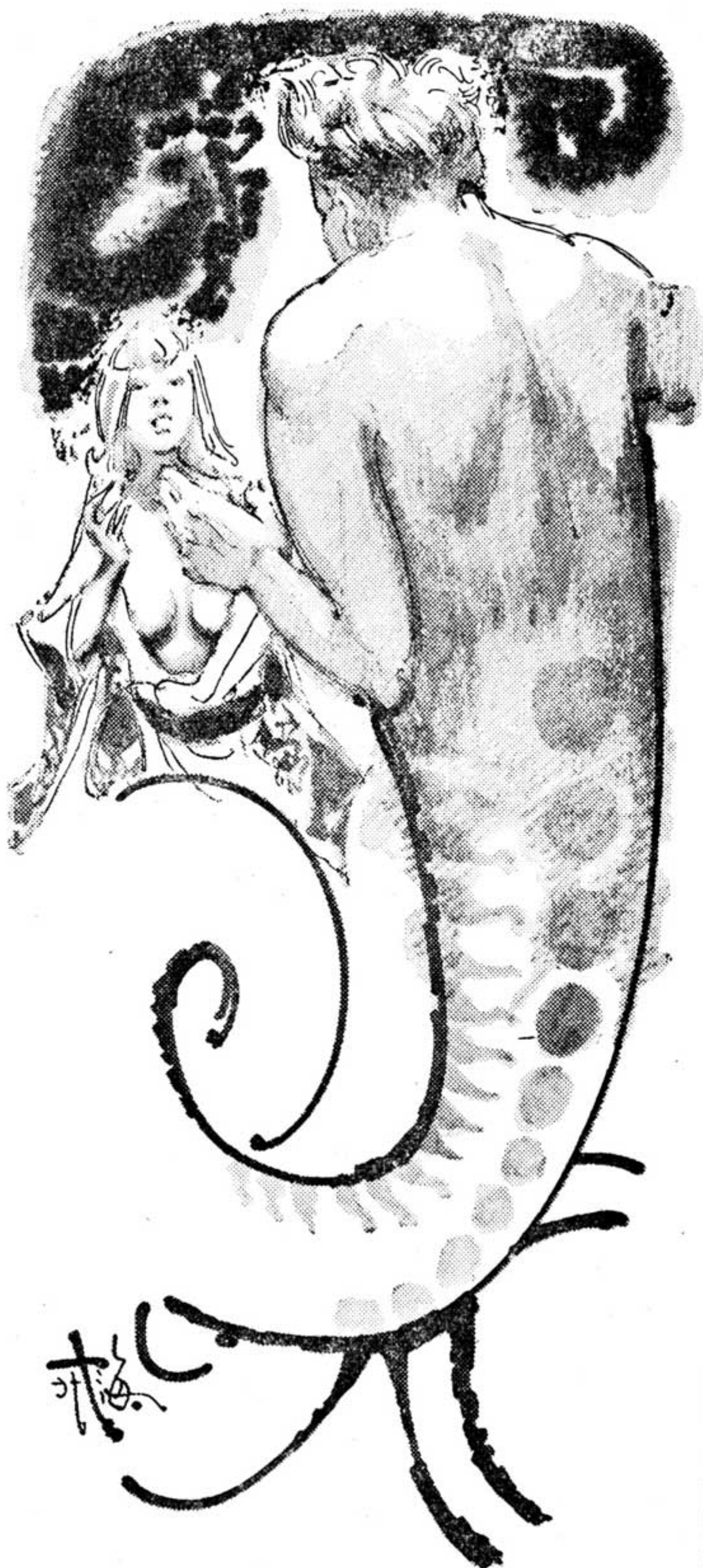
蛇男の衣服を着けない上半身が、あぐりの目の前で野性的な体臭を伴って近づいていたから……

胸元は強く頑丈にあぐりの目の前で、烈しい感情をかりたてていった。

うすべったいふとんの上で、わなわなと処

あまり喋らないようだけど、やっぱり、この体がいやなんだ。この、蛇が半身をおおっているのがいやなんだ。ね、そうなんだろう」

だったら、私は外観のことは少しも考えない。でも、あなたの心だって、私にわかるはずはないし……でも、噂にしろ公園の主の蛇



女の肉体はくるおしい空気にしびれていくのであった。

「あぐりさん、君は僕が化身までして恋するほど僕の心をとらえてしまった。さっきから

「ううん、私はどうせ片輪者よ。愛してくれ人なんてこの世にありやしないわ。ほんとうに、私の気持ちはだれでもいい、何でもいい、慰めてくれたり、愛してくれたりする人

がいるってよく聞かされたけど、やっぱり本当だったのね」

「そして、君の前にこうして現われて、君を僕のものにしようと一生懸命なんだ」

蛇男はあぐりの目をみつめたまま自分の化身が非常に大変なことだと説明するのだった。

あぐりは今夜、桜の道で、蛇やガマガエルに飢えた心を告げるように叫んだことを思い出した。

それが蛇男に聞えたのだろうか？

でも、それでもよかった。

あぐりの前にいる蛇男は、彼女を愛していると何度も、何度もくりかえしているのだから。あぐりは笑った。

その笑みの中に彼に対する好意がありありとかんである。

闇の中にシュルシュルとうろこのふれあう音をさせて侵入してきた蛇の執念も知らぬあぐりは、ギリシャ彫刻のような深いほりのあ顔をみやった。

この蛇男の瞳中に、ペロペロと赤い舌が優越的に燃えていた。

蛇男はもう沈黙したまま彼女の動きを見守っている。

もう、自分から愛という言葉に酔いしれているあぐりに近づかず、彼女の方から身を投げだしてくるのを待っているようである。

あぐりはみもだえしながら、

「ひどい方……。私はもうためらうことも忘れてしまいました。ね、この片輪者の私を抱いて……おねがい」

蛇男の胸の中にとびこみ、なまぐさい体臭の中に顔をうずめるのだった。

下半身の蛇身がピクピクとけいれんして、うろこを光らせてあぐりの体を抱くように巻いていく。

右足の不安定さを気にしながらも、そのたくましい力に陶醉していくのである。

（半分人間で半分蛇の男に、私は恋をしたのだ。この人は神力があるから私は安心していられるわ）

蛇男は、

「あぐり、もし、僕が人間になれたら、君はどうする？ でも、夜だけなんだけど」

「私、あなたの側にいたくてよ。でも、いつそうなれて？」

蛇は抱きしめていた腕の力を抜いて、悲しげに消沈してこういうのだった。

「それが、この下半身を人間のものと同じにするには、処女の両足が必要なんだ。何も、今すぐ、切断してくれろというんじゃない。口約束だけでいいんだ、真心でもって一言、あげるっていう言葉だけで、僕は晦日の前夜

に人間の男になれるのだ」

「私のはだめ？ 片輪だから。私のでいいんだったら、私、あなたにあげてよ」

蛇男の目の奥で狡猾そうな笑いがうずをまいているのを、あぐりは透視できなかった。

自分から両足を彼のためにやることを何のためらいもなく約束してしまった。

「僕に両足をくれる約束をしてしまって、君後悔しない？」

「ええ、どうせ、こんな足なんかいらなくてよ。あなたにあげるんだったら、私、本望だわ」

「じゃあ、約束したね、もう、君の言葉はとり消せない、僕は人間になれるんだ。ありがとう。お礼をいうよ」

「お礼なんて、口約束だけであなたが人間になれるなんて……、すてきだわ」

あぐりは幸福感からふいに性急な独占欲が頭をもたげてきた。

「もし、この足を今、あなたにあげるとしたら、明日、人間になれる？ そして、私に毎晩、逢いにきてくれる？」

蛇男はゆっくりと、

「うん」

といった。

「じゃあ、あげる。今、あげる、切り取って。私に毎晩、逢いにきてくれるのなら、私の両足ぐらい惜しくないから」

あぐりは興奮してたてつづけに喋った。

蛇男は、外面はむっとりとしながら、「そんなに君がいうのなら、一日も早く、まともな人間になろうね、毎晩、逢にくることにしよう。晦日まで十二日もあるし、君が足をくれるなら、もっと早く人間になれる。それに口約束ではなく、本当に貰えるのだから、きつと二十四時間、人間でいられるよ。あぐり、仲よく暮らそう。両足のない君は僕にとって大きな宝になるよ」

「うれしいわ」

「じゃあ、明日の晩、たしかに貰にくる。今夜はもうだめだ。僕の神通力も、数分で消えるから」

「本当に明日、きてくださいよ」

蛇男は、シュルシュルと蛇身にくねらせて、満足気にふとんの上に起き上った。

その時、落雷の音がして、あぐりはハッとした。

部屋の中がめらめらと炎のように燃えあがっているのだ。

蛇男の姿はいつのまにか消え去り、畳を這

う音だけが耳に残っているのであった。

「あつ、いない、どこへいったのだろう。部屋が燃えている。どうしよう、歩けない。まだ、足もやらないのに歩けない」

何度も何度も歩こうとしたが歩けない。額に汗が流れてくるのをぬぐうこともできずに、炎の中であぐりの杖のない体が、幾度も転倒するのであった。

あぐりは、苦しさのために失神してしまつた。遠くの方へ両足だけが、蛇男にひっさられていくような錯覚がおきてきた。

「これ、あぐり、どうしたんだい、あ、ぐり、——たいそううなされているが夢でも見たのかえ、あぐり、あぐり……」

母の絹江の声がしきりにあぐりを呼んでいるのだ。

絹江は、掛ぶとんをかぶって汗びっしょりになってうなされているあぐりに、おどろきながら、

「これはひどい熱だ、あぐり、あぐり、起きてごらん。頭でも痛いのかい。あ、ぐり」
自分の名を遠くの方でだれかが呼んでいるような、もうろうとした意識の中で蛇男のこ

とが浮んできた。

「ああ、あの人が呼んでいる。あの人が」
あぐりは薄目をあけた。

体中で精気をなくしたようなだるさで、熱っぽい感じが四肢にまつわるのである。

ことに両足は麻痺したように感覚がない。部屋の中はあかるい光りが射しこみ、雨上りの上天気、あぐりの頭の上にまばゆいほどであった。

あぐりの枕元に、母の絹江がぬれ手拭いと洗面器をいっしょにかかえて、不安気に、あぐりの顔をのぞいていた。

「たいそう、昨夜はうなされていたようだね。気分はどうだい。汗をかいているから拭いてあげよう」

「いいわ、体を動かすのがとてもいやなの」

「あんまり公園に何度もいくからさ」

「いいじゃないの。行きたいもの」

「でも、こんなに熱が出たら、おまえ、大変じゃないか」

「ねえ、私、うなされていたんじゃないのよ。とても、いいことがあったの。きつと、あの人のおしゃべりや私のおしゃべりが、眠っているお母さんには、うなされているように聞えたんじゃない？」

「何を、おいで、私は一晩中、おまえの側にいたのに」

「じゃあ、落雷を知っていた？」

「落雷？ いやだよ、あぐりは夢を見ていたんだね、きつと。かみなりさんなんて、おっこちやしないよ」

「あら、うそよ。お母さんは知らないのよ。夢だろうなんて、ひどいひどい。もう何もきかない。あっちにいった」

怒りだしたあぐりは絹江をむこうの部屋へ追いやってしまった。

ほつねんとふとんの上に仰臥すると、昨夜のことが、走馬燈のように頭の中をまわった。

落雷のあと、たしか部屋中が炎のように燃えていたのを思い出したが、その残骸はどこにもみあたらなかった。

今一度、あの半身を蛇におおわれた男のことを考えるのである。

「あの人に、今晚、足をやる約束だったわ。

あの人は、人間になって私の側にいてくれることを誓ってくれた」

夢かうつつか、あぐりの妄想ははてしなく広がっていった。

体中が熱っぽく、起きあがるのさえ自分の



意のままにならぬほど、病魔にとりつかれていた。

母の絹江が心配しながら、足をゆっくりさすってくれた。

やはり感覚はないのである。

「両足をやるといったのを覚えていて、たしかに今晚、蛇男はやってくるかしら、早く逢いたい」

熱にうかされたあぐりの脳裡には、昨夜のことだけが強くやきついていくのだった。あぐりはまた眠った。

絹江は迷信深い女で、こんな熱にうかされているあぐりを見ると、きつと何かに憑かれたのだと思い、神様に見て貰うことにした。

足をさすっているうちにあぐりが眠ってしまったのをさいわい、三軒となりの野死のおば、のところに相談にゆき、おまいりをしてもらうことにした。

野死のおばとはおキツネ様の呼び人で、いろんなことを、ズケズケと云いあてるのであった。

野死のおばは、黄色いらんぐい歯をのぞかせて、たえず、ブツブツとなにかつぶやいていた。

おばはあぐりの枕辺にたつと、おキツネ

様におうかがいをたてていたが、体中をふるわせて、

「おお、おそろしいことじゃあな。あぐりさんには死神が憑いとる。それを憑けたのは公園の池の主の青大将じゃ……」

「どうにか、なりませんでしょうか」

「うーむ、この蛇は古い奴で、もう何人もの人の体をねらっとるんじゃ。昨夜から、あぐりさんの様子が変なのなら、きっと、何か体に故障がきとるじゃろう。どこか、痛いといわなんだかね」

「足が変なのです。歩こうとしないものですから」

「家の中に入れんようにするから、公園には晦日まで行かんことです。そうすれば死神からは守られる。しかし、足はだめですよ。いざりになるでしょうよ。この調子では」

「公園にやらねばよろしいのですね」

「絶対にやってはまずいですぞ。おばばは嘘はいいません、では、お大事にな」

野死のおばばが帰ったあと絹江はへなへなとすわりこんでしまった。

晦日まで十日余り、思っただけでも怖しい気がした。

あぐりは何も知らぬ氣に眠っていた。



食事もせずに、死んだように目を開かないのが氣になった。

三日目にまた、強い風と雨が襲って部屋の中を真暗にしまった。

濡れ縁に公園の桜の花びらが、うす汚れてはりついた。

三日目になって、あぐりの熱は下り平温になってきた。

床の上に起き上ろうとすると、足の感覚がまったく失せているのに氣が付き、ゆがんだ顔をして絹江に蛇男の話しようとしたが、思い止って口をつぐんだ。

「いじわるな人だわ、翌日の晩に来るなんていって、黙って私の足を盗んでいったのだわ。仕返えしをしてやる。仕返えし……といっても私にどんなことができるのだらう。そうだ、いくらなんでも一度くらいは逢いにきてくれるはずだわ。私は足をあげたのだもの。神経をやってしまったのだもの」

医者にかからないあぐりは、一途に夢の中の蛇男が自分をこんなにしたのだと思ひこんでしまったのである。

医者に診察して貰ったら、小児性下肢麻痺という病名が、カルテに記されるかも知れない。

今のあぐりの気持ちを消沈させていく理由は、やっぱり蛇男にうらぎられた、それだけのものではなかった。

あぐりは蛇男に恋をしてしまったのだ。

夢の中の蛇男に恋をして、あの夜以来姿をみせない蛇男にやるせない思慕の花が、胸の中で開花していったのだ。

四日……。五日……。

けだるいような体だったが、あの晩より精気もあり、元気をとりもどしたあぐりは、むしろように公園の桜に惹かれていった。

「お母さん、私、公園に行きたい。桜の花を見たい。でも、松葉杖をつかえないから、お母さん、おぶって連れて行って」

「そりゃあ、おぶって連れていくぐらい、簡単だけでもさ、もう桜は散って葉ばかりになったわね。見てもつまらん」

「そう、私が寝ている間に散ったのね」

「晦日すぎれば、つごもり池の八重桜が開くんだらうから、連れて行ってあげようね。それまで辛棒し……」

「うん」

あぐりの返事の中には、いつわりがあった。今日にでも公園に行き、あの主である蛇に逢いたい衝動は計画的に、あぐりに素直な

言葉をはかしたのである。

絹江は安心して気をゆるしてしまった。

その夜、あぐりは母の寝息をうかがい、赤ン坊のように畳を這って外へ出ることに成功した。三十日の十二時前であった。

外に出たのはよかったが小雨と一緒に風が強く吹きまくり、土の上に這ったあぐりをみじめにしていた。

公園まで赤土の道で、雨のため、ぬかるみ、両手をあやつる肩先きに、土のはねがべつとりついてきた。

体中が雨にぬれて、這いつくばる胸元には春の夜の冷気がしのびよって来る。

真暗いぬかるみの道を一匹の環形動物のように、伸縮しながら公園の方へ這っていた。

なめくじか、みみずのように爬行するたびに、ぐにやぐにやと麻痺した両足が、胴体にくっついてくる。

あぐりは赤土道を過ぎて小石を敷きつめた坂道にきた時、もう、ぐったりとなっていたが、蛇男に、それも人間の姿をした彼に逢えると思って、やすむことなく、サーカスの小屋が、かかっていたところへ上ってき

た。

赤いほんほりの光りは消え、公園の中心に植え込んであるソテツが、怪物のように黒い影を見せて、強い風にざわめいていた。

あぐりは、その暗闇の中に青い二つの目を捜した。

一心に這いつくばり、顔だけを左右に向けてあの夜の青い目の光りを捜した。

どこにもそれらしき光りはなく、雨滴で重くたれ下った桜の葉が、ボタ山を登るトロツコの光りに、チカチカと映えるだけで、又、もとの闇へかえっていく。

あぐりは、もうここまで歩きだした体を止めようもなく、のろのろと鈍重につごもり池の方へ這っていった。

疲れのために、頭がガククリぬかるみの中に、埋ずもれる。

あぐりは鬼子母のおやしをすぎて、つごもり池につづく、小道を這っていく。

人の通った跡はなかったが、雨水をたっぶり吸った土は、手を伸すたびにずぶずぶと深くもぐる。

つごもり池を守っている堤防に上る時、何度も何度もすべり落ちてしまう。やっと草をつかまえて這い上っていった。

堤防のすぐ下で、風に波をたてられた濁水が闇の中で渦まいてゐる。

「私は何のために、つごもり池まで、こんなみじめな恰好をして這ってきたのだろう」

這いながら、小石を投じた。

静かな水面ではなかったので、小石は波紋さえも残さず、池の底へ沈んでいった。

あぐりは、安心して、池の対岸の方を眺めた。

青い二つの光りが、ゆらめいているではないか。！

あぐりは狂喜して、ズルズルと水面の方へ這っていった。

あの光りのそばへ……。

そこに蛇男がいるのだ！

渦まき濁流が、それを見守り、水面に両手がとどいた時、あぐりの体をひとのみにしてしまった。

あつという間に、あぐりの体は、つごもり池の中に沈んでしまったのである。

あぐりのいざつたあとが、堤防の方から悲しい跡を残していた。

その時、晦日の午前二時を告げる炭坑のサイレンが鳴り響いた。

死を教えるように。

あぶちつく
みすてりい

天使の犯罪

宇留
利一

次号
予告



犬公方
余聞 妖雲練馬御殿

小田桐 爽

古正英 生・画

★非道の政令はここにまたしても美しい犠牲をたおそうとする！★

政道と私情

その年の夏、綱吉はどうも気分がすぐれなかった――。

全身がだるく、足がしびれ、次いで口がこわばるようになった。

起居振舞いや言語に支障をきたすほどではないので、それは少しも目立たなかったが、綱吉は内心、狼狽した。

四十代の半ばには、まだ間がある。気力も若者に劣らず充実しているつもりであった。

しかし、考えてみると、腹違いの兄、前將軍家綱の死は四十才であった。父の家光も四十八才で死んでいる。また、自分の嫡子、世継ぎの徳松は五才で夭折しているのである。

「將軍家といえども天命には勝てない。見苦

しく天命にさからうようなことがあってはならぬ」というのが綱吉の死生観であった。

だが、自分が病んでみると、やはり冷静ではあり得ないことを知った。

彼は、愛児徳松の死に際して自分が示した「冷静さ」を、苦渋の思いで想起するようになった。

天和三年の五月――徳松が病んだ時、柳營の医官はこぞって、吉田策庵を推薦した。策庵は江戸随一の小児療治の名人として知られる医師であった。

ただちに迎えの急使が策庵の屋敷へ赴いたが、策庵はなぜかそれに応じようとはしなかった。

綱吉は憤激した。

「医は仁術と申す。即時に病者のもとへ行き

てこそ仁術であろう。しかるに策庵とやらはおのれが勝手を構える不屈き者。余が招いてさえかくの如き仕儀なれば、下々の者にはさぞや難儀を与えておろう。許しがたき痴れ者！」

という彼の言葉で、策庵はたちまち禁獄される身となった。

策庵に代って、松平大膳太夫のお抱え医師であった山添宗碩という者が召し出された。

しかし、徳松の病状は次第に悪化するばかりだった。そういうころ、柳沢出羽守保明と並び称される綱吉の寵臣、牧野備後守成貞がこう進言した。

「畏れながら、徳松君の御療治に当るべき医師は吉田策庵において他にはござりませぬ。

何卒、いま一度、策庵を御登用遊ばされます



るよう……」

だが、綱吉は言下にこれをしりぞけた。

「その儀、相成らぬぞ。いま、いかに徳松が病い重かろうとも、その故に天下の政道を曲げることができ得ようか。……生死は天命で

ある。政道は天下の鑑じゃ。私情をもって仕置の軽重をはかるが如きことは許されぬ。徳松の命は天命に任せる……」

といったのである。

間もなく、徳松は死んだ。そしてさらに、

徳松の死を知った吉田策庵が、伝馬町牢屋敷の揚り屋で自害を遂げた。

策庵は遺書を残し、無実を訴えている。

「当日、自分は不在であった。御召出しに応じなかったのではない。何者かの奸策により自分は罠に落ちたのである——」
という意味の言葉が書かれてあったのだが、もとより綱吉はそこまでは知らない。

彼はただ、冷厳でありすぎたこ

とに後悔を覚えるのである。あの時、牧野成貞の進言をいれて策庵の罪を許していたら、徳松を死なせずに済んだのかも知れぬ——と思うのだ。骨肉の情が政治の道より尊い場合があるのかも知れない。少くとも絶無とはいえないのであろう、と考えるのであった——。
(いかにも、生死は天命である。……しかし天命は人事を尽した上

大奥後宮秘史・特集

で待つべきもの……」

不意に、綱吉がいった。

「保明……保明はおらぬか？ 医師をよべ。道三をよぶのじゃ！」

脚 氣 公 方

「……おそれながら拝しまするに、上様には御ン脚氣と拝診し奉りまする」

祖父の代から三代続いた柳營医官の筆頭、曲真瀬玄洌は綱吉の容態をそう見立てた。祖父の称号であった道三法印をついで、今は玄洌が道三と名乗っているのである。

もとより、凡医ではない。

「なんと！ 御脚氣といわれるか？」

かたわらに控えていた、將軍家御側用人の柳沢保明が大仰に驚愕して、聞き返した。

三十才を過ぎたばかりだが、側近第一のお氣に入りである。後に將軍家の諱名、つまり綱吉の吉の字を給わって美濃守吉保と名乗り大老職にまで進んだ利ヶ者だ。

「いかにも左様です」

道三法印は大きくうなずき、明確に断定してみせた。

「それは……まことにおそれ多い。して、原因はいかなることか？ 上様の御身を守護し

奉るわれらに、この上重ねての手落ちがあつてはならぬ故、憚りなく申されよ」

「されば……脚氣の病因はいまだ不詳でございます。なれど、その症状は、病む者の末梢神経を犯し、下肢、下腹、及び口唇を麻痺しことに脛下に浮腫を発するをもつて特徴と致しまする、また脈搏迅速にして尋常ならず、尿量を減ずるもの、……上様の御症状はまさしくこれに相当いたしまするが故に、御脚氣と拝診つかまつりました」

「して、その療法はいかに？ 道三殿、療法を申されい」

保明は、じれたように促した。

「治癒の法は、転地療養が最も効能いちじるしきものでござります。おそれながら上様には、やんごとなき御身に加えて多端の御政道につかれ給うが故に、山野の清爽にお親しみ遊ばす機会が少なく、これがこのたびの御病いを誘発せられしかと、愚考つかまつります」

御簾の内で二人のやりとりを耳を傾けていた綱吉が、何事かに思い当つたような表情で独りうなずいた。

学問好きの將軍である。彼は鷹狩りのような武張った行事を好まない、いわゆる「文武両道」の遺風を踏みはずしたような貴公子型

の性格であつた。

学問のほかには好きなことといえば、享楽である。能楽、男寵、女色、遊宴、そして生類憐愍狂という奇怪な資質も持っている。それらの中に強健な体力を造り出す要素は一つもなかった。

「転地療養……と一口に申されるが、上様が江戸をお離れになり給うなどは、まことにゆゆしきこと、天下万民のため、経綸の御恵みを垂れさせ給う御尊志にそむき奉る結果となり申そう。何ぞほかによい療法はござるまいか？」

「これはしたり！ 柳沢様のお言葉とも覚えませぬ。上様、くれぐれも御自愛遊ばされてこそ天下万民の御ためござりましょう。脚氣の病いが悪化亢進する時は、脚氣衝心と申す急変も、まま起るものでござります。にわかには知覚が麻痺し、四肢の運動叶わず、呼吸急迫を来たし、ついには一命をも失います。この儀、御賢察あつて何卒転地療法をお採り上げのほど、道三、謹んで願ひ上げ奉りまする」

意外に強い言葉で主張を続けたのは、医師としての信念が、保明の阿諛迎合的な態度に反撥するものを覚えさせたからだだった。

大奥後宮秘史・特集

(小癩な奴！)

保明は陰険な眼の色で、無言のまま道三を眺めた――。

「よい、兩人とも、大儀であった。余のためを思うそち達の誠心、過分に思うぞ。余は道三法印のすすめに従うことに致す。とは申せ江戸を離れるのではない……」

「は？……」

平伏した二人は、綱吉のいう言葉の意味をはかりかねて、怪訝な表情となった。

「江戸を離れずとも、転地に等しい養生をし得る土地は幾らもあるぞ。案ずるには及ばぬことじゃ……」

綱吉は申し聞かせるような口調でいった。

元来、講筈道楽の彼には、好んで中庸を講ずる気質があった。幼少から学問を好み、諸子百家の書に通じ、みずから学事の教授も行なう彼は、孔孟の教を説くには君主がまず仁者でなければならぬ、という認識を持っていた。そして、仁とは中庸を尊ぶものだ、という解釈を持っている。惜しむ

らくはそれを実践し得ず、かえって学識を歪めた形としての悪政をしく結果とはなったが――ともかく、この日も、保明と道三の二人は共に立場のきずつくことなく、

「へへ！ ありがたきお言葉……」

と感にうたれて、その場を退出したことであった――。

練馬御殿

「どうでえ聞いたか、公方様の御殿が新しく練馬に建つんだとよ……」

「練馬たあ何でえ？」

「あれ？ てめえは練馬を知らねえのか？」

お江戸の外、板橋の向うにある、その、なんだ、つまりよ、ずうっとこうダダっ広い野っ原のことだあな」

「へえ……何だってまた、そんな野っ原に公方様の御殿が建つんでえ？ これからはお犬様と一緒に暮らそうってえ寸法か？」

「コン畜生、よくよくなんにも知らねえ野郎だな。その御殿でよう、女を抱きながら脚気の養生をやらかそうってんだ。公方様はな、大きな声じゃいえねえが、今や脚気で明日の命も知れねえ体だとよ。御本尊様さえたばっちまえば、御政道が変って犬に頭を下げな

くても済むだろうし、鰻の蒲焼も喰えようってもんだ」

「兄貴、ちと声が大き過ぎやしねえか……」

「べら棒め、てめえがあんまりトンチキなことをいいやがるから、つい大きな声も出したくなろうじゃねえか、気をつけろい、間抜けめ！」

――そんな噂が江戸の町に流れ始めた、將軍の保養地は武蔵国北豊島郡練馬村と定められたのである。

練馬は江戸の郊外だ。政務と養生とを兼ねて行なえる土地として選定されたのである。

この辺り一帯を支配する豪族、豊島勘解由左衛門を太田道灌が亡ぼしたのが文明九年であった。以来、道灌はこの辺りの土地を軍馬の調練場として用いた。練馬という地名の由来も、そういう故事による。

だが、今ではひなびたただの農村でしかない。

そこへ、突然、御殿の建築が始まったのである。江戸市中から、大工、左官、石工、植木職、等が乗り込み、夜を日についての突貫工事が開始された。

養生のためのかりの建物――とはいってもやはり將軍の住む所である。でき上ったもの

は、宏荘にして華麗な御殿であった。

世にこれを「練馬御殿」という。

まだ壁の土も乾かぬうちに、綱吉は江戸城をたった。

小石川御門から出て川越街道を行き、練馬へ至る道およそ三里は、数日前からすっかり清掃が行き届いて、道中の警護も万端抜かりがない。

大がかりな行列の中で特に目立ったのは、大奥の女達大勢と愛犬の駕籠である。

徳松を失って以来、綱吉はまだ世継ぎの子を得ていない。

綱吉が成年の生れだから犬を大切に扱うよう——という「生類憐愍令」も、世継ぎの子を持たないあせりから成立したものだ。

綱吉の寵を得て男子を生むことのできた女は、次代の將軍の母となれる。

そのため、大奥の女達の間では陰に陽に明闘暗争が続けられていた。

幾人かの実力者の下で幾つかの派閥ができている。その中でまた、駈け引きや裏切りや反目や策謀など、あらゆる形で醜い競争が常に行なわれていた。

すなわち、そういう競争に勝ち残った女達が、綱吉の供をして練馬御殿へ向うのである。

練馬大根由来

練馬の綱吉は遊蕩に明け暮れた。

政務——とはいっても有名無実であった。

政治のことは保明や成貞、綱吉の生母の桂昌院などが一切をとり仕切っていた。

綱吉自身が行なうべき事柄はただ一つ「子孫繁栄に関する義務」だけである、

政務にあらずして性務——というのは下手な語呂合せのようだが、まずはそんな具合のものであった。

脚気の症状も気のせい快方へ向うように思えた。何よりも、ここは江戸城では得られぬ解放感があった。

思いきり気ままに振舞うことができる。城中では奇妙なしきたりや習慣や日課が定められていて、いくら將軍家でも肩がこるような毎日であった。

それが、練馬の生活ではだいぶ簡略化されている。

ある朝——綱吉はふと思ひ立って望楼へ上ってみた。

期待通り、富士がよく見えた。

「……いつ眺めても、富士はよいのう」
眼を細めて、少年のように満足した。
「おそれながら……」

不意に、静かだがしかし張りのある女の声
を聞いて、綱吉は振り返った。

「これにて……」

女は平伏したまま、遠眼鏡を捧げている。
阿蘭陀渡りの望遠鏡であった。

「ふむ……よくぞした。これへもて」

傍に控える初瀬という老女の手を経て遠眼鏡は綱吉へ渡された。

「見ぬ顔じゃな、名は何と申すか……」

綱吉がたずねた。彼の関心はすでに富士を離れていた。

「於伝の方様の部屋子にて、楓と申す新参の者にござります」

初瀬の言葉に合わせて、女は静かに一礼した。抜群の美貌が、はじめて綱吉と視線を合わせた。



(心利く女……愛い奴じゃ)

無言で綱吉は軽くうなずき、再び富士に向って遠眼鏡を構えた。

これで——その夜の伽は決まったのである。將軍に名を聞かれた女は、その日のうちに「御中藤」の身分を得て、その夜、將軍の寢室に侍る。一夜を過ぎると「お手付の御中藤」とよばれる大奥の重役となり、部屋も待遇もすべてが変るのだ。

綱吉は楓が気に入った——。

羨望と嫉視の渦の中心にいて、楓はまた綱吉の心を確実につかんで行き、次第に勢力を増していった。

同じころ、練馬御殿で不思議なことが始められた。御殿の裏庭を畑とし、大根が植えられたのである。

道三法印の診察により、綱吉の病状は大し

て変っていないということがわかった。
「上様には、毎朝、素足で土をお踏み遊ばすよう……」

と道三法印は付け加えた。

そこで、御殿に大根畑を造る案が生まれたのであった。畑を毎朝見廻るようなことになれば療法として有効——というのである。

早馬が尾張へ飛んだ。名産地の尾張から大

根の種子を取り寄せるためだ。

これがすなわち「練馬大根」の由来である。

虚構ではない。「徳川五代將軍綱吉、脚氣を病み、江戸郊外、練馬村に転地す——」と史書にも明記されていることなのである。

大根がどうやら大根らしい形をみせるまでに育ったころ、楓の懷妊が伝えられた——。

狂 犬

「練馬の御殿で公方様がな、毎朝大勢の女達と一緒に畑の大根を引っっこ抜いて喜んでいらんだとよ。妙チキリンなことになったもんじゃねえか」

「今度は大根公方ってわけかい？」

「何でも桂昌院様が考えついたことだというが……」



「なるほどね。やっぱり、生れが八百屋の娘だけのこたアあらあな。考げえることが違わあ」

そんな噂が江戸へも流れて来た。

綱吉の母の桂昌院は、京都堀川通藪屋町の八百屋仁左衛門という者の娘だった。

それが、三代將軍家光付きの中蔵、お万の方の部屋子として大奥に入り、家光の寵愛を得て正保三年に男子を生んだ。これが綱吉である。「女、氏なくして玉の輿に乗る」という言葉の典型のようなものであった。

だが、悪政への反感は庶民の間ですでに根強いものとなっている。

「八百屋の娘が……」

「大根公方……犬將軍」

などと、ひそかに罵ってうっ憤をはらし、狂歌や落首にもそういう言葉がしきりと使われる今日このごろであった。

その、暮らしにくい江戸に、近ごろ痛快な人物が出没するようになり、市民の喝采を博していた。

正体は誰も知らないが「犬斬り侍」と呼ばれ、大変な人気だ。

犬を相手に辻斬りをする——といえればわかりが早い。夜間、あるいは人眼のない場所では昼間もそれは行なわれたが、一太刀で鮮かに犬の首を打ち落すので、役人に現場を押えられることがない。

奉行所は躍起となって探索を続けたが、犬

斬り侍は風のように神出鬼没であった。

そんなある日——牛込築土八幡の近くで狂犬が通行人に咬みつく、というできごとが起った。

咬みつかれたのは、商家の手代ふうの男であった。

男は恐怖に蒼ざめた顔をひきつらせながら救いを求めた。

「助けてくれ！ 狂犬だ！ 誰か、助けてくれ！」

足に咬みつかれたのを必死に引きはなそうとするのだが、居合わせた人々は遠巻きにただハラハラと見守るばかりだ。

かわいそうだが見殺しにする以外に方法はないのである。犬から危害を加えられた場合でも、人間がそれに反撃することは大変な重罪となるのだ。もし手出しでもしようものなら、たちまち打ち首である。各所に、そんな例がいくらかあった。被害者自身でさえ一切の抵抗が許されないのだから、他人の場合はなおさらである。まして相手は、一見してすぐそれと知れる狂犬なのだ。

男は脂汗を浮かべ、救いを求める声も悲鳴になつていた。

その時である。一人の若い娘が、勇敢に近

寄って行った。そして、路傍の天水桶から水を吸み出し、いきなり犬へ浴びせかけたのだ。これは有効な方法だった。

狂犬は水に愕いて物凄いい唸りを発しながら逃げ去ったのである。

「あ、ありがとうございます……」

「狂犬は水を恐れるものです」

娘は半ば見物の者達へ教えるような口調でいつてから、手当の指示をした。

「さ、早く、傷口の毒を吸い出すのです。充分に吸い出したら、口をよくおすすぎなさいませ」

男はうなずいてその場へ坐り、足の傷口へ唇を当てた。

犬 分 け 水

沈着な行動であった。

身なりは質素だが、美しい娘である。居合わせた者達は口々に称讃した。

「どうでえ、偉え娘じゃねえか」

「全くだ！ てえした度胸だなあ」

「それに比べるってえと、てめえ達は何て間抜けだい！ いい若えもんが人の難儀を黙って見物たあ、呆れ返ってものもいえねえや！」

「おや？ この野郎、妙なことをいうじゃね

えか。そういう手前は、いってえ何をしていやがったんでえ！」

「俺か？ 俺は、その、何だ、水を探したんだが、あいにくといいい水がなかったんで……」

「べら棒め！ いい水も、悪い水もあるものか。水に変わりはねえやい！」

妙なことから弥次馬の間で口喧嘩が始まった時である。

「待ちな。お犬様に掛けていい水と、よくねえ水は、確かにあるぜ」

といった者がある。牛込袋町に住む清蔵という岡っ引だ。

名前は清蔵だが人柄は少しも清くない。至って評判の悪い四十男である。

それが帯にはさんだ十手を抜き取り、蛇のような眼つきとなって娘の跡を追った。

「やい、娘。御用だ！ 神妙にお縄を頂戴しろい！」

「あ、何をなさいます！」

「御法度破りの咎めで手前を縛るのだ、シタバタするな！」

早縄がからみつき、娘はわけもわからぬまま、キリキリと後手に縛り上げられてしまった。

たというのです！」

娘は身悶えして叫んだ。

「とほけるねえ！ 知らねえはずはあるめえ。天水桶の汚ねえ水をお犬様に浴びせやがった罪だ！」

「人助けでしたことです。それがどうして罪になるのですか！」

「文句があるならお白洲で申し上げろ。さ、歩け！」

十手で背を小突かれ、娘は前へのめった。不思議な罪である。だが、そういう罪が存在する狂った時代だった。

人間が犬を傷つける場合のほかに、犬と犬との喧嘩がある。その時は犬を保護するため水を浴びせて離れさせる定めとなっていた。

その用意に「御犬分け水」というものが市中に置かれていた。これは天水桶とは別に、常に専用の桶の中へきれいな水を汲んでおくのである。

犬にのみ使用する水であり、汲み替えを怠らたってボウフラなどが湧いたならば、これまた罪となる。

温情主義の役人なら、見て見ぬふりをするだろう。だが、清蔵は残忍な岡っ引だった。

ゆすり、たかり、いやがらせ、賄賂とり——

十手をちらつかせながら、何でもやる奴である。

この男にとって「お犬様時代」は都合がよかった。

ドブの水を道へまくとボウフラが通行人に踏み殺されて罪になるから——と、そんなことにまで神経を使った時代である。罪人はいくらでも造り出せるのだ。

犬斬り侍

清蔵は荒々しく娘を引き立てて行く。

当然、弥次馬の間から怨嗟の聲が湧いた。

「畜生め！ ひでえことをしやがる！」

「あんな野郎こそ咬まれりやよかつたんだ！」

「誰か、何とかしねえかい」

「相手が悪いやな。……とはいっても、あんないい娘が人でなし野郎に縛られたんじゃあ、かわいそうだしな」

「ああ、こんな時に犬斬り侍でも飛び出しやいいんだが……」

大奥後宮秘史・特集

皆、自分の身が可愛いから、いまいましてに見送るだけである。

「犬斬り侍か……よし、飛び出してやるぞ」といった者があった。

深編笠の浪人者である。スタスタと無難作に清蔵へ近寄った。

「おい、犬。ちょっと待て……」

「俺のことか」

清蔵はせいぜい凄んだ顔つきで、振り返った。

「左様。お前のことだ。どうだな、犬。その娘を解き放してやってはくれぬか」

「ならねえ！ この娘は天下の重罪人だ」

「犬。そう固いことをいうな」

「や、やいやい！ 俺あ犬なんかじゃねえ。

清蔵ってもんだ！」

「犬と呼ばれたのが不服か……」

「別に……不服ってわけじゃねえ」

清蔵は口ごもった。

「そうだろう。犬が人間より偉い世の中だからな。お前などは犬と呼ばれば本望だろうが、時にな、犬」

「な、何でえ！」

見守る者達の間で笑声が湧いた。

「ものは相談だが、その娘を放してやらぬな

ら、不本意だが、犬一匹、退治しなければならぬ。だから……な、放してやれ」

「ふざけるねえ！ てめえは誰だ！」

「俺か。俺の名は、人呼んで、犬斬り侍！」
いうが早い、浪人は抜き打ちに一太刀、

清蔵の頭の辺りへ見舞った。

「わあ、や、やりやがったな！」

清蔵は頭を抱えて、地面を転げ廻った。

その間に浪人の刀は軽快に動いて、娘の縄目を切り解く。

ようやく命に別条のないことに気づいた清蔵がヨロヨロと起き上って、自分の頭へ手をやった。ザンバラ髪となっている。鬚を切り落とされたのだ。

「畜生！ い、犬斬り侍、御用だ！」

からくも十手を構えた。

「俺もお前に用がある……」

侍は娘の体から離れた捕縄を拾い上げて、

清蔵に近づいた。

「犬め、神妙にするがいいぞ」

手際よく後手に縛り上げてしまった。

そして、軽々と暴れる清蔵を担ぎ上げ、天

水桶へ歩み寄った。

「頭を冷やせ」

声と一緒に、清蔵の体を逆さまに水の中へ

投げ込んだものだ。

「いよう！ 犬斬りの旦那！」

「待ってました！」

「日本一！」

無性に嬉しがって囃し立てた。

「……さて娘御。落着いてはいませんか。

逃げるのだ、拙者について来なさい。逃げ方を教えてあげよう」

「はい。お教えくださいまし」

深編笠の下で、浪人は白い歯をみせて笑った。

反逆児

一刻後――

牛込榎町の済松寺という寺の庫裡で、浪人と娘が向い合っていた。

「……そうか。吉田策庵殿は、お手前の父親か」

といい、深くうなずいた浪人者は、年のころ三十七八か。色は浅黒いが武芸者らしい引き締った顔立ちだった。

「策庵殿が無実の罪で捕われたのは、おそらく柳沢あたりのさし金によるものだろう。柳沢は將軍に世継ぎの子がないようにと望む男だ」



「誰のしたことかは存じませんが、恐ろしい罠でございました…」

「お手前も苦勞をされただろう」

娘は臉を伏せて、言葉もなくうなだれた。

「わかる。拙者にはよくわかるのだ。何をかくそう、拙者も天涯にやるべのない孤児として、生きて来た男なのだ。拙者の父は別木庄左衛門といつてな、慶安の昔、徳川幕府覆滅の企てを起したのだが……」

浪人——別木庄三郎は、身の上を語り始めた。由井正雪の乱があった翌年、慶安五年の秋九月に、幕府打倒の計画を抱く浪人の一味が一斉に捕縛されるといふ事件があった。

長島刑部左衛門という武士の訴人により、陰謀が未然に發覺したのである。

首謀者の別木庄左衛門以下、藤江又十郎、林戸右衛門、土岐与左衛門、三宅平六、等、一党の者ことごとくが妻子と共に捕えられ、市中引廻しの上礫の刑に処せられたのだが、別木庄左衛門の一子庄三郎は幸運にもこの難を逃がれたのである——。

「拙者は、父や母や姉などが引き廻されるのを幼い眼で見たのだ。死後もなお刑場にさらされるむごたらしい姿も見た。拙者の父は歪んだ御政道をただそうとされたのだ……。それから三十余年、世の中はますます悪くなって、犬がのさばり歩く、このありさまだ！」

庄三郎は吐き捨てるようにいった。

「拙者は、父の遺志を継ごうと考えた。だが拙者一人では、所詮、どうにもならぬ。三十年磨いた剣が犬斬り剣法で終るとしたら、いかにも無念だが……百合枝殿、お手前は敵討ちはきらいかな？」

「は？……」

「犬公方を斬るのだ。今なら斬れる」

出産の怪

大根畑に親しんだためかどうかはわからない

いが、綱吉の脚気は徐々に回復して行った。
練馬へ来てから四ヶ月目に、綱吉は一度江戸城へ帰った。

その際、愛妾の楓は練馬御殿へ残った。

楓はすでに練馬御殿第一の勢力を得て、このすべてを支配する女主人の格式であった「男を生んでくれい。立派な男の子を生むのだぞ。生まれるころには、余はまた、ここへ戻って参る……よいな」

と、そんなことをいい残して、綱吉は練馬をたった。

大奥の生活をまだよくは知らぬうちに練馬へ来た楓を、すぐに江戸城へ連れて行くわけには行かぬ、と綱吉は考えたのである。

男ならなおよし、また、たとえ女の子が生まれたとしても、出産の後に江戸城へ入る——という異例の処置が定まった。

摩擦の起こるのを避けるためである。女達の間で毒殺事件などが行なわれた前例もあるのだ。

いくら勢力のある女でも決して油断はできない伏魔殿なのだ。

——楓の出産が迫ったところ、綱吉は再び練馬御殿へ入った。

二日後には、柳沢保明の行列が練馬へ向つ

た。

出産の準備がすべて終わった。

取り揚げ役に選ばれたのは、楓のお気に入りの一人で医術の心得のあるお初という女である。

やがて、ある日の深夜——

分娩が行なわれた。

「ただ今、無事、御生誕でございます」

保明の報告を聞いて綱吉はすぐに起き上った。目が冴えて睡れはしなかったのだ。

「うむ。すぐに参るぞ……」

長い廊下を急ぎ足に行く綱吉の表情にも、やはり父親となる者の喜びがあふれていた。

「男か？ それとも女か？ いずれじゃ」

せわしくたずねる綱吉は、しかし、その部屋を異様なものと感じ取った。

取り揚げ役のお初は平伏したまま答えず、肩の辺りが小刻みにふるえていた。

次の間に控える手伝いの女達も同様であり

それは、誕生のめでたさとは全く別な、何かを恐れる姿と見えた。

「……死産か」

気落ちしたように呟いた綱吉は、数歩をあと寄り寄りして愕然とした。

彼が見たものは、四、五匹が一塊りとなつ

てフヨフヨと蠢めいている犬の仔であったのだ。

「あッ！ これは……」

あまりのことに、綱吉はしばしの間絶句した。

「……何としたことだ、何としたことなのだ

！ 楓！ そちは犬の仔を生みおったのだぞ！」

不覚にも、綱吉は急激な目まいに襲われてその場へ、ヘタヘタと崩れ折れた——。

綱吉 悩 乱

大奥の女達が飼犬を愛玩することで、妖しい噂の立つ場合があった。

將軍から夜の伽を申しつかる以外には、全くの禁男の生活である。

一度も將軍の目にとまる機会を得ず、生涯を生娘のまままで終る女もおびただしい数にのぼる。

また、一度はその機会を得たが、間もなく寵愛が遠のいて行く場合も無数であった。それはそれで、女達に烈しい悩みを植えつけることだった。

ために、大奥では不自然な形の「夜」が存在する。

同性愛、宿下りの際の役者買い、城内に入りする僧侶との命がけの密通——その他、悶えを解決（とまでは行かなくても）する方は、あらゆる種類が用いられていた。

普通の將軍ならば、犬の仔を見ただけでただちに女を成敗するであろう。

しかし、綱吉の場合はまことに皮肉であつた。

「生類、殊に犬を尊まうべし」という前代未聞の法令を造らせた者は、ほかならぬ綱吉自身である。

理屈から行けば、犬の仔が生れた奇蹟に感激しなければならぬところであつた。

ともかく——楓は産後の身を座敷牢へ移された。

「不埒な女め！」

と綱吉は呪つたのである。

もはや不合理でもよい。

彼は楓を窮命する決意をした。

唐土の言葉に「帝王無道」というのがある。

一口にいえば、法律の上にたつ王は法律の束縛を受けない、ということである。

綱吉は無道の將軍として、錯乱し、楓を憎悪した。

憤怒は楓の必死の申し開きを寄せつけぬま

でに激しいものだった。

彼の言動はすでに常規を逸したものとなつていた。

「体力の回復をまって、女を鋸挽きの刑にかけい！そして、その死肉は犬にくれてやれ！お犬様に喰わせるがいい」

そんなことをヒステリックに口走ったかと思うと、次の瞬間には放心状態に入ったりするのである。

綱吉の錯乱はこれが初めてではない。

徳松を失つた後も、一時、憂鬱症にかつたことがあつた。正気の沙汰とは思えない振舞いを示したことも、たびたびあつたのである。

隠密同心

練馬御殿にほど近い、森の蔭に建つ古い辻堂の中である——。

苦しげな女の呻き声が續いていた。

こうこうたる月光に照らし出されて、内部は意外に明かるい。

呻き声は、犬の仔を取り揚げた女、お初であつた。

それが、大の字なりに手足を拡げた恰好で、苦痛に呻吟しているのである。

「いい加減に白状したらどうだ？なぜ、御殿を抜け出そうとした？名は何という？

お初というのは、もとより本当の名ではあるまい……」

お初は答えない。

なぜか身動きもせず、ただ苦しげに呻いているのである。

そのありさまは、痺れ薬でも飲まされた者のようだった。

「強情な女め！今度は首の関節をはずしてくれようか……」

「……」

両手、両足、それに首までをはずされると、大の男でもクラゲのようになるのだ。その上で好き勝手に料理をする……これが、隠密廻りの同心、この塔場陣十郎の地獄責めだ。よく憶えておけ」

「……」

男は陰惨な含み笑いを洩らしながら、お初の黒髪をわしづかみにした。グイと引き起す。

「……ひ、卑怯！」

お初はわずかに首を振って反抗を試みたがもとより手足の関節をはずされた身では、何の甲斐もない努力であつた。

「なんとでもいえ」

男の手が、お初の衿の辺りをつかみ、情容赦もなく左右に押し拡げてしまった。

「どうだ？ 女の操と替えても白状はせぬというのか？」

「……殺せ！」

悲痛に女が叫んだ時、その場へ闖入して来た黒い影があった。

「お！ 何奴！」

「人呼んで犬斬り侍」

「なにっ！」

「どうやら今夜の犬はたいそう汚ない犬らしいな」

「おのれ！」

猛然と立ち上ろうとするのへ、犬斬り侍の白刃が一閃した。

真っ向から袈裟斬りに、骨の髄まで切り裂く剛剣だった。

男は声もなくたおれた。

八丁堀同心の中で最も恐ろしいのが「隠密廻り」の同心である。人類も氏名も全く秘密にされて、重大事件の際に影のような暗躍をする、という存在だ。

だが、犬斬り侍の腕もまた凡庸ではない。

「百合枝殿、辛抱するのだぞ……」

いたわりの言葉をかけておいて、はずされた関節を手早く直してしまった。

「さあ……これでよい」

「庄三郎様！」

女は涙声となって庄三郎の胸にひしとすがった。

首尾よく練馬御殿へ住み込んだ、吉田策庵の娘の百合枝であったのだ。

「そなたが何の連絡もなく手筈を変えてしまったので拙者はまごついたぞ」

「お許しください。わたくしには、人を殺すことはできません」

「拙者もやっとそれに気がついたところだ。」



やはり、医師の娘だな……」

出産の後、祝宴が行われる日に、御殿が寝静まってから百合枝が放火をし、同時に庄三郎が斬り込む——という手筈であったのだ。

しかし、百合枝は死産の子と犬の仔をスリ換える、という方法の皮肉な復讐を独断でやってしまったのである。

「もういい。拙者は復讐の心を捨てた。半ば狂気の綱吉だ。亡び果てる日も遠くはあるまい。何よりも、拙者は百合枝殿さえおればよい。」

はっと男の顔をふり仰いだ百合枝の白い頬がみるみる朱の色で染まって行った——。

編集部より

◎前号に発表しました「マンハント」創刊一周年記念の読者招待映画試写会は、お申込順に招待券を発送し、去る七月十四日三時より銀座ガスホールにて盛大に開催致しました。

◎前号色頁「裏窓くもりガラス」に御投稿をいただきました、大滝荘二様。御住所をもう一度御連絡下さい。

異妖時代伝奇小説

悦虐濡れ肌地獄

岩 堀 光

利音は牢格子の中に捕えられて

にぶらせた。

いた。しかし、地牢ではなかった。

ふつう、問者は罪人のうちでも

奥づとめの女たちに間違いがあつ

もつとも冷遇され、残酷な刑が、

た時罪の定まるまで捕えておいた

かせられるものだった。まして、

めのものであった。ただ座敷の中央

忠長は、非情残忍の性ときいてい

に、格子をもうけてあるにすぎな

た。それこそ、一寸きざみ五分だ

い。ちよつとした機会があれば、

めしに利音のまっ白い肌をさいな

忍びの業を学んだ利音には逃げ出

むことによるこびを感じないとも

せそうだ。しかし警戒は嚴重な様

限らなかった。

子だ。数人の女たちが、交互に利

格子の向うのふすまが開いた。

音の脱出を防ぐためにみはつてい

牢格子のカギが外された。忠長が

るのが察しられた。それにしても

ひとりはいつてきた。伴の女中た

捕えられた問者にしては待遇がよ

ちは、廊下に膝をついて、忠長を

すぎて、かえって不気味でもあり

警護していた。たぶん、彼が、女

また、忍者としての利音の闘志を

たちにそう命じたのであろう。

★「関白秀次」の著者が、久々に世に問う時代艶美妖異編！

喜多玲子・装幀 定価二二〇円・二四〇円 絶賛発売中！

（大納言はなんのために自分でき 百姓町人の娘だつて眼にとまれば
たのかしら？ この人は太刀も持 それまでだ。抗ええば斬る）
たないで……）

とつさに利音は、兄宗平の言葉
を思った。
（好色なんだ……奥の女たちだけ
じゃない。家人の妻子はもちろん

逃げられる。牢格子はあいている。
廊下には人がいるし、ここは城の
奥、だが自分ならにげられると、
彼女は、油断なく心を静めた。

「ふふ、は、は、は」

突然、忠長は笑った。

「そち、まだ逃げようとしておる
のか。気の強い女子だ」

と、利音は、思いがけぬ羞恥が

身内を走った。それは庭先で、彼

を刺そうとした時から、いつでも

ふいに彼女の剣先をにぶらせた奇

妙な動揺だった。こんな風になら

なければ、あたしは忠長卿を、い

まころは殺すことが出来たのに。

「駿河大納言秘帖」より

東京都中野区江古田あまとりあ社
振替東京一〇七五六（久保書店宛）



夕月弦三郎変化暦

怪異河童小僧

寿々木多呂九平

古正英男・画

一、寺小屋浪人

「やあ……」

教室から子供を帰して居間へ戻って来た夕月弦三郎は、そこへボツネンと待っている鯛沢新三郎の姿を見て、

「どうした。なにか事件か」

と、眼に一ぱいの親愛感を見せてニコリ迎えた。

「ウム……また一つ貴公に手伝って貰いたい
と思つてネ」

鯛沢は遠慮のない声でいって心もちいずま
いを直した。鯛沢新三郎は八丁堀の常廻り同
心で、弦三郎とは、神田連雀町天真理念流本
田猪三郎道場における同門の友である。

弦三郎は浪人だが、探索に独特の手腕をも
ち、常に鯛沢へ協力していくつかの難事件を
解決している。

齡は三十になったばかり……上背のある長
身に小麦いろの肌をした威丈夫である。髪は
いつも無造作な五分月代で、衣類は、好んで
黒紋服白献上博多の帯をしめ、これがまたと
てもよく似合つて、その男ぶりを一段と引き
たたして見せる。

贅肉のない肉のしまった頬……涼しい眼、
一文字にグツと結んだ唇、どうしてなかなか
いい男前である。

しかも性来、くつたくのない明朗な性格だ
からだれからも好感をもたれている。

彼は現在、この神田紺屋町の一隅で、ささ
やかな、算盤と、書道の塾を開き、昼は女の
子に書道を夜は男の子に算盤を教えて生活の
資としている。

まだ独身で、家には髯の重左こと曲淵重左
という髯侍が一人同居し、下男のとてちん松
というのが炊事万端うけ持っている。





重左は髻の中から眼を丸くして叫んだ。

「その話ならもうカビがはえてまさあ」とてちん松が横から口を出した。

「なに？ カビが生える……？」

「へい、なんでも、去年の夏もそんな話があり、今年の花時にもそんな噂がとびましたが何しろとりとめのない話で、八丁堀でもどうせ誰かのいたずらだろうくらいに考えて、そのままほったらかしてあるって話ですぜ」松は知ったかぶって鼻たかだと述べた。

「ところが……」

弦三郎はちよっと開き直って、

「昨夜、奥山へ出ている見世物小屋の親方がこの河童を生け捕り、商売物にしようと、小屋の若い者を二人連れて鐘ヶ淵へ出かけたんだそうだ」

「それでどうしました？」

松がすぐ興味を湧かして小膝を乗りだしてきた。

「すると、噂にたがわず河童が現われた。だが、そ奴を捕えるどころかあべこべに三人と

重左は、主の弦三郎が捕物で忙がしい場合

寺小屋の助教授としての代役をつとめ、とて

ちん松は下っ引きの役をうけたまわる。

鯛沢が帰った後、弦三郎はさっそく重左と

松を茶の間へ呼んで、

「また、町方からの依頼だ」

といって顔をほころばした。

「で、こんどはどんな事件だ」

重左が好奇に満ちた眼を向けた。

「鐘ヶ淵へ河童が出て、女を掠っていくそう
だ」

「なに、河童？」

★夜ごと現れて娘をさらう河童の怪異、今宵も異形の者がどすぐろい池の面にぼっかりと……

も大川へほうりこまれて、中の一人が今朝方死体となって浮きあがったんだ」

「じゃ河童に尻っこ玉でも抜かれたのか」

重左がきいた。

「その通り……まさに死体の尻はぬかれていたそうだ」

「するとやはりそりや本物の河童か？」

「いや、それがさにあらず、八丁堀の同心が出張って検死してみると、これは、明らかに刃物の類いでえぐったものであることがわかったんだ」

「なるほど、そんなこったろうと思った」

「で、こうなると八丁堀でも捨ててはおけない」

「もつともだ」

重左は大きくうなずいて、

「そこで鯛沢同心、例によって貴公の助力をうけるべく、わが家へ訪問と相成った次第だネ」

「ま、そんなところだ」

「貴公、何か目星がついているのか」

「ないこともない」

「ほう……」

「生き残った二人の話によると、三人の前に現れた河童というのは、十二、三の男の子ぐ

らいあって、真黒い体をしていたそうだ。そ奴がいきなり三人の前へとび出し、アッという間に三人を河の中へ叩つ込み、自分も河の中へ飛びこんだきりゆくえ不明になったということだ、生き残った二人はすぐ岸へはいあがったが、殺された一人は、河童に足をもつて引きずりこまれたらしい、見ている前でズルズルと水の中へ沈んでいった。そのありさまを眼のあたり見た二人は、怖氣をふるってほうほうの態で逃げ帰ったんだそうだ」

二、河童男

「さあさあ寄っていらっしやい見ていらっしやい。これは因幡沼でとれた河童でござい」

その頃江戸の街々を、こういう呼び声で、河童に扮した男を連れて、簡単な芸をやらして歩く一種の物貰いがあった。

もつとも芸といつてもちよつとしたとんぼを切るぐらいで大した芸をやるわけではないが、なにぶんにも娯楽機関の少ない時分のことで、こんなことをしても結構銭が貰えた。

むろんこれは人間が扮しているので、たいてい介添えの男が一人か二人ついていて、一人は太鼓を叩き、もう一人は三味線を弾き、器用な奴は三味太鼓に合して伊勢音頭ぐらい

踊った。

旧四月の末頃から、十月初旬までが稼ぎ時で、以後はかき消すごとく姿が見えなくなるのが常で、

「河童小僧がいなくなったので、そろそろ秋だ」

とよくいわれたものである。

夕月弦三郎はまずこの河童小僧の群れへ眼をつけてみた。稼業が稼業だけに諸国の流れ者が多い。ひよつとしたら奴等の中に悪い奴がいて、いたずらをしているんじゃないか、と思ったので、その日早速、松一人を連れて山谷の、彼等が常宿している界限へ出向いてみた。

山谷町の自身番屋で番太郎の親爺に聞いてみると、近くの浪花屋というのが河童小僧の常宿だそうで、筋向いの蕎麦屋へ張りこんでいると、やがて一人の若い男が浪花屋から現れて、彼らが張りこんでいる蕎麦屋へ入って来て、種物の蕎麦を一つとって酒をのみ出した。

出前が

「あの男が河童小僧の一人です」

と教えてくれた。見ればまだ二十位の青二才で、目のギョロリとした一癖あり気な、見

たところ、どこか、市井の小悪党といった人柄である。

こいつ確かに怪しい……

とみてとった弦三郎は、相手より一足先に店を出て、近くの暗がりでは彼の出てくるのを待ちうけた。

ややしばらく待っていると、やがて相手の姿が現れた。蕎麦屋を出た若者は、宿へは帰らず足を外へ向けて歩き出したが、吉原の方へは行かず、街角を左にとって隅田の河岸の方へ向いた。

弦三郎と松は互いに顔見合しながら尾行を続けた。しばらく行つて彼は、今戸から白髯の渡しへ近づいた。

「いよいよ臭いぞ」

二人は更に尾行を続けた。すると、渡しの近くの芦藪の中へ舟足をとめていた一艘の小舟から、不意に一人の女が現れて男の前へ立ちふさがった。

「お仙かえ」

若者が声をかけた。

「遅かったネ」

という女は若者の傍へすり寄った。それから二言、三言、何か囁き合っていたが、女は男の手をひいて、傍にもやってある小舟の

中へ入っていった。

弦三郎と松は舟のかたちを見て、これが大川筋を根城に稼ぐ舟饅頭の舟であることをすぐに悟った。

「どうやら目串が狂ったようだ」

弦三郎は、独り胸でつぶやいて、がっかりした。

三、緋鯉娘

昨夜、河童小僧と舟饅頭の色ごとをまともに見せつけられた弦三郎と松は、聖朝……朝っぱらから、お恵に踏みこまれて叩き起された。

お恵は、近所に住む岡ッ引風呂徳の一人娘で評判のはねッ返りであるが、町内でも評判のきりょうよしでもある。

年齢は十七……まだ軀は十分に發育していないが、小股の切れあがった江戸前の女である。ただ性質が男まさりで、誰にでもツケツケ物をいう癖があり、人一倍蓮っ葉で、

「あの子は、持つ物をとつ違えて生れて来たんだ」

といわれるのが玉にきずとでもいうのだがそこは年頃……どこかにいうにえない色気があり、この娘どうやら夕月弦三郎へホの字

らしく一日一回は必らず彼の家を訪れて罪のない口喧嘩に花を咲かしている。

「誰だ、朝からそこでギヤギヤ騒いでいるのは」

眼をコスリコスリ出て来た弦三郎へ、お恵は水でも浴せるように毒舌を叩きつけた。

「朝からギヤギヤ騒いで大層悪うござんしたね。いくらのおんな気な浪人暮しだつてたいいてにして眼を覚ましたらどう……お天頭様はもうとつくに頭の天辺に昇つていらつしやるわよ」

「へっ」

弦三郎は鼻の先であしらつて、

「お恵さんみたいなの、親の脛つかじりにや俺達の苦労はわからないよ。こう見えても吾々は昨夜、八丁堀の依頼で河童小僧探索に夜っびて歩いてたんだ、家へ帰つて寝たのは明け方なんだ」

「おやそうでしたの、そんなこととはちつとも知らなかったの、ごめんなさいね」

毎日こういう調子だから腹も立てられない「ところでどうでした。その河童小僧について何かいい聞きこみでもありましたかえ」

「それが残念ながら、虻蜂とらずのくたびれもうけさ……」

「おやおやそれはお気の毒ね、じつは今夜ネエ妾みずから囮になって河童小僧を誘き出してやろうと思つてんだけど」

「あんたの物好きにも困つたもんだ。いくら岡ッ引の娘だって、そんな危い橋を渡るのはおよしなさい。もし身に間違いでもあつたらどうするんです」

「大丈夫よう」

「なあんていってると、今に河童に誘拐されてとり返しのつかないことになりますよ。あの河童は、とても色好みの河童で、つかまえた女は片っ端から手ごめにするそうさ。詰らねえで起心して、もし河童の子でもはらんだらどうするんです。およしなさい。娘なんてものは、役者の顔を見て涎を流したり蜜豆を食べてお針の稽古をしてりゃいいんだ」

「そうさそうさ。女の子というものは鏡の前へ小半刻も坐りこんで顔をいじくり、役者の噂をしながら焼芋を食べてりゃそれでいいんだ」

弦三郎の背後から顔を出したとてちん松が負けずにからかった。

「うるさいよ」

お恵は柳眉を逆立てて松を睨みつけ、クルリと背中を向けてブンとふくれた。

「第一そんなこと、風呂徳の親分がご承知なすつたんですかい？」

松はいくらどなられても蛙に水といった顔でこう聞いた。

「知らない……」

びしやりとぶつつけるようにいって、お恵は、池へ放たれた緋鯉のように、華美な黄八丈の袂をヒラヒラなびかしながら表へとび出していった。

四、怪物

夜のとばりがおけると、寺子屋の方は髯の重左へ委しておいて、弦三郎は松を連れて鐘ヶ淵へ出かけた。

二人は、しばらく河岸をブラブラ歩いてみたが、河童出現の噂に慄えたか人っ子一人通らない。

いつも今時分になると、この辺の堤防は涼み客で賑い、河の流れにも猪牙や屋根舟が浮び、弦歌のひびきも聞えるのだが、なんというさびれようであろう。

だが、さすがに川面から吹きあげる風は涼しく、サラサラと芦の葉を鳴らしながら二人の袂を払った。

二人は歩先を木母寺から水神の森の方へ向

けて歩いた。

と突然梅若塚の方から、

アレーという絹を裂くような女の悲鳴があがった。その声を聞くと二人は、つきあがられたようにとびあがり声のした方へ一目散に駆けた。

と、行く手の小暗に路をまっしぐらに走ってくる一人の女の姿が眼に映った。その後から十二三才の男の子ぐらいある異様な物が追っかけてくる。

……河童……二人はハッと息をのんだ。怪物に追っかけられている女は、路傍の石につまずいたか……アッといって前へのめりそこへ転んだ。と、後から追っかけてきた怪物はすかさずパツと跳躍して女の頭上からとびつき、上から女の軀をグイとおさえつけてしまった。

「アレー、誰か来てえ……」女は再び金切声をあげたがその口を怪物の両掌がふさいだ。

女は苦しげに手足をバタバタ動かし、夜目にも鮮明に、赤い物と白い脛がチラチラ動いた。そこへようやく駆けつけた弦三郎は、物をもいわず怪物の背後から襲いかかり、相手の肩へ手をかけて引き戻し、尻餅つく奴を柔術の手で投げとばした。

と怪物はクルリと宙で一回転して地上へ立っていた。なにさま身軽い奴で人間業とは思えない。

「河童だ」

はじめて気づいて松は胴ぶるいした。弦三

郎が再び怪物へとびつかんとした時、相手は敵せずと見たか、そのまま踵を返えして白髯の方へ向いて逃げ出した。

「待て」

弦三郎は素足となつてすぐに後を追つたが



怪物は、まるで四ツ足のような速さで路上を走り、そのまま堤防の上から眼下の大川めがけてザンブと飛び込み、ついに行方をくらましてしまった。

「惜しいことをした」

弦三郎は残念そうに舌打しながら先刻の場所へ来てみると、松がそこへ倒れている一人の女を介抱していた。

それは、意外、岡ッ引風呂徳の一人娘お恵であつた。

「何でいお恵ちゃんか」

お恵は黙って横を向いていた。

「危いところだった……先生今のはたしかに河童ですね」

松が息はずませながらいった。

「いやありや河童じゃないたしかに人間だ」

「ええ人間……？」

「ウム、拙者彼奴に組みついた時、プーンと髪油の匂いがした。いくらお洒落な河童だって、まさか河童が椿油をつけやしまい」

「なるほど、すると」

「間違う方もなくありや人間が河童の真似をしているんだ。そしてあの者の正体はどうやら侍のようだな」

「どうしてです」

「拙者が柔術の手でとって投げた時、クルリと転回して地上へ立ったろう」

「ヘイヘイ」

「ありや、日本伝柔術の極意で、あの道の心得ある者はたいていやる技だ」

「じゃ別に河童の軽業じゃないわけですね」

「さよう、人間でも柔術や忍法を習得すればあのくらいのことはやれる」

「すると、相手は河童と見せかけてその正体は人間だってわけですね」

「そうだ、そして身分は武士だが、あの背丈かっこうからいって……」

「まさか子供じゃありませんまい」

「もちろん子供じゃない。大方一寸法師だろう」

「一寸法師？」

「そうだ。よく、成人に達しても背丈だけが一人前にならない者がいるもんだろう、この犯人はどうやらその類いだ。松、どうやら犯人の目串がついたようだ。この界限に、武家で今いったような片輪者のいる邸はねえか捜してみるんだな、河童の正体はそ奴だ」

五、囃の美女

「どうもこの度は娘がいろいろお世話になり

まして」

翌朝、風呂徳が一升徳利を二本ぶら下げて夕月弦三郎の家へ礼に来た。

今しがた寺子屋の授業を終ったばかりの弦三郎は快く風呂徳を迎えながら、

「なあにその礼には及ばぬが、折角持って来たもんだ。断るのも角が立つ、松、髯重が悦ぶだろう、貰っとけ」

「ヘイ、親分先生もあとおっしゃるから貰ったときですが、昨夜はすんでのことに娘さん危かったぜ」

「何ともはや」

「どうしてまた、娘さんなんぞをあんな危い所へ出しなされる」

「それがね、私がいけねえっていうのに黙ってうちの子分を連れて出かけやがったんで」

「大方そんなこったろうと思った、が親分、娘さん本当に危かったぜ。別に恩に着せるわけじゃねえが、すんでのことに河童へ手ごめにされるところをうちの先生がお助けなすったんだ。よく礼をいうがいいぜ」

「ほんとに、なんとも御礼の申しようもございません」

風呂徳はあらためて頭を畳へすりつけて、「ところで、相手は河童じゃなく人間だって

話ですが」

「ウム……拙者の鑑定はそうだが。何かそれについて心当りはありませんか」

「さあ……今といって今ちよっと考えはつきませんが、子分の者にもよくいいつけて聞きこみをやってみることに致しましょう」

「だが、親分、これや極内でやって貰った方がいいと思うんだ。というのは、もし相手が旗本か何かだった場合、この事件に八丁堀の手が動き出したとなりや、必ずどこからか邪魔がはいる。あるいは犯人をどこかへ隠される心配もある」

「なるほどね、いや承知致しました。十分注意してやってみることに致しましょう」

風呂徳はこう請合って帰って行った。

それから二日たった夜のことに。

浅草の水戸様御藩邸の塀外で風呂徳の家の若い者松三が、何者かのために斬られて果てた。

その報告を聞くとお恵は自分の兄を殺されたように口惜しがり弦三郎の家へ乗りこんで来て、

「あたいまた今夜から囃になるから、あの河童野郎を捕えておくんなさい」

と申し出た。それをなだめて帰すのに松と

弦三郎は一汗かいた。弦三郎はお恵と入れ違いに訪れた鯛沢へ、

「こうなつてはもう捨ててはおけないな」

強い決心をうちあけた。

夜になると弦三郎は、ぜひ連れて行つてくれというお恵の申し出を退けて、松を女に変装させて囨にすることにした。

お恵が、自分の家から自前の衣裳や白粉を持って来て貸してくれた。鬘は鯛沢の口利きで市村座から貸して貰い、お恵は笑いながら松の顔をつくってやった。

できあがつた松の女形を見て弦三郎は、
「両国の猿芝居にも、こんな太夫はいるまいね」

と吹き出した。

「だが、俗に夜目遠目傘の内というから四辺が暗くなりやこれでも結構別嬪に見えるだろう……」

と笑った。弦三郎のいう通り、表へ出て暗がりで見るとちよつと小股の切れあがつた小粋な女に見える。

「これなら、下サ廻りの女形ぐらいつとまる」と自惚れる松を促して弦三郎は白髻の渡しを渡って隅田の堤へ出た。

それから二人は寺島村を右に見て、水神の

森の方へおりて行つた。

水神の森は、隅田河岸にあるコンモリ茂つた森で、その森へ囲まれて水神様の社がある境内に周囲三尺七寸のグミの大木があるので有名だ。

また近くへ名の知れた割烹店八百文があり旗本の寮も二三軒ある。

弦三郎が別あつらえの女形を連れて水神の森の鳥居の近くまで来たおり、満ち潮のため根っここの辺りまで水につかった鳥居の後から怪しい一つの影がニョキリと頭をもたげた。

四辺が暗いので、人相のほどはわからないが背丈の低い頭の大きな一個の人間である。いや人間というより一つの生物といった方が当っているかも知れない。

いつか、お恵を襲つたあの怪物である……怪物は、四方へ鋭い警戒の眼を配りつつ水に奇怪な影を映しながら、しだいに二人が隠れている方へ近づいてくる。

「よし……今夜こそ」

弦三郎はかたわらの松へ耳打ちした。

「松、そろそろ姿を現わして、あ奴のそばへ近づけ。なあに大丈夫、お前の後には俺がついている。怖がらず、女らしく見せてあ奴のそばへ近づいて行け」

「だ、大丈夫ですか」

松は慄えて尻ごみした。

「大丈夫だ」

弦三郎が念を押して松の軀を押し出さんとした時、思いがけぬ事件が突発した。

怪物の出現を待ちうけていたらしい一団の武士が、突然物蔭から躍り出て怪物の周囲をとり囲み一斉に抜刀した。

刃の光りを見ると怪物は、何やら怒声を浴せたが、そのまま暗闇の中を走り出した。

武士達は、すぐに追跡に移った。が一瞬水音とともに怪物の姿は水中へ没していた。

「しまった」

「残念……」

というような声が入り混って聞えた。何が何やらわからなくなった弦三郎は、あわてて飛び出さんとする松を制して、かたわらの物蔭へ潜み息をこらした。

怪物をとり逃した武士の一団は、しばし何か囁きあっていたが、やがて堤の方へ立ち去る模様である。

「ヨシ、俺はあの侍達の後を尾ける。お前はここへ張りこんで、先刻の怪しい奴を見張っている。もし姿を現したら、コッソリ後をつけて行く先を突きとめろ」

「ハイ……」

「見つかったら命が危い。気をつけろ。俺はあの侍達の後を尾けて行き先を突きとめたらすぐにここへ戻ってくる。心配はいらぬしっかり働け」

といい捨てると弦三郎はもう武士達の後からそっと尾行を開始した。

六、盗

侍達は、木母寺から斜めに隅田堤への道をと、白髯神社の鳥居前を通過、更に三囲稲荷、小梅と過ぎて、中の郷へ出て、八軒町から業平へ現れ、とある一軒の旗本屋敷へ入った。

近くに辻番があつたので訊いてみると、この屋敷は寄合旗本三千五百石大須賀大学の下屋敷だと教えられた。

旗本も二千石以上の御大身となると、歴とした下屋敷を構え、その規模も二三万石の名と大差はない。



この御大身の寄合旗本大須賀家と、あの怪物と何の関係があるのか、そしてこの屋敷の者が何であの怪物へ刃を向けたのか、どう考へても判断がつかない。

一方……松は独りになると、やっぱり心細くなって恐怖に慄えた。元来があまり度胸のある方じゃない。江戸ッ子だからタンカを切るのはお手の物だが、根が淋しがり屋で、独りぼっちになるとカラ意苦地がない。

御主人夕月弦三郎と一緒になら、いかなる大敵といえども怖れないが、独りになっては心細い、しかも、相手は河童に化けた怪物である。

弦三郎は、相手は人間だと、見てきたようなことをいうが、松の常識からすりやどうも本物の河童とは思えない。

河童なんてこの世の中にいない……というが当てにはならない。誰が何といおうと、松は本物の河童が存在することを信じている。「さっき見たあれはやはり本物の河童に違

ない」

松は独りで自問自答し、ブルツとふるえた。と、彼が隠れている社の大きなさいかちの木の向うに光っている水面から、突然ポカリと丸い西瓜のような物が浮きあがった。

まぎれもない河童である。

「……出たあ……」

松は背筋から冷水を浴せられたように寒気を催した。河童は、松の隠れていることには気づかぬらしく、静かに水をかきわけて浅瀬へ近づき全身を現した。

四辺は仄暗いが水の光りが反射して怪物の姿を照らし出した。見たところ、やはり絵に描いた河童によく似ているが、甲羅はない。

河童はそろりと河岸へ這いあがり、周囲をキョロキョロ見廻しながら、誰も見ている者がいないと見定めるとそろそろ歩き出した。

足が妙に曲って俗にいうガニ股である。背丈はさっき見たと同じく十二三歳の子供ぐらいいかない。

松はそっと物蔭から這い出して、怪人の後を尾けた、見つけれられたら命がないと弦三郎から脅かしつけられているので、用心の上にも用心して怪人の後を尾けて行った。

怪人は水神の森を横切り、八百文の背戸へ



出て、そこにある一軒の旗本の寮とおぼしき小屋敷へ入った。

足音忍ばして怪人の後を尾けていた松は、怪人が裏の耳戸を押して屋敷内へはいると、思い切って、自分も築地塀を乗り越えて中へ忍び込んだ。

部屋の作りも庭も小じんまりしているが、石州流らしい庭石の配置といい、部屋の感じもひとしお数奇をこらした跡がみられ、いずれはどこかの金持ちか富裕な旗本の隠居所で

はないかと思われた。

庭の一隅に古い蔵が一棟あって、母屋から渡り廊下がついている……松が庭の植込みの中から覗いていると、今しがた耳戸をはいたあやかしの人物がスルスルと渡り廊下を走って、つと、蔵の中へ姿を消したと思うと、窓にぽっかり明りがついた。

松は足音しのばして蔵へ近づいた。みると幸いかたわらの物置の横へ一本の梯子が置かれてある。松はその梯子をそっと蔵の窓のあ

たりへかけて段をのぼった。

一步、二歩、用心しながら窓へ近づいて彼は中を覗いた。

果して蔵の中には、先刻の怪物、いや河童がいた。

こんどは明りが点っているのでよくわかる……怪物は淀んだ水のような顔いろをして眼は猫のように野性的な光りを帯び、朱い唇に歯が真白である。頭はちぢれっ毛をたばねて後ろへ切り下げ、軀のかっこうは人間というより猿に似て胴体より手足が長く足はガニ股である。

身に、簡単な胴着を着用し黒い褌をしめている。一見、河童に見えるがこれはやはり人間に違いない。

人間には違いないが、普通の人間ではなくいつか弦三郎のいった通り、一寸法師に近い片輪者である。

彼は、窓から松が見ているとも知らず、片隅の枕屏風の中から何やら抱えて来て、部屋の真中へ敷かれた蒲団の上へそっと置いた。それは、着物をはがれた一人の裸の女であった。上半身は裸でわずかに腰の物だけをつけている。

お椀を伏せたような乳のぐあいからみて、

齡はまだ二十前であろう。頬の豊かな色の白いヌメのような肌をした美人である。

女はグツタリと死んだようになっていたが微かに手足を動かしているところを見ると死んではいないらしい。

しかし、すべてを諦めているのか、何の抵抗も示さず、相手のなすがままに委している……。

「くそッ少しも早くこのことを夕月の先生へ訴え、この憐れな娘を怪物の手から救い出さねば」

と考えて、窓から眼を離して梯子をおりんとした時、突然彼は梯子の上から引きずりおろされて地上へ転倒した。

驚いて起きあがった面前へ、こわい顔をした侍が二人仁王立ちにたっていた。

「こりやウヌはどこの何者だ」
一人が眼を怒らして吠えた。

松は覚悟をきめた。こんな鬼のようなサンピンに捕まっては百年目である……それにしても夕月の旦那は何をしているんだらう……松はいまだにやってこない弦三郎ののん気さが腹だたしくなった。

「死んだら化けて出てやる」
松はこう思って腹を立てた途端、

「こいつ神妙にしる」

といきなり腕をつかまれたちまち高手小手に縛られてしまった。

「進堂さん。こいつ町方の犬かも知れませんか」

背の高い方が年かさの方を振り返った。

「そうかも知れぬ……貴公たしかこの間求めた新身の一刀があったな」

「ええ、これです」

「どうだ。それをこいつで試してみては」

「そうですね」

「犬や死体を斬っては刀がけがれる。幸いこいつの生胴を試してみてはどうだ」

「それもいいですね。じゃこいつ拙者にくれますか」

「やるから存分に試してみるがいい」

この会話を聞いて松はガタガタふるえ出した。

その頃……弦三郎は、この屋敷の裏手へ辿りついていた……弦三郎は平生松を尾行せしめる時、いつもその道筋に目印をつけておくよう命じてある。で、今宵もまたその目印を頼りに辿ってゆくと、旗本の寮らしき裏手へ出た。

と、そこへ松の手拭いがかけてあった。こ

れも、二人だけが知っている秘密の合図である。

この合図で、松がこの小屋敷へ潜入したことを知った弦三郎は、自分も塀を乗り越えて邸内へ忍び入った。

そして間一髪のところ、試し斬りにされようとする松を救い、ついでに、蔵の中へ監禁されている女を救い出した。

が、無念にも河童の怪物と、松を試し斬りにしようとした二人の侍はとり逃がした。

女の語るところによると……彼女は今戸焼の職人留造という者の娘で、千住の親戚へ行っての帰り日が暮れて、あわてて夜路を帰る途すがら、河童の怪物に襲われて誘拐され土蔵の中へ連れこまれ、いうにえない羞かしい目に遭わされたと言った。

七、秘密

昨夜弦三郎と松は、怪しい屋敷から助け出した娘を親許へ送り届け、ついでに近所の町年寄を訪ね、あの小屋敷は一体何人の屋敷であるか、聞いてみると、それが驚くべきことには寄り合い旗本大須賀大学の隠居所で、先代の勘兵衛がこの隠居所を建て三年前ここで亡くなったことがわかった。

大須賀大学といえ、昨夜河童小僧を襲ったあの侍達が入った屋敷である……

「ここに何かある」

と感づいた弦三郎は、みずから八丁堀の鯛沢を訪れて大須賀家の戸籍調べを依頼した。

二日の後、鯛沢はすっかり大須賀家の戸籍調べて持ってきた。

それによると……大須賀家は三河以来の旧臣で、先祖は関ヶ原及び大阪陣で大功あった豪勇の士で、先代勘兵衛は一時小普請組頭をつとめたことのある人物である。

その勘兵衛に二人の男の子があり、兄の大學は、小さい頃から、昌平校でも有数のキリン児として誉れが高かったが、弟の覚太郎は軀の發育が普通でない不具者で、ことに背丈が足らず、世にいう一寸法師であつた。

しかし知能は常人と異ならず性来武術を好み、ことに柔術が巧みで、彼の霞返えしは定評があつた。

霞返えしというのは、投げられながら、相手の胸を蹴返えし、自分は空中で転回して地上へ立つ特種な技術で、柔術の秘伝中でもないかならずかしい技とされているが、覚太郎は、これが得意中の得意で一種の天才であつた。

覚太郎は初め駿河台の関口流の先生神保十之進の門へはいつていたが、成長するとともに、次第に不具者としての特長がでてきたので、父の勘兵衛は進堂なにがしという浪人を覚太郎のために家庭教師として雇つた。

この進堂というのが悪い奴で、どうやらこの男が覚太郎に色慾の道を教えたらしい。初めの間は、近くの河岸へ出て、舟でやって来る舟まんじゅうを相手に遊んでいたらしいが次第に、それに飽き足りなくなり素人の女を襲うことを教え、そのお余りを進堂や、同僚の関文五郎が頂戴していたらしい。

彼が河童に化けて女を誘拐しているらしいことは、いつしか兄大学の耳へ達し大学は勘からず心を痛めた。

いかに身分が旗本でも、こうしたことが世間に知れたらただではすまない。いや旗本であるが故にその刑罰はひとしお厳しいにきまつている。軽くて、減地、下手すると切腹の上お家は改易にもなりかねない。

というので、兄は涙をのんで弟を暗殺し、ことを闇から闇へ葬ろうとした。いつか数人の侍が覚太郎を襲つたのはそのためである。

鯛沢の報告によつて、以上の線がクッキリと弦三郎の脳裡へ描かれた。

「さて鯛沢、このおさまりをどうつける」

「そうだな、相手が旗本では吾々が覚太郎を捕えることは掟としてできない。若年寄りへ願い出で正規の手続きを経るとなると大須賀家がつぶれる」

「それも心ないやり方だな」

「武士の情で、今しばらくようすを見るか」

「吾々の意のあるところが大須賀家へわかれば、このままほつてはおくまい」

「そうだな。じゃそうすることにするか」

その夜、向島に火事があつて大須賀家の隠居所が焼けた。そしてその焼跡から三人の焼死体が現れた。検死によつて、それは大須賀家の二男覚太郎と、雇われ浪人進堂、関の両名であることが明らかにされた。

三人は多分泥酔の末、失火し、逃げ遅れて焼死したのであらうと簡単に片づけられたが三人を暗殺し、屋敷へ火をかけたのは、大須賀大学の指令によるものであることはだいた想像された。

それから間もなく大学は若年寄りへ隠居の届けを出して僧籍に入り、伴の伊織が後を継いだ。罪を犯した弟とはいえ、自分の意志で暗殺されたことが気になったのであらう……弦三郎は大学へ同情した。

狂

妃

の

畏

藤見 郁

木原 三樹画

奇妙な乞食僧

軒なみに灯がはいると、江都一の柳暗花明の地、銀殿巷の路次は、いっせいになまめかしい媚をみせて遊客を招きだす。

建ちならぶ白天楼、仁芳店、金城楼、百仙楼などが、その内臓にたくさんの美女を擁してうごめきだし、男たちの心をうずかせるのだ。

毒々しい朱塗りの柱と、女の肌のような白い壁は、ひと目で娼家と知れるこの一劃である。銀縁飾りの扁額が、昼をあざむく燈燭に照り映えて、夜半に入るとともに、嫖客の群れはいよいよ増えていった。

いま――。

金城楼の裏庭、池のほとりの房室に、娼婦の宗揺琴と、客の応門佳が酒を酌みかわし、浮き浮きした語らいに、この一刻をすごしていた。

客の応門佳は、牛殺しを職業としているが心のやさしい純情な若者であった。

「それじゃ、おまえは本当に、おれのことを好きだといってくれるのかい？」

酒盃をもつ門佳の手が、よろこびにふるえて、片方の手は、揺琴の膝のあたりを熱っぽく握りしめる。

「ほんとうです。こういう所へくるお客は、みんなあぶらぎったお金持ちの、いやらしい

男ばかりなのです。あなたのように、真心からあたしを抱いてくれる方は、はじめてですわ」

揺琴の言葉は、なかば真実で、なかばは商売柄客に対するただのうれしがらせである。

苦界に身を沈めて暮す揺琴には、たしかに門佳のような無垢の若者に心を惹かれる。

と同時に、やはり財力にも充分に心を惹かれるのだ。

いかにまことの愛を捧げられても、貧乏な牛殺しの女房になんかなることは、まっぴらだった。揺琴は、とりわけ貧乏がきらいである。

しかし、そこは商売だから、年期があけて自由の身になれたら、夫婦になろうと口約束はしている。それが、いつの日に実現するか、借金の多い揺琴には、自分でもとうていわからないのだが――。

「――ほう、ほう……」

そのとき、裏庭の方から、奇妙な感嘆の声がきこえた。

「なんだろう、あの声は？」

二人は、丸窓の手すりに身を寄せて、声のした庭に眼をやった。

と――一人の年老いた乞食僧が、庭池のほ



とりたたずんで、そこから丸窓越しに、揺琴と門佳を凝視しているのだ。そのようすはどうやら先刻から見つめているらしい。

「なんだおまえは？」

門佳は、やや怒声をふくんで言った。せっかくの楽しい語らいに無遠慮な声をたてられて、不愉快である。

と、老僧は、シヨボシヨボした金壺眼をすまなそうに伏せてこたえた。

「いや、これはすまぬいや、その御婦人の顔に、妻妾宮というすばらしい吉相があらわれ

ているので、つい感嘆の声を洩らしてしまっただのじゃ」

「妻妾宮という吉相だって？　なんだ、おまえさんは人相見かい？」

門佳のその問いにはこたえず、老僧は、こんどは眉の根にふかい縦皺を寄せていった。

「ふうむ。——しかし、その珍らしい吉相のなかに、ただ一本、気がかりな兇運の筋がみえる。女の弱点に気をつけられよ。その畏にさえ、おちこまなければ……」

あとは、ブツブツとつぶやくだけである。揺琴ははじめから相手にしなかった。こんな物乞いの坊主なんか、娼家の裏手には始終やってくるからだ。

「フフフ……。あたしにどんな吉相があるかわからないが、まさか、王妃さまにもなれまいに……」

と、笑いながら、いくらかの銭を投げ与えた。

「そのとおりじゃよ。うまくまちがえば、王

後宮の内部では、やはりかなりの権力を握っているだけに、翠姫の陰謀は、揺琴にとって不気味だった

妃の座につく相じゃ……」

と、乞食僧は厳肅にうなずくと、こんどは門佳の顔をみつめていった。

「それから、お前さんにも、たいへんな相があるぞ。苦しい試煉の末に、万民を救うために天下をとる相じゃ……」

「いいよ、お坊さん。おれは一生、牛殺しでけっこうだ。天下なんかとりたくない。もう邪魔だから、さあかえった、かえった」

いらだった門佳は、裏門から乞食僧を追いつ出した。

たった一夜揺琴とすこすために、半月分の稼ぎを払って登楼している門佳である。人相見の乞食坊主なんか、この貴重な刻を邪魔されたくないかったのだ。

嫉妬と策謀

だが、その乞食僧の予言は、みごとに適中したのである。

この国に君臨する江都の建王が、揺琴に眼をとめたのだ。

城中における酒池肉林に飽きた建王は、彼お気に入りの宦官、韓猫伯とともに、身分をかくしたしのびの趣向で、一夜、銀殿巷に遊んだ。

「いかがでございます、王さま。後宮にいる

女たちとは、またちがった味わいがございます。えへへ……。とりわけ、わたくしめが送りだした、あの揺琴と申す女は、いかがでございますか？ えへへ……」

この猫伯は、四尺にもたりない小男だが、伶俐な頭脳と巧みな弁舌をもって、建王の寵愛を受けている重臣である。

「うむ、おまえのいうとおりだ。よいところへ案内してくれた。おまえには、ほうびとして百金をとらせる。わしはあの揺琴という女を、城につれて帰ることにきめたぞ」

王の一言――。

たちまち、揺琴の身代金借金に数倍する金銀が、金城楼の主人の前に積まれた。

(夢！――夢じゃないだろうか！……)

揺琴は裳のかげから手をさしこみわが身の内腿をつねった。

だが、はげしい興奮で、痛みを感じない。やっぱり夢なのかと落胆した。

しかし、城からは、ただちに莫大な仕度金とともに、色とりどりの美しい絹織りの衣裳が届けられた。

その柔らかな肌ざわりの衣裳の山に、そつと身をうずめたときに、はじめて揺琴はさけ

んだ。

「ああ！ あのお坊さんの予言は、ほんとうだったんだわ！」

感動の涙が、ポロポロとあふれた。その涙のなかには、門佳のことなんか、微塵もなかった。

建王は、無知粗暴な性格として知られている。しかし、粗暴であろうが野卑武骨であろうが、一介の娼婦が、王の側妾に加えられるとは、幸運なことにはちがいない。

いままで日蔭者の身として、卑屈に虐げられてきた女の感情が、これを機として、反対傲然とふくれあがった。

建王の後宮には、千に近い美女たちが、一人の王を争ってひしめいている。その渦のなかに、揺琴も参加するのだ。

建王は、揺琴を城に入れると、自分の寝室にもっとも近い宮房を与えた。このことは、揺琴を有頂天にさせ、その心に勇氣と虚栄とを芽生えさせた。

「あたしはいま、王さまの一番のお気に入りなんだわ。ほかの女たちに負けるもんか！」後宮の女たちは、当然、この売女あがりの新入りを白い眼でみた。

揺琴の眠床に毛虫を這わせて悲鳴をあげさ

せ、食事の中には馬糞をませ、衣裳に針をいれてその肌を傷つけようとする。

ありとあらゆる陰険な方法で、この新入りを迫害し、追いだそうとはかった。

「ようし、それなら、あたしはあたしのやり方で、王さまの心をとらえてみせる！」

揺琴は、唇を噛んで決心した。

たしかに、この新しい愛妾は、女に馴れた建王を、改めてよろこばせる数多くの技巧を心得ていた。

「ううむ。揺琴、おまえは、なんというすばらしい女なのだ……」

その秘術に、建王は眼をほそめた、ヨダレをながして歓喜した。そしてもう、片時も揺琴を手ばなさなくなった。

「おのれ、売女め！……」

この有様をみて、ますますおさまらないのが、後宮千人の女たちである。もっとも卑しい身分の者に、王をとられてしまったのだ。

女たちは、揺琴一人に対して、さらに悪癖ないじわるをはじめのだった。

とりわけ、揺琴がこの後宮に入る前まで、建王から最大の寵愛をうけていた翠姫は、その胸に、はげしい嫉妬と憎悪の火を燃えたぎらせた。

大奥後宮秘史・特集

しかし、建王の心は完全に揺琴に傾むき、あとの女には、まったく用がなくなってしまった。

翠姫は、ついに耐えきれなくなって、宦官の猫伯を、そっと自分の宮房に呼び寄せて詰問した。

「ねえ、猫伯。わたしは、おまえを恨んでいるのだよ」

「はい。申しわけありません」

猫伯は、四尺の背丈を、さらに猫のようにまるめて、翠姫の膝もとにひれ伏した。

「ほほほ。わたしがなぜおまえを恨んでいるのか、何も言わないうちに、おまえはわかるのかえ？」

「はい、おそれいます。——わ

たくしめが王さまをそそのかし、銀殿巷などという魔窟にご案内し

たこと。そしてさらに、揺琴さまを、お城におつれたこと——で

ございましょう？……」

小利口な猫伯は、もうとくに翠姫の胸のなかを読みとっている。

「よう知っておるな。いつもながら、こづら憎い猫伯めが……」

翠姫は、赤い唇をゆがめて苦笑し、猫伯の赤猿のような顔をにらんだ。

「それで、わたくしめに、なにか？……」

猫伯は、うわ目づかいに翠姫の顔色をうかがった。

「おまえのそのおそろしいほどの知恵で、あのいやらしい商売女を、この後宮から追いだしてもらいたいのじゃ……」

「はて。揺琴さまは、いま一番のお気に入り……それはちと、むずかしいおいつけでございますな」

「おまえが引っぱりこんだ女ではないか。う

まくいったら、おまえに三百金与えよう」

「三百金！……」

「ほほほ、多すぎるかな？」

「もうすこし、よい値がつけられませぬか。これはなにしろ、たいへんな仕事でござい

すからな」

猫伯の眼が、すかさず狡猾の色に光った。

「ええい、足もとをみおったな。——では、

五百金つかわそう。しかも、前金でな……」

「ありがとうございます。たしかに、おひきうけ致しました。なあに、むずかしいといっ

ても、うつ手はいくらでもございます。へへ……」

うまい金儲けの蔓をつかんだぞ——猫伯は内心でこおどりしてよろこび、翠姫の膝下で三拝九拝した。

男の機能をもぎりとられたこの宦官は、金を蓄えることだけに、異常な執念を抱いているらしかった。

悪知恵宦官

「——もし、揺琴さま、揺琴さま……」

「どなたですか」

「わたくしでございます。猫伯めで。えへへ……」

ひとしきり、建王が楽しんで去ったあとの揺琴の宮房である。猫伯はその扉をそっと叩くとするすると這い入った。

「猫伯さまが、いまごろ、何のご用で？」

「それが……一刻を争う一大事をお知らせに参ったのです」

「何ごとです？」

「実は——あなたさまを、この後宮から追いだそうと謀っている者がおります……」

「なに、わたしを、王のそばから引き離そうと？……」

「さようでございます。女の嫉妬はおそろしいもの。ゆめ、ご油断をなさいますな」

猫伯は、猫のように揺琴の足もとに這い寄ると、いかにも重々しい口ぶりで、声をひそめていった。

「だれ？ それは、だれなの？」

早くも揺琴は猫伯の話術にのった。

「揺琴さま、それが……へへへ、実はわたくし、ちかごろ、少々ばかり手もと不如意なのでございますが……」

「よい。いくらほど欲しいのですか？」

「へへへ……これはさすがに、おわかりが早い。——まず、さしあたって、百金ほど頂ければ……」

「たやすいことです。二百金あげましょう。で、わたしを追いだそうとする陰謀は？」

「あなたさまが、このお城へこられるまで、その方は、第一番目の王妃さまでした……」

「と——翠姫さま……」

「そのとおり——」

揺琴の柳眉が、くやしげに逆立った。

（あの女の企みそうなことだ……）

しかし、後宮の内部では、やはりかなりの権力を握っているだけに、翠姫の陰謀は、揺琴にとって不気味だった。

その揺琴の表情を、猫伯はすばやく読みとった。

「おおどろきになる必要はありません、揺琴さま。この機会を利用して、逆にあの翠姫さまをこのお城から追いだしてしまえば、よいではありませんか」

猫伯は、瞳の奥に青い光りをチロチロとうごかしながら、とほうもないことをいいだした。

「そんなことが——できるかしら？」

と、眉をひそめ、首をかしげながらも、薄ものにおおわれた膝を、そろりと前にのりださせる揺琴である。

「できますとも。——ねえ、揺琴さま、わたくしに、千金お恵みください。そうすれば、わたくしがよい知恵をお貸し致しましょう」
ここぞとばかり力をこめて猫伯はいった。

翠姫折檻

城内王宮の中庭に、翠姫が高手小手に縛られてひきだされたのは、その翌日であった。

「——おのれ、につくき翠姫め。日頃のわしの寵愛も忘れおって、反逆の陰謀を企らむとは、犬畜生にもおとった女狐。存分の折檻をしてやるから、そうおもえ！」

満面に朱をそそいで激怒しているのは、建王である。むろん、武力一方の王であり、理



知にはめぐまれていない粗暴の性であった。
今朝早く、揺琴を抱きしめたときに、その
耳もとに、翠姫謀叛のことをささやかれたの
である。

いまは揺琴の肉体にくるい、盲目となって
いる建王に、このささやきが事実か無実かを

判断する余裕はなかった。
揺琴が憎いといえ、建王もまた憎くなる
のである。

あの女が怪しいと揺琴がいえば、建王もま
た怪しく思うのである。

「血迷いなされましたか、王さま。わたくし

が、どうして王さまに対し、そのような謀叛
など企らみましよう！」

いきなり縄をかけられて、翠姫は仰天し、
必死になって弁明した。だがその弁明も、い
まの建王の耳には、半句もきこえない。

「ええ、まだほさくか。それ、女をその木か
ら吊りさげろ！」

中庭に生い茂った老松の枝をゆびさし、建
王は荒々しく命令した。

「ははっ」

侍臣たちが、これも乱暴に縄尻
をつかんでひきたてる。

「なにとぞおゆるし、おゆるしく
ださい！」

翠姫は、この王の残忍非道さを、
いやというほど知っている。縄尻
をひかれながら、額を地面にすり
つけて哀願したが、建王の眼には、
もう嗜虐の色がうかんでいるのだ。

「それ、早くひきたてて、枝から
吊りさげるのだ！」

桃色のうすものをまとった豊満
な肉体が、そのとくに柔らかい胸
のところに縄をかけられて、ギリ
ギリとくびれている。

大奥後宮秘史・特集

肩のつけねから、思いきり背中にねじあげられた二の腕のあたり、肩のあたりの薄衣がびりりと裂けて、香油のしみこんだなめらかな肌が、あらわにのぞいた。

馬追いの皮鞭をもった侍臣が、つかつかと翠姫の前までくると、まず、びゅうっと空鳴りさせて威嚇した。

（ああ、なんというおそろしいことを！）

と、思わず目をおおったのは揺琴である。

建王の背後に、かくれるように立ちすくんで、この折檻の有様を、さっきから眺めている揺琴であった。

（ああ、猫伯に教えられた言葉を、たった一言、あたしが王さまに告げ口したために、こんなおそろしいお仕置きを……）

あまりに残忍な光景をみて、はじめのうち揺琴ははげしい後悔におそわれた。

しかし、やがて――。

おそろしさに顔をおおったその指のあいだから、白い柔肌がつづけさまに打たれ、すさまじい悲鳴をあげてのけぞる同性の姿をみつめているうちに、揺琴の心には、異常な変化がおきてきた。

（あたしにさんざんいじわるをしたあの女があたしの一言の告げ口で、あんな目に逢わさ

れている……）

（あたしの一言は、もう王さまのお心を、どのようなにも、うごかすことができるのだ）

（たくさんいる王妃のなかで、王さまはあたしを一番愛してくださっていることが、これで確かめられたんだわ）

苦悶の翠姫を眼前にして、揺琴に傲りの心が、むくむくともちあがってきたのだ。

（ということは、この国の女のなかで、あたしが一番えらいということなんだわ）

この考えは、揺琴を有頂天にさせた。胸の底から、ぞくぞくするような満足感が湧いてくる。

「――お待ち。その鞭を、こんどはわたしに貸しておくれ」

揺琴は建王のうしろから前に歩きでて、白い腕をついとのかすと、侍臣から皮鞭をとりあげた。

「ほほう。おまえが打つというのか」

建王が好奇心を面上にうかべて、揺琴をみた。その背後、数尺はなれて従っている猫伯も、皮肉なうす笑いをうかべて、揺琴のようすをうかがっている。

「――翠姫、よくもいままでわたしにいじわるをしたね。いまこそ、その仕返しをしてや

るよ！」

揺琴の細腕に、馬追いの皮鞭は、あまりにふとく長かった。しかし揺琴は、足をしっかりと踏みひらいて、果敢にそれをふりかぶった。

揺琴の胸底に勝利者の傲慢な快感が湧き、彼女はなおもつづけて皮鞭を鳴らした。

残忍な陶酔に、揺琴は荒い吐息をついた。

（ふふふ……。揺琴め、たいした自信をもったものだ。おれの眼には、やはり狂いはなかった。わが後宮には、ここ当分のあいだ、この揺琴の天下がつづくのだ……）

と腹のなかでほくそ笑むのは、猫伯であった。彼は、すでに落ち目になった翠姫を、あつかりと裏切り、揺琴のために、有効な入れ知恵をしたのだ。

この計画が好都合にいきそうなので、彼は上機嫌だった。

狂王狂妃

翠姫は、木に吊り上げられたまま、ついに皮鞭で打ち殺された。

これで揺琴にとって一番の邪魔者はいなくなっただけである。

こうなると彼女は、おのれに与えられた権

大奥後宮秘史・特集

力を、もうすこし試してみたくなった。

そして、自分の肉体に溺れきった建王をそのかし、さらに嗜虐の遊戯を計画した。

まず、自分をいじめた後宮の女への復讐につきつぎと彼女たちを責め殺していった。

地獄図をみるような光景を、建王と揺琴は岸辺にしつらえた豪華な縁席で、山海の珍味を喰らい、また美酒に酔いながら見物した。

建王は、揺琴が提案する嗜虐の方法を、すべて採用し、実現した。そして、揺琴の求める、すべての財宝を与えた。

もし揺琴が、沈みゆく夕陽をふたたび東の空にもどしてくれと駄々をこねたら、建王は数千の兵士を出動させて、太陽を追ったかも知れない。

「——揺琴さま。あなたさまというお方は、ずいぶんと出世されたものですなあ……。あなたが、つい二年前までは、銀殿巷の娼窟で安白粉を塗りたくって、男に媚を売っていた人とは、とても思えない……」

つくづくと感嘆した口調で、あるとき、猫伯がいった。その感嘆

の舌の裏には、皮肉と侮蔑のひびきが、相変らずかくされている。

この猫伯が、王を銀殿巷に誘わなければ、いまのこの揺琴の栄華はないわけである。

だから、表面では奴隷のように服従しているが、一步裏へまわったときには、猫伯はそれを恩に着せて、ことあるたびに揺琴から、金や物品をねだっていた。

ひどいときには、揺琴が建王からもらう金や物の半分までをまきあげてしまう。

それが次第に露骨になり、強欲になってくると、揺琴もがまんなくなってきた。

虚栄、傲慢の心が、ますます増長している王妃に、四尺にも足りない猫伯は、虫けらのように思えてくるのだ。

「——猫伯。おまえは、いつまであたしを、銀殿巷にいた頃のあたしだと思っているの。

あまり馬鹿にすると、しまいには王さまにおねがいして、おまえを火あぶりにしてあげるよ」

あるとき、たまりかねた揺琴は、手きびしく猫伯をたしなめた。

それを機会に、以後、揺琴は猫伯のねだりにもせびりにも応じないことにした。

「そんなにつめたくなさると、あのことを王

さまに訴えますよ」

猫伯は脅迫した。

あのことは、揺琴が密告した翠姫の陰謀なんて、とんでもない嘘っぱちで、口からでまかせの偽わりだったということだ。

「訴えたければ、訴えてごらんさい。あんなこと、王さまはもうとくに忘れていらっしやるわ」

揺琴は平気だった。建王の愛に自信があるのだ。

「へへへへ。そうですかねえ。それはどうも、おそれいりました、王妃さま……」

猫伯は、小馬鹿にしたように、ニタリニタリとうす笑いをうかべる。しかし、心のなかでは、

（ちくしょう、おぼえている、成り上がりの売女め！）

歯がみしくてやしがった。

この男が、蛇のように執念ぶかく、悪知恵にかけては、異常な才能を発揮することを、うっかり忘れた揺琴だった。

転落の罠

それから数日後の夕刻——。

揺琴は、いつものように食後の一刻を、ゆ

つくりと散歩して、王宮に行き交うすべての者に最敬礼をさせ、みずからの地位をたつぷりと味わってから、自分の宮房にもどってきた。

と――。

室内に飾られた真紅のとぼりのかげから、ふいに一人の男が、ぬうっと現われたのだ。

「あっ、お前は誰です、無礼な！ おさがりなさい！」

おもわず、大声でとがめる揺琴の面前に、その男はつきつめた顔で、ぐいぐいと迫ってきた。

「おれだよ、揺琴、門佳だ。忘れたのか、二年前、金城楼で、おまえと夫婦になる約束をした門佳だ！」

さけびながら門佳は、ひしと揺琴に抱きついた。

「まあ、あの牛殺しの門佳……」

「そうだよ。よくおぼえていてくれたね。おれはおまえが城につれていかれてからも、一日だっておまえのことを忘れなかった。こんなに身分がちがってしまったら、もうとても夫婦になんかねやしないけど、ひと目おまえに逢いたくて、こうしてやってきたんだ」
この若者は相変らずの熱っぽい純情で、揺

琴の身体をぐいぐいと力まかせに抱きしめるのだ。

「だけどおまえ、どうしてこの王宮のなかにまで入ってこられたの？」

揺琴には、それが不思議で、また不気味だった。

「どうしてって、おまえがわざわざ呼んでくれたんじゃないか」

「あたしが？」

と、揺琴がきき返したときである。

「おのれ、不義者！」

すさまじい怒声が、揺琴の背後にぶつけられた。建王であった。いつのまにか、とぼりのかげに立っていたのだ。

「ああ、王さま、ちがいます！ この男とはなんの関係もないのです！」

揺琴は、息がつまるほどおどろいた。あわてて建王の膝下にとりすがる。

「なんの関係もない者が、宮房の中で抱きあっているのか！ おのれ、わしの寵愛をよいことに、そんな男をひき入れておったとは、なんとという姦婦！」

怒髪天をついた。この猛り狂った王に、いかなる弁明も無駄であった。もともと単純な性格である。

若い男に抱きすくめられたまま、言葉を交しているところを見られたのは、致命的であった。

「王さま、わたくしは、本当に、何も知らないのです！」

わあっとばかりに揺琴は泣き伏した。

（そうだ！ わかった！ これは猫伯のしわざだ。あの男の罠だ！……）

揺琴は、泣きながらやっと気がついた。

自分がいま、とり返しをつかない立ち場におち入ったことをさとって、慄然とした。

（あのずるがしこい男の仕組んだ罠なら、もう、のがれられない！……）

揺琴は、はげしい恐怖と絶望に咽喉がふさがり、声がでなかった。

（猫伯のいうとおりにしてやればよかった）
この後悔は、もう遅かった。

「うぬ！ きさまはわしの眼を盗んでこの二年間、その男と逢っていたというではないか！ みんなわかっておる。おのれ、どうするかおぼえている！」

建王は唾を吐き散らしてわめき、揺琴の髪を乱暴にひつつかむと、怒りにまかせて房内をひきずりまわした。

それを押しとどめようとした門佳は、たち

まち侍臣たちにとりおさえられて
縄をかけられた。

「ふふふふ……」

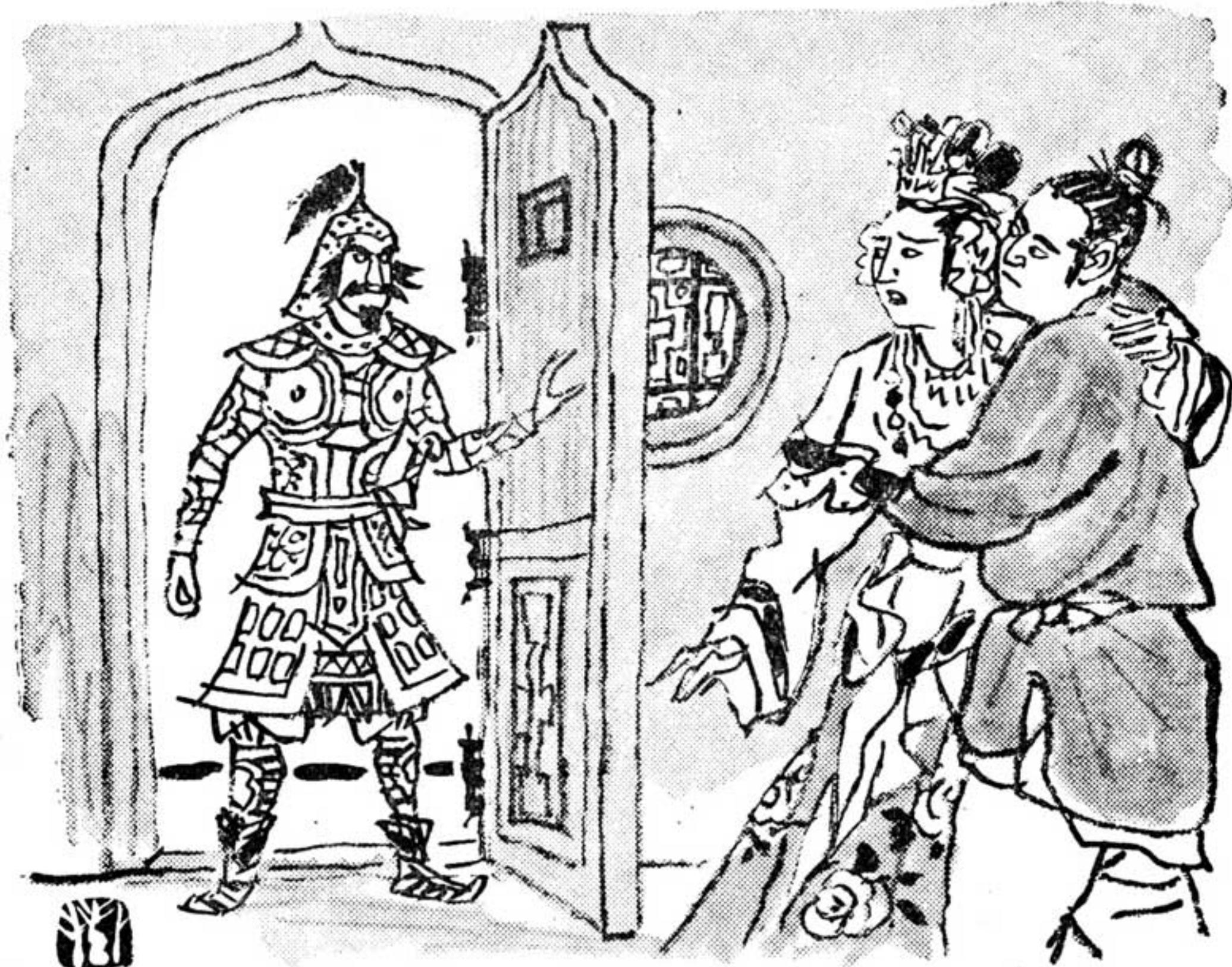
建王の背後に、いつも影のよう
につきそっている宦官の猫伯が、
鼻を鳴らしてふくみ笑いました。

門佳は、その猫伯の顔をみて、
ハッと気がついてわめいた。めち
やくちやに抵抗した。

「わかったぞ！ これはその小男
の計略だ。おれは、そいつにだま
されて、この王宮のなかにつれて
こられたんだ。おれも揺琴も、そ
いつにいっぱい喰わせられたんだ
！」

が、もうどうにもならなかった。
なぐられ蹴られ、縄尻をひきたて
られて地下の牢獄へぶちこまれた。
揺琴も同じく、高手小手に縄を
かけられ、牢獄の中におしこめら
れた。

昨日まで多くの女に与えてきた
恐怖戦慄の運命が、思いがけなく
も、自分の身にふりかかってきた
のだ。



栄華きわめた王妃の地位から、
牢獄の罪人へと一足飛びに蹴落さ
れたのだ。

「うぬっ、いますぐにでも首を斬
り落して殺したい。しかし、そう
やすやすと殺しはせぬぞ。この二
年間わしをだましてくれた礼に、
生きながらの地獄を味あわせてや
るのだ！」

建王の憤怒は、かつてない残酷
な打ち仕打ちとなって、揺琴の身
にふりかかった。

刑は、揺琴が死なないように、
長い時間をかけて、ゆっくりとす
こしずつおこなわれた。

「殺してッ、ひと思いに殺してえ
ッ！」

揺琴は、狂乱の絶叫をあげて、
数十度気を失った。

髪は烏雲をあざむき、眼は秋水
をたたえ、眉は春山をはらって、
腰、楊柳のごとし――

建王の愛を欲しいままにしたこ
の美貌の寵妃は、いまや、みるも
むざんな変り果てた姿となって、

城外に放逐された。

それより前に、門佳は、これも顔じゅうに刑罰の刺青をほどこされ、化け物のように変貌して、瓊州（いまの海南島）に島流しされた。

目と口と鼻の穴をのこして、あとは顔の皮膚いっばいに、醜怪な刺青を彫られたのであった。

狼海將軍

それから、五年の月日がながれた。

「おい、乞食坊主。そんなところにつっ立っている、狼海將軍の馬に蹴殺されるぞ。早くこっちの道端へひっこみな！」

「あっ……」

茶店のおやじにどなられて、ボロボロの衣を着た坊主頭は、よろよろと軒さきにころげこんだ。

「なんだい、馬鹿にひよろついているな。坊さん、飯喰っていねえのかい？」

言葉は乱暴だが、親切そうな茶店のおやじにいわれて、

「はい、この三日ほど、なにも口にしておりませんので……」

とこたえたのは、かほそい女の声である。

「なんだ、おまえ、尼さんかい」

「はい」

「それにしちゃ、ずいぶん汚ねえ尼さんだな。まあいい、こっちへきな。売れ残りの饅頭でよければ喰わせてやろう」

おやじは、ひからびた茶色の饅頭をつかんで、ひょいと尼の前にさしだした。

「はい、ありがとうございます……」

両手をさしだして、その饅頭をうけた尼の指が、根もとから十本とも無いのを見ると、おやじはギョツとして息をのんだ。

「あっ……」

ふと足もとに眼をやると、はだしの足の指が、これもまた十本ともない。

「……」

おやじは、うす気味わるそうに首をすくめた。

この尼は、乞食となって露命をつなぐ、揺琴であった。

旅から旅への放浪をつづけて、とうとうこの瓊州までながれてきたのだ。

「あの、浪海將軍さまとおっしゃいますと、どのようなお方？」

揺琴は、おし頂いた饅頭を、ガツガツと頬ばりながら、おやじにきいた。

おやじはいった。

「うむ。こんどこの島で軍勢を集めてな、江都の建王という、悪い王さまをやっつけるために旗揚げした、めっぼう強い將軍だよ」

「江都の建王……」

揺琴にとつては、忘れようとしても忘れることのできない名前である。

「そうよ。その建王というのが、とんでもねえ悪党でな、重税をとりたてて良民を苦しめる、女を片っぱしからさらって城の後宮へおしこめる、あまりのことに領民たちが陳情にいけば、皆殺しにしてしまうという、ひどい奴なんだ。」

「……」

「そいつの城へ攻め入るために、こんど旗揚げして、威勢よくこの島から押し渡ろうというのが、浪海將軍さ」

「……」

「ほら、おしゃべりしてる間に、むこうからきたらしいぜ。どいた、どいた、あぶないよ」
おやじは揺琴の腕をひっぱって店の中へ入れた。

やがて、馬蹄をひびかせ、砂塵をまきあげて、その將軍の一隊がやってきた。

道の両側には、この壮挙を支援する人々が

手をふって迎え、そして見送る。

「ほら、尼さん、あのまんなかに赤い旗をたてた馬にのった男がいるだろ。あれが狼海將軍だ。なんでもとは牛殺しだったというけど、すごい力の持ち主なんだ。あの顔じゅうに彫ったすごい彫物をごらんよ。あの顔をみただけで、江都の建王もふるえあがっちゃうだろうよ」

おやじが得意げにゆびさした男の顔を仰いだとき、揺琴はハッとして声をあげそうになった。

(あっ、あれは門佳!……)

その馬にのった將軍は、まさしく門佳であった。

刺青に、おおわれた怪異の風貌だが、その大きな眼、大きな鼻、には、忘れがたい特長があった。

狼海將軍の門佳は、眼光をまっすぐに、威風堂々と揺琴の前を通りかかった。

揺琴は、思わず声にだして、その名を呼ぼうとした。

が、思いとどまった。

この醜惡無惨な姿を、かって真心こめて自分を愛してくれた男の前に、現わしたくなかったのである。

それは、落ちぶれ果てた揺琴の心に、最後にのこったかすかな虚栄であった。

遠ざかっていく門佳の馬影を見送りながら揺琴の胸中には、ふと七年前、あの銀殿巷の金城楼で、人相見の乞食僧にいわれた予言を思いだしていた。

「——そなたの顔には、すばらしい吉相がある。しかし、一本だけ気がかりな兇運の筋がみえる。気をつけられよ。その罨におちこまなければ……」

そして、さらに老僧は、門佳にむかって、たしか、こういったのだ。

「——それから、おまえさんにも、たいへんな相があるぞ。苦しい試煉の末、万民を救うために、天下をとる相じゃ……」

自分の吉運とは、牛殺しの門佳と夫婦になることではなかったか……と、はじめて揺琴は気がついた。

そして、兇運の罨とは、建王に見いだされて、むなしい栄華にふけたことではなかったか……。

——揺琴は、喰いかけた饅頭を片手にもったまま、白い埃道のなかを、いつまでも門佳の去った後を見送ってたたずんでいた。

続・密書
隠覚

忍び夜秘帖

島本春雄・著

喜多玲子・装幀

大江戸の夜に咲く逢魔の花! 大名屋敷、旗本屋敷、そしてまた分限者の夜の闇を探ぐる影のような公儀隠密鳴子善四郎!

¥ 260

〒 40



読者短評

◎八月号の、読者随想中の「高嶋はじめ」氏の一文はなかなか佳篇でした。忠言、至言、得るところ大でした。毎号このような評を読みたいものです。雑誌の内容から受ける感じは新人のものは観念的なものが多く、造り物の感じで、どうも頂けません。現実的と云いますか迫真力といえますか、手なれた人の書いたものは、矢張り最後まで読みあきませんし、読後感もいいと思います。

(神奈川・雄生)

◎毎月二三日頃になるとどうしても落着きを失ってしまう。郵便屋サンが持つて来る『裏窓』をどれだけ首を長くして待つ事か。ドサリと投げ込まれた8月号は三百頁を越す大冊。素晴し

いボリウムがまず目をうばう。一部の週刊誌の行過ぎが影響してこのごろ世論も当局も大分やかましいようだ、日本にタツタひとつしかないこのユニークな雑誌まで十バひとからげに見られることは、吾々読者としても心外である。仔細に見ればそのような上スベリした雑誌とは全然異なるものであることが、スグ判るであろうのに。八月号では『なめくじ屋敷』と、絵では「婦人課報部員」のさし絵を、とくに楽しく拝見した。それから表紙はこのところずっと好調なものも嬉しい。灰色のわが人生に明るい灯をともししてくれる、ワガ『裏窓』の変らざる健在を祈る。

(東京、戸山原生)

◎八月特大号は好調であつたが頁数の多い割に優秀作の少なかったのは残念だった。今月号でいいと思つたのは、小田桐爽の「妖寄女護が島」である。これは他篇を圧倒して第一の白眉だと思う。読物として面白いし、挿絵もよい。

連載絵物語「婦人課報部員」は、絵も文も巧く、満足感が得られた。その他、「地獄医者」「お龍秘帖」「髪人形」等、異

色作品の多いのは、裏窓の特色である。希望としては、何時までも見飽きることはないような挿絵を、もっと文中に入れてほしい。一層の御奮斗を期待します。

(京都・憂世子)

◎「裏窓」8月号、遅ればせながら本日入手。サツと一通り目を通して、思った事を二、三書きます。私は、文章の良否はよくわからないので、主として絵について書きますが、まず巻頭の絵物語「美女と野獣」は、一応面白く拝見しましたが、顔の表情があまりないので、迫力が減少する結果になっているようです。それに、紋太郎クンが全然みにくく描かれているので、鉄クンが英雄に見える前に、興ざめして、面白味がなくなっている。説明の方も、もう少し現実性がほしいかと思つています。

「丑の刻異変」では、文章では「お由羅」の方は白の長襦袢一枚を素肌にとっているきりである……云々」となっているのに、最初の絵では、ちゃんとうちかけまで着ている。幽霊陰陽師でも、最初の絵と三番目の絵の、お千代ちゃんの着物の柄が

違つていました。こんな小さなことでも割と気になるものですから、御注意下さい。

失礼なことばかり書いたのであとになりましたが、気に入ったことをとりあげてみます。あいかわらずの絵物語ながら「あんどろめだ絵図」にしろ、「地獄医者」にしろ、喜美先生の絵は好きです。私は、魅了されました。「婦人課報部員」の絵はよかったです。細い線を使った影絵のような所がいい、これからもっと描いて貰つて下さい。

最後に文章のことですが、近頃、女性の切腹が続いてのつているようですが、あまり戴けません。それも、中康弘通先生の「悲愴美の世界」のように、歴史的にしっかりと書いているものは、読んでいても気持ちがよいのです。先月号だったか、その前の号だかのように、乗馬服でどうかして、刻一刻と描写してゆくようなのは、読んでいて嫌悪感があるだけです。急いで書きましたので乱筆乱文になってしまいましたが、どうかお許し下さい。では、また。

(芦屋市・S生)

◎日本国中には貴誌「裏窓」の

愛読者もさぞ多いことだと思ひます。そして、数ある裏窓ファンの中には「既刊号」をゼヒ共読みたいと思つてゐる人もあることと推察してゐます。ところで小生、御誌を過去にさかのぼり、約三十冊ほど所蔵してゐますので、そのような御希望の方に「全冊贈呈」したいと考えてゐます。如何でしょうか。昨年引越しの際に、三十二年頃より御誌を十数冊、誤つて払下げてしまひました。何しろ他の雑誌と一括しておいたため、残念なことをしたと思ひます。此度こそこのやうなことが起らぬうちに、どなたかのお役に立てたものと存じます。当方の希望としては、出来るだけ東京より遠方の地の方に差し上げたいと思ひます。本は一度目を通しただけでですから、少しも汚損などしてゐません。商取引や譲渡などという下心や意図があるものではないと思ひます。無償で結構です。見て喜んでもらえたいといふところです。

(足立生)

◎右のやうなお申出がありまして、御希望の方は、編集部までお知らせ下さい。先方様は

無償でいいと云われて居りますが、送料等の点は、受け取られる方が負担して戴くことになります。

(編集部・係)

◎八月特大号。「なめくじ屋敷」は、女体と軟体動物との悲痛な交歓がよく描けてゐました。こうしたアイデアのものとしては、珍らしく完成した形の小説でした。さし絵のヒロインが美しいのも興をそえています。

巻頭のグラビアは随分面白く見ました。三枚目と四枚目の折り込み、特に惹きつけられました。どうせ幻想の世界ですから四枚目のものは思ひきつて鎖の数をふやしたらよかつたと思ひます。「未整理棚の中から」は夫婦の心理生活を妖しく鋭くえぐつてゐます。このやうな場合全文を絵入りでのせるべきだつたと思ひます。

「呪法幻術特集」では「丑の刻異変」と「幻術からくり小町」が氣を吐いてゐます。いけにえに最後をうながす登壇や、琉球畳が手にふれるやうに実感として受けとれます。話が面白いので絵も楽しめます。「あんどろめだ絵図」は最後の

絵がよく、このやうに自然界をどしどし背景にとり入れて欲しいと思ひます。「婦人課報部員」は凄絶で、よかつたです。「妖奇女護が島」はひろびろとしたロマンスがよく、壮大なレビューでも見えているやうでした。挿絵は悪くなかつたけれども、必ずしも適任だつたとは思ひませんでした。

(文京区・かおる)

◎八月号に「マンハント」の創刊一周年記念で読者を映画に招待する、と云う広告がありましたが、裏窓自身も、創刊何周年記念と云うのをやつたらいか？ 新東宝あたりと特約して、最近作の特別試写会に読者を招待できないものでしょうか？

本誌読者向きの作品は、おそらく数限りなくあると思うのですが、その中で、特にこれぞと思うものを選んで、一般封切りに先んじて見せて戴けると、映画屋さんの方も広告になることですし、読者も喜ぶと思ひます。第一、本誌には映画化しても面白く思ひえるやうな筋の作品が

いくつも出てくるので、こう云つた作品を、どうして映画にしないのか、不思議な氣持がするくらいです。

(九段生)

それから、「裏窓くもりガラス」と云うのは面白かつたです。他の雑誌だつたら、読者の欄に取り上げても、全部、あれもよかつた、これもよかつた。感激しました、先生によろしく……。と云う、きまりきつた字句が並んでいるばかりなのですが、「くもりガラス」のやうな批評を平氣でのせて、読者の思つてゐることをズケズケ並べたてると云う本誌の勇氣と自信には感心しました。裏窓の、そんなところがとても好きなので。

◎他にも御投書は多くありましたが、スペースの都合で割愛しました。掲載出来ませんでした方におわびします。この欄にはハガキで結構です。御自由に好きな事をお書き下さい。本号掲載の方には、本誌十月号をお送り申し上げます。誌上匿名は随意ですが、住所と氏名はお知らせおき下さい。

(読者短評係)

時代 巷談

お竜秘帖



あらすじ

お龍と千太郎は、黒蛇の仁助の裏納屋の中に、背中あわせに縛られて、放りこまれていた。甲州駒返し村で猫の額ほどの縄張りを持つ、二足わらじの仁助の賭場で、お龍のつかったいかさま賽が、ふとしたことから見破られたためであった。

出入りの間違いがもとで、旅に出たまま甲斐の駒返しで行方知れずになったという、お龍の夫、富岡の清太郎を、乾分同様にしていた千太郎と共に探したずねてきた旅だったが底をついた路銀の算段に、お龍が使った細工賽で、二人は今にも責め殺されそうになる。

やっこの思いで縄をとき、逃れ出ようとしたものの、それを黒蛇の仁助に見つけられて千太郎は逃れたが、お龍は再び捕えられてしまい、地獄部屋に連れこまれて帯をとかれる。

千太郎は、お龍と旅を続けているうちに、心の中でお龍を恋するようになったが、親分の女房に手を出すわけにもいかず、苦しんでいる矢先の出来事だった。

仁助の家の地獄部屋で、お龍の危機は迫ったが——（前号まで）



赤鬼の檻

お龍の軀は、畳の上を、赤いものを散らつかせてくるくと花のように転がった。

「ちくしょう！ け、けだものッ！」

身自由を奪われていても、口だけは、鉄火にはねかえって、いまはもう、どうしようもない憤りを、せい一杯に、仁助の面に叩きつけるのだが、それが、かえって黒蛇の仁助

月城寺達

絵・長多玲子

を赤鬼にするのに役立っていることに、お龍は気がついていないのだった。

しめきった裏二階の、むっとする暑さ。

帯を手許にたくり寄せる、黒蛇の仁助の、鼻の頭にも、頭のあたりにも、ジトジトとにじみだすような脂汗が浮んでいる。



お龍もそうだった。

納屋の中で千太郎と一緒に、藁六に水をぶっかけられたまんまの着物が、今は一応乾きはしたものの、今度は軀中が汗だった。

「ふ、ふふふ。涼しくしてやるぜ」

「……………よ、よけいな、おせわさッ！」

「へへ、そうピンシャンすると、尚のこと、よけいなお世話を、焼きたくなるというものさ。え？ お龍。そう思わねえかい、ふふ」
「ちえッ。そ、そう思わなかったら、どうしようというのさッ」

「この阿魔。口のへらねえ奴だッ、この仁助様にタテつきあがると、どうなるか、わかるようにしてやる！」

仁助の手が、今度は、お龍の腰紐にかかった。

「あッ！、ち、ちくしょう」

「なにを、吠えやがる。まだ泣き声を出すにやア、早えんだッ！」

片隅の壁ぎわに押しつめられたお龍の、蜂のようにくびれた形の良い腰から、淡紅色の腰紐が、むすび目を解かれて、美しい蛇のよ

★千太郎が案じていたとおり、お龍は裏二階の地獄部屋で、身も世もなく悶えていた！！★

うに、くねりほどける。

そいつを、ぐいぐいと、無情に引き寄せる
赤鬼の馬鹿力。

「あッ。あッ」

お龍の軀は、また嵐にあった花のように、
きりきりと壁ぎわに転がる。

おさえるものがなくなった薄い着物が、は
らはらと開いて、こいつは、赤鬼の目には、
毒だった。

いや、仁助にしてみれば、目の薬と見たか
しれない。

その、目の薬が、必死にもがいて、立ち上
ると、縛られたままの軀で、部屋の戸口の方
へ、だッ！と馳けだした。

「へッ！ そうはゆくもんかい！」

「あッ」

仁助の毛むくじらの足が、お龍の引きず
って走る着物の裾を、ぐい、とふんづける。

「ここまできて、逃げられてたまるものか。
まだ、いかさま賽のお礼が、なんにもしてね
えんだぜ」

着物の裾を、驚づかみにして、それを、ず
るずる、と手許に引きよせる。

高手小手に縄が巻きついているので、流石
に着物は剝ががれはしないが、お龍の、じっ

とりと汗に濡れた、抜けるように白い円っこ
い肩が、すっかり露わになって、向うむきに
なった胸のあたりは、この裏二階の空気にじ
かに触れているのだった。

「けッ！ あ、あっちを、おむきッ！ こ、
この、お龍さんの肌を見た奴は、め、眼がつ
ぶれるンだよッ！」

「ひ、ひッひッ」

妙な声で笑った仁助。顔の紐を、全部ほど
いてしまったような笑い方だ。

「いきがいいぜ、お龍。いっそ、眼がつぶれ
てしまっても、いいような気になってきたが
それでもいいか！」

「か、勝手に、するがいいや！」

「ふふ。そうか、それじゃあ、眼がつぶれる
か、つぶれねえか、ゆっくりためしてみると
しようじゃねえか」

「……………」

「おっと、その前に、この裏二階からは、何
処にも逃げられねえ、ということ、てめえ
に判らしておいてやる。そら、こっちへ来て
みろッ！」

黒蛇の仁助、半裸になったお龍の縄尻をぐ
いと引きしごいて、部屋の戸口をあけた。

その向うは、一坪ほどの板の間で、板の間

の隅が、階下に降りる段梯子だ。

引きずられ、突っつかれながらもお龍の眼
は、必死になって、逃げ道を探しているのだ
が、

「どうだ！ こういう仕掛けになっているン
だぜ！」

仁助にそういわれて、よく見ると、階下ま
でつながっている筈の段梯子は、どういう仕
組みになっているのか、きりきりとせり上っ
ていて、そいつが、降り口の天井までもとど
き、牢格子のように、階下に通じる道をふさ
いでいるのだ。

「あッ！」

「わかったか。この裏二階の出入口は、ここ
だけだ。この梯子を降ろす仕掛けが判らなき
やあ、降りることもできねえし、下から、邪
魔しに上ってくることも、ならねえんだ。ど
うだ、これですこしは、安心したろう」

「……………」

「ふふふッ。どれ、眼をつぶしてもらおうぜ
え？ お龍」

「……………ああ、千太ッ！」

お龍、乱れてたれ下った髪の毛を、唇にく
わえて糸切歯で、キリッ、と噛んだ

赤鬼の檻の中にとじこめられて、もう、ど

うにも逃れようのない濡れ髪お龍だ。

いっそのこと、ひと思いに、舌を噛んで死んでやろう。そう心に決めるとき、瞬時の早さで仁助の手から、豆しほりの手拭がくり出されていった。

「あ、うッ、うッ！」

「そりゃあ、悪い量見だぜ、お龍。こうして口に猿ぐつわを噛ましておかねえと、これからあとは、こっちが安心できねえ！」

仁助は、眼をギラギラとさせながら、そうつぶやいて、額の汗をぬぐった。

道祖神

ちぎれそうに破れた片袖で、額の汗を押しぬぐった千太郎は、簾っ蚊に責められながらくさむらの中に身を横たえた。

黒蛇の乾分たちに袋叩きにされた軀の、骨身にこたえるような筋々の痛みが、思いだしたように千太郎を責めるのである。

ここは駒返し村のはずれに違いなかったが夜のことで、見知らぬ土地の、どちらが西やら東やら、いまの千太郎には、わかるすべもなかった。

黒蛇の納屋からやっと思いで逃げだしてきたものの、ひとり残してきた、姐御のお龍

のことが、気になってならなかった。

千太郎は、決してお龍を見殺しにしたわけではない。いずれは、なんとしてでも、救い出しに行くつもりでいるのだが、あの場合、一応身を隠さなければ、また二人とも捕われて、前よりもひどい目にあうにちがいなかったのだ。

それに第一、痛めつけられた軀が、いうことを聞かなかった。常日頃の千太郎なら、酒に食らい酔った黒蛇の仁助の一人や二人ならなとかできたのだが、多勢の奴に袋叩きにあった上、お龍ともども、手も足もがんじがらめにされて、永い間転がされていたのでは仁助をあるとき叩きふせるどころか、こうして逃れられたのさえ不思議な程だった。

「姐さんは、いまごろ……」

どんなむごい目にあっているかと、それを考えると、いても立ってもいられない気がする千太郎である。

だからといって、もう一度、仁助のところになぐり込むには、手に持っているのは、お龍の髪から抜いた、笄の仕込み刃がたった一本。

これでは、どうなるものでもない。

千太郎は、じりじりした気持で、お龍を救

い出す途を考えている。

心の中で、火のように燃え慕いながら、一時は生命を預けたこともある人の女房だという浮世の垣が、千太郎の気持をせき止めて、幾夜を重ねた旅の宿でも、部屋は別にする二人だった。

しかし、あの納屋の中で、背中あわせに身動きも出来ず、縛りつけられたとき、これがもう、命の終りかとおもう絶望感のほかには、自分の力で触れることができなかった柔らかな弾力のある、お龍の肌が、うすものを透して、吸いつくように千太郎の若い血を沸かせたのだ。

（死ぬときは、一緒だよ……）

そういった、お龍の声が、千太郎の耳の奥によみがえってくる。

そのお龍が、いまごろは、あの淫らな黒蛇の仁助の前に引きすえられ、身に着けたものをすっかり引っぱがされ、女盛りの軀を、覆うものもなく身悶えている……そんな想像が千太郎の頭の中を一杯にするのだった。

まっ白な、肥り加減の餅肌、石のように堅い五分丸の麻縄が、喰い込むほどに巻きついて、身のおきどころもないまっばだかを、羞恥と屈辱にふるわせているお龍の凄艶とも



いいたい姿。それが、千太郎の想像だけではなく、仁助の家の裏二階で、赤鬼の眼の前に身を縮めているのだったが……。

「……………」

ふと、人の話し声に気がついて、千太郎はくさむらの中から、頭を上げた。

「……そうだったなあ。もう、一年になるかなア……」

「うん、ちょうど、去年の夏のことだったかなア。俺ア、ここを通るときやあ、いつも気になって仕様がねえンだ」

まっくらな道端に、道祖神らしい崩れかけたような石塔が立っているのだが、その側の石ころの上に腰かけて、ヒソヒソとしゃべっている二人の男。

追手ではないと判って、千太郎はほっとしたが、しかし、だからといって油断はできなかった。

「別に、殺してしまう程のこたア、なかったんだが……」

「そうはいかねえ。親分にしてみりゃあ、あのときは内所は火の車だったんだ。ちょっと都合の悪いことがあって、甲府支配のお手先に、金の轡をはめなきゃあならぬえわけがあったのさ……ふふ」

「どうせ、何処かの若い女房を、どうかしたんだろうが、ありや、困った病氣だぜ」

「そうさなア。その悪い病氣がもとで、十手を取り上げられそうになったところを、どうにか金で納まりがつきそうになった……ところが、そのお手先の袖の下に入れる金をつくるために、例の通りの開帖だが、鴨の中にまじっていた旅がらすのばくち打ちが、すっかりさらっていったんだ……」

「なるほど、そんなわけだったのけえ」

「勝負が常のばくち場で、勝った奴が金をさらって行くのはあたり前だが、それでは、仁助親分の方で都合がわりい。金がまとまらなきやあ、十手を取り上げられらあ。そいつは親分にとっちゃあ、生命を半分持って行かれるようなもんだ……」

「で、やったんだな」

「あと味がよくなかったぜ。欺しうちさ、なア。滅法腕の立つ野郎だったが……」

「殺して金を取りかいし、その金を、お手先の神の下に使ったってえわけか……」

「声が高いぜ、夜更けで人が聞いていないからいいようなものの、気をつけろい」

「消された野郎に運がなかったんだな」

「何でも、清太郎……とかいう旅人だったぜ

え。やった場所がこのあたりだから、あまりいい心持でもねえやなア……」

千太郎、どきっとして身を堅くした。

若しやと思う心の乱れが、警戒心を忘れさせて、くさむらが、ガサリと音をたてる。

「誰かいるンじゃねえか？」

三 下

「人がいるわけがねえじゃねえかよう。薄っ気味の悪いことをいう野郎だ。もう、夜中だぜ」

「その夜中まで、墓六のあにいは何をしているンだろう？、おめえ、確かに道祖神のところで待ってろって、聞いたんだな？」

「そ、そんな気もするんだが……なにしろ、墓兄いのおごりで、酔っぱらっていたもんだから……」

さては、こいつらは、黒蛇身内の三ン下たちか、そうなら、ますます油断ができない、千太郎は、そう考えて、気づかれなかったのを幸に、尚も聞き耳を立てている。

「それで判ったぜ、おい。俺たちア、ていよく追っぱらわれたンだ。道祖神のところまで待ってろ、一緒に帰るから……そういつて一足先に俺たちを出しておいて、墓あにいは、あ

の、お秋とゆっくり濡れるつもりなんだ」

「ちえッ！ そんなことかもしれねえ」

「親分は、あの裏二階の地獄部屋で、お龍とかいう、小股の切れ上った年増を、いまごろは……」

「ちえッ！ 親分の邪魔になるから、遊びに行こうと追んだされ、その先で、墓兄いに邪魔にされりやあ、いつてえ、おれたちは、どこへ行きやいいんでえ」

「お、おめえ……」

と、一人が思いつめたようにいった。

「おめえ、あの部屋を、覗いたことがあるけえ？」

「え、あ、あの部屋を……？」

ごくり、と唾をのみこんだようない方でもう一人が応じる。

それは、お龍が閉じこめられているという黒蛇の家の裏二階のことであった。

聞いている千太郎には、それが裏二階なのか離れなのかそれまでの話では判らなかったが、お龍の安否にかかわりのあることだけはその気配で察しられるのだ。

「覗いたことがねえのか？」

「……」

無言なのは、覗いたことがないという返事

だろう。

「そうか。お、おれは、これから、親分のところへ帰るぜ。そして……」

「俺も一緒に帰る。おめえ一人で楽しむってえこたあねえ！」

「そんなら、地獄部屋の覗けるとおれを教えてやる。そのかわり、見つかったら、生命がけだが、それでもいいんだな！」

「へ、へへへ」

妙な声で一人の奴が笑った。

「へ、へへ。親分におんだされ、慕兄いに邪魔にされて、おまけによくしたもんで、懐もすっからかんだ。もう、こうなりやあ、面白いくところがあるなら、命ぐらい捨ててえぐらいのもんだ！」

「よしッ、そんなら、こんな気味の悪い場所で、来もしねえ慕兄いを待つより、地獄部屋の雨戸に吸いつくことにしようぜ！」

「それがいいな！ふふ」

「富岡の清太郎の幽霊にでも出くわさねえうちに、出かけようぜ」

そういつて、立ち上った二人の三下。

千太郎は、富岡の清太郎という名を、今度は、ハッキリと聞いて、はっとした。

旅に出た清太郎が、甲州駒返しで行方不明

になったという噂は、矢張り本当だった。

実の親とも兄とも思う清太郎の行方を尋ねて、清太郎の女房お龍と一緒に、旅に出た千太郎が、こんな場所で、はからずも聞いた、探す人の最後のありさま。

こみ上げてくる怒りに、千太郎の胸は煮えくりかえった。

清太郎を殺したのは、黒蛇の仁助だと、一番先に知らせてやりたい姐御のお龍は、その目指す仇の罠の中にいる！

ああ、ちくしょう！ どうしたらいいんだろう？

千太郎は唇を噛んで、よろよろと立ち上った。

酒の肴

「ああ、ち、ちくしょう！ どうしよう？」

お龍は、心の中でそう思い、猿轡の下で唇を血の出るほど噛みしめている。

千太郎が想像して、胸がつぶれる程案じていた通り、裏二階の地獄部屋で、お龍、どうしようもない姿にされていた。

黒蛇の仁助は、ねちねちと永いことかかってお龍を脱がせてしまったのだ。

二つ賽のいかさまの仕返しにしては、どう

やら時間をかけすぎるようだが、黒蛇にしてみれば、ゆっくりいたぶるほど、効果があると思っっているのだった。

徳利の酒が空になって、黒蛇はいま、階下まで取りに行っているのである。

「夜が明けるまでには、料理してやるぜ、まっっていることだな！」

そう、黒蛇の仁助はいったのだ。

いまに、あの一升徳利の中に、たっぷり地酒をつめこんで、この地獄部屋に上ってくるに違いない。

そして、眼の前に引きすえたお龍の裸を、酒の肴にして、ぐびりぐびりと地獄の酒宴が始まるのだ。

ああ、どうしよう。

お龍は、地獄部屋の中で、たったひとり、身を悶えていた。

何もまどってない。生れたまんまの姿だった。

巻きついてるのは、蛇のように無情な、情容赦のない麻縄だけだった。

ねじ上げられた白い二の腕に、「せいたろ命」の刺青が、鮮やかに浮き上っているのは、蚤に喰われたあともない女盛りの玉の肌。

お龍、今はもう、身も世もない。

猿ぐつわの中で、口の中が、カラカラにか
わいてくる。

ゴトリ……。

不意の物音に、お龍、はっとして、軀を堅
くした。

閉めてある障子の向うの雨戸に、何かが当
った音だった。

「もしや、千太が……」

そう思うお龍の気持は、すぐ絶望で打ち消
されてしまう。

あの袋叩きにあつて、痛めつけられた身で
は、自分を救いにくることはおろか、どうか
すると、今頃はつかまって、す巻きにされて
生きていないかも知れない……。ましてここ
は、あのつり梯子の入口しかない地獄の部屋
だ。あのからだで、二階の窓の外の雨戸まで
はい上がれるわけがない……。

お龍の周囲には、絶望しかなかった。

畳の上には、お龍の使ったからくり賽が、
二個、半目を上に向けて転がっているきりで
ある。

その半目の、おどけたような賽の目が、じ
っと自分の裸をながめているようで、お龍は
たまらなかった。天井の木目も、行灯の明り
も柱の節も、障子の穴までが、羞かしいお龍

の姿を覗いているのだ……。

ギ、ギギギイ。

梯子が降りる音がする。

ミシリ、ミシリ。

黒蛇の仁助が、そのつり梯子を登ってくる
足音だ。

「ふ、ふふふ。たっぷり酒を仕入れてきた
ぜ。乾分の奴等ア、氣を利かしたつもりか、
今夜は帰ってきやがらねえ。へへ、どうせ、
宿場の白ッ首を抱いて、とち狂っていやがる
んだろうが、こういう時の朝帰りなら、文句
を云うどころか、ほめてやりてえぐらいのも
ンだ……へへ」

仁助は、眼尻を下げてそんなことを云いな
がら、部屋に入ってくる。

「……………」

はっと、縛られた軀をうつ伏せるお龍の前
に、どっかと大あくらだ。

双肌を押し脱いだ色の黒い肌に、蛇と天狗
がもつれている、奇妙な毒々しい刺青が彫っ
てある、

「う、ふふふ。お龍、こうして、酒の肴にす
るにやあ、一晩や二晩では、もったいねえぐ
らいのもんだぜ。賭場を荒らしてくれたその
仕返しに、ここ当分はこの部屋から出さず、

骨身にこたえる程、泣かせてやる。ウィーツ」
酒の酔いで、眼が真赤になる程充血してい
るし、それとも怪しくなって、じりじりとお
龍の側によってくるのだ。

「……………」

猿ぐつわに声も出ず、じりじりとあとに退
るお龍。

「ふふ。いまだに眼のつぶれねえところを見
ると、弁天様の御利益も、あてにならねえん
だな。へへ、蚤の食ったあともない……と云
いてえ肌だが、二の腕に刺青があったなア。
ふふ、せいたろ命か……。それがおめえのい
ろの名か……」

そう毒づいて仁助、ふと、首をかしげた。
「な、なに。せいたろ、せいたろう……うむ
どこかで聞いたことのあるような名だぜ」
「……………」

お龍。清太郎の名を聞いて、はっとした。
「うん。あいつだ、あいつの名前だったな。
いやなことを思い出させやがったな」
「……………」

「そんな名前なざア、どこにでもある名だ、
おめえにかかわりなソぞ、あるものか！」
そう、打ち消すように云った黒蛇の仁助。
「こっちに來るンだ！」

と、お龍の円いすべすべした肩に手をかけようとした。

雨戸の眼

お龍の、すべすべした白い肩に仁助が手をかけようとしたとき。

ゴッソ！ ガラガラッ。

大きな音が、窓を覆った雨戸のところでした、それと同時に、瓦をふむ人の気配がそれと判るくらいに聞こえた。

「うッ。だッ、だれだッ！」

仁助は、驚いて叫んだ。

今の今まで、とう然として、お龍の柔肌に見とれていたのだが、それが、急に水をぶっかけられたような驚きだった。

裏二階の窓は、屋根ひさしの上についていて、雨戸が閉めてある。

そんなところから覗く奴がいようとは、今まで考えても見なかったのだが、お龍の泣き声が外に洩れないように、暑いのを承知で開けなかったのだ。

「くそッ。だ、だれでえッ！」

窓のところに走りよった仁助は、障子を破れそうな勢いで開き、雨戸を押しあけた。

「う、うわーッ」

ガタガタッ、と瓦を割って、足もともあぶなくあわてる二人の男の影。

こいつら二人が、誰だかは、仁助にはすぐに判った。

「うぬッ！。こ、こいつらッ！」

六と一緒に宿場の女を抱いて、腰を抜かしている筈だった乾分の二人が、こともあろうに、窓の外から、この部屋のありさまを覗いていたとは！。

そう云えば、雨戸にはちょうど都合のいい節穴があった。障子にも穴があいていた。

「けえーッ。どうするか、みやがれッ！」

仁助は怒りで、頭に血が上ってしまった。

自分だけが、たった一人で楽しんでいたはずの、お龍の全裸を、三下奴の二人が、外から覗いていやがった。

それだけではない。

お龍の姿にみとれてうつつを抜かしていた自分の、人には見せたくない図を、知らぬ間に覗かれていようとは、とても辛抱ができなかった。

まだなにもしていなかったから、よかったようなものの、とんでもないことだ。

部屋の片隅におっぼり出している脇差しを

つかんで、大急ぎで仕掛け梯子を降ろす黒蛇の仁助。

あの二人をとっつかまえて、それこそ、首の骨でも叩き折るかもしれない勢いだ。

屋根の上で、二人の三下奴は、大慌てである。

こいつらは、何故、雨戸があんな大きな音をたてたのか、全く判らないのだ。

命がけの覗きだと思うから、二人して、音をたてないように、静かに覗いていたのだ。

唾をゴクリとのみこむ音まで、気にしていたというのも、嘘ではない。

仁助が酒をとり下に降りている間に、お龍の悶えている図を、咽喉が乾く思いで見ているのである。

親分の仁助が部屋に上ってきて、お龍に近寄ったと思うまぎわに、雨戸が、ゴッソンと大きな音を立てたのだ。

急な傾斜の屋根の上を、何か、石のようなものが転がり落ちた音も聞いたはずだが、それはもう夢中だった。

屋根に登る時は暇がかかったが、降りるときは、暇がかからなかった。

「うわーッ」

そう叫びながら、飛びおりてしまったのである。

「野郎ども、待ちやがれッ！」

脇差しを抜きはなった黒蛇の仁助が、表戸をけ破ぶるようにして、とび出してきた。

裏二階のひさしの下から、家の横を廻って裏街道に出る道がある。

二人の乾分は、もう、仁助に捕まったが最後、命がないと思うから、飛び降りた時にくじいた足で、びっこを引きひき、前後して逃げてゆく。

「くそッ。ま、までーッ！」

仁助の怒り声が、そのあとを追って、簷かげの道を走った。

そのあとに。

ゆらり、と現れた男の影があった。

開きっ放した表戸の前に立って、闇をすかすように左右を見廻わす。

千太郎だった。

千太郎は、二人の三下のとをつけてきて、覗きに夢中になっている頃合を見はからって、雨戸に石を投げたのだ。

これか思いのほか旨くいって、仁助が飛びだしていったのだが……。



悪業の血

黒蛇の仁助が、脇差しを抜き放ったまじまじとびだしていったとき、お龍はたとえ一時にもせよ、地獄の魔手が遠ざかった事を、心の中で喜こんだ。

今のうちに、どうにかして逃げなければ、と、縛られた裸の軀を立ち上って、つり梯子のところを覗いてみる。

「ああ……」

うれしや、梯子は降りたままになっているあわてた仁助が、忘れていったのだ。お龍、我身が一絲もまもっていないことさえ忘れたかのように、梯子のところに駆けよった。

そのとき、

「あッ！」と階下から叫ぶ声が聞えた。

どきりとして、お龍、その場に立ちすくんでしまったが、その声は忘れる訳がなかった。

「せ、千太ッ！」

「あ、あねさん！」

「はやく、早く助けておくれッ！」

「いま、行きますぜッ。あねさん！」

痛む軀を鞭うって、梯子を上ってきた千太は、お龍の姿を見て今更のように驚いた。

「ちくしょう！、ひどいことを、しやがる」

「あッ！み、見ちゃあ、いけないッ、千太ッあたしや……」

ちら、と、真っ白な柔肌が、千太郎の瞬の中にうつって、それが二つに折れて蹲みこんだ。思わず眼を閉じた千太郎は、手さぐりのような形で、縄を引きよせている。

「は、早く、しなけりゃあ……」

仁助がもどってくる、と云うのは口のうちに、その間にも、千太郎の手は素早く動いていた。

お龍の筈に仕込んだ刃物が、こんな時にも役に立って、プツリプツリと縛り縄が切れて落ちる。

お龍は浅間しい姿の背中を千太郎に向けながら、泣けてくるような気持で、自分の軀が自由になってゆくを感じていた。

「さ、はやく！」

手首の縄が最後にとけると、千太郎にせかされるまでもなく、お龍はその場にちらばっている着物にとびついた。

「ちくしょう！。足の早い野郎だッ」

梯子の下で、仁助の音がする。

今にも、上ってきそうな気配だ。

「……………」

千太郎の顔が、一瞬、蒼ざめたが、お龍を

背後にかこつて、部屋の入口の壁ぎわに隠れた。

せいせいと、息を切らしているのは、仁助だった。追っかけたものの、二人の足は案外にはやくて、首の骨を叩き折れぬままに、途中から引き返してきたのである。

やり場のない怒りだけが、仁助の胸の中に残っていた。

「ちくしょうめ。どうするか、見やがれ！」

そうつぶやきながら上ってくるのだ。自分の悪業は棚に上げて、乾分に裏切られた口惜しさだけが、この屑のような男の心の中に憤りとなって渦巻いている。

その矛先を、お龍の餅肌に向けて、うつぶを晴らすつもりだったかもしれない。

部屋の中に入ろうとして、

「ぎえーッ」と、仁助はのけぞった。

千太郎が、からだごとぶつかって、胸もと深く突き刺した仕込み刃が、その、たった一突きで致命傷になっていた。

「う、うーッ、く、くくッ」

おのれの悪血のふきだす中に、もがき廻る黒蛇の仁助。

「姐さん！こ、これが、親分を殺した野郎だッ。清太郎親分の、仇だッ！」

「えッ？　そ、それじゃあ！」

「みんな判ったんだ。さっきの三下が、問わず語りに喋りやがったんだ。これもみんな仏の引き合わせかも知れねえ！」

「……………」

お龍、無言で、千太郎の胸に顔をうずめてすすり泣いた。

最後の賭

道祖神の立っている道端で、お龍は千太郎の胸に顔をうずめて泣いていた。

探し求めていたはずの人が、一年前にこんなところで死んでいたのだ。

それは、あっけないような幕切れだったが、お龍にとっても、千太郎にとっても、これでいいのかも知れない。

幾夜を重ねた旅の宿で、肌もふれずに過したことが、いまになって、よかったと思うのである。

「……姐さん。あっしやア、こんな世渡りがいやになりやしたぜ……」

「あたしも」

そう云ってお龍は、千太郎の胸から顔を上げた。

千太郎の顔に、ほのほのとしたものがこみ

上げてきた。これが親分清太郎の女房でなかったら、思いのたけを打ちあけて、女房にして、百姓でもいい、人足でもいい、お天とうさまをまともに仰げる堅気の暮らしがしてみたいと、夢にまで思ったことが、いま、やつと口に出して云えるような気がしてきたのであった。

千太郎は黒蛇の納屋の中で、生死の瀬戸ぎわに自分がお龍に云った言葉を想い出している。

「あ、姐さん。あっしは……姐さんが好きだったんだ。こ、こうなつたいまだから、い、いんだが……姐さんが……」

お龍も同じ思いだった。

お互に心の中は判りながら、行方知れない人に義理をたてて、死んだとも知らずに、探し廻っていた二人の心のいじらしさを、いまさらのように感じるのだ。

「姐さん……。お願いがあるのだが……」

「……………」

「あの、あの二の腕の刺青を、彫り直しちゃあ、もらえまいか？」

「え？　こ、この刺青を……」

お龍、あの地獄部屋での、自分の羞しい姿を思い浮かべて赫くなる。

“せいたろう命”

遠い昔に、娘ごろに思いつめて彫った刺青だった。いまは遠い日の思い出に、かすみそうになっている文字だ。

「“い”の文字を“ん”にしてくれりやア、いいんだが……」

いろは四十八文字の間を全部飛びこえて、一番頭の文字を、一番最後の文字ととりかえてくれと云う、千太郎の言葉は、胸の中の全部を吐きだしていた。

お龍は、何も云わずに懷から賽を取り出して、掌の上においた。

「これで決めてもいいねえ？」

神沢の山の上から夜明の光りが登ってくるし、しらじらと明けそめる朝の光りの中に、小さな二つの賽ころが笑っているのだ。

「丁目が出たら、彫り直すのはいやだよ」

そう云って、お龍は、道祖神の前の道端に賽をほうり投げた。

半目しか出る筈のない、いかさま賽は、捨てられたように土の上に転がって止まる。

「ふふふ、ふふ」

ふり向きもしないで歩るきだすお龍。

追手が来るまでに、二人は峠を越さなければならぬのだ——（終）

妖婦悪党抄

鈴木和夫

東 桂 史・画

★非道に徹した悪侍、無情の化身遣手婆、太く短かい盗賊哲学
★底深い江戸期に、どろどろとよどむ滓とも見える人間図絵ノ

責め殺された遊女

今回は、主として悪漢と悪女の話を書いてみる。悪女も悪漢も同じようなものではないか——などというなかれ。悪漢とは悪い男のことである。

太田南畝、つまり蜀山人が世の中の出来事を書き綴った「半日閑話」と題する随筆集がある。その中の「中万字屋の幽霊」という章に、こんな話がある。

文化七庚午年旦畝卯、中万字屋妓を葬る。十月末の事なり。此妓（この女）病氣にて引込み居たりしを、遣り手（やりて）婆仮初なりとて（かりそめ。仮病だと）折檻を

加へしに、ある日小鍋に食を入れて煮て喰はんとせしを見咎め、その鍋を首にかけさせ、柱に縛り付けて置きしかば終（つい）に死しけり。その幽霊首に小鍋をかけて廊下に出るよし沙汰ある。

「中万字屋」とは「吉原遊廓の万字屋」という意味である。「妓」は遊女。遣り手婆は監督兼拷問係りみたいなものだ。

遊女屋には折檻部屋というものがあり、その部屋には往生柱などというのがある。

この遊女はそういう場所に縛られたままで置かれ、ついに絶命したのである。

縛られる前には絶食の折檻を受けていたのだ。餓えのあまり、内緒で何かを煮て食おう

としたところを発見されたわけである。その鍋を首にかけるなどは、まことに残酷なアイデアで、眼の前に食べ物があいながら身に自由がないため、いっそう苦しめられるのだ。化けて出たくなるのも無理はない。

これに類する話は他にもたくさんあるのだが、責め殺してしまったのでは楼主の損害になるだろうと思えるのに、なぜだか、多くの場合は責め殺してしまう話なのである。

つまり、責め折檻の直接担当者である遣り手婆には、ソロバン抜きサディズムがあるからで「ヒューマニティ溢れる遣り手婆」の話などは探しても見当たらないのである。

恐るべきことには、こういう場合、責め殺

しても殺人罪は成立しなかったのだ。

遊女は楼主の所有物である。楼主は生殺与奪の権を持っているから、他の遊女に対する見せしめになるなら責め殺してもよかったのだらう。遣り手婆の嗜虐性は楼主への忠誠に通じる。遊女は殺され損である。

こういう、悪人の悪業が罪にならない世界の存在を、封建制度は当然のこととして許していたのである。

ヤケクソ放火で火刑

そういう地獄へ身を沈めた女の親の生活態度はどうかというと、もとより善悪いろいろとあるだろうが、悪い方の部類でこんな作が、同じ「半日閑話」にある。文政元年の事件である。

麻布十番火付

十月頃麻布十番辺に、後家暮らしにて娘一人持ち居り候処、貧乏の余り娘を品川へ勤奉公に出し（品川遊廓の宿場女



郎にした）後家一人暮らしにて過し処、この後家悪党にて博奕を事とせし処、この頃勝

子を見ては如何とぞんじ、娘を又々だまし亦五年ばかりの年を以って金子を受け取り

帰りしに、この間の勝負にまけしを悔ひて、又候（またぞろ。又しても）右の金子にて勝負を初め、又候残らず取られしゆへ最早（もはや）娘へ申訳も不成、外へ対しても不濟、大いにこまり自分の内へ火を付け、少々燃へ上り、右の一条頭はれ終にこの頃火あぶりに行はるとなり。

という、女だてらに博奕で身を亡ぼし、火刑柱を背負う破目になった者のお話である。

文中に「悔ひて」とあるのはよい意味で後悔したのではなく損をしたのが口惜しくて、ということだ。「今度こそ挽回してやろう」というギャンブラー特有の泥沼心理である。

切っ端つまって自分の家へ火をつけたのは前後の見境いもないヤケクソ放火だろうが、「少々燃え上る」程度のボヤに

しかなかった。しかし、当時の刑法では 上火あぶりの刑に処せられたのである。

火附御仕置之事

- 一、火を附け候者 火 罪

但、もへ立ち申さず候はば引廻の上死罪

- 一、人に頼まれ火を附け候もの 死 罪

但、頼み候者 火 罪

- 一、物取にて火附け候者引廻之義

日本橋

両国橋

四谷御門外

赤坂御門外

昌平橋外

右之分引廻し通候節人数不依多少科書之

捨札建置可申候、尤火を附候所居所町中

引廻之上火罪可申付事

但、捨札は三十日建置可申候

- 一、物取にて無之火附は不及捨札、火を附

候所居所町中引廻し之上火罪可申付事

右火罪御仕置都て不及晒に事

- 一、火附を召捕亦は訴人に出候者 御褒美

人数之多少によらず 銀三十拾枚

- 一、火を附候もの年を越於頭は 死 罪

(御定書百箇条)

とあって、燃え上らなくても市中引廻しの

幼児受難

戦後間もないころ、食糧事情の悪かった時代に「寿産院事件」というのが東京で起ったことを、読者はまだ憶えておられるだろう。

巢鴨あたりだったと記憶するが「寿産院」という名前だけはおめでたい産院を経営する

夫婦がいて、配給米の横流しをしたため、生まれたばかりの赤ん坊を大勢餓死させた、という憎むべき事件だった。あれと似たような

話が江戸時代にもあった。以下は文政元年の出来事――。

四ツ谷小児殺し

四ツ谷の駕籠かき至つての悪党にて、女房と申合せ、小児を貰ひ、其の小児の尻へ針を立て、一人は首尾よく殺せし処、又候この頃小児を貰ひ、是も針を立て殺さんとする処、唯なくばかりにて死なざるに付き、然る処へ右の小児を世話せし者参り、是は虫気哉、又、乳がない哉、我が方へ連行き乳を遣はし申すべしとて仲人の方へ連行き乳を吞ませ、医師をも呼び見せし処、医師申すよう、虫気の様なれども強いて虫気と

も思えずとて、所々をさぐり見るに、尻をさぐれば猶更泣くゆへ、よく／＼見し処、尻に針を立て有り、依て早々町奉行へ届けしに、かの駕籠かき聞き付け、とても逃がれぬ処とて、仲間へ暇乞ひして出奔せんと宅を出る処、外にて遂に捕えられしが、誠に天命恐るべし、是又この頃碌となる。

(半日閑話)

とあって、これは金欲しさからの犯行である。貰い子をするに養育費がついてくる。子供を殺して金だけ取れば営業として成り立つだろう――というコンタンだったのだから、実に恐るべきものである。

貰い子という風俗の現われる芝居に、西沢一鳳作の「乳貰い」(天保四年初演)がある。身を持ち崩した絵師が、闇夜の真葛ヶ原で女を手籠めにする。その後、僅かの借金に責められて男は二両の金を付けた貰い子をしたが、その赤ん坊の臍の緒書きから、昔の許婚の子であることがわかる。男は乳呑児を抱えて女の行方を血眼になって探す。ある雪の日に、妾宅の二階から乳が捨てられたのを見て貰い乳を頼むが、その家に住んでいた者こそ探し求める女であった。男は女の不貞を責め

たが、女は「真葛ヶ原で手籠めに遇つてできた罪の子だ」と語る。つまり、男は許婚と知らずに犯かしたのだ——というのがそのあら筋である。この芝居は今年の春、東京で上演されたが、つまり、氏素姓の正しい子なら「貰い子」なんかにはしないのである。そこに眼を着ける悪党があるのも、また当然だった、というわけである。

それにしても悪どい駕籠屋もいたもので、犯罪の中でも幼児を毒牙にかける犯罪は最も憎むべきものだ。先ごろ、東京に養女を虐待して逮捕された教師夫妻の事件があつたが「人の性は善なり」という言葉さえ疑問に思えるほどのものだった。

同書には、他にも幼児受難事件が書かれている。以下いずれも文政六年の事件である。

甲賀組屋敷にて小童打殺さる

此の頃の事とかや、青山甲賀組屋敷にて、

十二才に相成り候男子、同心の打ち候鉄砲

にて尻を打たれ苦痛すと云々、是は鉄砲を構へし処へ子供遊びに出て打たれしと聞こ

滝与一郎方の妖姥

砲試射の犠牲である。



同年五月青山組屋敷にて与力滝与一郎と申す者の方にて安産有之候処、取揚げば参り右赤子を抱きあげ長屋へ走り込み候ゆへ、直様跡追かけ参り候内、又候、取揚げば参り候間、是にて可有之と（同一人と思つて）縄からげに致し候処、是は実の取揚げばばにて、最初のばばいかなるものや分り兼ね、そのうちに出火、跡方なしに相成候由。と、これは幼児誘拐と放火の事件だ。続く章にはさらに奇怪な事件が書かれている。

下谷小児喰殺

同年其頃、下谷辺にても武家屋敷にて四才に相成候子供と隣の赤子二階にて昼寝致し候を、腹を喰ひ破り臓腑をたべ候由、右の母、下に洗たく致し居たる処、赤子泣き候ゆへ直に参り見候処、右の始末

の由。

とあり、四才の子供が隣家の赤ん坊を喰い殺したのである。

当時の奉行が、この「幼なき殺人鬼」とその母親をどう裁いたか？ 大いに興味がある問題なのだが、残念ながら事件記者としての蜀山人先生も、そこまでは書いてくれなかったのである。

虚無と頽廢

十一代將軍徳川家齊の治世、享和から文化文政、天保の初め、というあたりは江戸期の中でも最も頽廢をきわめた時代である。

饑饉、大火、旱魃、暴風、疫病、等の天災人災が相次いで全国を襲い、餓死する百姓は数知れず——という非惨の反面、江戸では風俗が華美、墮弱、乱脈の一途をたどった。

ブルジョアは豪奢逸樂の限りを尽くし、庶民また享樂淫蕩にうき身をやつした。

売春、賭博、犯罪は全盛時代に入った。

鼠小僧のような怪盗や河内山宗俊のような脅喝犯、片岡直次郎のような不良武士、愚連隊や毒婦などが横行して「悪の華」を咲かせた。蜀山人の「半日閑話」は、そういう時代

相を背景として書かれたものだ。

政治の貧困、人心の動揺、道德の低下腐敗は最高潮に達し、世はまさに濁流のごときデカダンス時代であった。

デカダンスとは、苦悩を調節することだといえる。つまり苦痛や煩悶から逃がれるため、享樂的な形で発散をするのである。発散というよりも一種の心理的な排泄行為と呼んだ方がよい。排泄が必要な時にそれを行わないことは、すなわち死を意味する。つまり排泄は自衛本能の所産である。

デカダンスが是認される理由はそこにある。何ともやりきれない世紀末的な混濁時代には、人々はデカダンスになりニヒルになる。さもなくば、エネルギーの消耗を強いられて生命を保持して行けないからである。

柴田鍊三郎が「ニヒリストはタフである」という意味のことを語っている。戦争中シバレン先生の乗った船が沈没して、長い間海上を漂っていたというのである。板きれか何かにつかまって浮いているわけだが、日本にいる家族のことなどを考える戦友は皆死んでしまったという。「俺が今ここで死んだら、女房はどうなる。子供は、親は……ああ、死に

たくない！」などという苦悩に悶えてエネルギーを消耗させた者は先に参ってしまうわけである。シバレンは「ケ・セラ・セラ」とニヒルでいたために命を落さずに済んだ。

「眠狂四郎を書いた動機はおめえ、ここにあるんだぜ」などといっている。

眠狂四郎の時代は、やはり家齊さんのころに設定してある。それが現代の読者に受けたということは、現代が化政度から天保にかけてのころの時代相と相似点があるからにほかならない。

早い話が、政治問題について真剣に考えてごらんなさい。ノイローゼ状態に達するまでには、そうたいして時間はかからないから。要するに、ニヒルやデカダンスは安全弁になっているのだ。これを利用できる者はタフでいられるのである。

ところが、ニヒルやデカダンスを毒物と混同する奴がいる。

「あの雑誌はデカダンス趣味だ。けしからん」などといい出したりするのである。こういう連中はたいがい頭のよくないお歴々なのであり、頭のお弱い御仁は元来がタフネスにできているから「薬品」を必要としないのである。

もう一つ。それよりもさらに頭の弱い連中というのがある。この連中は、もっと始末のよくない混同をやらかすものだ。

「都知事なんてえ野郎はよう、オカシな選挙や無理押しのオリソピックなんかやりやがってよう……」などと口走りながら善良な市民の粹からハミ出てしまう奴である。つまり、「こんな男に誰がした型犯罪者」というわけである。

最も、デカダンで身を守るには多少の経済力を必要とするので、世の中の悪さのしわ寄せが最も無力な者のところへ集まるのだ、といえなくもないのだが――。

河竹黙阿弥の「鑄かけ松」(慶応二年初演)が、その心理を、しがない鑄かけ職人の松五郎に代弁させている。

松五郎君が両国橋を通りかかって、ふと下を眺めると、大尽客が屋形船に美人をはべらせて、金にあかせたデカダンに耽っているのである。

「こう見たところが江戸じゃあねえ、上州あたりの商人体だが、横浜でも儲けた金か、切れ放れのいい使いぶり、あれじゃあ女も自由になるはず、鍋釜鑄掛けをしていちゃあ、

生涯できねえあの栄耀。ああ、あれも一生、これも一生……こいつあ宗旨を替えにやあなるめえ」

と商売道具を大川へドンブリコと投げ込んで泥棒を開業する、という名場面だ。

今年のメーデーに、皇太子ご夫妻の張りボテ像の下へ「俺達にも結婚させろ！」と書いたのがあったが、鑄かけ松のセリフで封建君主制時代の遺物としての天皇制を批判したらどうなるだろうね。「こう見たところが庶民じゃねえ。宮城あたりの皇族体だが税金でも集めた金か……」

という具合になるが、冗談はともかくとして、笑って済まされない問題が、やはりあるのではないか。

泥棒哲学

江戸末期の頃、勘定奉行や江戸町奉行の職にあつて名奉行と評判の高い曲渕甲斐守という人がいた。

その甲斐守が手がけた事件の一つに、次のような話がある。

曲渕甲斐守御勘定奉行たりし時、盗賊を吟味せしに、出生より以後今日迄の事、所々

へ盗賊に入り、財宝をうばひ取たる仔細、少しもつつみかくす事なく、明白に演説して、此上は一日もはやく御仕置に行われんことを願ふたり。何ゆへに盗賊をなせしと尋ねしに、彼もの云く、すべて人として一度は死せずといふ事なし、病みて死する時は数日のくるしみいふやうべきやうもなかるべし。死罪は即時に死する故、くるしみといふとも、すこしのうちなり。又とらへらるる迄は金銀を心のままに遣ひ捨て、乏しくなればまたぬすみ出すゆえ、尽くる事なければおしむ心もなし。万福長者といふとも、盗賊ほどおしげなく金銀を遣ふ事になるべからずと、覚悟せしゆえ、盗賊を業とせしよし申しけるとなり。(梅翁随筆)

というのである。「太く短かく――」の実践者だったわけだ。

しかし、太く短かくというのは実際にはあり得ない、というのが犯罪学上の常識となっている。大泥棒だの怪盗だのと呼ばれる者の「収入」を日割りで計算してみると、地道に働いている庶民の所得を下廻っている――というのである。やはり鑄かけ松的哲学は持たない方が無難でアリマス。

甲斐守は後に大目付に就任したが、その甲斐守にも悩みはあった。「半日閑話」はこう書き伝えている。

曲淵甲斐守娘出奔

七月十一日の頃曲淵甲斐守大目付なり、此娘兩人とも出奔の由、沙汰ありしなり。と、「世上の噂」を書いているのだ。二人の娘の年令も家出の動機も判然とはしないが無論、曲淵家がひた隠しに隠したためだろう。

しかし、火のないところに煙は立たず、善事門を出でず、悪事千里を走る——のたとえの通り、いつしか世人の口の端にはのぼったわけだ。

二人の娘はデカダンスを行ったのかレジスタンスを敢行したのか？ いずれにしても苦悩の代償を求める行為には違いない。屋敷にいては圧殺されてしまうからなのだ。

ノイローゼになるか発狂するか？ という事態を避けるための逃避行だ。近代的な女性だったものようである。一種の「出藍の誉れ」みたいなものだ。

こういう思いきった行動に出られない女性、どんな無理を押しつけられても、どんなに厭なことを強いられても、ただ忍従してい

なければならなかったのである。つまり、封建江戸期の大部分の女性は、生きているとは名ばかりの人形的生存をしていたわけである。

しかし、女性はどういうことが可能だからまだよい。同じ条件の下では男の方が弱いのである。男はすぐに発狂したりして、女の生命力の強靱さには及ばないのである。

大名発狂す

「半日閑話」などにも、大名旗本の発狂した話が沢山書かれている。次はその一例で、文政十四年の事件である。

稲垣若狭守嫡子乱心

稲垣若狭守嫡子、九月九日の事とかや、登城致し夫（それと読む）より帰宅がけ上屋敷へ立寄り住宅へ帰りしが、如可なる故や其の奥方を（松浦肥前守の娘なり）抜打ちに致され、夫をこばむ兩人の女中に手（傷）を負はせ、夫より庭を伝ひ表へ出で行方知れずに相成られしとなり。依って屋敷内上を下へと騒動なし、早々追手を掛けし処、其の三日目に両国橋の下にてさつま芋を食べ居られしを見付け、搦め捕り連れ帰りしとなり。誠に狂乱の致す所やとりく評判

なり。然るに松浦氏より奥方の安否を問ひに使の往来誠に二日三日は昼夜となく櫛の齒を引くが如しとかや。奥方も遂に公評に相成り候由。依之此節迄落着無之故、麴町の普請青山赤坂下町辺の大工日雇取にて普請致され候となり。いまだ落着付き申さずというのである。最後の「普請、云々」は座敷牢に関する記述であろう。

斬り付けられた娘の親は、肥前平戸で六万三千石の大名松浦肥前守静山である。この読物にもたびたび抜き書きをしている随筆書、「甲子夜話」の著者でもある名君だ。

ところで、発狂という状態も自衛本能の所産であることはいうまでもなからう。ノイローゼは地獄の苦悩に引きずり廻されることだが、苦悩に堪える力には限界がある。その限界を超えると人間は発狂する。発狂して初めて楽になるのである。狂人は苦悶をしないのだ。

むろん、劣性遺伝による発狂や、欲求不満（主として性的な）が原因の発狂などは別だが知的な人間の発狂は自衛本能の表われなのである。知的な人間はタフネスでない。発狂か自殺か——という状態に追い詰められた鬼

才芥川龍之介の場合などは、それを有弁に物語っている。というところ「あら、失礼ね！女

つほど書いてみよう。武士の家から狂人が出た話を、もう二つ三

が強靱なのは、つまり男よりバカだから、とっているみたいじゃない！」などと誰かが柳眉を逆立てて抗議をしそうな話となるが、実際の話が「みたい」どころの騒ぎじゃない。

早い話が、女が出産の苦痛に耐えられるのは強靱だからである。強靱な人は狂人にはなりません。

ともかく、こうなると大名旗本よりは下層階級の人間の方が有利である。

「てやがんでえ！べら棒め！」などと啖呵の一つもきって、女房の横っ面を二つ三つ張り飛ばして、亭主の方は吉原（乃至は夜鷹）へ直行し、女房は井戸端会議で憤満を爆発させる——という発散法もあるからである。

乱心者時代



山形吉兵衛母乱心

御普請方同心に山形吉兵衛と云ふ者有之、

だが、事情は省略する。

吉田仙吉一件

四月下旬（文化十四年）其の母乱心致し、右同心の頬を余程切り、背中をも余程、指

迷

を八本切り、母は直ちに井戸へ飛込み、落命致し候由。然るに切り候刀は五郎政宗の由輕き者に似合ざる刀を差料に致し候哉と評判有之、然れども右疵は追々快有之由なり。とあって、これは倅に斬りかかった話である。

松平外記乱心

同年（文政六年）四月廿二日夜御書院番三番御番の節、松平外記脇差を抜き本多伊織沼間左京を一打に致し、間部源十郎、神尾五郎三郎に手疵負はせ、跡にて外記は自害致す（下略）

というのは、城内で起った刃傷沙汰で、乱心とは称しても必ずしも発狂とは限らなかった。この事件も遺恨による殺人なの

廿六日、小普請組吉田仙吉奥向へ乱入せし由にて御吟味有之追って押込被仰付之。

御城内紛れ者の事

八月上旬の頃、御城へ安藤対馬守家来、杖を持ち笠を提げ躑躅之間迄参りし由、坊主見つけて早々取計りし由なり。

などというのもあって、惚れた女が大奥の奉公にでも上ってしまったのかも知れない。

青山長谷寺乱心者

同月（文化十四年七月）十三日、松平甲斐守家来乱心致し、麻布長谷寺へ参り、庭内を荒せしゆへ、門番を出し尋ねし処、悪口

申し拔身にて追かけしゆへ、其儘右の次第を院主へ咄せしゆへ、内前の町家へ通しければ、町家より大屋（大家。家主である）を

はじめ十五六人階子（梯子）蔦口等を持ち来たり押さえんと致しけれども、先に拔身持ち居り候ゆへ進み兼ねしが、大屋階子を持ち壱番に押し伏せし処、階子の下より乱心者体出し刀にて大屋を突く。即座に大屋死失せ、大屋の跡に居る者へも拔身の先あたり、是は少々手負ひけれども、そのうちに漸々取押へ奉行所へ訴へ出せしとなり。然るに翌日かの乱心者生氣（正気）に相成

り大いに悔ひし由なり。その咄を承るに、一体盆前金子にても詰りしや、十三日の昼麻布の質屋へ参り金子調べしが思ふ程出来申さず、夫よりの発り（始まり）にて長谷寺の住持にても頼み申訳にても致さんと思ひ参りし処、住持に逢ひ申さずゆへ猶更狂乱と相成りし由なり。懷中の金子三両有之右之金子を出し妻子方へ届け呉れ申すべき段頼みし由なり。寺の扱となりしとなり。とあって、これは金の工面に困って発狂したのだ。

無頼武士

このころ、武士階級の経済的基盤は破滅に瀕していた。

衣食足りて礼節を知る——という言葉の通り、武士の生活は乱れたものとなった。

「斬り取り強盗武士の習い」という硬派や、「君と寝やるか五千石とろか、何の五千石君と寝よ」型の軟派が続々と出て、武門の誉れだの恥だのはかえりみられなくなった。そういう例を「半日閑話」から拾ってみる。

麴町貝坂殺害

麴町貝坂の酒屋へ二月上旬（文化十三年）

に大村とやらん足軽体の士三人酒飲みに来たり、代を置かず飲み逃げんと致せしを亭主追掛出で一人をつらまへ、悪口致せしかば（罵倒した）侍、刀を抜き肩を突きしかば、其儘亭主即死す。依って手代ども遂に侍三人つらまへ、ゆびを一本々々に折り厳しくいましめしかば、げし人には相成らず、遠嶋ぐらいにて済みしよし専ら評判す——これは無銭飲食の果てに殺人を犯し縄目の恥を受けた者の事件である。足軽というのは武士の最下級、兵隊の位でいえば二等兵だが、浪人ではない。主人持ちの人間がこういう破廉恥を行なったのである。指の一本一本まで縛られたというのだからお話にならない。「げし人」とは「下手人」のことで、これは「犯罪者」というよりも「死罪」を意味する当時の刑法上の用語であった。それが遠嶋で済んだのは「町人の分際で出過ぎた致し方、たとえ被害者側といえども不届きである……」というような理屈でもつけたのだろう。

辻強盗

是も其の頃（文化十四年七月）の事とかや千田ヶ谷（千駄ヶ谷）新日暮の西にて麴町十三丁目の裏に居る町人、掛け（貸金）を

取り帰る所を侍体の者三人ばかり、かの町人を縛り、手込めに金子衣服を奪ひ取り行方知れずに相成り候由。此方へ出入りの絹屋嘉兵衛が話し致せしなり。右町人は絹屋裏の者の由、慥かなる説なり。

——というのは、武士の集団追はぎ事件。

近藤斧助町人を殺す事

土屋伊賀守家来平野匠八といふ剣柔の弟子に、松前奉行に家来となりし近藤斧助といふ者六月頃下谷辺を徘徊せし処、町人を乗せ候駕籠かき行き当りしゆへ不礼(無礼)を咎めし所、駕籠かき悪口に及びしゆへ、忽ち刀を抜きければ駕籠かきは、いづこともなく逃失せしゆへ、かごに乗りし町人を切殺せし処、堀家の辻番人、棒を持ち出でけるに、いかと思ひけん一図に逃げ延びんとせしに、急に辻番人に追はれ、逃げ道を失ひ、かの番人をも切殺し、夫より辻番へ上り右の通りを訴へしとなり。其の後斧助牢舎(入牢)致せし処、牢内名主といふ者有之由、金子持参致さぬ者をばむごき取扱ひ致すものよし、然るにかの斧助一銭も持参これ無きゆへ牢名主むごき取扱におよび或は悪口雑言なせしゆへ、斧助大いに立腹

致し、己れに劣らぬ(腕力の強い)者三人人申し合はせ、遂に牢名主の片足をば斧助持ち、一人も片足を持ち、兩人して牢名主を引きさきけり。有合ひの者ども肝を消すとぞ。誠に剛力といいつべし。八月に至り咎極り(判決があつて)遠島仰せ付けらる惜しき哉、町人を殺せし時、逃げさる時は遠島に及び申すまじと、人々沙汰す。

——とあつて、この侍は本格な悪人ではないので、世人の噂も同情的である。

駕籠に乗った町人は吉原へでも向う途中だったかも知れない。武士の権威はすでに地に堕ちていた。もっと昔なら町人側が平謝りに詫びたはずなのだが、この場合は駕籠かきだけでなく乗客の町人も負けずにいい返したのだろうと思える。その後で辻番人を斬り牢名主を股裂きにしているのは、落ち目の侍のヤブレカブレみたいな武勇伝である。

一つ疑問に思えるのは、武士が町人牢へ入ったような印象を受けることだが、あるいは揚り屋(武士などが入る牢)に町人でない囚人が多数入牢していて、町人牢なみのツル、(牢内へ持ち込む金)徴収制度が確立されていたのかも知れない。

ドライな悪漢

次は、ほぼ同時代(寛政の頃)の江戸町奉行、名判官と謳われた根岸肥前守鎮衛の残した随筆集「耳袋」より——。

強悪の者その死も又強悪の事

宝暦明和の頃なりし、御旗本に下枝采女といえる強悪不道のおのこありて、衆悪露頭して、御吟味の上、八丈島へ遠島に処せられける。なお悪事やまず、島にても品々不届ありける間、島にて刑に行はれしが、島の刑は、簀巻になして、数十丈ある崖上より、投げ落せば、屈曲峨々たる岩にあたりて、微塵になりて死せる事の由。下枝をも簀巻にして、かの巖上に連れ行きしに、下枝いえるは、我もかく積悪の上は、死は覚悟なり、しかれども、元来武士の事なれば簀巻にて、谷底に落ち死なんこと、いかにも口惜しき間、簀巻を解かれたし、自身谷底へ落ち死なんと申す故、其の意に任せければ、巖の端へ出て、右谷へ飛びけるが、下なる巖へ突き立ちて、上をにらみけるが、遍身裂け破れ、其のにらみし顔色、怖しなんどいわんかたなしと、八丈の土地の者語

りしとなり。

——とあって、これはレッキとした旗本である。

文化文政のころの人、鈴木孫兵衛という武士の残した随筆書「反古のうらがき」には、浪人の犯罪者の話で異様な事件がある——。

強悪

天保の初年、青梅（武州西多摩の青梅である）在に風呂敷づつみを持ちあるきて、質におかんといふ浪人ありて、所々にて迷惑することあり。其の包みの内は生首なり。包みの儘、質に取るといふことは無き故、是非改めんといへば、何かとむづかしくいいて改める事を許さず、兎角に面倒なる事なる上に、其の包みの様子、外より見ても人の生首と知らるるなれば、事を穩便に計らふにはしかずとて、金子少々遣はし帰す事あるよし。初めの程は故なく金子は取らずなどいへども、遂には取りて帰るよし也度々重なりて八州廻りといふ役人に召捕られ、吟味に及びし処に、もとより強盗なれば陳すべき心もなし、いひ上るよふは、駿甲あたりより東海道にも出、この業をすること六七年、首をきること二十に余れり、

金子を得しことは数をしらず、今命数尽きて召捕られぬれば、何も思ひ残す事なしと申しけり。さて首はいかにして得たると問ひしに、これは最初より一計ありて、いくたり切りても皆一法なれども、一人も漏らしたることなければ、住所にて行わる、其の法は野伏せりの宿なしを語らひていふ様は、吾浪人者となり、汝をしぼりて手打にするとして、村近き辺へ連れ行くべし、汝大声に、衆人吾を助けて給はれと呼ぶべし、さて人集りて問ふ時、吾が召使ふ下人、余が金子一両を取り逃げせしに、今ゆくりなく行き会ひたれば、手打となすなりと云はば、汝が命を助けんとて、少々づつ金子を出すものあるべし。其の金を得たらば山分けにすべし、土地にては後難あり、遠くへゆくべしとて乞食を連れ行き、河原などに荒縄をもてかたくいましめ、かくして村へ行くなりといつはりて、人遠き所へ引き行き、口に手拭にても土砂にても押し入れ押し伏せて首を切る、甚だ手軽なる法なりといへり。又問ふ、刃物は何を用ちひしや答ふ。数年前よりサスガ（小刀）一本身を離さず、重宝なる物なり、人の首を切るに

も、サスガにて少しづつ切り放ち、骨ばかりを残し、あお向けにもぎれば、大体取れるもの也、少しつづきたりともサスガにて切り放すに難き事なし、第一は河原にて面ばかり水に押し伏せて切るが切りよしと云ひしよし、悪虐無残なるも此の如きはまた珍らし。

——とあって、全く珍らしい悪浪人である。乞食を欲で吊つて、欺まして縛るあたりのプロセスが、なかなかおもしろい。おもしろい——というが無責任に喜んでいるみたいで、被害者には気の毒だが、全く人の世は油断も隙もできない。「旅は道連れ、世は非情。渡る世間は鬼ばかり」というお話である。

武士と悪女と密通

次は女の問題でゴタゴタした腑甲斐ない侍達の話を「半日閑話」から——。

青山原宿夫殺し

文政元寅年青山原宿御留守居同心の女房、（或ひは下女とも云ふ）此の女六月十一日夜主人の寝入りたるを考へ、兼て用意致し候哉、白帷子を着し脚絆をはき、蚊帳の中へ這入り、刀をもち主人の胸元を一刀突き

蚊帳を這出て外に伺ひ居り候処、主人右の
一刀に驚き目を覺し、枕元を見れば、血刀
を持ち候女ありし故、周章（あ
わてて）走り出で、戸口を蹴
放し、外へ出る処を又一刀背
を切るといへども、兎角して
走り出で、地主の内へ這入ら
んと門まで走り来る（此の地
主は金森仙介隣家なり）とい
へ共、戸を開く間なく、又女
はせ来る。主人のたぶさを取
り背より亦一刀腹へ突込みえ
ぐりけれども、又走り行き、
此の時腹わた出るといふ。夫
より大屋の戸口へ参りければ、
此の騒ぎに大屋も立ち出る処
へ、手負ひ来たりければ、是
に驚く処、又跡より女も来る
ゆへ、大いに驚き外に走り出
て、近辺の人を集めんと致す
処、大屋の子供彼女の血刀を
揮り来たるを見て泣出しける
ゆへ、かの大屋の女房（四十余りなり）外
へ走り出で、彼女を何の苦もなく手取り、

刀をもぎ取りければ、所々より人集り遂に
擲捕ると云々、いかなれば此の騒動に及ぶ



と尋ぬるに、先年彼女の先亭主を、当主人
と彼女と密通致し、毒を与へ殺し、其の節

古井鉄之助密通の事

申し合ひて、一生不便を加へ申す可きよし
（一生面倒をみてやると）約束致す処、彼
女は四十に満ち主人はいまだ二
十才の事なれば、此の頃は大き
に倦きて外に女にても出来しと
見へて、内へ一向に寄付き申さ
ずゆへ、彼女大いに立腹致して
先の亭主の敵を討つと号して右
の始末に及ぶよし。然る処主人
の弟あり、是へも彼女密通仕か
けし処、是は聞き入れざると云
云、此のゆへに擲捕り候節彼女
申すは、今一人を殺すべきにの
がしたりと言ひしとかや。主人
は色々介抱なすといへども、数
ヶ所の疵ゆへ遂に落命す。彼女
は牢舎（入牢）に相成り、御咎
はいまだ分らず、かの大屋の女
房は殊の外検使の御徒目付褒美
と云々。
——という、男も男なら女も女、
いずれ劣らぬお粗末さの果てに身
と尋ぬるに、先年彼女の先亭主を、当主人
と彼女と密通致し、毒を与へ殺し、其の節

七月廿八日（文化十四年）本所へ参りし処
竹本の隣に古井鉄之助といふ普請（旗本で
ある）有之、此の者割下水の津輕脇の同じ
小普請の所へ同居致せしが、右地主の妻と
密夫致し、右頭はれしゆへ、地主は事静か
に取計らはんと、右の妻の里方へ申すは、
箇様々々の義これ有れども内々にて相返す
（離縁か一時別居か、この辺の文意は判然
としない）此の上は右之密夫方へは決して
遣はし申すまじくと断はり相返せし処、其
の夜直ちにかの妻密夫方へ駆け込みせしゆ
へ、大いに地主立腹し、かの古井の宅へ切
り入り、かの妻を二ヶ所切り、古井も少々
手負ひせしよしなり。依て支配より早々古
井を本屋舗へ遣はし、妻も共に押込め置き
追々片を付け、内済に相成り候由咄にて承
る。

——このように内済ですめばまだよいのだ
が、つまらぬ女のことから自分は獄門となり
主君にまで迷惑をかける武士などもいた。

栗西市之丞獄門

七月十四日（文化十四年）頃、青山同心町
借地の植木屋の娘（名はとき）三味線弾き
て近所にて芸者ともてはやせしが、植木屋

も欲心深きものにて人々をゆすりて金銀を
貪りしといふ。あたり近き松平左京太夫の
臣栗西市之丞（百五十石斗取）久しく此の
女を愛しけるが、其の事藩主にも聞こえて、
国詰を云付けられしゆへ、此の女に俱に国
元（南部なり）に行くべきやと云ふに、辺
鄙の事なれば辞して随はず。市之丞は幼少
より鉄砲の上手にて、藩中にては鉄砲の弟
子多く、七才の時大筒を打ちて人も知るも
のなりといふ。則ち鉄砲を持て此の女を打
ちしに、玉と石とを込めたりしが、石は筒
の中に残り、玉は女の腹中に止りて、苦し
みて死せしといふ。速かに官に召捕はれて
吟味ありしに、如可なれば鉄砲をば用ひ
しと云ふに、渠（かれ。この場合は女のコ
と）は畜生同然の者なれば刃を用ふるは穢
れなり、よりて禽獣の積（つもり）にて鉄
砲にて打ちしといふ。

十月十四日

松平左京太夫家来

栗西市之丞

獄門

鈴ヶ森において捨札を見しに、御法度の武
器を用ひ、御咎のみにて、婦人の事なしと

云ふ。松平左京太夫殿も差控被伺といふ。
左京太夫殿差控ひ伺候事は延享年中ありし
後無之といふ。

美妾、拷問さる

次は文化十四年夏の出来事だが、蜀山人は
三度にわたって同じ事件を書いている。

本妻と妾の争い、毒殺事件、放火、悪女の
拷問、等々が行なわれた典型的な乱脈武家の
話である——。

山田仙之助一件

同年同月頃小川町猿楽町辺に山田仙之助と
いふ小普請有之処、右仙之助妻酒井若狭守
殿之駕籠訴致し、石川左近将監之御下げに
相成り、石川宅にて吟味致し候処、最初は
隠し居り候得とも色々申し衣服着替させ候
得ば、襟に火道具小刀様のものを縫込あり
しなり、其の翌日評定所へ出で直ちに揚屋
へ右女参り候、然る処最前山田次郎とて是
も養子なりしが、養母並びに兄弟の娘悪党
者にて遂に治郎を毒殺致し候由、当時の仙
之助は村上志摩守御先手の次男にて、養子
に参り候時も、甚だ家内騒がしく有之、仙
之助が手段にも及び兼ね困り居り候ひしが

如何なる存寄哉、養母並びに兄弟の娘を折
(牢)へ入れ置し処、火を付け抜け出し右
之始末に及びしなり、かの姉嬢は生得悪人
にて仙之助へ色々拵へて妻にならん事を巧
みし由なり、かの仙之助妻酒井氏へ駕籠訴
の節迄、養母も附き居りしが、是は其の場
にて制し寛勝之進と申す御旗本の方へ参り
居りしとなり、母娘共暫く寛へかくまい居
り候由沙汰有之、是も至ての放蕩之者の由
右の引合にて寛も評定所へ被呼出し、其の
外仙之助は勿論村上の家来迄評定所に被呼
出しなり、色々の評定最中なり、其の後翌
年に至り仙之助娘母円珠も病死す、然るに
評定殊の外長く相成り牢屋の娘を色々責具
を以て問ふといへども埒明ず、評定十六度
に及びしとなり。

——というのだが、これはどうも蜀山人と
しては悪文であつて、一度読んだだけではよ
くわからないようなところがある。この第二
報ともいうべき章には、こうある。

竹本安芸守自害

七月廿三日、泊の御小姓竹本安芸守(三百
石斗)部屋の廊下に出て、己が服を着かへ
切腹せしと自害をも致されけるが、いまだ

息あれば頭取衆としかくの事言置きて、
さて水を吞みて死す。家内へ朝はやく迎へ
の駕籠をよこすべきよし言置ければ、吐
血のつもりにて退出と云ふ。

此の人の弟専之助(前出の仙之助と同一人
だが字を間違えている)は養子にゆかれし
が、養方にて妾有りて美女なり、奥方に毒
をすすめしとか云ふ事にて、座敷牢に入れ
置きしが、牢を破りて老中酒井若狭守殿に
駈込み訴へて、其の事を言ひしかば、三年
揚屋へ入れ置かるなり。其の内に病死し
て家(五百石)断絶するに及びて、家に伝
はりたる御三代目の將軍家(家光のこと)
の御朱印、疾く紛失してなしといふ。其の
事に付いて竹本氏自殺されしといふ。

——とあり、さらにこの翌年に「事件の結
果」を書いている。

山田仙之助一件落着

昨年の山田専之助一条に至りても、円珠並
に専之助妻多勢とも種々御吟味の上、評定
十三度に及ぶといへども方つかず、依つて
石谷氏発言にて牢へ下り、厳しく拷問す。
訳はこの騒動の節に専之助病死す後、御朱
印紛失の故とかや。余り厳しき拷問にて円

珠は病死す。たせは事ともせず拷問を受け
しとかや。是に至つて町奉行岩瀬氏の沙汰
甚だ悪しき評判あり。然る処、八月頃御小
姓専之助兄竹本安芸守御殿に於いて自殺す
表向は吐血の積りなり。右ゆへ上にてても、
甚だ愛憐をたれ玉ひ、御言葉もかかりし由
なり。依つて岩瀬氏も取計り兼ねし処、十
月に至り落着す。その趣きは専之助生存に
候はば閉門仰せ付けられ、専之助伴権太郎
へ跡式無相違被下置、専之助妻たせは親類
に御預け、厳しく押込仰せ付けられ、専之
助叔母ゆい実たせの姉なり、是もたせ同
様、寛勝之丞は逼塞仰せ付けられ、其の他
掛はりの者それく御咎め仰せ付けられ、
記すにいとまなく、誠に此の度の御政道御
仁徳の至り世挙げて称歎す、近来の御政道
皆感涙を流すとかや。

当時は空前の賄賂横行時代で、跡目相続で
も裁判でも賄賂次第でどうにでもなったので
ある。天保十二年に家斉が死んだ時家斉の部
屋の周囲には、諸大名諸役人が献上した賄賂
の金品が山のように積み重ねてあった。
將軍家でさえそういうありさまだったのだ
から他はおして知るべしである。



東京の死角で

たそがれの霧雨

仕事で太平洋を越えたのは、生れて始めてだ。もっとも、一度戦時中に太平洋をわたったから、これで二度目だが、あの時は「仕事」じゃなかった。戦争のせいだ。

思ったより東京の街が大きいのに驚いた。何をおいてもまず、いわれた通り、ホテルで旅装をとくと、すぐ新マス・ビルへ出かけた。

その八階の八〇五号室。曇りガラスに、「レオン・アンジエ法律事務所」と書いてある。

中で、ポピュラー・ミュージックが響いていた。ノックすると、色の浅黒い、ヒリッピン人みたいな男がドアをあけて、どうぞといった。この男がトートンだった。はじめはヒリッピン人にみえたが、レオンと話をしながら、よくよく観察してみると、トートンはヒリッ

作・新・記
ホンキイ・トンク・羽
黒

藤原 隆・画



がてら——」

レオンは腕時計をみて、トートンに顎をしゃくつた。

ビルを出ると、たそがれで、小雨がシトシト音もなく降っている。

そこに行くまで、オレたちは三人とも、一言も口をきかなかった。

車は、銀座の「サニイ・アイランド」とネオンのある、その前でとまった。

「ナイト・クラブです、ムッシュ。ビールで飲んで、肩の荷を下してください。日本のビールは、ドイツものにひけをとりません」中へ入ると、まだ早いので、フロアはがらんとしていた。

オレたち三人は隅に座をしめた。

「マチコさん、来ていますか？」

レオンが給仕に、こう日本語で聞いた。ボーイはうなずくと、おビールですねといい、おじぎをして引き返して行った。

カメロン登場

オレが、わざわざ空路日本まで探しにきた女の名はクレア・パトキンス。クレアは二十

ビン人というより、むしろアメリカ・インディアンといった方が正しいような気がした。いつも、にこにこ笑っているようにみえるが、目の底に、暗い色をひそめている男だ。

これにくらべると、ムッシュ・アンジェレは、半白のあごひげを短く刈りこんだ、中年の紳士で、顔つきと同じように、話し方もおだやかだった。

「おつかれでしたらう？ 東京は始めてでしょうな？」

オレは首をたてにふってから、すぐ話題を切り出した。

「仕事は、できたら十日くらいで片づけたいんです、レオンさん」

レオンは肩をすくめた。どういう意味か、聞こうと膝をのりだすと、

「ムッシュ・トंक。十日では無理と私は考えます」

「なぜですね？」

「説明は長くなりますから、一つ街を御案内

「そりゃア困ったな。二週間で片づけるって約束してきたんだから」

相手はオレのはなしに耳をかさない様子だった。

どうして十日では無理だっていうんだ？

たかが、女一人を探す仕事じゃないか。東京の人口が九百万にしろ、オレにしてみれば、アメリカ人はその何千分の一しかないはずだ。

「出かけましょう、ムッシュ・トंक」

オレはあえて反対しなかった。向うを出るときブルースが、「レオンのいう通りに動けばまちがいない」といったことを思い出しただけではなく、妙に、このレオンを、オレは信頼できそうな気になっていたからだ。

彼女は東京で消えた！ いくら人間が多い日本でも、アメリカ人はわずか、すぐわかるはずで乗り込んだオレだが……

一で、許婚のウィリーに逢いたくて、半年前日本へ来た。ウィリーはある基地の航空隊員で、歴戦の勇士。二年前、二人は結婚の約束をしたんだが、現役のウィリーが、なかなか米国へ帰れないので、クレアの方が出かけてきた。母親の話だと、待ち切れないので、もしできたら、日本でウィリーと式をあげるつもりだったらしいという。

友人の家に三ヵ月ばかりいたクレアが、ある日突然失踪してしまった。ウィリーは、失踪をしらなかった。自分がまだ結婚できないといったので、怒ってクレアが国へ帰ったものと思ひ込んだ。これが行きがちのものと。

三ヵ月も便りがないので、クレアの母親がウィリーに身元を紹介してみても、はじめてクレアの失踪が明るみに出た。

ウィリーといさかいをしたので、自殺したのではないかというものもいたが、ウィリーは強くそれを否定した。日本の警察へも一応捜査を依頼したし、米国軍人の妻ということにして、ウィリーがMPに捜査を頼み出た。

しかし、捜査は捗らず、ブルースが捜査を引き受け、ブルースからオレにその仕事がまわってきた。

「実費は別で、成功報酬は三千ドル。わるく

はなからう？ 日本見物をしてきな。オレへのリベートは二十パーセントでいいぜ」

ブルースの奴、いいのができたんで、外へ行くのをいやがり、オレに仕事を廻してよこした。

だからオレは多寡をくくって引受けた。

ところが、レオン・アンジェレは、十日じや無理という。なるほど、日本の警察でも少し手こずっている一件だから、そうはいえるだろうが、人探しじや人後におちないオレだ。ビールがほどよく廻ってくると、舌のまわりもスムーズになり出した。

「ブルースがね、あんたのいう通りにしろっていったんだ。一応、ブルースの顔は立てますがね、しかし、どうしても十日じゃ探し出せないっていうんです、レオンさん」

その返事の代りに、レオンは酌をしているホステスに話しかけた。

「マチコさん、ミス・クレアが、いつまでこのお店につとめていたか、それをこの男に話してあげてください」

聞いているうちに、オレはレオンのやりかたに感心した。

案内するといったのはうわべで、レオンはちゃんと段どりをつけていたんだ。

「四月の末でした。それっきり知りません」
マチ子という女は、口数が少ないが、清潔な感じのする子だ。

「つまり、四月の末、突然姿を消したのです、ミス・クレアは。なぜでしょう？ 私もその理由を考えました」

レオンはオレにも考えてみるというような口ぶりで呟いた。

「できるだけ永く、日本にいたいので、ミス・クレアは、ウィリーに内緒で、ここで働いていました。約二ヵ月です。ところが、働いているうちに、彼女は、ある日本の大新聞の記者と知りあいになったのです」

その記者の名はイトウというのだそうさ。『おそろく、私の考えですと、このイトウというリポーターに当たってみるのが一番早道じゃないかと思ひます。何かうまい口実をみつめて近づいて、ミス・クレアのことを嗅ぎだしたらいいでしょう』

マチ子が横から口を出した。社の名と、電話番号と、所属の地位を数えてくれたので、オレはそれを手帖にメモした。

そのとき、トートンが、レオンに目で合図した。オレもその視線を追った。

入口から一人、恰幅の好いアメリカ人が入

つてくると、誰かを探すように、中をぐるりとみまわした。トートンが、小さな声で、レオンにいった。

「また、カメロンが来ましたよ」

十年前の事件

例外は別に、新聞記者で連中に、悪い奴はいない。こいつはオレの持論だ。B新聞のイトウは、オレの持論を裏切らなかった。

生来オレは、あんまり策を好まない。だからイトウに逢ったときも、すぐ単刀直入にオレの肚をぶちまけた。

「わざわざアメリカからですって、驚いたな」イトウは若くて、さしずめラグビーならハーフをつとめるといったタイプにみえた。

「実をいうとね、トンクさん。僕も、そのミス・クレアのことを気にしてたんですが！」ちよつと、齒に物がはさまったいいかたを、オレは聞き逃さなかった。

「ミスター・イトウ。彼女とだいぶ親しくしておられたと聞きましたよ」

イトウは首をふった。

「誤解しちやいけませんよ、僕は、あの人にフィアンセのいることを承知の上でつきあつてました」

TAKASHI



「異国人に同情したんですか？」

「おおげさない方はやめてください。実をいうと——」ここでイトウは声をひそめ、辺りをみまわした。

二人っきりの応接室なのに、何を心配そうにするのかと、オレは妙に思った。

「あなたは、昨日東京へみえたただけなんで、

むろん御承知ではないはすですが、僕はミス

・クレアに近づいて、カメロンの正体をつかもうとしたんです」

「カメロン？」

聞いたような名だと思ったが、とっさに思ひ出せなかった。

「それで？」

「ミス・クレアは、カメロンが、どういう男か全然しらなかったんです。カメロンの方は、ミス・クレアが何の目的で日本へ来て、なぜナイト・クラブで働いているか、チェーンと知っていました」

「それは、どういう意味かね、ミスタ・イトウ」

「するといきなり鼻をつまらせたような声でイトウがべらべらと早口にしゃべり出した。

「許してください。もしかすると、僕がミス・クレアを殺させたことになるのかもしれない」

「何だと？」

イトウは涙をハラハラとこぼした。

「トングさん。こうなんです。実は、僕が彼女に、あることをたのんだ結果、彼女がカメロンの手で消された確率が高いのですから――」

「カメロンが消した？」

「そういったとたん、オレは昨日みた恰幅のいい男の顔と思い出した。」

「あのナイト・クラブにも来ているアメリカ人だな？」

「どうしてあなたは、それを？」

「いや偶然さ。昨日、ちょっと姿をみかけた。」

ところで、君は、ミス・クレアに、何を頼んだのだ？」

イトウはネクタイをゆるめ、ワイシャツの首元を空けた。

「話せば長いことになります。おそらくあなただって、占領されていた当時、日本でおきた大きな事件を御記憶と思います」

「例えば、テイギン事件といったたぐいのことか？」

「それも一つです。シモヤマ事件、マツカワ事件、ミタカ事件の、一連の事件です。むしろ、くわしい経緯をあなたは御存じないでしょうが、シモヤマ事件から十年たった今日、一部のジャーナリストが、また、自殺と認定されたシモヤマ事件を、別の角度から検討しはじめているのです」

「それが、ミス・クレアやカメロンと関係があるともいうのかね？」

「ええ、あるんです」

オレはすわり直した。

「一つ質問させてもらおう。そのカメロンという奴は、一体全体何者なんだ？」

「元少佐とかいう話です。しかし、誰もはっきりしりません」

「軍を退いたのか？」

「そのようです。とにかくわれわれ日本人は、彼の指揮下にある団体を、カメロン機関と呼んでいます」

失敗の原因

翌日一日、オレはイトウの助けをかりて、ほとんど二十四時間ぶっ通して「調査」に当たった。

外国人記者クラブへ行って、何人も同国人の記者をつかまえ、カメロンについて尋ねたが、はっきりしたことを何一つつかめなかった。

午前三時にホテルへ帰ったオレは、イトウと一緒にあけがたまでにウィスキーを一本空にした。

そのときイトウが話してくれた、テイギン事件の真相らしいという推理に、オレも少しばかりひかれた。

「あの事件で失敗したので、シモヤマ事件がおこったんです」

眼をさましたのは、夕方の五時だった。

シャワーをあびながら窓の外をみると、相変らずの雨だ。身体がべとついて、一日に何度もしシャワーをあびないと気持ちがわるい。こんな時季に日本へくるなんて、オレも馬鹿な

ことをしたもんだ。

それから飯をくいぐい一杯やってイトウに聞いたはなしをもう一度くみ立ててみた。

一時間ほどして、レオン・アンジェレから電話で、また一杯のまないかとさそいがかかった。

「(サニイ・アイランド)でならね?」

そういうと、電話の向うでレオンが笑った。

「マチコが気に入りましたか?」

そういつたから、そうだといっておいた。

レオンの正体だって、オレにはよくわからない。何しろ、ブルースが曰く(とにかく信用のおける男さ)といっただけなのだから――。

トートンが部屋へしばらくたつと誘いにきたので、オレは出かけた。

やはり時間が早いので、中はすいていた。

マチ子もむろんいた。しかし、オレのお目当は、マチ子ではない。

「プレスマンのイトウに逢ったよ!」

「収獲は?」

「ムッシュ・アンジェレ。どうやら君のいった通りらしい。ミス・クレアを探し出すのは、十日じゃだめなようだ」

こういつただけで、オレのはらをレオンはすっかりよみとっていた。

「ムッシュ・トング。あの男は危険です、近寄ってはいけない」

なるほど、たしかに(あいつ)は危ない。

しかし、オレの商売には、絶えず危険がつきまといっているし、よせといわれると、やりたくなるのがオレの性分、ましてミス・クレアに(何かをたのみ)、そのこと以来、彼女が姿を消してしまったとなると、どうしても(あいつ)をつけねらうより仕方がない。

「御好意には感謝しますがね、ムッシュ・アンジェレ。わざわざ東京くんだりまでやってきて、わかりませんでしたと引き下ったンじやア、オレのつらが立たない。お客さまの信用も大事だから、御注意を胸に、ほどほどにやりますぜ」

オレがそういうと、二度とアンジェレは異議をとえず、何かトートンと小声でしゃべり出した。だからオレはマチ子の手をとって踊りに床へおりて行った。

早射ちの名手

家は、イトウがしらべておいた。

オレは出かける二時間ほど前、ブルースの顔を立てる意味で、レオンに電話して、これから出かける予定だと通告だけしておいた。

東京へ着いてちょうど七日目。その日だけは珍らしく雨はふらなかつたが、朝からどんより一日中曇っていた。

車をボーチへのりつけたのは、午後七時半だった。

ベルをおすと、腰のまがった召使いが顔を出した。

「カメロンさんに逢いたいんだが?」

オレは、はつきり名刺をわたした。いわばこれがオレの戦法の一つ。敵のふところへとびこんで、当りや碎けるばかりさ。

成功したようだった。すぐ中へ通され、待っている、ドアをあけてカメロンが入ってきた。

「一杯やりですか、ミスタ・トング」

「バーバンじゃないでしょうな、ミスタ・カメロン」

「日本人は、われわれより口が奢っています。

黒でものみますか?」

ジョニー・ウォーカーの黒。

すぐにオレは切り出した。

「あなたのことだから、おおかた何できたか御存じだと思いますが?」

カメロンは、ニヤリと笑ってうなずいた。

「レオンとおしりあいですね。あの男は危険

です」

「レオンもいつてましたよ、あなたのことを同じようにね」

二人は思わず吹き出してしまった。

オレは少しも油断していない。レオンから聞いていた。カメロンは(コルトのカメロン)と仇名されている早射ちの名人だという。それでオレは、わざとカメロンの右わきにびったりとよりそい、奴の右手を封じる位置に座をしめて笑っていた。

「いつ帰られます、ミスター・トンク？」

「用件がすみ次第」

「じゃア、今夜のほうですか？ 幸い切符の余分があります。何ならおゆずりしてもよろしいが」

オレはむかつとした。こいつ、オレを追いつ返す気だと思ったからだ。

「まだ用はすんでいない」

つい語気に陰がこもった。

「もうすんだと私は思いますよ。いくら日本にいても無駄ですから」

「おい君、それはどういう意味だ？」

「ほほう、まだおわかりにならないんですか。じゃアはつきり申しましょう。尋ね人は見当らなかったと、依頼主に報告されればよろし

い」

「君は、オレに命令をするつもりか？」

「とんでもない。ただ、親切に申しているだけですよ」

「ミス・クレアをどうした？」

「ミス・クレア？ さア」

「とほけるのもいい加減にしろ。貴様が消したのか？」

「おだやかでないいい方ですな。私は争論を好まない。おひきとりねがおう」

カメロンは立ち上ると、ブザを押した。

腰のまがった召使いが、ドアをあけて入ってきた。

「ヘストン、お客さまがお帰りだ。お送りしろ」

このとき、おかしなことがもち上った。

というのは、ヘストンがこう答えたからだ。

「お客さんは、お帰りになりたくないそうでございます」

「ヘストン、貴様——」

電光石火、どこからとり出したのか目にもとまらぬ早業だった。ヘストンの右手に、ピストルが握られていた。

伏兵

カメロンより、オレの方がよっぽどおどろいてしまった。それまで腰の曲っていたヘストンが、身をしゃんとおこし、作り声を改めてオレに指図した。

「ムッシュ・トンク。その男の拳銃をとり上げてください」

それまでは悠然としていたカメロンも、拳銃をオレがとりあげると、はがみして口惜しがった。

「本物のヘストンは、台所でやすんでいます、ムッシュ・キャメロン」

カメロンもフランス派りで、キャメロンとよんだ男は、いうまでもなく、レオン・アンジェレだった。

「貴様か、レオン」

「いかがです。やはり私はあなたにとって危険な人物だったようですよ」

「レオン君、君は？」

「それよりも、その男に、ミス・クレアの所在をただすのが、あなたの義務でしょう？」
「いわれる通りだ。オレはカメロンをにらみつけていった。」

「さあ、いえ、ミス・クレアはどこにいる？」



「ミス・クレアは、存在していない」

「というのは、貴様が殺したというのだな？」

「いや待て、私は、殺したとはいわん」

「いいかげんにしろ。たつた今、ミス・クレアは存在しないといったじゃないか？」

「その通りだ」

「冗談をいっているときじゃない。痛い目をみたくなかったら——」

このとたん、窓のそばのかけから、いきなり女が一人姿をあらわした。

「ムッシュ、銃をおすてなさい」

レオンが、ぼとりと銃を床におとした。

攻守は逆転した。

女はおちついていった。

「カメロンのいう通りで

す。ミス・クレアは、存在していません」

はじめてオレは、その女の顔をみた。そして同時に、アッと叫んだ。何度も、写真を見せられた（あの女）が、冷い銃口をオレたちに向けて、面のような顔で立っている。

「ミス・クレア？」

女は首をふった。

「いいえ、ミス・クレアは存在しないのです。自己紹介をいたします。私は、ミセス・カメロンです」

オレは思わず、レオンの顔をみた。だが、どういうわけか、レオンは顔の筋一つ動かさなかった。

いや正しくいうと、そんなことは百も承知だというように、ニコニコ笑っているようだった。

「あなた、どうするんです、この二人を？」

冷たい声で、ミセス・カメロンが聞いた。

カメロンは、床の上から拳銃をとりあげると、内ポケットへしまいこんだ。

「もう三十分もすると、テッド達が戻ってくる。あいつらに任せよう」

人を殺すのを、まるで鶏の首でもしめるようにいいやがった。

レオンが口をひらいた。

「マダム・キャメロン、ここでちょっと私に一言いわせていただけませんか？」

ミセス・カメロンの顔をみた。カメロンは首をすくめた。

「何とおっしゃりたいんです、ムッシュ・レオン」

「かけてもよろしいでしょうか」

「妙な真似をするな」

カメロンはどすのきいた声でレオンにいった。

「しませんとも。マダムの前で、はしたない真似をしないのが、われわれの国の風習です」

「じやアお前たち、二人ならんでかけろ」

罨

レオンは、ゆっくりとしゃべりだした。

「マダムに聞いていただきます。しかし、前もっておことわりしておきますが、それは私の創作ではありません。生証人もいる事実なのです。おそらくどなたかは否定なさるでしょうが、常に真実は、決して否定できぬものです」

「前口上はけっこう」

ミセス・カメロンは短くさえぎった。

「では本題に入るといたします。ある女性が、アメリカから日本へやって参りました。許婚の兵士と結婚するつもりでしたが、兵士は待てといいました。その女性は、仕方なく、それでいてアメリカへ帰る気にならず、日本に止まりました。本国へ金を送ってくれたのんですが、手ちがいで送金がありません。そこでその女性は、あるナイト・クラブでホステスをつとめ、そこで日本のプレスマンと、そして、アメリカの実業家としりあいました。ところが、日本のプレスマンは、アメリカの実業家と称している男の正体をつかんでくれれば、お礼はいくらでも出すと申し出ました。彼女は、アメリカの実業家と称している男の正体を全くしらなかったの、いわれた通り、金がほしさに、そのアメリカ人に接近したのです。一方、当のアメリカ人は、彼女に許婚のいることも、ちゃんとしらべていました。なぜ彼が、彼女の身元をしらべたかというところ——」

「彼女を愛していたからさ」

いきなりカメロンが口を出した。

レオンは皮肉たっぷりの口調でいった。

「愛情を疑うつもりはございません。しかし、そのアメリカ人は、何度も同じように女を手

に入れ、邪魔になると、始末してしまうという前歴の持主でした」

「でたらめだよ、こいつのいうことは」

「本当かどうかは、ミセス・キャメロン、あなたの御判断にまかせます。とにかくいままでお聞きねがいます。ところで、そのアメリカ人は、常に、目的のためには手段をえらばぬことを信条にして生きてきた男です。彼女が、ある意図をもって自分に近づいてきているのを知りながら、自分の方でもある方策を立てました」

「ど、どんな？」

ミセス・カメロンが真顔で聞いた。

「うそっ八さ」

「あなたは黙っていて。ムッシュ、どうぞはなしをおつづけください」

「ありがとう存じます。そこでそのアメリカ人は、まず彼女を自分のものにするために一つの手を打ったのです。彼女の許婚に、日本人の愛人がいることを吹きこみました。しかも、その許婚の兵士が、日本人の愛人と同棲している写真もでっちあげてみせたのです。もうすこし彼女が賢明であれば、彼女の許婚のところへ行つて、理非を正したかもしれせん。しかし、おそらく、彼女はそのアメリ

カ人の罠にかかってしまい、許婚より、そのアメリカ人のいうことを方を信用してしまったものと思われれます」

「そうです、私は、カメロンのいったことを信じました。そうね、あなた」

ミセス・カメロンの銃口が、少しカメロンの方へ移動した。

「そ、そうさ。本当のことをいったんだ。こいつは嘘をついている。お前は、まさか、こんな奴の話を信じるんじゃないまい」

「信じるのも、信じないのも、私の撰択に委せてください。ムッシュ、生証人は、本当にいるんですか？」

「こんなことあるかと思って、外につれてきています。何でしたら、おあいになってお聞きになったらいかがですか？」

ミセス・カメロンの顔が、みるみる曇っていった。

「私が窓から合図すれば、トートンがその日本娘をここへ連れてくる手筈になってます、マダム・キャメロン」

ミセス・カメロンの眉がきりつと上った。

「ハリー、あなたは、私をだましたのね？」

「馬鹿馬鹿をいうな」

「いいや、じゃア、その日本の娘さんにあつ

て話をききます」

「いけない。みんな、こいつらの企んだ芝居だ。命がおしいんで、芝居をしているんだ」

「いいえ、そうではありません。おそろくムッシュのいうことが真実でしょう」

「まアお聞きしたら」カメロンが、じわじわと女のそばへより始めた。

「そばへ来ないで。射つわよ」

「さアそんな玩具は私にわたすんだ」

「いいえ、いやです。あなたの口から本当のことを聞くまで私は——」

カメロンが女にとびついたのと、銃声がひびいたのは、全く同時だった。そして、腹をかかえて床に倒れたのは、カメロンだった。

もうあと三十分もすればニューヨークだ。

オレは見送りにきたときレオンがいった、あの言葉をそのとき思い出した。

「カメロンは、ひよっとすると命をとりとめるでしょう。ああいう奴は、殺そうとしても、死ぬもんじゃありません。いわば、社会を温床にする、バチルスも同然です。いくらわれわれがバチルスを駆逐しようとしても、バチルスが生きのびてゆく、その真理をおわかりでしょうか？　つまり適者生存の原理に同じ

です。人間生きて行くには、強くなければならないのです。たとえその生き方があやまつていても、生活力の旺盛な人間は、抵抗をしりぞけて生存しつづけます。法律で約束しようとしても、法律は人間のつくるものですから、どこかに欠陥があります。この欠陥が、一つの病気の代理をつとめ、バチルスどもはそこへくいこんで生きのびるのです。ですから、正しい人にも、ある意味でバチルスの生きかたを学び、そしてバチルスを駆逐するために、強く生きて行く必要があります」

一体、レオン・アンジェレの正体は何なのだろう？　たしかに、悪に味方するような人間ではないが。レオン・アンジェレという男も、カメロンと同じように、何かの機関を結成しているのではないのだろうか？

それからあの女だ！　かわいそうに……。

しかし、彼女にはウィリーがいる。オレからも、よくウィリーにいつてやった。彼女も戦争の犠牲者なんだ。戦争さえなかったら。そうだ。根本はこれなんだ。戦争さえなかったら、人は、人を殺しあたりすまい。もう二度と人類は戦争の愚をくりかえしてはいけないんだ。さて、こっそり一杯ひっかけることにしよう……。

泣き兵衛 往々組始末記
 老巴嚙子

飯田 豊吉

画・中島喜美

左衛門河岸

夜の左衛門河岸である。

月はなく、風もなく、重い夜気が、どっぷりと川面に垂れこめていた。

猫の子一匹通る気配のない、静まりかえった深夜である。

いや——。

土堤柳のかげに、いま、死神にとりつかれた一組の

男女が、うすぼんやりと現われた。

男は商家の手代ふうの身なりで、色の白いなよなよとした姿である。

娘は、まだ十六、七でもあろうか。これは大店の箱入娘らしく、美しい絹物を身につけて、髪にさした櫛、かんざしの類も安物ではない。

「お嬢さま——」

「新七……」

二人は手を取りあって、ひしと抱きあった。熱い息をたがいの頬に寄せあったのち、手をつないだまま、腰をかがめた。小石をひろい集めては、袂にいれるのである。



「どうやら、身投げ心中の決意らしい。」

大店の一人娘と雇用人の恋。親のゆるさぬ二人の仲。どうせこの世で添われぬものなら、いっそあの世で……。

という次第であろう。

「なむあみだぶつ……」

二人は、暗い水面にむかって、手を合わせた。

浪人、並川浪十郎は、そのときになって、はじめて二人の背中から声をかけた。

「おい、待たれよ——」

二人は、ギクリとして、浪十郎をふりかえった。

「死なねばならぬわけがございます。どうかお見のがしのほどを……」

新七は、あえぐようにいった。おきまりのセリフだ。

「とめはせぬ。ただ、待てといったただけだ」

浪十郎は、能面のような無表情な顔でいった。着流しの黒羽二重に朱鞘の大刀を落し差しにした浪人姿である。

「……………」

手代も娘も、横あいからふいに現われたこの浪人に、不気味なものを感じて、足をすくませた。

「お前たち、財布を持っているか？」

ふところ手のまま、浪十郎がいった。

「へえ?……」

「持っていたら、ここへだせ。——冥土への旅に、旅費はいらぬ」

「……………」

手代と娘は、おずおずと懷中をまさぐり、財布をだした。娘のほうが重そうである。

「それから……。おい、娘、お前の頭のものを置いていけよ。水びたしにするのは、もったいない」

「……………」

「……………」

娘は、キツと唇を噛んで、髪に手をあげた。櫛、かんざしをひきぬくと、それを土堤草の上に、投げ捨てるように置いた。

「ほかに金目のものを身につけていないか」

浪十郎は、まだふところ手のままだ。

「あなたは、いったい誰なんです!」

たまりかねたように、新七がいった。だが浪十郎はそれにはこたえず、

「邪魔してすまなかったな。もう死んでもよい。袂に石でもつめろよ」
ニヤリともせずに、いった。

「あ、あなたは!」

「ほら、そこに大きな石がころがっている。それを抱いて、早くとびこめ」

浪十郎は、やっとなところ手を解いて、草の上に落ちている櫛やかんざしをひろった。

それを見ていた娘が、いきなり、わッ……と泣きだした。

★美貌の娘玉乗りと、白髪の老爺の心中死体! その蔭には、妖しくもおぞましい秘密が……

「新七、あたし、もう死ぬのはいや！ 死にたくなかったわ。うちへ帰りましょう！」

駄々をこねるように、娘は顔に手をあてて泣いた。

「なにをお嬢さま、いまさらそんな……」

手代はあわてた。娘の袖をつかんで、一緒に死んでくれと哀願するのだ。

だが、死神はもう娘をみはなしていた。娘は夢からさめたような、すっかりした足どりになると、さっさと土堤をおり、一人で闇のなかに去っていった。

「お嬢さま！ つれのうございます！」

手代は、草の上にべたりと坐って、泣き面になった。

「ふふふ……」

並木浪十郎の唇から、はじめて笑いが洩れた。そして、死にぞこないの男の耳に、そっと口を寄せてささやいた。

「お前、それほど死にたければ、これから店へ戻って、十兩ばかり盗んでこい。そうすれば、とびきり上等の極楽往生をさせてやる」

が、男は首を横にふって、とびあがった。

「いやだ。あたしも命が惜しくなった。お嬢さァん！……」

新七も、娘のあとを追って、とびたつように土堤から離れていった。

「馬鹿めッ！」

浪十郎は、その後姿へ、みじかい罵声を吐きかけた。

ところが――。

土堤かげの暗闇から、この珍奇的一幕を見物していた、もう一人の男がいた。

赤檜の木刀一本、ストンと腰に落した遊び人、泣き兵衛である。

（へへへッ……こいつアおもしろえや！）
泣き兵衛、口をあけて感嘆した。

（味なことをやる浪人じゃねえか……）

一人つぶやいた泣き兵衛、浪十郎の前に、ふらりとその姿を現わした。今夜の泣き兵衛は、夕方から鳥越辺の安酒屋で飲みつつけ、かなり酔っている。

「む――何者だ」

浪十郎の眼が、するどく光った。

「いや、お侍さん。おどろきましたよ。いい人助けをなさいましたねえ……」

「みていたのか」

「ヘタに説教なんかきかせねえで、みごとに二人の命を助けておやりになったその呼吸、まったく、たいしたもんです。感心しましたぜ」

「ふふふ……」

油断のないかまえて、浪十郎は声だけで笑った。

「けれど、たった一つ、気になることがござんす」

「……」

「あの若い心中者から取りあげた、櫛やらかんざしやら、そいつはいつたい、どうなさるンで？……」

「どうもしない。このままだ」

「ほう……。それじゃ、物盗りだ」

その泣き兵衛の言葉が終らないうちに、

「ええいッ！」

浪十郎の大刀が、朱鞘からはげしいうなりで一閃した。

無法にも、抜きうちさまに泣き兵衛の真ッ向うを斬りさげてきたの

だ。

「あぶねえッ、何しやがるッ！」

つぎの瞬間、身を落してひねった泣き兵衛の腰からも、赤檜の木刀がひきぬかれ、

「とうッ！」

目前一寸に光る浪十郎の白刃を、横なぐりに烈しく叩いていた。

「うッ！」

浪十郎の手が、ビリビリッとしびれ、その大刀は、びゅうんと空を斬って、数間離れた土堤柳の幹に、ふかふかと突き刺さっていた。

死を誘う女

その翌日の夕刻――。

泣き兵衛は、また左衛門河岸の土堤にきて、しきりに首をひねっている。

（なにしろ、ゆンベは酔っぱらっていたからなア……。あれは、夢だったかも知れねえなア……）

ひどい二日酔いで、まだ顔色の青い泣き兵衛だった。

居候さきの龍門勘五郎の家の二階で、いままでげっそりと寝ていたのだ。

昨夜のことが、どうも気になってしかたがないので、こうしてまたこの河岸までぶらりとやってきたのである。

（いや、夢じゃねえ。ほら、この柳の幹に、昨夜の浪人の刀の突き刺さった痕が、ちゃんと残っているア……）

もうちょっと酔いが深かったら、おれはバツサリやられるところだ

った。かなり腕のたつ浪人者だったが、あいつはやっぱり、ただの物盗りだったんだろうか。

だが、あの心中者にとっては、たしかに救いの神だったな……。

泣き兵衛は、腕ぐみをして、川の面を見おろしながらぼんやりとそんなことを考えていた。頭が重いので、するどい知恵もうかばない。夕闇が次第に濃さを増してきた。

と、そのとき――。

泣き兵衛の右肩に、すいっと一人の女が寄ってきた。

「――ねえ、あんた。とびこむの？」

「えッ？」

と、おどろいて、泣き兵衛はその女の顔をみた。

三十二、三の年増で、顔にうすく白粉を塗って、唇が赤い。あいま

い茶屋のおかみのような身なりでくすれた色っぽさをもつ女である。

びんつけ油と白粉の匂いが、ブーンと泣き兵衛の鼻をくすぐった。

「女にふられたのかい。それとも、主人の金の使いこみかい？」

女は、泣き兵衛を身投げと間違えている。

無理もない。二日酔いの青い顔で、さっきから川つぶちにたたずみ

腕を組んで考えこんでいるのだ。

「頭がズキズキするんだ。酒のない国にいきたいやつさ」

また三日目には帰りたくなる……と、あとは都々逸でつぶやいた。

妙な女がでてきやがったな、と思っている。

が、そのつぶやきは、女の耳にはいらなかった。

「五両だせば、極楽往生させてやるよ。さんさん、いい思いをしたあげくに、ちっとも苦しまないで、死なせてあげるんだがね……」

女は、泣き兵衛の耳に口を寄せると、そっとささやいたのである。



「なんだって？」

泣き兵衛、さすがにいぶかって、女の顔をまともからみた。

その泣き兵衛のするどい眼光に、身投げなどする人間の気配はなく、

「あッ、いけねえッ」

女は、舌うちすると、裾をひるがえして逃げた。

「おい、待て——」

五、六歩は追ったが、女の足が必死の勢いで遠去か
つていくので、泣き兵衛はあっけにとられて立ちど
まり、呆然と見送った。

（妙な女だぜ、まったく——）

川風に吹かれたためか、泣き兵衛の頭痛もだい
ぶおさまった。

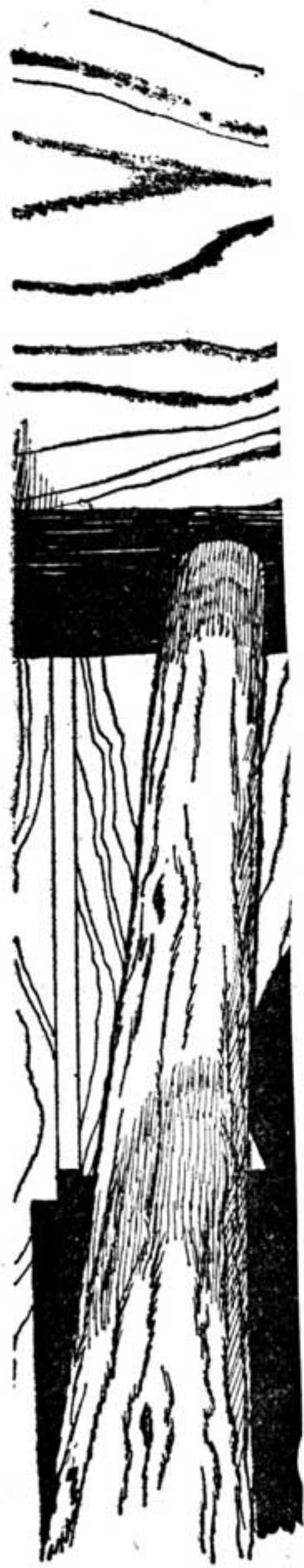
いきなり女にそばへ寄られ、白粉の匂いをか
がされたせいか、泣き兵衛の胸に、春駒太夫
の面影が、ぼうッとうかんだ。

するとこの男の足は、吸い寄せられる
ように、西両国へむかっているのだ。

めざすは娘出刃打ちの掛け小屋、そ
の裏口からすうッと楽屋へとおる。

「——三日目だよ、泣きさん、くや
しいッ」

春駒太夫は、いきなり泣き兵衛
の胸にすがると、二の腕をキュ
ウツとつねりあげた。



つきりさめたぜ」

でれでれッと鼻の下が三寸ばかりも長くなる男である。

「ちえ酒の飲みすぎかい。道理でいつになく顔色が冴えないと思つたよ」

「いてえッ」

泣き兵衛、とびあがって、

「なにが三日目だい。いてえ、いてえ。手をはなしてくれよう」

「きょうで三日も、あたしのところに顔を見せなかったということだよ。この三日間、どこでなにしてたんだい」

「なにもしてやしねえよ。居候は二階で昼寝と、昔から相場はきまつてらア」

「ほんとかしら？」

春駒太夫は、いま舞台からおりてきたばかり。下座の囃子が、まだにぎやかに鳴っている。

緋鹿の子のたすきをとると、真紅の地色に金色の桜を散らせた大振袖が、ハラリと大きく垂れさがる。はなやかな水色の化粧袴の紐を、するするとほどこいて脱ぎ捨てると、鏡台の前に坐る。

いつもながら、眼もさめるような艶姿の春駒。もろ肌ぬぎになって厚化粧をおとしにかかると、娘ざかりの肌の匂いが、このせまい楽屋に、むんむんあふれる。

泣き兵衛の鼻のさきに、ぬけるほど白い、なめらかな春駒の襟あしがちらちらして、

「クンクン、ああ、なんてえ、いい匂いだ。この匂いで二日酔いもは

鏡をのぞきこみながら、春駒がまだすねている。形はすねていても、

惚れた男の顔をみたうれしさに、胸のなかはとろけそうな娘太夫だ。

「退屈でたまらねえんだよ。ひまがあり余るもんだから、つい飲みすぎちゃうんだ」

「ぜいたく、いつてる。あたしや、日に四度も五度も出刃打ちを勤めなけりや、お酒どころか、おまんまにもありつけないっていうのにさ」

「そいつをいわれると、いちばん弱い……」

泣き兵衛は、急にしょんぼりとなって、首をすくめた。

「ああ、そうだ。もしかしたら、お前さんのその退屈の虫封じになる話があるんだけど……」

ふいに改まって、春駒がいった。

「へえ、なんだい？」

「うちの小屋の隣りに、娘玉乗りの一座が掛っているだろ？」

「ああ、小菊太夫という、ポチャポチャッとした可愛らしい芸人がいるよ」

「まッ、あの娘を知ってるの？」

「二、三度のぞいた。いや、五、六度だったかな。その太夫がめあてでね」

「くやしいッ」

「いてッ。おい、よせよ。その娘玉乗りがどうしたんだい？」

「ああそうだ。ヤキモチやいてる場合じゃないんだ。その小菊ちゃんとあたしとは、隣り同志のつきあいもあって、とても仲がよかったのよ」

「ふうん……」

「ところが、ゆンベ、その小菊ちゃんが、本所の堅川で身投げ心中してしまったの……」

「へええ？」

昨夜から今夜にかけて、いやに身投げだとか、心中だとか、からみついていやがる、と泣き兵衛は首をひねった。

興味をそそられて、膝をのりだす泣き兵衛に、化粧をおとした春駒は、真剣な顔で語りだすのである。

不思議な心中

——小菊は、薄幸な娘だった。

両親も生れたところもわからない。ものごころついた時には、もう娘玉乗りの芸人として、きびしい親方の鞭が、肩に背に、手にも足にも鳴る毎日だった。

小さい時から舞台にだされていたが、胸もふくらみ、身体に娘らしい色香がつきはじめると、急に人気もでてきた。

と——この頃になって、父親がわりになっていた親方の六兵衛が、小菊の身体を狙いはじめたのである。もともと器量よしに生れついたので、かえって災いした。

（親方に身体をもてあそばれるくらいなら、いっそ、死んでしまった

ほうがましだ……）

小菊は、そこまで思いつめた。

そのことを、仲良しの春駒太夫にも打ち明けた。

「そんな、死ぬなんて了簡はよくないわ。どんなつらいことがあっても、我慢して生きていなくちゃ……」

と、春駒は年上らしく小菊を慰さめ、励ますのだった。

だが、春駒にしたところで、たかが出刃打ちの娘芸人である。狻々親方の毒牙から、小菊をかばいとおすだけの力はない。

どうかそれだけはかんにんして下さい、ゆるして下さいと、手を合わせて哀願しても、執拗に小菊の身体を狙う六兵衛親方。近頃では、どうしてもおれのいうことをきけないのかといって罵しり、毎夜の責め折檻がつづくという。

この救いのない毎日の暮しを、思いつめればつめるほど、小菊にとりついた死神は、骨がらみになって誘惑する。

死ぬことだけが、いまの苦しみからぬける、唯一の手段に思える小菊だった。

「——と、こういうわけなんだけど、その小菊ちゃんが、とうとう今朝がた、仏さまになって、堅川に浮かんでいったってわけなのよ」

語り終った春駒は、肩をおとして、ふうッと深い息をついた。

「なるほどなア……。はなやかにみえる舞台のかけには、そんな可哀そうな話があるんだなア……」

きいている泣き兵衛の眼から、ホロリホロリと涙がこぼれている。

「またはじまったよ、このひと——。同情する気持は尊いと思うけどそう手ばなしで泣かないでくれよ。あらまア、膝の上が涙でぐっしよりじゃないか……」

「そんなこといったって、あ、あ、あんまり、か、か、かわいそうな話じゃねえかよ……」

よくもまあそんなに涙がでるかと思うほど、泣き兵衛の眼からは、大粒のやつがホロリホロリと溢れてくるのである。

「ところがねえ、泣きさん。さっきもいったように、小菊ちゃんは一人で身を投げたんじゃないかと、ほかの白髪頭のじじいと一緒に死んだんだってさ。つまり、心中ってわけなのよ」

「白髪頭のじじいと心中？」

「そうなんだ。そこが変なんだよ。あたしや小菊ちゃんのことなら、たいていは知ってるつもりだけど、あの娘にそんな心中なんかするよるな相手はいないんだ。まして、年寄りなんか……」

「しかし、お半長右衛門っていう話があるからな」

「検屍のお役人にきいたんだけど、そのじいさんは、なんでも葛飾在の大百姓のご隠居さんで、両国になんか足を踏みこんだことのない人だって。両国にきたことのない人が、娘玉乗りを知るわけがないし、小菊ちゃんと心中するような仲に、なろうはずがないじゃないか」

「なるほど。そいつはちつとばかり、妙なくあいだな」

泣き兵衛の涙が、ピタリととまった。

と——いままで涙をたたえていた大きな目玉が、ギョロリと奥底から光りだして、宙の一点をみつめた。

(なにか、ありそうだぜ……)

泣き兵衛の脳裏に、昨夜の左衛門河岸の浪人、そしてさっき同じ場所に現われた、あの不思議な女の顔がうかんだ。

それと、小菊の心中事件。この三つが重なりそうで、なかなか重ならない。結びつきそうで、なかなか結びつかない。

(しかし、何かありそうだぞ。ええい、こんちくしょうめ!……) しばらく思案した末に、泣き兵衛はおそろしく真剣な顔になって、春駒にいった。

「——太夫。お前さんをみこんで、頼みがある」

「あいよ。あたしや、あんたのためなら……」

「おっと、あとはいわねえでもわかってる。——頼みというのは……」 泣き兵衛は、春駒太夫の耳に、そっと口を寄せた。

何かしゃべり終えてから、ニヤリとして、その桜色の貝がらのような耳たぶを、パクリと噛んだ。

「あれッ、痛いじゃないか」

「痛いもんかい。なめたただけだ」

「どんな味がした？」

「あまい、あまアい味——」

「ふふふ……」

「へへへ……」

いつのまにか春駒の顔は、泣き兵衛の胸のなかに、うっとりとうずまっている。

「それで、ひき受けてくれるかい？」

「がってん承知のすけ……。うしろにやお前さんがひかえてるんだ」

「ありがてえ。さすがは両国——いや、江戸一番の娘出刃打ち、春駒太夫——」

「おだてるんじゃないよ」

こんどは春駒が泣き兵衛の耳たぶを噛んでいる。

極楽往生組

異色風俗集 倒錯の夜

妖しい魅惑に憑かれて——めくらめく
華麗な旋律とやるせない恍惚に包まれ
てトロトロと燃える鬼火のような執着
の世界を描いて凄美きわまる作品集！

鳥羽 瑛子・著 200円
〒40円

官能惑溺集 密 (ひそかよ) 夜

秘められた情熱と、しびれるような耽
美陶醉の密夜にあえぐ、特異の男女の
姿を描いて満天下のマニアを狂喜させ
た閨秀作家が放つ傑作集！

松井 籟子・著 200円
〒40円

耽美派異集 官能の夜

昼間の聖女・夜の妖婦——白濁のミル
クの泡から生誕した近代のヴィナス。
淫蕩きわまりなく、しかも清純な愛欲
情緒に織りなされた艶夢世界！

龍膽寺 雄・著 220円
〒40円

当社の出版物をお求めの際は最寄りの書店に
お申し込み下さい。短時日にお手もとに届き
ます。勿論送料は不要です。もし書店がお近
くにならない場合は、振替または郵便にて送料を
そえ直接に本社へお申し込み下さい。

東京都中野区江古田1の2302

株式会社 あまとりあ社

荒れ果てた本堂に、女が十三人、男が十三人いる。
いずれも生気のない、暗く沈んだ表情で、凝然としてうずくまっ
ていた。

この一座の、上座と思われるあたりに、浪人、並川浪十郎が厳然と
した面持ちで坐っていた。

その隣りには、浪十郎の情婦のお源が、これももつともらしい顔で
坐っている。

「——では、これから今夜の組み合わせの籤をひきます。まず、女子
の側から……」

浪十郎は重々しい声音でこういうと、手にした朱塗りの角箸の束を
ずいっと前方につきだした。

十三人の女のなかには、娘もいる、年増もいる。仇っぽい芸者もい
れば、髪に白いものを混えた武家の内儀もいる。

それらの女たちが、浪十郎の手から、朱塗りの角箸を一本ずつ抜き
とるのだ。

こうして十三人の女の手に、それぞれ箸が握られた。

「——つぎは、男の側……」

浪十郎の手には、こんどは黒塗りの箸の束が握られている。

若者、中年、老人と、雑然と混った各年令の男が十三人、その黒塗りの角簪を、一本ずつ抜きとった。

一座の面上に、重苦しい動揺と、暗いみだらな期待が流れた。

「——では、一番の組……」

浪十郎が、顔をあげていった。

「はい」

「はい」

男と女の声が、同時にあがった。女の声はききとれぬほど低い。男は、三十なかばの商人体。女は、これも三十なかばの町家の女房ふうである。二人のつかんだ朱と黒の簪の根もとには、一という数字が彫られてあったのだ。

この組み合わせは、ただちに手を取りあって、奥室へ消えた。

「——つぎは、二番の組……」

浪十郎が、いった。

「はい」

「はい」

これは、紅顔の美少年とでもいうべき、品のよい小姓と、あぶらぎった年増の茶屋女であった。

「あら、また梅之助さんね。うれしいわ」

女は、少年をかかえると、大きな尻をふりながら、別室へ消えていった。

十二組の組み合わせは終った。

「——さて、今夜の最後、十三番目のお方は？」

浪十郎の声が、一段と厳肅味をおびた。

「はい……」

「はい……」

二人だけとり残された男女が、紙のように白い顔で、身体をかたくしてうなずいた。

これは一対の雛人形のように、若く美しい若者と娘であった。膝においた手が、こきざみにふるえていた。

「左様か——。お二人とも、今宵がこの世の最後、ご充分におたのみなされい……」

浪十郎の言葉に、若者は声もなくうなだれた。顔色がいつそう蒼白になった。

娘のほうが、しっかりしていた。

「ああ、やっと今夜死ねるのね。うれしい。さあ、早くあちらの極楽のお部屋にいきましょ」

男の腕をとると、ひきずるようにして、この本堂から去っていった。

「ふふふ……。どうも、いざというときには女のほうがしっかりしているな」

と、浪十郎が苦笑して、お源にいった。

「男はいつでも薄情でいくじなしさ」

お源が、ふんといった顔で、つめたく笑った。

と——つぎの間の襖があいて、十人近い浪人者が、そろそろと現われた。

浪十郎とお源を上座に据えて、用意しておいた酒盛りをはじめの

「商売繁昌で、まずはおめでたい——」

と、浪人の一人が、浪十郎にベコリと頭をさげていった。

「いや、わが極楽往生組は、時宜にかなった商売ゆえ、こんなに繁昌

するのだよ」

べつの浪人が、するめの足を噛じりながら、したり顔にいった。
極楽往生組——。

これが、この女も混えた一団の無頼浪人どもの、自らつけた名称である。

いかにも、世情騒然として、いやな時勢であった。

一番には、為政者の責任である。上層部には賄賂と情実の悪政がつづき、百姓、町民どもに希望のない日を与えていた。

飢饉に苦しむ百姓は、むしろ旗をおしたてて、各地に一揆をおこしていた。

関東一円には、不気味な地鳴りが月のうち六度もあり、江戸市中には原因不明の火事が、数度もつづいた。疫病が流行し、巷には不景気風が吹きすさんだ。

そしてこの不安暗黒の時勢に抗しきれず、自殺者が激増した。

並木浪十郎とて、長年の浪人ぐらしに疲れ果て、夜鷹あがりのお源と心中する一歩前であった。いよいよ死ぬ間際になって、お源がいったのだ。

「ねえ、お前さん。こんなに毎日自殺する人間がふえているんだからそいつらをカモにして、なにか一儲けできないかしら。死んだ気になって、うんとあくどいことをやってやろうじゃないか——」

そこで、いろいろ考えた末に、できあがったのが、この極楽往生組である。

自殺寸前の者を見つけて、片っぱしからこの荒れ寺のなかへ連れてくるのだ。

金を持っている者は金、高価なものを身につけている者は、それを

剥ぎとって、この往生組に入会させる。

「どうせ死ぬのなら、死ぬ前に思うぞんぶん楽しめ——」

と、ささやかかれ、往生組には、身投げ寸前、首縊り寸前を助けられた男女が集まった。

それらの男女を、朱と黒の角簪の籤で、毎夜組み合わせて、歓戯の限りを尽くさせるのだ。

組み合わせの、最後の番号に当たった男女は、その歓戯きわまった末に、当人たちも気がつかないうちに死ぬことができる。

浪十郎およびその部下の浪人どもが、殺してしまうのだ。そのために、南蛮渡来の毒薬も用意してある。殺した男女は、その夜のうちに心中とみせかけて川へ流してしまうのだ。

なかには、そのよろこびのために、生への望みをとり戻す者がいた。だが、往生組の浪人たちは、その者を町に放つようなことはしなかった。死ぬのがいやになった人間も殺した。

かくて——。

往生組は死神と手を結んで繁昌した。浪十郎、お源以下浪人たちは宵の口から真夜中にかけて仕事にでかける。身投げや首縊りの姿を求め、彼らの好みそうな川べりや林の中を、猫のように眼を光らせて徘徊するのである。

死神がそこへ招き寄せるのか、自殺の場所が、ほぼ一定しているのが、往生組にとっても、都合のよいことであった。

地獄の鬼

「——おい、往生組のみなさん。さっきあたしに当たった九番の小娘、

駄目だ。どうしてもいうことをきかんのだ。なんとかして下さらんかい」

でっぶり肥えたあから顔の男が、本堂にかけこんできた。このあから顔は、京橋の紙問屋の主人だが、店が破産して債鬼に追われたあげく、大川に身を投げようとした男であった。

「紙屋さんのお相手は、どなたでしたかな」

と、浪十郎は思ひだすように眼をほそめ、

「ああ、先ほど、わたしが筋違橋の下で見つけてきた娘でしたな」

つぶやいて、浪人の一人に目くばせした。

うなずいた浪人は、奥の部屋へ消えると、すぐにその娘をひきたててきた。

なるほど、一目で生娘と知れる、まだあどけない結綿の娘である。

「いやです。あたしは清い身体で死にたいのです！ あ、あんな男に手ごめにされるくらいなら、舌を嚙んですぐ死にます！」

青ざめた顔で、必死に抗議する。

「ふふふ……。男とは、よいものだ。知らずに死ぬのは、つまらぬぞ」

浪十郎は残忍な笑みをうかべ、紙屋の主人にむかっていった。

「あなたは、部屋でお待ちください。すぐにこの娘を納得させて、お届け致します」

「たのみますよ」

紙屋の主人は、醜く顔をゆがめ、もう一度娘をみてから奥へ去った。

「——名は、たしか、お絹さんといったね」

浪十郎が、つめたい声でいった。浪人たちが、娘の周囲をそろそろと取りまいた。

「はい。あの、あたしをここから出してください。あたしは一人で死にます！」

お絹は不気味な体臭に押され、袂をひるがえして、この本堂から逃げようとした。

「ふふふ。可愛いことをいう……」

お絹の襟くびを、浪人の手が、ぐいっつかんだ。同時に、べつの手



がお絹の帯にかかった。

「あれえッ！」

ズルズルッと帯が解けた。お絹の身体は、つかみかかった数本の手で、クルクルと回転され、帯も扱帯も腰紐も、みるみるうちにひき裂がされて、着物の前が大きく乱れてひろがった。

「ふふふ……。いくら大声をあげても、うしろは川、前は砂村十萬坪だ。誰も助けにきてはくれぬぞ」

狼のような浪人どもであった。

お絹は、たちまち腰のもの一枚にされると、床の上にねじ倒された。

「ひいッ！」

荒れた本堂の床のささくれだったトゲが、うつ伏せになったお絹の裸の胸に突き刺った。浪人の膝が、ぐいッと背骨の上を踏まえると、お絹の乳房がぺたりッと板の間に押しつぶされる。

「ああ、くるしいッ」

うめいて、必死の力で起きあがろうとすると、二本の腕はもろくもつかみ取られて、背中へねじりあげられるのだ。

左右の手首が背骨の上で重ね合わされ、荒荒しい縄の感触が、ギリギリと巻きついた。

（縛られる！）

と思うと、恐怖の悪感が、お絹の全身を襲った。

（縛られたら、何をされるかわからない！）

もがいた。あがいた。せめて足なりともバタバタさせて、浪人の膝から逃げようとするのだ。

緋縮緬の湯文字が割れて、白い足が夢中で床を蹴った。

だが、またたく間に両手首は縛られ、その縄は二の腕から胸に、び

しびしとかけまわされた。二巻き、三巻き、四巻き……。一巻きするたびに、浪人の手に力がこめられて、キリキリッと縄が肌を噛むのだ。ぐぐッと息をのむほどの、するどく熟練された縄さばきであった。

「おとなしくしろ。いくらあばれても、もう駄目だ」

往生組の浪人どもにすれば、この仕事には馴れていた。この荒れ寺へつれてきて、組み合わせの籤をひかせ、いざとなるといくら死を覚悟していても、ためらう女がいる。なかには、このお絹のように、根かぎりの抵抗をみせる女もいる。

そのときには、こうして縄で縛りあげ、さらには、死よりもはげしい苦痛と屈辱を与えるのだ。すると、ほとんどの女は観念してしまう。

「さあ、立て——」

縄尻を乱暴にひかれて、お絹はよろよろッと立ちあがった。

「な、なにをするンです！ こんなに縛ったりなんかして！」

乱れ毛を唇に噛み、お絹はあえいだ。形よくふくらんだ無垢の生娘の乳房。そのまるみの上にも一筋の縄がむごたしくかかっている。

肉は縄を噛みこんで、形のよいまるみも二つにくびれ、うす赤い乳首はせつなげに上をむいた、小さな悲鳴をあげていた。

「なにをされるか、すぐわかるわい」

浪人は、お絹を縛った縄尻を、天井にむけて投げると、手際よく梁にとおした。

ペッペッと手に唾をして、それをぐいと引っ張った。

「あれえッ！」

お絹の身体が縄にひかれて、床からじりじりッともちあがった。

吊り責めである。が、これは単なる吊り責めでないことは、あとでわかった。

浪人ども四、五人の手で、縄がぐいぐいと引かれ、お絹の身体は五寸、一尺、一尺五寸……と、床から離れていく。

「ひっひい——ッ」

お絹の咽喉から、するどい悲鳴がほとばしった。

縄が肉をギリギリとしめつけるのだ。胸も腕も、手首にも、縄がずしりッと喰いこむ。

すると——。

吊りあげたお絹の足の下に、一台の木馬がおかれたのである。木馬といっても、これは首も尾もなく、荒削りの材木を四ツ足に組みたて背中の頂点を三角にとがらせただけの簡単なものであった。

「さあ、往生組の掟どおりになるか——」

浪十郎が、梁から吊り下ったお絹の顔をあおいでいった。浪十郎の眼の高さに、緋縮緬におおわれた太腿のあたりが、ゆらゆらとゆれてゐるのだ。

苦しみにのけぞるたびに、緋色のあわせめから、まっ白い肌がチラチラとこぼれるのは、男どもの背すじを、ゾクリとさせるほどの妖しい眺めであった。

「いやです！」

けなげにも、お絹は苦しい息の下から、首を横にふった。

「そうか。それならしかたがない。——それッ、縄をゆるめて、お絹の身体を馬の上におろせ！」

浪十郎の残酷な命令である。これで、吊り上げたお絹の足の下に、奇妙な木馬を置いたわけがわかった。

「縄をぐんとゆるめろ！」

縄がゆるめば、お絹の身体は、ずんと木馬の背に沈むのだ。

「ひい——ッ！」

たちまち、すさまじい悲鳴がおこった。三角の背中が、お絹の肌に喰いこんだのである。

「くうッ、くっくっくッ！……」

火のようなうめきが咽喉からふきあげ、お絹は眼がくらんだ。

「気を失うぞ。ひけッ」

浪人は、縄を持つ手に力をいれて、ふたたび引いた。

お絹の身体は、ずるずるッと天井にあがる。木馬の背から下半身が浮いて、お絹はホッと息をつく。

と、こんどは、いきなり縄をゆるめる。

「あれえッ！」

お絹の身体は、はずみがついて、ずしんッと木馬の上にまたがるのだ。

これは、死よりも苦しい、地獄の責めであった。往生組の無頼浪人どもは、地獄の一丁目に巢喰う、鬼の群れであった。

「ゆ、ゆ、ゆるして！ な、なんでも、いうことをききます！ こ、ここからおろして、おろしてください！……」

ついにお絹は、息も絶えだえに絶叫した。

もだえ春駒

（——今夜あたり、でそうなものだけど……）

春駒太夫は、襟に顎をうずめ、じっと川面をにらんで立っている。

東両国を、ずっと本所寄りに寄った堅川の川べりを、今夜でもう三日、ぶらぶらとうろついている春駒だった。

雨もよいの空で、いつもより早く夕暮れの闇がただよいはじめていた。

と——。

ふいに背後から、人の気配が近づいた。

(きたよッ……)

キュンとひきしまる春駒の身内。心の臓が急にドキドキと鳴りはじめた。その耳もとに低くかわいた男の声で、

「——お前、身を投げるのか……」

並川浪十郎である。

春駒は、ギクリとして、浪十郎の顔を、こわごわふり仰いだ。

「水に溺れて死ぬのは苦しいぞ。拙者が、ラクに死ぬ方法を教えてやる。しかも、死ぬ前に、思いきりの極楽浄土を味わわせてやるがどうだ?……」

浪十郎は、不気味な笑いをふくんでささやいた。

四半刻後——。

春駒は、砂村十万坪に近い、古寺のなかにつれこまれていた。

そしてその夜、死神につかれた男女の亡者どもが集まり、れいの朱と黒との角簪の籤がはじまった。

「わかった!」

と、春駒は思わず叫んでいた。籤が終り、男女の組み合わせにすすんだとき、この往生組のからくりが、はじめてのみこめたのだ。

娘玉乗りの小菊が、顔も知らない年寄りと心中していたわけが——。

「小菊ちゃんを殺したのは、あんたたちだね!」



春駒は憎悪に燃えた眼で、浪十郎とお源をにらんだ。

「小菊? ああ、あの玉乗りの小娘か——」

浪十郎は、いぶかしげに春駒をみた。

「やっぱり、小菊ちゃんもここへきたんだ!」

「きさまは何者だ!」

疑念を生じた浪十郎の眼が、蛇のように光った。

「ちくしょう! なんて悪いやつらなんだろう!」

春駒の頭に、カッと血がのぼった。全身の血が逆流するような激怒に、手足がガクガクとふるえた。

浪十郎の耳に、お源がささやいた。

「お前さん、この女怪しいよ、油断しちゃいけないよ」

いわれるまでもなかった。浪十郎は、背後にひかえている浪人どもに、するどい眼を投げて合図した。

「あれッ、何するンだいッ」

「何をするでもない。お前のような騒々しい女がここにいては、ほかの衆の迷惑になるのだ」

手どり足どりされて、春駒は別室に運びこまれるのだ。

静寂にもどった本堂で、今宵、歓戯にふける男女の組み合わせをすませた浪十郎は、やがて、その春駒の前に、ずいと腰をおろしていった。

「お前、何者だ?——あの川で本当に死ぬ気だったのか。それとも、何かの目的があって、おれの現われるのを待ち受けていたのか」

「……」

春駒は、キリキリと唇を噛み、無言のまま、浪十郎をにらみすえた。すでに着ているものをむしり取られ、両手をうしろに縛りあげられ



た春駒の姿だった。

「返事をしろ！」

浪人の一人が、背後からののしった。

「ヘン！ お前たちみたいな人間の皮

をかぶった犬畜生ときく口

は、はばかりながらこの春駒ねえさんには、これっぽっちの持ち合わせもないんだよ！」

歯切れのいい、江戸前のタンカがとんだ。

「おのれッ！」

浪人の一人が、いきなり足をあげると、春駒の胸を蹴りつけた。

「あれッ！」

春駒の身体は、もろくもうしろにひっくり返った。

「ち、ちくしょう！ てめえら、縛った女を蹴り倒して、それで得意

になっていやがるのかい！ だから犬畜生っていわれるんだ

よ。犬畜生の唐茄子野郎め！」

負けずに起きあがろうとすると、あざやかな緋

一色の湯文字から肥り肉の太腿が、む

っちりとこぼれるのだ。

乳房の上下に縄が喰いこみ、

もとよりゆたかなふくらみを、

異常なほどに大きく盛りあげて

いる。その白いまるみには、苦

痛の青筋が、美しいほどに透き

とおってくるのだ。

「……………」

縄と乳房の、むざんであるべき

とり合わせの美しさに、浪十郎は

眼をみはってゴクリと咽喉を鳴らし

た。

白く長くなめらかな襟あしに、髪

油に濡れた数本の毛がほつれてみだれ、そこに眼をやった男の、息もとまるかとばかりの、なまめかしい無抵抗の姿なのだ。

「この女、ひどく勝ち気の性質とみえる。口を割るまで、この女も木馬にのせるか……」

浪十郎がつぶやいた。

「ひい——ッ！ 泣き兵衛さアん、は、はやく助けてえッ、はやくこなけりや、あ、あ、あたしは死んじまうじゃないかッ！」

思わず、血の叫びをあげた春駒である。

と——それにこたえて、

「すまねえッ、むこうの部屋にいる死にたがり屋の亡者どもに、ガラにもねえ説教をしたもンだから、つい遅くなっちまった。かんべんしてくれよッ！」

破れ襖がガサリとあいて、姿をみせたのは、赤檜の木刀一本腰に、ひょうひょうたる泣き兵衛であった。

「あッ、お前さん！」

春駒太夫、木馬の上でへたへたと氣を失なった。

滅法流風車返し

「なんだ、うぬは！」

浪十郎が、怒声をふくんでうなった。

「五日ばかり前の晩、左衛門河岸で逢ったじゃねえか。忘れちゃ困るぜ」

泣き兵衛、ニヤリと笑った。

「なに！——そうか、あのときの遊び人か」

「思いだしてくれたかい。——それから、そのとなりにいるおかみさんにも、そのあくる日、所も同じ左衛門河岸で、お目にかかったっけねえ……」

「ええッ？」

お源はたじろいで、まじまじと泣き兵衛の顔をみた。

「ちえッ、忘れっぽいんだなア。おれを身投げと間違いやがったじゃねえかよ」

「あッ、あんときの——」

お源は、腰を浮かせた。

「面倒だ、斬れッ、この男を斬り捨てろ。この寺から、生かして帰すな！」

浪十郎が、顔をゆがめて命令した。

「馬ッ鹿野郎！ てめえらみてえな隠亡浪人に斬られる泣き兵衛さんかよウ。ふざけるねえッ！」

泣き兵衛滅法流居合打ち。

真ッ先に斬りこんできた浪人の鼻ッ柱を、はげしく下から突きあげた。木刀の先端から尾をひいて、さあッと血しぶきがあがる。

「手ごわいッ、抜かるなッ」

六、七人の浪人が、いっせいに白刃をかざして斬りかかった。

「ええいッ！」

「おッと、そんなへっぴり腰じゃ、生きた人間は斬れねえよ」

泣き兵衛の木刀が、浪人どものまんなかでクルクルと風を切って回転した。

電光石火。滅法流風車返し——。

数本の白刃は宙にはねあげられ、天井へ、壁へ、襖へ、床へ突き刺

さった。同時に、したたかに脳天を打たれた浪人どもは、一人残らず昏倒していた。

残るのは、並木浪十郎とお源だけである。

「さあ、どうしたい。かかってこねえのかい」

片手使いの木刀の先を、浪十郎の眼の前でクルクルまわしながら、泣き兵衛の呼吸は乱れていなかった。

「……………」

しばらく無言のまま泣き兵衛をにらんでいた浪十郎、

「ええいッ！」

何を思ったか、いきなり居合抜きに、かたわらのお源を斬った。

「ひええッ！」

血けむりとともに、肩さきをおさえてのけぞるお源、この一太刀で絶命した。

これには泣き兵衛も、あっけにとられて見つめるだけである。

「おい、泣き兵衛とやら、きさま、ただものではないな。腕はおれより数段上だ。斬り合っても無駄だ……」

「ヘン、お世辞いうない。そんなことより、てめえ、なぜその女を斬った？」

「お源とおれは、半年前に心中しそこなった。それから、こんな商売をはじめたおかげで、うまいものも喰え、タラ腹酒も飲めた。もうこの世に未練はない。だから、改めて心中だ」

吐き捨てるようにいうと、浪十郎はその血刀を逆手に握って、刃先をいきなり自分の腹に突きたてた。

「むっむうッ！……」

たちまち、がっくりとくずれ落ちる浪十郎であった。

それから、数刻後――。

砂村から扇橋へぬけ、両国に足をむけていく、二つの影があった。

「これで小菊ちゃんも、あの世で浮かばれるというもんだよ」

春駒太夫が、しみじみといった。

「あの世で浮かばれても――死んでしまったら、何もかもおしまいだよ。人間、なんとしてでも、生きてなくちゃア……」

泣き兵衛も、しめっぽい顔でいった。

あの古寺に妖しくうごめいていた男女たちに、死んじやつまらねえと意見してきた泣き兵衛だが、あの亡者たちが、はたしていることをきいてくれるか、どうかはわからない。

「――あ、痛ッ……」

春駒が、顔をしかめて立ちどまった。じいッと腰をかがめている。

「どうしたンだい、太夫――」

泣き兵衛が、心配げにのぞきこむ。

「どうもこうもありやしないよ。あの木馬責めだよ」

「もう少しだ。辛抱して歩けねえかい」

「歩けないよ」

「じゃ、ここでちょっと待っていてくれ。ひとつ走りいって、駕籠を呼んでくる」

「あたしや駕籠より、お前さんの背中がいいよ」

「ちえッ、おきやがれ！」

「おや、いやなのかい」

「あまったれめ」

泣き兵衛の背中についた春駒は、上機嫌になって鼻唄をうたいはじめた。

(泣き兵衛巷囃子第二話 終)

◇他誌に見られぬ特異な題材で頁を飾る本誌は、毎号異常な反響を呼び、店頭で売切れの盛況を示しておりますが、来月号も買い洩れのないように必ず本号お買い上げの書店に御予約下さい。

◇バックナンバーは新規の愛読者のために小部数取り揃えてあります。(一一二頁―一一七頁を御覧ください) 既刊号三冊以上お申込みの読者には送料は当社で負担いたします。

◇御送金は、現金書留、小為替、振替等が最も安全で確実です。
◇小社は本誌の他にも、単行本・新書判等の書籍を多数出版しております。出版目録

集 募 稿 原

◎小説・読物 三十～四十枚

他誌に見られないような特性異のあるもので、本誌にピッタリすると思われる作品をお待ちします。(時代・現代どちらでも結構です)

◎アブチック・スリラー

◎あぶちっく・みすてりい

いずれも三十枚～四十枚でいどで、他に本誌に適すると思われるものなら何でも結構です。原則として原稿は返却しないことになっております。掲載の分には、掲載誌発行後、相応の原稿料と掲載誌一部をお送りします

— 原 稿 送 り 先 —

東京都中野区江古田1の2302
久保書店内 裏窓編集部

をおのぞみの方は、ハガキにハッキリと御住所、御芳名をお書になって「裏窓で見た、目録送れ」とだけ書いて、東京都中野区江古田一の二三〇二久保書店営業部宛お申込になれば、無料ですぐ送ります。

◇直接購読希望の方は、三ヶ月分・三百六十円、又は六ヶ月分・七百二十円を、本誌営業部あてにお払込み下さいますと店頭発売前に直接お送りします。(送料小社負担)
◇但し、特大号、臨時増大号のように定価が上った場合は、その分だけ追加払込みして頂きます。なお、御送金と同時に、何年何月号より何月号までと、ハッキリ御指定下さい。

★お買い上げの本誌に落丁乱丁等がありました節は書店にておとり替え下さるか、または本社宛にお送り下されば、スグおとり替えします。

裏 窓 九月号

第四巻 第九号
(毎月一回一日発行)

定価 百二十円・送料十二円
(地方売価百二十三円)

印刷 昭和三四年八月二五日
発行 昭和三四年九月一日
編集人 須磨 利之
発行人 山田 忠雄
印刷所 向上印刷株式会社
発行所 株式会社 久保書店

東京都中野区江古田一ノ二三〇二
電話中野・(38)六九八〇・一三八八
振替口座・東京 一〇七五六番

★本誌の記事を無断で転載、上演、上映、放送することはお断りします。